慎吾と麗名の旅奏曲

全四巻合冊

蓮　文句

慎吾と麗名の旅奏曲

全四巻合冊

２０１９　～　２０２０年

蓮　文句

慎吾と麗名の旅奏曲　（全四巻合冊）

２０１９　～　２０２０年

蓮　文句

慎吾と麗名の旅奏曲

［別称］　　慎吾と麗名の旅奏曲（１）：環太平洋編

２０１９年８月１日（若干修正：２０１９年９月１日）

蓮　文句

これは、先に発表された第一話「もう先生と呼ばないで」と第二話「きみの意識が戻るまで」の後続九話を含めた全１１話です。第一話と第二話は個別に発表されたものと若干異なっている箇所があります。

１．もう先生と呼ばないで

慎吾は高校三年になって初めての英語のクラスに行くところだった。今までの教師が退職したので、新任の若い女の先生が来るということを聞いていた。いずれにしても慎吾は英語の授業をずっと嫌ってきたので、大した違いは無いだろうと思っていた。麗名は大学を卒業してすぐに慎吾の高校へ赴任してきた。三週間の教育実習の他は教壇に立ったことはなく、相当に緊張していたことに間違いはない。教師として最初のクラスは尚更のことだ。

慎吾が教室に着くと麗名はもう教室の前に居た。彼は麗名を見たその瞬間にもう完全に参ってしまった。彼は今まで何人か同級生と付き合った事はあるが、深い仲になったことはない。そして、たった今のようにどうしようもない感覚を覚えたこともなかった。そんな状況で慎吾が授業内容に注意を向けられたわけがない。途中麗名が一人ずつに教材を配ったとき、慎吾は麗名の手が少し震えているような気がした。新任の教師だからやっぱり緊張しているのかなと思った。それより、慎吾は自分の興奮状態を収めることに精一杯だった。

それから数週間が過ぎた。慎吾の麗名への想いはとどまる所を知らず、英語だけでなく

全ての授業中、いや一日中そのことばかり考えていた。英語の授業はむしろ苦痛にさえなってきた。この憧れの人が級友皆に平等に英語を教えているからだ。もうたまらない。ある日の放課後、慎吾はこっそりと麗名のあとをつけた。同じ電車に乗り、同じ駅で降り、少し離れてついて行った。慎吾の心臓はもう破裂寸前だった。

麗名が自分のアパートのドアを開けようとした時、「先生。」という小さな声がした。振り返ると、そこには慎吾が立っていた。その時の麗名の驚き様はただものではなかった。「あっ」と叫んでいる様な顔をしているが声は出ていない。慎吾を凝視したまま凍結してしまったようだ。しばらくしてやっと麗名が口を開けた。
「あの、城ヶ崎君、どうしてここに。」
それは、半分は教師が生徒をたしなめるような口調であったが、後の半分は旅先で旧友にあったときのような親しみがあった。慎吾はきまりが悪そうに返答した。
「すいません。悪いとは思いながらついてきたんです。先生、すいません。どうしようもなかったんです。」

麗名はすぐには返答できなかった。そして思い切るように言った。
「城ヶ崎君、それはどういうことですか。」
麗名の顔は少し赤らいでいる。慎吾はもうすべて言うしかないと思っていた。
「先生。先生を一目見た時からもう頭が一杯で。授業中も苦しいくらいで。もう、直接会って話をしないと耐えられないと思ったんです。」

麗名は返答に困っているようだった。顔は更に赤くなってきた。しばらく経って、やや落ち着いてきたかと思われるとポツリと言った。
「城ヶ崎君、とにかく中に入って。こんなところを他の人に見られてしまっては。」
麗名は鍵を開けると慎吾を中に通した。アパートの中はガランとした感じで、隅には幾つか段ボール箱が積んであった。麗名は慎吾を小さな椅子に座らせると台所の流しの方を向いてしまった。そして、麗名の次の言葉は慎吾には少し意外だった。
「城ヶ崎君、コーヒー飲む？」

慎吾はもう信じられなかった。あの安城先生のアパートに二人だけでいる。
「二人だけ。先生、夢のようです。本当にどうして良いか分からなかったんです。」
麗名の方はうつむいてコーヒーの用意をしている。慎吾には麗名の表情どころか顔さえ見えなかった。次に麗名は独り言のように言った。
「こんな状態が学校に知れたら、わたしすぐクビにされてしまう。どうしよう。」

麗名が心配しているのを悟った慎吾はすかさず返事した。
「先生、オレ、絶対、誰にも何にも言わないから。心配しないで。」
麗名はそれには反応しなかった。まだコーヒーの方を向いている。少し身体が震えているようでもある。
「先生、すいません。悪い事だとは分かっていたし、先生を困らせようというつもりは全然なかったんだ。」
「城ヶ崎君。分かっているわ。わたし、今言った通り自分の仕事の事が心配なのは本当なんです。でも、実はもっと切迫していることがあって。」
慎吾にはその意味は全くわからなかった。
「もっと切迫していることって？」
麗名はまだコーヒーの方を向いている。
「城ヶ崎くん、コーヒーができたわ。」
そう言って、コーヒーカップを２つテーブルの上に置いた。麗名の顔を見た慎吾は驚いた。麗名の目からは涙が流れたあとがある。それなのに全然悲しそうではない。慎吾の身体は完全に興奮していた。

「わたし、どうしていいかわからないの。」
そう言ってコーヒーカップ一つを慎吾の方へ押した時、麗名の手が震え、カップが傾き、コーヒーがこぼれてしまった。慎吾は手を出してそれを抑えようとしたが間に合わなかった。
「ごめんなさい。」
「すいません。」
麗名と慎吾が同時にそう言った時に二人の手が触れ、次の瞬間には唇も触れた。麗名はちょっと後ずさりすると、完全に動揺した様子で、
「わたし、どうしよう。わたし、どうしよう。」
と繰り返している。

慎吾が話し始めた。
「先生、すいません。でも、オレ、もうどうしょうもないんだ。なんと言っていいかわからない。」
麗名はまだ動揺した様子で、「どうしよう。」といっている。顔は相変わらず赤く、興奮しているのは明らかだ。しばらくして麗名が観念したという様子で話し始めた。
「城ヶ崎くん、実は、わたし。実は、わたし、初めて会ったときからあなたのことを。あなたのことを考えていたんです。あなたが気がついたかどうかわからないけど、あなたに教材を渡す時になんだかいたずらに手が震えて。丁度さっきコーヒをこぼしてし

まったときのように。それで、それから毎日・毎日が苦しくって。どうかして、あなたとお話出来ないかと考えていた。今日城ヶ崎君が急に現れた時、わたしはもう気絶同然でした。嬉しかったの。いや、それ以上。今、やっと二人だけに。」
そう言うと麗名はうつむいてしまった。

慎吾は信じられなかった。あの安城先生が自分のことをそんなに思っていてくれたなんて。あの安城先生が。もう世の中の他のことはどうでもよかった。すると麗名が突然立ち上がって言った。
「わたし、もう熱くなってしまって。ちょっと待っててね。」
と言うや他の部屋に行ってしまった。しばらくカサカサ、コトコトとした音がしていたが、直に戻ってくると、言った。
「こっちに来て。」
麗名が興奮している慎吾の手をとって通したのは彼女の寝室だった。慎吾はちょっと驚いた。そこは片付けたと思われる後にしては、かなり散らかっていたからだ。傍観者だったら引っ越して来て間もないからだと思うだろう。ただ、慎吾にはそんなことも麗名の「ごめんなさい。こんなところで。」という言葉も気にならなかった。そこがどんなところであろうがどんな状態であろうが、そんなことはこの二人にはもう関係のないことだった。

どのくらい経ってであろう、麗名が仕方がないという感じで口を開いた。
「城ヶ崎君、もう遅いわ。帰らないと。お家の人が心配しているんじゃない？」
「先生、オレ、もうずうっとここにいたい。いや、今日のこの一日だけでももう死んでもいいくらいだ。」
すると、麗名がちょっとたしなめるように言った。
「そんな。変なこと言わないで。わたしのそばにいて。それから、城ヶ崎君、わたし達もう男と女の関係になってしまったのだから、わたしのこと『先生』って言うの辞めてください。」
慎吾はちょっと困惑したようだったが、すかさず対抗した。
「先生も、オレのこと『城ヶ崎君』って言うのおかしいな。」
「それもそうね。」
「先生、なんて呼んだらいい？」
「わたしの名前は麗名よ。」
「先生、それは知ってるよ。あ、麗名先生。えー、麗名さん。オレの名前は、先生は当然知ってるわけだけど、慎吾。」
「ええ、当然。『先生』だもの。あの、慎吾さん。実は、わたし、あなたのこともっと

知ってるわ。不気味と思うかもしれないけど、学校のコンピュータに保存されているあなたの記録を見たの。英語の勉強は全くしていないけど、そして他の科目の成績もかなり悪いけど、あなたの高校に入りたての頃の成績はすごく良かったわ。それから、去年の模試では、英語はトップクラス、数学の点数も悪くはない。これ、どういうこと？わざと勉強しないの？」
「学校の勉強は嫌いだ。無意味なことばかりやっている。例えば、英語や数学の授業なんて実社会とは全く無関係だ。先生、すいません。これは英語の先生に向かって言っていいことじゃないよね。ところで、最近は先生のことだけに夢中で、実は先生が何を教えていたか全く頭に入っていないんだ。」
「いいのよ。わたしも苦労したわ。わたしの頭の中も慎吾さんのことでいっぱいだったけど、授業中教師がボーっと生徒のことを見ているわけにはいかないでしょう。それに、色々授業の準備をしたり、職員会議にでたり。でも、気が散ってしまって、着任してからもうたくさん間違いをしてしまったわ。みんな慎吾さんのせいなのよ。」
「本当に？そんなこと全然想像もしていなかった。ところで、オレ、先生の授業でひとつだけ気がついたことがあるんだ。先生の英語の発音、良すぎる。アメリカ人が話しているみたいだ。」
「それは当たり前よ。わたしは生まれてから中学までアメリカで育ったのだから。」
「え？じゃ、アメリカ人なの？」
「二重国籍なの。両親が日本人でもアメリカで生まれれば自動的にそうなるの。でも、わたし、先月２１歳になったから日本の法律では直にどちらかを選ばなければならないの。どうしていいかわからないんだけど。ところでわたし、３月生まれで、小学校の時飛び級しているから同学年の人より２年近くも若いことがあるわ。でも、どうして慎吾さんはわたしのアメリカ発音のこと気がついたの？他の教師や生徒は『発音いいね』とは言うけどアメリカ英語とイギリス英語の違いも分からないわ。」
「あぁ、オレはよく音楽聞くし、ユーチューブで動画を見たりするから。耳は悪くないと思うんだ。英語の方言とかある程度区別がつく。」
「そうなの？そうやって英語身につけたのね。ところで、慎吾さん、もう遅いわ。帰らないと。お家の人が心配しているんじゃない？わたしもあなたにずうっとここにいて欲しいわ。だけど、まずなんとかしなくては。」
そこまで言うと、麗名はベッドから立ち上がろうとした。だが、即座に慎吾に戻された。そのあと、またしばらく会話はなかった。

「先生、えーと、麗名さん、麗名っていい名前だね。」
「この名前、わたしが生まれた時近所に住んでいたプエルトリコ人のお婆さんがつけて

くれたの。将来『女王様』のようになるようにって。スペイン語でそういう意味なの。漢字は両親が随分難しい当て字を選んでくれたので、ちょっと苦労したわ。わたしが生まれ育ったのはニューヨーク近郊のラテン系移民がたくさんいるところ。わたしの父は日本企業のある秘密プロジェクトのリーダーで、他の日本人の住んでいるところには住みたくなかったんだって。だから、そこらじゅうでスペイン語、ポルトガル語、フランス語が飛び交っていたわ。わたしのすごく仲の良かった友達はメキシコ人でその子とはスペイン語で話をしていたの。彼女、アメリカに来たばかりの頃は英語が全然できなかったから。」
「え、じゃー、スペイン語も話せるんだ。ポルトガル語やフランス語も？」
「えぇ。だって、自然とそうなったのよ。ねぇ、今慎吾さんとこういう関係になって、わたし、すごく心配なんだけど。慎吾さんは高校を卒業したら大学に行ってしまうのよね。大学に行ったらまた新しい環境で多くの女生徒にも出会うだろうし。」
「先生、あー、麗名さん。今、オレが考えているのは麗名さんとずうっと一緒にいたいということだけなんだ。高校卒業後のことはわからない。うちの両親は両方共大学教授のくせに今の学校教育に大反対なんだ。二人の教育方針は普通の家庭とは全く違う。大学に行く必要はまったくないと言う。それでも、オレがちゃんとした考えと目的を持っていれば大学の費用は出すとも言っている。まあ、このオレとしては、まったくもって大学に行く目的も必要もない。高校でさえこの有様だ。」
「随分変わったご両親ね。でも、それって、本当によく考えてのことみたい。普通の人って、世の中のレールに沿って動いていくだけじゃない。」
「オレもそう思う。オレはそうなりたくはない。でも、とにかく、今は麗名さんのことで頭いっぱいで。」

麗名はハッとした様子で、また言った。
「慎吾さん、もう遅いわ。帰らないと。ご両親が心配しているんじゃない？」
「先生、じゃなくて、麗名さん。今晩泊まってもいい？オレ、うちに電話して話してみるよ。」
「慎吾さん。それ、わたし達のことを打ち明けるっていうこと？」
「うん、好きな人ができたとだけね。今は誰だとは言わない。うちの両親はオレが本気で決めたことなら文句は言わないと思う。両親はオレのことを信用しているし、オレが携帯のロケーション情報を止めていることも知っていて、了解している。オレの居所を突き止めることはできないし、しようともしないだろう。」
「慎吾さんもご両親のこと信頼しているのね。わかったわ。電話して。わたしは慎吾さんがここに居てくれるだけで本当に嬉しい。」

慎吾は自分の携帯で親としばらく話していたようだった。戻ってくると、麗名に言った。
「麗名さん、今日はオレにとって今まででで一番幸せな日だ、そして、夜だ。うちは大丈夫だ。オレの思ったとおりだ。両親は喜んでさえいる。」
と言うとすぐに麗名のところにもどった。またしばらく言葉のいらない時間が経った。

「麗名さん、今までこういう経験したことあるの？」
「ないわ。慎吾さんが初めて。わたし、男の人に声をかけられたり、誘われたりしたことはあるわ。何回かデートをしたこともあるわ。だけど、全然真剣に感じたことがないの。アメリカの中学の時は、これ日本と違うんだけど、毎年同じ男の子がわたしにバレンタインデーのギフトをくれたわ。でも、わたし、お礼のカードもあげなかったの。もしそうしたら、その子と本気で付き合わなけれならないんじゃないかって思った。その子とは小学校のときからの友達でよく話したり、ふざけたりした仲だったんだけど。わたしも子供だったのね。幼かったのよ。とにかく慎吾さんだけが全く違う。もう、わたし、限りなく熱くなってしまうし。慎吾さんが目覚めさせてくれたみたい。」
「本当に？本当に信じられない。あの安城先生が。」
「また先生？でも、慎吾さん、明日からどうしよう。真剣に考えないと、わたし、もう破裂しそう。」
「オレはもう破裂してしまった。もう学校はどうでもいい。もともとどうでもいいんだ。たまたまこんな進学校に入ってしまったけど、ほんとはどうでもいいんだ。麗名さんだけでいいんだ。」
「でも、考えないと行けないわ。わたしは、かなりズボラな性格だから、ちゃんと計画しないといけないわ。慎吾さん、わたしのこの部屋に気がついたでしょ？だらしないと思わなかった？」
「色々あるなっては思ったよ。だけど、そんなことはどうでもいいよ。あの安城先生が整理整頓が苦手だなんて可愛くていいよ。」
「いくら先生でもわたしは精神的に幼い女の子なのよ。あなたにすがりたい気持ちで一杯なのよ。」
「オレ、何でもするよ。とにかく、一瞬でも長く麗名さんと一緒に居られるなら何でもするよ。」
「じゃぁ、今のままで高校卒業までいける？」
「つまり、オレが卒業するまで、今までみたいに麗名さんを遠くから見つめていろって言うこと？」
「そうじゃないの。わたしだって、あなたの居ない生活は耐えられない。いつでもここに来ていいの。ほんとはね、ほんとはなんだけど、一緒に住んでもらいたいぐらい。」

「え、ほんとに？一緒に住んでもいいの？」
「本当に。一緒に住んでほしいのよ。でも、そんなこと出来るかしら。そういうことも考えないとって言ってるわけ。だけど、あなたには高校は卒業してほしい。わたしも今仕事を辞める訳にはいかない。少なくともこの一年は終えないと。」
「オレ、麗名さんと住んでいいんだったら、高校終わるまで、学校ではおとなしくしていられると思う。うちの両親も反対しないと思う。」
「本当？！嬉しいわ。考えてみれば、わたしのほうこそ自信がない。学校であなたを見ていて素知らぬ顔が出来るかって。なんせ、わたし、こういう想いも経験もしたことがないから、すごく不安なの。」
「そう？オレだって不安だけど、麗名さんと一緒に居れるんだったらどんなことでも乗り越えられるっていう気がする。明日、学校からうちに帰って、両親と話をするよ。麗名さんの名前を出すかどうかは麗名さんの気持ちを尊重したいけど。その後、荷物を持ってすぐにここに来るよ。」
「そうしてくれたら、すっごく嬉しい。あなたのご両親信頼できそうだからわたしのこと話してもいいわ。いずれちゃんとご挨拶したいわ。ところであなたお腹すかない？わたし達、学校から帰ってから何も食べてないじゃない。」
「そうだね。」
「何か用意するから。わたし、だらしないだけじゃなくて料理もろくにできないんだけど。嫌にならない？」
「ほんとにかわいい安城先生だ。オレも手伝うよ。」
二人はキッチンで何やら食べ物を用意してエネルギーを補給した。しかし、そのエネルギーもすぐに消費されてしまったことは言うまでもない。

翌朝、麗名は目覚まし時計で起きるとすぐに慎吾を起こして、朝支度を始めた。
「慎吾さんシャワー入る？」
慎吾が先にシャワーを浴びているとすぐに麗名も入ってきて朝支度どころではなくなってしまった。二人共やっとの思いで出ると慌ただしくトーストを食べ、アパートを飛び出した。新しい恋人達は駅まで寄り添って歩いた。
「あなた、わたし、どうしても信じられない。昨日の朝ここを歩いた時、わたしは一人だった。寂しかった。だけど今日は、たった一日の違いで、わたし達、恋人同士。」
「そうだね。オレもまったく信じられないよ。たった一日の違いで、オレ達、恋人同士。」

駅まで来ると二人は立ち止まった。
「あなた、わたし、辛いけど、ここから別行動にしましょう。ここは学区外だから生徒

はいないはずだけど、他の教員がいるかもしれないし。」
「わかったよ。じゃ、学校で。またあの安城先生にあえるね。」
「もおぅ。それより、学校が終わったらアパートで待ってるわね。今日はもう少しちゃんとした夕食作るから。栄養取らなきゃ。あなた、放課後ね。」
「うん。必要なもの持ってくるよ。じゃぁ。放課後、きみのところで。」

２．きみの意識が戻るまで

その日の放課後、慎吾は自宅に帰るとすぐに両親に話をした。麗名とは最初のクラスで出会ったときから一目惚れだったこと、昨日麗名のアパートで一夜を過ごしたこと、そして、これから二人で生活したいこと。麗名のアパートに泊まる前、慎吾は誰とは言わずに両親に電話で承諾を得ているので、両親はことの成り行きは察していた。そして、この型破りな両親は慎吾を十分信頼していたため慎吾の希望は喜んで受け入れてくれた。

慎吾は急いでボストンバッグに着替えと教科書を積めて麗名のアパートへ向かった。麗名との新しい生活が目に浮かび、慎吾の心は喜びに満ちていた。ところが、アパートに着いてベルを鳴らしたのだが返事が無い。変だなと思ったが、多分まだ買い物でもしているのだろうと思い、そのまま待っていた。１０分経ち、２０分経ち、１時間も過ぎた頃には、慎吾は不安になってきた。どうしたんだろうかと。

１時間と３９分が過ぎた時重々しい足音とともに現れたのは、麗名ではなく、一人の警察官だった。慎吾はとてつもない不安に包まれた。警察官は慎吾を見ると言った。
「しんごさんですか？」
慎吾は無言だった。
「実は、言いづらいのですが、安城麗名さんは交通事故に遭って病院にいます。」
慎吾は目前が真っ暗になった。彼の初めての真剣な恋人。まだ一晩しか一緒に過ごしたことがない人。

慎吾はやっとの思いで口を開いた。
「どうしたんですか？！」
「麗名さんは、自転車との接触事故で転倒し、出血多量で意識不明です。目撃者の話では、『しんごさん』、『アパート』とふた言だけ言い残して意識を失ってしまってしまったようです。そのため、私がそのしんごさんを探すべくここに来たのです。一緒に来たください。」

慎吾が病院に駆けつけた時、麗名は救急病室に横たわっていた。間違いなく、あの麗名。慎吾が昨夜を共にしたあの人。苦しんでいる様子はない。ごく僅かに微笑んでいるかのようでもあり、あまりに落ち着いている。そばには麗名の両親と思われる人がいた。
「すいません。麗名さんに、麗名さんに、話しかけてもいいですか？」
慎吾は全力を振り絞って言った。

「失礼ですがあなたは？」
その両親らしき二人は慎吾に聞いた。慎吾はなんと答えていいかわからなかった。
「あのぉ、あのぉ、麗名さんを慕っている者です。いいえ、麗名さんの恋人です。麗名さんの新しい恋人です。城ヶ崎慎吾といいます。」
その両親らしき二人は顔を見合わせた。
「そうですか。私たちは詳しいことは知らないのですが、事故の少し前に麗名から電話を受け、恋人が出来たと聞きました。とても嬉しそうでした。あなたがその人ですね。」
慎吾は涙をこらえられなかった。ただ、ただ、泣きながらうなずいた。父らしい人の話によると、麗名は出血多量で意識不明。脊椎損傷の可能性あり。生存の可能性は五分五分。一命をとりとめた場合、生涯車椅子生活の可能性大。慎吾は麗名の手を握って泣いた。麗名の手にはまったく力が無かった。どうして？どうして？運命はあまりに過酷すぎる。

しばらく経ってから、慎吾はその両親らしき二人に聞いた。
「動揺していたので失礼しました。麗名さんのご両親ですか？」
二人はうなずいた。
「麗名さんがこんなことになってしまって。あまりにひどすぎる。」
今度は、麗名の母が言葉を発した。
「慎吾さん、麗名は気を失う前にあなたの名前を言いました。最後の力を振り絞ってまで言いたかったのはあなたの名前です。私にはわかります。あなたが彼女にとって最も大切な人になっていたのです。」

この言葉は慎吾にとって救いでもあり、攻めているようでもあった。
「すいません。麗名さんを事故から守れなくって。」
慎吾のこの言葉には麗名の父が答えた。
「慎吾さん、自分を攻めてはいけません。これは誰の責任でもありません。」
「麗名さんのお父さん、お母さん、今晩ここに泊まってもいいですか？」
二人はまた顔を見合わせた。そして、二人共うなずいた。

慎吾は何もせずに麗名のベッドの横に座っていた。両親は病室から出たり入ったりしていたが、やがて病室の外で待機すると言って出ていった。病室には慎吾と麗名二人だけが残された。二人だけの二晩目の夜。前夜とのあまりの違いに慎吾は愕然としていた。食べる気力も、飲む気力も無かった。ただ、ひたすらに待った。麗名の意識が戻るのを待った。

長い一夜が開けても地下の緊急病室に朝日はやってこなかった。次の日、麗名は幾つか検査を受けるために病室から連れ去られた。無い力を振り絞り、慎吾は母親に電話し高校に連絡してくれるように頼んだ。慎吾はもう学校に行く気力も意志も全くなかった。母はとりあえず休学の手続きを取ってくれると言った。麗名の両親も高校に連絡して麗名の状況を伝えていた。この日から急に麗名と慎吾の両者が休みになっていろいろな噂もされることだろう。しかし、そんなことは慎吾にはどうでもよかった。

検査の後、麗名は一般病室に移された。やはり、脊椎損傷があるとのことだった。慎吾はそういった障害のことはまったく知らず、不安は更に深まった。どのような状態でもいい、一刻も早く麗名の意識が戻ってほしい。慎吾は思った。そして、麗名のもとからほとんど離れなかった。

麗名の両親は交代で家に帰っているようだった。学校には状況が状況なので見舞は控えて欲しいと伝えたらしい。学校からは誰も来なかった。時折、麗名の親類と思われる人たちが来た。そのような時は、慎吾は病室から出て、少し屋外に出たりしてみた。外の光は必要以上に眩しく、痛いくらいだった。辛かった。

麗名の事故から数日経った。どうやら麗名は危篤状態からは抜け出したらしい。ただし、意識回復の様子はまったく見られない。麗名の両親は慎吾のことも心配しだし、休みを取るように頼んだ。確かに、慎吾の体力も確実に衰えてきていた。

その頃、慎吾が気がついたことがある。毎日決まって夕刻に一人の男性が現れる。慎吾がいつも部屋の中に居るためか、その男性はドアの外から異常に丁寧にお辞儀をして立ち去っていく。気になって、ある日慎吾はその男性に声をかけてみた。
「あのぉ、どうしましたか。」
その男性はすぐには返答しなかった。何故か異常にためらっている。慎吾は少し不審に思った。しばらくの沈黙の後、その男性は弱々しい声で答えた。
「実は、私がその自転車に乗っていたんです。」
慎吾はすぐには理解できなかったが、やがてその男性の自転車が麗名に衝突したのだということに気がついた。慎吾はそれ以上の状況を知らなかったのでなんとも言いようがなかった。その男性は続けた。

「あの時、後ろに乗っていた子供が急に泣き出したために、私の注意がそれてしまったのです。当然それは言い訳にはなりません。この人を意識不明の状態に陥れてしまったことに弁明の余地はありません。私はもう生きた心地がしないのですが、子供のことを

考えると今死を選ぶわけにもいきません。私が慌てて、倒れているこの人のところに駆け寄った時、この人は言ったのです。『しんごさん』そして『アパート』と。あなたがしんごさんですね。私はあなたに声をかけることも出来ずにいつもドアの外でお詫びをして、いや、しようとして、そして立ち去ることしか出来なかったのです。もちろんそれが無意味なことはよくわかります。私自信、私の妻を数年前交通事故で亡くしているものですし。」

その話の間、慎吾の気持ちは一瞬麗名からこの男性に移った。たとえ事故の加害者とはいえ、とても気の毒な気がした。責める気にはなれなかった。慎吾は一言、
「そうだったんですか。」
と言っただけだった。その男性はその後も毎日麗名の部屋のドアのところまで来た。慎吾も毎回その男性に頭を下げた。

事故から一週間と少し経ったろうか、夜中、もう早朝と言ったほうがいいかもしれない頃、慎吾の耐えきれない気持ちは相当高くなっていた。麗名の意識が戻らなかったら自分は生きていけるだろうか。慎吾は真剣にそう考え始めていたのだ。と同時に、疲労も激しく、体力の限界にも達してきていた。飲み物を買いに病院の１階ロビーに行った時に目にとまったのは「命の電話」のポスターだった。涙ぐんだ目をこすりながら、その番号を携帯に入力して呼び出しボタンを押した。

ずいぶん長い間呼び出し音がしてから眠そうな声で返答があった。
「もしもし。」
「助けてください。もう限界に来ているんです。」
「はぁ。」
「このままだったら、もう生きていけるかどうかわからないんです。」
「あのぉ。」
「僕の恋人が昏睡状態になってしまったんです。」
「そのぉ。」
慎吾は詳しく麗名の状況を説明し、自分の耐えられない状態を訴えた。１時間以上経ったろうか、電話の相手はゆっくりと言った。
「あなたは本当に麗名さんのことが好きなんですね。それだけの熱意があれば、きっと先が開けるはずです。私は何も出来ないけれど、もっとあなたのことを手助けできる人もいるはずです。他の人とも話してみたらいかがですか？」
「ありがとうございます。僕の話を聞いていただき、ありがとうございます。また電話してもいいですか？」

「えっ、私にですか？どうやって私の電話番号を知ったのですか？」
「病院に貼ってあった命の電話のポスターですけど。」
「それでは、間違い電話です。いずれにしても、麗名さんとあなたの幸運を祈っています。」
間違い電話？「命の電話」ではない？携帯の発信履歴を見たところ、確かに番号を誤って入力していたことに気がついた。あの人はいったい誰だったのだろう。

翌日、シャワーを浴び、着替えとお金を取りに行くために、慎吾は自分の家に戻るところだった。途中、新宿を通った時、あの電話の相手の言葉がふと思い出され誰か他の人にも相談してみようかという気になった。西口に出ると、占い師が軒を並べている。慎吾は占い師に相談するような性格では無かった。そのようなものは信用していなかったのだ。それでも、「新宿の母」のことは聞いたことがある。どうしようもないのだし、他に出来ることもない。話してみようかと思った。ただ、その日「新宿の母」は見当たらず、他の占い師の前に座った。かなり年配の女性のように見えた。看板には「婆婆」と書いてある。

婆婆は聞いた。
「どうしました？」
慎吾は訴えた。
「僕の恋人が交通事故で意識不明なんです。どうしたらいいでしょう。」
うんと言うようにうなずいた後、婆婆は何も答えなかった。何か考えているようでもあり、何も考えていないようでもあった。慎吾はじれったかったが、どうすることも出来ずにしばらく待っていた。すると、突然、婆婆が話し始めた。
「通常、わしは依頼者の話を聞くだけでどうしろということは言わないのじゃ。殆どの依頼者は話をしている間に自ら解決策を見出していく。そうではなくとも、話をすることによって気が紛れる。そして、殆どの依頼者は自分の出来ないようなアドバイスは嫌うし、聞こうともしない。あんたの場合、少し違うようだ。あんたはもうだいぶ話はしたようだし。そうそう、あの間違い電話で。」
慎吾は驚いて割り込んだ。
「え！どうしてあの間違い電話のことをしっているんですか？」
「まあ、聞きなさい。わしは、たった今何人か賢者にあたってみた。どうやら、意識不明に効く薬草があるようだ。それをあんたに教えよう。その薬草はレバンティエルバという。それが取れるのはペルーとボリビアにまたがるチチカカ湖の南岸だけのようじゃ。」

慎吾には信じ難い話だった。しかし、あの間違い電話のことを感知できるのだったら薬草のことも本当かもしれないと思われた。どんなに信じ難いといっても、慎吾に出来ることはもう何もないと思っていたので、この薬草のことは頭を離れなかった。家に帰るとすぐ、両親に事情を話し、旅の準備をした。両親は慎吾の真剣さを受け止め、旅の費用を工面した。用が済むと慎吾はそのまま麗名の病院へ戻った。真夜中だった。その夜、麗名の横で一晩を過ごし、翌朝麗名に言った。
「麗名さん。オレ、チチカカ湖に言ってくるよ。意識不明に効く薬草があるらしい。ことの真偽は不明だけど、麗名さん、なんだかこれがオレに出来るただ一つのことのような気がする。一週間で戻ってくるつもりだ。待っててね。オレ、麗名さんの写真を大事に持っていくよ。」
その後、慎吾は麗名の両親にこの話をした。当然、二人はかなりびっくりしたが、慎吾の真剣さに押され慎吾を送り出した。

慎吾は成田に直行し、ペルーの首都リマへロサンゼルス経由で行く航空券を購入した。幸い、混雑期ではないため簡単に席はとれた。帰りは一週間後に設定したがこれは変更可能とのことだった。リマへのフライトは乗り換え時間を入れると２０時間以上だ。慎吾は極度に疲れていたため、フライトは休養時間となった。一般に不評の機内食でさえ今の慎吾にとっては久々の調理をされた食事だった。ある程度精気を養った慎吾はリマ到着の同日ボリビアのラ・パスまで続けて飛んだ。そこからデサグアデロというチチカカ湖南岸の町までバスで約３時間。さすがに、バスを降りたときはクタクタだったので、近くのホステルに宿をとった。慎吾は携帯に保存してある麗名の写真を枕元に置き、深い眠りにおちいった。

翌日、起きるとすぐにホステルでその薬草レバンティエルバを探す方法について訪ねた。内心、ほんとにレバンティエルバなるものが存在するかどうかさえ不安だった。現地のシャーマンを紹介され、訪ねた。麗名が居ればスペイン語で苦労することはないのだが、慎吾は英語でいろいろ質問をしなければならなかった。兎に角、この薬草、どうやら実在するようだ。シャーマンには馴染みのようだった。この薬草を求めて年に数人は来ると言う。どうも、はっきりとはしないのだが、デサグアデロから３０キロほどバスに乗り、そのあと５キロほど道路を歩き、湖岸沿いの道なき道を少し進んだところに群生しているらしいという情報を得た。

慎吾は最低限の水と食料を持ってすぐに出かけた。この辺はかなりの高地にもかかわらず、湖のおかげで気温は比較的安定しておりその割に過ごしやすい。そのため、行程はそれほど苦ではなかった。最後の道なき道は、もう走らんばかりの勢いだった。美しい

湖も広大な山々も目に入らなかった。目的地とおぼしき所に着いた時、慎吾はためらった。レバンティエルバのような草はそこらじゅうに生えている。ただ、どうやら似たような種類が何種類もあるようだ。仕方なく、３種類、それと思われる草をとり、大事に袋にしまって来た道を戻った。そのままシャーマンのところに寄り、草を見てもらった。運良く、慎吾の採集した中にレバンティエルバがあった。類似の他種はそこで廃棄した。もう町を出るバスは無かったので、もう一泊同じホステルに泊まって次の朝を待った。
「麗名さん、目的の薬草を見つけたよ。すぐに持って帰るよ。」慎吾の心は期待に満ちていた。

帰途、ボリビアからペルーに入国する時、慎吾は入国書類の動植物を持っているという欄に正直にチェックした。ところが、そのため、入国審査で引っかかり審査室へ入れられた。殆どの国で事前の許可無しで一般人が動植物を持ち込むことは難しい。慎吾はそのことに気が付かなかったのだ。審査に時間がかかったため、予定していたロサンゼルス行きの便には乗れそうもない。慎吾は絶望的になった。文句とも泣き言ともつかない様子で、審査官を罵り始めた。年配の男性の審査官はしばらく話を聞いていたが慎吾が麗名の名前を出した時に気の毒になってきたようだ。「マイ麗名、マイ麗名」と、英語でだが、繰り返し言った。麗名のスペイン語で女王様という意味もなんとなく助けになっただろうか。審査官は強いスペイン語訛りのある英語で慎吾をいたわり始めた。

「セニョール、我々だってあなたのレイナを助けたい。今日のところは目をつぶろう。あなたはもうロサンゼルス行きの便には間に合わない。だが、これはラッキーだったかもしれない。米国入国時の厳密な動植物検査に引っかかれば、あなたは長時間留置されてしまうだろう。メキシコ・シティー経由で行きなさい。我が国はメキシコと強い友好関係にあるから、当局からの要請書を出してあげよう。ただし、日本入国の際はあなた自信で考えて対応しなけれならない。」
だいたいこんな意味であった。

慎吾は、予定の航空会社と同系列の会社のメキシコ・シティー経由のフライトに変更してもらった。審査官の計らいで、若干の手数料のみで変更してくれた。積み重なる疲労のため、フライト中慎吾はぐっすり眠った。メキシコ・シティーでは要請書のおかげで乗り継ぎはスムースにいき、無事成田行きの便に乗ることが出来た。後少しだ。慎吾の気持ちは向上した。それでも、フライトの殆どは寝てしまった。成田到着数時間前の食事の時、隣に座っていた仕事風の男性が話しかけてきた。何故か親しみの持てる人で、慎吾の様子を気にしていたようだ。確かに、慎吾は普通の観光客でも仕事人でも留学生でもない。

「だいぶお疲れのようですね。」
「ええ。」
「メキシコにはお知り合いでも？」
「いえ、メキシコは経由しただけで、ペルーからボリビアに入って、チチカカ湖まで
行ってきたんです。」

その男性は、ほう、といった感じで興味を示した。彼は旅行会社の社員で南北アメリカ大陸の特別な旅行を企画する仕事をしていると言った。慎吾は、話し始めた勢いでどうしてチチカカ湖に行くことになったかを説明した。男性はいたく感動していた。そして、慎吾の薬草のことについて何か考えているようだった。

「その、薬草のことですが。オーストラリアほどうるさくはありませんが、日本も島国で動植物の持ち込みにはそれなり神経を尖らせています。もし、よろしかったら、その薬草、入国手続きが終わるまでわたしに預けてくれませんか？仕事柄、成田はわたしの裏庭のようなものです。すべてを熟知しているし、大きな声では言えないんですが、顧客の薬用麻薬の持ち込みを手伝ったこともあります。ただし、わたしはそれなりに正義感のある人間なので、利益追求の密輸に関与する気はまったくありません。それでも、ほんとに必要な、無害な物の持ち込みをいたずらに規制するのには抵抗があります。いかがですか？ただし、初対面だし、あなたがどのくらいわたしのことを信用していいかわからないでしょう。用が済むまでずっとわたしのすぐ後を着いてきてください。」

特にいい考えの無かった慎吾には救いだった。この人がそう言うのだったら大丈夫だろうという気がした。少なくとも、自分がヘマをするよりは成功率が高いだろうと思った。慎吾は紙袋に入った例の薬草をその男性に手渡した。そして、飛行機がゲートに着いてからずっとその男性の後を追った。すべて何事もなく過ぎていくようだった。最後に税関申告を通過した後、その男性は薬草を慎吾に返した。そして言った。
「わたしは、あなたの行動力と未知の土地を旅する能力に感服しました。もし機会が
あったら、一杯やりませんか。気が向いたら連絡してください。いずれにしても、幸運を祈っています。」
そして、慎吾に名刺と旅行会社のパンフレットを手渡した。慎吾は丁寧にお礼をしてその男性と別れた。

慎吾はその足で麗名の病院に向かった。麗名の両親に挨拶すると、両親は慎吾が実際に目的の薬草を持ってきたことに驚いてはいたが、とにかく喜んでくれた。そして慎吾は麗名の病室に入った。麗名は慎吾が出る前の状態と同じように見えた。

「麗名さん、約束の薬草を持ってきたよ。意識不明に聞くそうだ。いま匂いを嗅いでもらうからね。」
そう言うと、薬草の匂いがするように麗名の鼻に近づけた。しばらくそうしていたが、なんの変化も見られなかった。次に、慎吾はその薬草を口に含み、噛み砕いた。そして、それを口移しで麗名の口に含ませた。やはり、なんの変化も見られなかった。慎吾はだんだん焦ってきた。こんなに苦労して取ってきたのに。やっぱり、あの占い師の言葉はまやかしだったのだろうか。旅の疲れがどっと押し寄せ、慎吾は麗名の上で眠ってしまった。

夜朝早く、病室でかすかな声が聞こえた。
「あ、あなた。あなた。」
慎吾はまだ深い眠りの中だった。
「あなた。あなた、帰ってきてくれたのね。」
慎吾はやっと気が付き、びっくりして言った。
「麗名さん！！！麗名さん、目が覚めたんだね。」
「あなた、帰ってきてくれたのね。わたし、夢を見たわ。あなたが遠くに行ってしまって。もう帰ってこれないんじゃないかって心配だったわ。」
「えっ。オレが出かけていた事を知っていたの？」
「そういう夢だったのよ。」
「麗名さん、意識が戻ったんだね。嬉しい。今ご両親に伝えるよ。」
両親の喜び様は例えようがなかった。彼らは慎吾に心から感謝した。慎吾は期待に満ち溢れていた。
「麗名さん、もう嬉しくて仕方がない。そして、話したいことが山ほどある。だけど、きみはもう少し休んだほうがいい。オレ、ここにいるからもう少し休んでね。」
そう言って、麗名を休ませた。慎吾も一緒に休んだ。

その日の午後から、慎吾は麗名に少しずつことの次第を話した。麗名の事故・様態のこと、命の電話のこと、新宿の婆婆のこと、チチカカ湖への旅のこと、旅行会社の社員のことなどなど。
「あなた、わたしが眠っている間にいろいろな経験をしたのね。わたし達沢山の人たちに助けられたのね。ありがたいわ。わたし、事故の後遺症が残るだろうけど、できるだけのことをするわ。わたし、あなたと暮らせるように頑張るわ。」
「麗名さん、オレも頑張るよ。何でもするよ。」
「あなた、わたし達、たった一晩しか一緒に過ごしたことがなかったのに、なんだかずっと一緒にいるみたいね。」

「そうだね。オレ、麗名さんのことはほとんど知らないのに、何でも知っているような気もするんだ。」

生命の危険は脱出したものの、意識不明の間に麗名の体力はかなり落ちていた。その後しばらくは栄養の補給と体力の回復に力が注がれた。次に、理学療法と作業療法が始まった。脊椎損傷のため、当初麗名は四肢を動かすのが困難の様だった。それでも、麗名は言った。
「わたし、まだ手足をよく動かせないの。でも、感覚はあるわ。これって、すごくいいことのような気がする。わたし、この感覚を大事にして手足が動かせるように努力するから。」

その後、麗名は予想以上に早く回復の方向に向かった。次第に車椅子での生活にも慣れてきて四肢の力も出てきた。医師団の初めの予見に反して、慎吾は麗名が完全復帰出来るのではないかとの希望を持ってきた。麗名に衝突してしまった男性も大変喜び、慎吾に繰り返しお礼を述べた。事故から約１ヶ月半後に、麗名は少し遠いところにあるリハビリ専門病院に移った。これが麗名のリハビリのためには最善の策と誰もが思った。しかし、このリハビリ病院には付き添いは寝泊まりすることは出来ない。慎吾は片道２時間程かかるところを毎日通って、昼間はずっと麗名に付き添った。

リハビリ期間は二人がお互いのことをもっと知り合う良い機会になった。ある日のことだ。麗名は慎吾に尋ねた。
「あなた、実はわたしがコンピュータであなたの記録を見てた時気がついたことがあるの。あなたは他の三年生より一つ年上なのね。」
「そうなんだ。オレが小学生の時、両親の研究のためモンゴルに一年間居たんだ。父親は考古学者、母親は文化人類学者で、サバティカルとか言われる、ほぼ７年に一度の研修年だった。二人の研究課題両方が出来る土地を探したところ、そうなったそうだ。父親は恐竜の発掘、母親は現地の人々の生活を記録する。そんな毎日だった。すごく辺ぴなところで、学校という学校は無い。オレは、現地の子どもたちと毎日遊び呆けていたという始末だ。すっごく楽しかった。自然いっぱいの中、そこにあるものだけで遊ぶ。ちょっとした冒険もする。おかげで、日本に戻った時は一年下の学年に入ることになったけどね。麗名さんとは反対だね。ところで、オレはこの経験があの薬草採集に役立ったんじゃないかと思う。」
「そうだったの。それ、素晴らしい体験ね。わたしは、都会っ子だから自然には憧れるけど、実際に大自然の真っ只中に入ったら怖いかもしれない。」
「オレも、モンゴルに行った最初の頃は驚くことだらけでかなりホームシックにもなっ

た。だけど、結構すぐ慣れるもんだよ。日本に帰ってからはモンゴルが懐かしく思ったものだ。」
「あなた、頼もしいわね。それに比べて、わたしはいつも幼くって。つい最近まで、わたしの父はわたしのこと『幼稚園児』なんて呼んでいたのよ。失礼よね。でも、その幼稚園児を発情させてしまうんだから、あなたもたいしたものね。」
「そんなぁ。きみだって、幼稚園児の魔女ってとこかな。崇拝していたのはオレだけじゃないことは知っていたんだ。まあ、たいそう可愛い魔女だけどね。」

リハビリは麗名にとって簡単なことではなかった。医師にもう一生車椅子生活かもしれないと言われた重症だ。手足の感覚を確実にし、筋力を取り戻すのには何ヶ月もかかった。しかし、麗名の努力と慎吾のサポートは根気強く続いた。リハビリ病院に移って、約８ヶ月後、季節が３回変わった頃、麗名は退院出来ることになった。まだ完全ではないが、一人で普通の生活が出来ると判断されたのだ。

退院の日、麗名の両親が麗名と慎吾を車で送ってくれた。しかし、アパートの近くまで来た時、麗名の頼みで、麗名と慎吾だけ降ろしてもらった。
「わたし、慎吾さんと二人だけで歩きたかったの。約束通り、わたし達やっと一緒に住めるのね。」
「やっと、二人だけの生活だね。」
「ずいぶん長かったけど、慎吾さん、ずうっとわたしのそばに居てくれたのね。」

アパートに入ると、麗名は言った。
「城ヶ崎くん、コーヒー飲む？」
「お願いします、先生。」
そして、麗名がコーヒーを差し出す時言った。
「わたし、すごく良くなったような気がするの。だって、あの時と同じように手が震えているもの。そして、わたし、わたし、あの時と同じように熱くなってしまって。
ちょっと待っていてね。」
麗名は寝室に入ると、カサカサ、コトコトと何かしら片付けているようだった。そして、興奮している慎吾の手を取って言った。
「あなた、こっちに来て。」

慎吾が麗名の寝室に入った時、この時は、驚かなかった。そこは、相変わらず散らかっていたからだ。しかし、そんなことは二人にはどうでもよかったのは言うまでもない。

３．新しい旅立ち

リハビリ病院から戻った麗名と慎吾は、麗名のアパートでやっと二人の生活を始めた。二人の最初の夜から一年近くも経っていた。麗名の散らかった寝室もまだ片付けられていないダンボール箱も気にならなかった。

麗名は初めは少しびっこを引いていたが、それも直になくなっていった。外から見た限りでは、もう完治しているようだった。二人は、少しずつ日常の活動を増やしていった。そのころ、慎吾の高校三年と麗名の教師としての最初の年が終わろうとしていた。しかし、教師と生徒との関係が公になってしまった今となっては、両者とも、もう学校に戻ることはできなかった。二人は正式に退学・退職の手続きをした。

この時までに、慎吾は薬草によって麗名の意識回復を実現した立役者として麗名の両親には英雄的存在になっていた。ディズニーの手で行けば、眠れるお姫様にキスをして目覚めさせた王子様であり、いずれ麗名がその名の通り王女様になってよいはずである。という訳で、麗名の両親は慎吾が麗名と一緒に生活をすることを喜んで受け入れてくれた。

また、麗名はリハビリ病院退院後、初めて慎吾の両親に会った。麗名は慎吾との初めての夜から挨拶したいと言っていたのだが、やっと、自分の気持ちを慎吾の両親に直接伝える機会が出来た。慎吾の型破りな両親は慎吾から話は聞いているし、二人の真剣さに少なからず感銘を受けた。そして、すぐに純情な麗名を自分たちの娘のように扱ってくれた。

ある日の夕刻、二人が新宿を通りかかった時、慎吾が婆婆を訪ねてみようと言い出した。西口へ出て所定の場所に行くと、婆婆はおらず壁に何やら張り紙がしてあった。「高校三年生と英語教師へ」としたためてある。二人は顔を見合わせた。その下には、「体調不良のため、早退する。お目出度い。ごきげんよう。２月２９日。」とその日の日付で書いてあった。麗名は唖然としていた。慎吾は「それいったろ」と言ったような、少し得意げな表情で言った。
「やっぱり、あの婆婆は本物なのさ。でなくてはオレの間違い電話のことも、薬草のことも、そして、オレ達が今日ここに来ることもわかるわけはない。ただ、婆婆の体調が気になるな。」
「そうね。大丈夫かしら。」

「また今度来てみよう。」

アパートに戻った二人は慎吾のチチカカ湖までの冒険を振り返っていた。
「ところで、あなた、あなたがスペイン語で苦労しているところ想像がつくわ。わたしがそばに居て助けてあげられたら良かったのにね。」
「実はオレもそう思った。きみさえいればって。」
「でも、わたしがそこに居るんだったら、薬草取りに行く必要も無いわね。」
「そうなんだけど。」
「それから、その旅行会社の人、何か特別なツアーを企画しているって言っていたけど。慎吾さんのもらったパンフレットを見せてくれない？」
「あぁ。ちょっと待ってて。」
慎吾は自分の荷物の中からそのパンフレットを探し出し、麗名に渡した。そこには、こんなことが書いてあった。

全米大陸エコツーリズムの企画するエコツアーの指針
・現地の環境及び人々の生活に害を与えないこと。
・参加者の平和な世界観を広げること。
・現地の人々と参加者の協調を図ること。

極めて簡単ではあるが、普通の海外旅行とは一味違うツアーを提供していることがわかる。その企画エリアは北はカナダの北端から南はアルゼンチンの南端までアメリカ大陸全部に及んでいた。モンゴルの辺境で一年過ごした慎吾は、普通の海外旅行がいかに世界を毒しているかということに気がついていた。旅行者の満足感を満たすために現地の環境を破壊する。為替レートの違いのため、旅行者は現地の人々の金銭感覚を損ない、現地の生活に過度の悪影響を与える。考えれば、普通の海外旅行には多くの問題点があった。そして、パンプレットの一番下にはツアーガイド募集の広告があった。「未知の土地で大自然、現地人、及び参加者と協調して仕事ができ、日本語、英語、スペイン語、ポルトガル語、そして、できればフランス語に堪能なこと」とあった。

慎吾が口を開いた。
「この条件、かなり厳しいね。こんなの満たす人ってなかなか居ないよね。だけど、麗名さんはこれらのすべての言葉を話せる。そして、オレは未開地で生活した経験がある。オレ達二人一緒だったら当てはまるかもね。」
「それもそうね。わたし達、もうあの高校には戻れないし、二人で一緒に出来ることがあったら、わたし頑張るわ。二人で旅すれば、夜は一緒に寝れるし。」

「そうだといいね。大自然の中で、参加者との共同テントだったらどうする？」
「やだぁ。そうだったら、テントの外でもいいわ。」
「熊や山猫が居ても？」
「あなたは流石に未開地経験者ね。わたしはそういうことあまり想像も出来ないわ。それに、その熊っていうの実はあなたじゃないの？」
「ばれてはしかたないか。それより、いつも思うんだけど、正直言って、オレが麗名さんのキャリアをぶち壊してしまったようで心苦しいんだ。」
「あなた、誰がわたしの意識を回復してくれたの？それに、あの教師の仕事はあなたに巡り合うための機会だったと思うの。だって、わたしって、ほんとはまだ教師になるのには幼すぎたのよ。高校三年生に恋してしまったのだもの。それは、将来、また教師になりたいと思うかもしれないわ。でも、それはその時。あなた、その旅行会社の人に会ってみましょうよ。」

慎吾と麗名はその旅行会社の人と東京の小さな喫茶店で会った。彼の名は橋和太郎といった。
「いやー、慎吾さんに麗名さん。それはそれは良かった。内心心配していたんですよ。本当にあの薬草が効くかってね。」
「橋和さん、あの時は本当にありがとうございました。ぼくはどうしようかと思っていたんですが、疲れていたためフライトの殆どは眠ってしまった。橋和さんが声をかけてくれなかったら、入国の時たじろいで、それで捕まってしまったかもしれません。」
麗名も感謝した。
「橋和さん、本当にありがとうございます。わたしがこうやってここに居るのもあなたのおかげです。」
「いやいや。ほんとによかった。実は、旅行会社のオフィスでお会いすることもできたのですが、こちらのほうが落ち着くかと思い、ここで会っていただくことにしました。慎吾さんから大体のことは伺っていますが、お二人で一緒にツアーガイドの仕事ができないかということですね。」
二人はうなずいた。
「それは十分可能です。ただし、前もってお断りしておかなければならないことは、給与が希望通りにはならないかもしれないということです。それは、私たちの経費計算がツアーガイド一人の前提でされているからです。まぁ、私の経験上、特殊ツアーでガイド一人というのは厳しいものです。ですから、もしお二人で努めて頂けるのであれば、それはいいことかもしれません。とにかく、私は慎吾さんの実行力には感服したし、麗名さんの語学力にも脱帽しています。あなた方が二人一組でこの仕事を引き受けてくれ

るなら、出来るだけ良い条件を出せるよう上司と交渉します。」

詳細は更に打ち合わせることにして三者は別れた。慎吾と麗名は好奇心も働き、やってみようという気になっていた。それから数週間後には二人はその旅行会社と契約し、最初の仕事の打ち合わせに入った。それは、実際のツアーではなく次に募集する予定のツアーの下見だった。行き先はアマゾン最西端の熱帯雨林。このあたりはペルー領で首都リマからアンデス山脈を越えて入る。現地での行動を容易にするため、持ち物は各々バックパック一つだけだ。

下見に出発する日、麗名はかなり緊張していた。いくらスペイン語に堪能とはいえ、行先は未開の熱帯雨林だ。二人は慎吾が以前体験したようにリマまでロサンゼルス経由で飛んだ。まずはリマで数日間情報収集に費やした。慎吾はスペイン語に堪能な麗名がいるとさすがに心強かった。それでも、これからは慎吾一人で行動することもあるだろうと、少しずつスペイン語を学ぼうと務めた。

今回の目的地はリマから５００キロほど北にあるモヨバンバと言うところだ。ここは、未開の原住民が住んでいる地域に近い。エコツーリズムの指針上現地人に悪影響を与えることはできないので、実際に未開原住民に接触することはないかもしれない。それでも、近隣の地域に行くことで未開の環境を見届けることは出来るだろう。モヨバンバにも一応空港があることがわかったのだが、それは泥地を整地しただけのもので、定期便はない。チャーター便は費用がかさむので、まず、チャチャポヤスというもう少し大きな町まで定期便で飛び、そこから約２５０キロ、８時間ほどのバス旅をする。チャチャポヤスではモヨバンバのホステルを選定した後そこで一泊し、翌日バスに乗った。行程は殺伐とした盆地から始まり、その後かなりの山々を超え、最後には熱帯雨林を通過する。

ニューヨークと東京近辺からあまり出たことのない麗名にとって、このバス旅はすでに衝撃的であった。それでも、好奇心の方が強かったと見えて真剣に窓の外を見ている。途中の休憩時間では簡易バスストップでトイレを利用するわけだが、麗名にはかなりの度胸が必要であった。無事にモヨバンバに到着した時はすでに暗くなっていた。早速チャチャポヤスで調べておいたホステルに徒歩で向かう。スナックを食べた後、二人とも疲労のためぐっすりと眠った。

翌日から現地の視察を開始した。どこでどんなものを食べたらいいか。どんな活動が出来るか。そこにはレストランと呼ばれるようなものはほとんどない。それでも、現地の

人々が食事をする場所はある。多くは屋台のようなものだ。二人は何か所か試してみた。二日目だったろうか、麗名が急に腹痛を訴える。はっきりとはわからないが、どうやら水にあたったようだ。それは、麗名だけ喉の渇きをいやすためにガボガボと水を飲んだせいだと思われた。慎吾は麗名をベッドに寝かせ、横で様子を伺う。その夜はそうやって過ごした。幸い、次の日には回復し、一日休養の後、視察を再開した。

数日後、ハイキングのコース選定に出かけた。町がある低地から少し丘のような地帯に入り、ちょっとした茂みの中のけものみちのようなところをかなり歩いたところだった。先頭を歩いていた慎吾が麗名の視界から急にいなくなったのだ。麗名は驚いて立ち止まった。恐る恐る慎吾が歩いていたあたりを見ると、どうやらそこには深い穴がある。麗名はアメリカに住んでいるときフロリダ州のシンクホールの話を聞いたことがある。それかと思った。自分も落ちてしまわないように気を付けながら覗いてみた。人の背丈よりずっと深いと思われる穴の底に慎吾が横たわっている。
「あなた！！大丈夫？」
麗名が声をかけても返事がない。麗名は繰り返し試みるが慎吾は気を失ってしまったようだ。麗名はさらに不安になる。「まさか、死んじゃっていないよね」とまで思った。到底麗名一人で救出できる状態にはない。数十分様子を伺っていたが変化がない。途方にくれた麗名は町まで戻って助けを呼ぶしかないと思った。そばの木にハンカチを巻き付け記しにした。麗名は来た道を戻り始めた。「こんな見知らぬ未開の地でわたし一人で救助を求めに行くなんて。」麗名は途方にくれていた。しかし、何としても慎吾を助けなければ。

麗名が去って数時間後、慎吾の入っている穴のところに数人、原住民と思しき人々が現れた。彼らはお互いに何か言いあっていたが、穴の中の慎吾を見て怪訝な顔をしていた。周りの木にロープを巻き付け、一人が下に降り、今度は慎吾の体にロープを巻き付けて引きずり出した。慎吾はまだ気を失っていた。原住民の一人が水筒から水を出して慎吾の顔にかける。それから、みんなで、慎吾の体を揺すったり顔を叩いたりした。すると、しばらくして慎吾の目が覚めた。慎吾はあたりを見回して不思議そうな顔をしている。
「麗名さん？麗名さん？！」
慎吾の言葉に返答はない。見知らぬ原住民たちも不思議そうな顔で慎吾を見つめている。

やがて、慎吾は完全に意識を取り戻した。服は泥だらけ、手には無数のかすり傷と切り傷、顔が少しひりひりするし、左の手首が少し痛い。それでも立ち上がるだけの元気と気力はあった。あたりを見回すと、そこはさっきまでハイキングをしてきた場所だ。しかし、麗名がいない。

「麗名さん？麗名さんはどこ？！」
慎吾は繰り返し言ったが返事はない。原住民の一人が穴を指さした。慎吾は初めて自分がその穴に落ちて気を失ったということに気づいた。今の時刻から推定して、それから数時間経っている。原住民の一人が気が付いて、木に巻き付けてあったハンカチを指さす。慎吾はすぐにそれが麗名の物と分かった。そして、麗名が助けを求めに行ったと想像できた。

もし、麗名が来た道を引き返し助っ人を連れて来れれば、いずれはここに戻ってこれるだろう。しかし、麗名は都会っ子だ。無事にそんなことをやってのけられるだろうか。慎吾は不安で仕方なかった。どうしたらいいか。慎吾はこの状況を原住民たちに伝えようと思った。木に巻き付いているハンカチを指さして必死に言った。
「ミ・ムヘール、ミ・ムヘール。」
この旅で覚えた数少ないスペイン語の一つだ。直訳すれば、「私の女」。だが、実際にはそれは私の妻という意味で使われる。兎に角、麗名の存在を示したかったのだ。

原住民たちは何やら話し合っている。慎吾にははっきりとはわからなかったが、どうやらそれはスペイン語ではないようだ。おそらく原住民の言葉であろう。しばらくして、一人が話し始めた。
「バモス・ア・ブスカール・ラ。」
これも慎吾にはわからなかった。戸惑った顔をしていると、他の一人がハンカチを取り、それを振りかざしている。真意がわからない不安が続くが、これ以上どうすることもできず、答えた。
「グラシアス。」
原住民たちは納得したような顔で立ち去った。そこには不安に包まれた慎吾だけが残った。

一方、助けを呼びに行った麗名は途方にくれていた。来た道を戻ったつもりだったが、どうも見覚えのないところに来てしまった。道に迷ったようだ。慎吾は穴の底。自分は迷子。想像を絶する悪夢で、絶望感がよぎる。これ以上無駄に動いては慎吾から余計に遠ざかってしまうかもしれない。麗名はその辺でなるべく見晴らしが良い場所を探し、誰かが自分を見つけてくれるように努めた。長い木の枝を探し、タオルを巻き付けて高く掲げた。今度は太い木の枝を探し、その辺の木を叩き始めた。それまでは助けを求めることに精一杯で気にしていなかったのだが、今となっては周りの大自然が麗名に蔽いかぶさっている。麗名は急に恐ろしくなってきた。「日が暮れたらどうしよう？」一人で大自然の真っ只中で夜を迎えられるだろうか？寒くもないのになんだか体が震えてき

た。

そして、段々日が落ちて行った。その時、麗名は何か物音を聞いたような気がした。ガサガサと草むらをかけ分ける音。人の声。「セニョーラ！セニョーラ！」と言っている。当然慎吾ではない。麗名はそれが誰だか見当もつかなかったが、思わず叫んだ。
「アキ！アキ！アジューデ！」

すぐに、草むらの中から数人の原住民たちが現れた。彼らの一人が麗名にスペイン語で慎吾の状況を伝えた。麗名はもう嬉しさで涙一杯だった。彼らに感謝すると、すぐに慎吾のところへ連れて行ったもらうように頼んだ。その途中、麗名は慎吾が落ちたのは彼らが作った動物捕獲用の穴だということを聞いた。原住民たちは麗名を慎吾の居るところへ案内した。もうだいぶ暗くなっていたため、慎吾と麗名のことを心配した原住民たちは町の近くまで二人を送ってくれた。二人は彼らに心からお礼を言った。そして、麗名が彼らにさらにお礼をしたいと言ったのだが、彼らは旅人を助けることが出来て名誉だと言っただけだ。今度は、麗名が彼らと後でコンタクト出来るかと聞いた。彼らは言った。
「我々はこの土地で先祖代々暮らしている。我々は他の部族の生活を尊重するし、我々のことも尊重して欲しい。他の部族との友好的な関係は歓迎するが、我々の生活を踏みにじるよな人々には来てほしくない。」
これに対して、麗名はエコツーリズムの指針を告げ、彼らの生活を尊重したいと伝えた。原住民たちはそれなりに納得したようだった。そして、麗名に、彼らは週一回、町のマーケットに行くと言った。そこで彼らの捕獲した動物を売っているというのだ。麗名はマーケットを訪れたい言った。後で、麗名は慎吾に原住民のスペイン語はかなりの訛りがあると言った。それでも、意思疎通が出来たことは二人にとってどんなに救いだったことか。慎吾と麗名がホステルに戻った時は二人とも疲れ果てていた。

翌日、慎吾と麗名はハイキングでの体験を振り返っていた。
「あなた、わたし達どうなることかと思った。どんなにあなたに一緒に居てほしかったか。わたし、まだ大自然の中で一人で夜を越せるとは思わないわ。」
「ほんとにどうなることかと思った。不幸中の幸いってとこかな。こんな危ない体験をして、きみはこの仕事続けられる気がする？」
「確かに昨日は絶望感に溢れていたわ。でも、それでも、わたし辞めたくない。高校教師を一年もたたずに辞めて、ツアーガイドを最初の下見で辞めてしまっては情けなさすぎる。わたし、頑張るから。大自然を楽しめるぐらい頑張りたい。お願い、城ケ崎君。」

「わかったよ、先生。元はと言えば、今回の事件はオレが不注意だったからだ。もっと気を付けるよ。兎に角、オレのけがも大したことなかったし、手首が少し痛いくらいで大した障害もない。あと、オレがもう少しでもスペイン語が話せたらと思ったよ。」
「わたし、ひとつ考えがあるの。未開地では携帯電話も通じないことが多いから、次から無線を持つことにしない？荷物が増えるけど使い道があると思うの。特にわたし達、二人一組だから便利だと思うわ。」
「それはいい考えだ。日本に帰ったら早速買おう。」
どうやら、この二人、この事件は乗り越えられそうであった。

数日後はマーケットの日だった。慎吾と麗名はあの時の原住民たちに会えると思って出かけて行った。二人は原住民の一人を見つけた。再びお礼を言って、彼らの売っているものを見せてもらった。二人には余りに馴染みのない動物ばかりであった。当然二人には買って消費するようなものではなかったので見るだけに留めた。そこには他にもう一人、少し年長の人がいた。この年長者はすでに慎吾と麗名のことを聞いていたと思われ、二人に話しかけてきた。趣旨は数日前に他の原住民から言われたことと同じだ。他民族を尊重するし、彼らも尊重してほしいということだ。彼らは、他の部族が侵入してきた西洋人たちに虐殺された話をいやというほど聞かされている。

麗名はこの年長者にもエコツーリズムの指針を強調した。そして、非商業ベースの交流が出来るかどうか聞いてみた。年長者と麗名はしばらく話し合っていたが、その後、麗名が慎吾に説明した。彼らは交流自体に反対ではない。部族外の世界に興味はあるし、部外者に彼らの生活を知って、理解してもらうことに異存はない。ただし、彼らの生活を破壊するようなことにはあくまでも反対である。年長者は条件によっては慎吾と麗名が彼らの部落を訪れることも可能だと言った。年長者と麗名の取り決めた条件は以下の通りだ。

１．部族の集落へ行く場合は必ず部族の人と一緒に行くこと。
２．部族の正確な場所を公にしないこと。
３．金銭・物品・食物の受け渡しがないこと。
４．ごみを出さないこと。

簡単であるが、慎吾と麗名はいい条件だと思った。年長者は次のマーケットの朝にガイドを連れてくるのでこのガイドについて行くようにと言った。

一週間後、慎吾と麗名がマーケットに行くと、約束通り一人の原住民がガイドとして

待っていた。ガイドは二人をマーケットのはずれの川岸まで連れて行き、一緒に小さなボートに乗せた。このボートには小さなエンジンが付いており、そこそこのスピードで川を遡っていった。３０分ほども行ったろうか、ボートは岸に付けられ、三人はそこから１０分程歩いた。部族の集落に着くとそこには広場を囲むように草ぶきのような建物がいくつか建っていた。集落では十数人の人々が各々何らかの作業をしている。少し、慎吾と麗名の事が気になっているようだ。広場の真ん中には焚火があり火がついている。二人は建物の一つに通された。

そこには、三人の年配の男性が土間のような床に座っている。部族のリーダーたちと思われた。慎吾と麗名も座らされた。この三人は原住民の言葉で会話をしていたが、これはさすがの麗名もわからない。だが、このうち一人がスペイン語で話し始めた。彼らのいつも最初に言うことは彼らの生活を脅かさないで欲しいということであった。これは、全米大陸至る所で原住民が虐殺されてきた歴史を考えれば明らかなことである。多くの部族は侵略者と戦い殺されてきた。この部族は外部との戦いは避けようとしている。彼らは外部との接触に極めて寛容であるとさえ言える。それでも、彼らの要求は常に主張しなければならないと思っている。麗名もまたエコツーリズムの指針を繰り返す。原住民の三人はこの指針については認めているようだ。そして前回会った年長者と麗名の話した取り決めも確認された。

次に、彼らの疑問はどうやってその取り決めが全うされるかと尋ねてくる。これには麗名もはっきりした答えを持っていなかった。慎吾に日本語で相談する。二人は、参加者の事前聴取と旅行前の講習が必要ではないかと話し合い、これをリーダーたちに伝えた。

最後に質問されたのは、もしその取り決めが破られたときはどうするかということだった。これについても麗名はすぐに答えられなかったので、慎吾と相談する。二人は、慎吾と麗名を含めて、参加者の合法的処置はやむを得ないと考え、これを伝えた。二人は、参加者の講習時にこれらの条件を確認する必要があると悟った。その後三人のリーダーたちはしばらく話し合っていた。反応は良いようだった。皆、笑顔で談笑している。彼らは話の内容に満足したと言った。

この後、慎吾と麗名は集落の周りを案内された。捕獲した動物を調理する場所、何種類かの農作物が植えられて居る場所、病人が看護されている場所、先祖が祀られている場所などだ。彼らは、慎吾と麗名が連れてくる限り、エコツアーを受け入れると言った。そして、二人に案内したように集落を案内してくれるといった。慎吾も麗名もこの部族を訪れることが新しいツアーのハイライトになると思った。未開部族の生活を忘れてし

まった日本人に原住民の生活はどう映るであろうか。

限られた時間ではあったが、慎吾と麗名は未開部族の世界観、社会観、生死感を垣間見た気がした。麗名は瀕死の状態を経験しているが、二人はまだ親類・知人の死に直面したことはほとんどない。どうやら、この部族にとっては、死という現象がもっと身近で、当たり前のことのようである。死が良いものというわけではないにしても、誰もの生活の糧として存在しているようであった。そして、彼らはマーケットで捕獲した動物を売り金銭を得てはいるが、部落での生活に金銭は無用だ。お互いに助け合いながらいろいろな物を共有して生きているように思える。

モヨバンバでの視察が終わり、慎吾と麗名は帰途についた。来た道中を反対に進む。リマの空港で出国審査の時、慎吾はチチカカ湖に行った時に助けてもらった審査官を見かけた。審査官は出国審査エリアの反対側を通り、関係者のみと書かれたドアに入っていった。慎吾は彼に声をかけたかったがこの時は諦めた。この仕事を続ければ、この空港に来ることも多いだろう。きっと会えるはずだと思った。という訳で、二人の新しい仕事が始まった。誰にもとがめられず二人で一緒に出来る仕事だ。二人は本腰を入れようと思っていた。

しばらく開けていたアパートに帰って来た二人は、麗名の長いリハビリ生活から帰ってきた時と同じ様な気がした。
「城ヶ崎くん、コーヒー飲む？」
「もちろん、先生。」
「そして、あなた、わかるでしょう。わたし、もう熱くなってしまって。」
その夜は、麗名が寝室を片付ける暇は無かった。麗名は興奮している慎吾を真っ直ぐ寝室に連れて行った。

４．安城麗名の幼序曲

これは麗名の母親の回顧録です。

夫と私は、夫の仕事の関係でニューヨーク近郊に住んでいました。その仕事はある日本企業の秘密プロジェクトで、私たちは意図的に日本人のいないようなところを選びました。私たち夫婦は二人の生活を楽しんでいたので、当初子供は作らない計画でした。私は美術史に興味があったので、ニューヨークの大学で授業を取ったり、たくさんある美術館に行ったりしていました。

ところが、ある日、私は自分が妊娠していることに気が付きました。計画していなかったとはいえ、妊娠してみると自分の子供が出来ることが嬉しくて仕方がなくなったのです。女の子が生まれた時は近所のプエルトリコ出身のおばあさんが「女王様」という意味のレイナにしてはと勧めてくれました。夫も私も気に入り、「麗名」という漢字をあてました。少し難しいとは思いましたが、麗しい名前というという感じで良いと思ったのです。

麗名を育てるのは簡単ではありませんでした。よく泣く子で、時にはどうしたらよいのかわからないこともありました。なんだか、いつも抱っこをしていなくてはならないような子だったのです。他の子供たちは平気でベビーカーに収まっているのに、麗名はいつも私の腕の中でした。アメリカ人は早くから子供を子供用のベッドに一人で寝かすのですが、私たちはこれには反対で、麗名はずっと夫と私の間に寝ていました。これは小学生になっても続いていました。中学になっても時折、いつの間にか私の横で寝ていることもありました。時々怖い夢を見るらしいのです。

それから、麗名は幼少時から時々癇癪を起すことがありました。バタバタと手足を振り回すような動作をして泣きわめきました。私たちはどうして麗名がそういう行動をするのか、何が原因なのかよくわかりませんでした。育児の本なども読んだのですが、どうもパッとしません。その後も、形を変えて癇癪は続きました。中学生のころは、さすがに手足をバタバタすることはありませんでしたが、急に大きな声をあげたりするのです。夫は夫の父がよく怒鳴り散らす人で、それが嫌だったということも漏らしていました。それで、自分は怒鳴らないように注意していると。ひょっとして、何か遺伝的なものがあるのでしょうか。

多くのアメリカ人は子供を早くから託児所等に預けてしまうのですが、私たちは給料で働く人たちに麗名を見てほしくはありませんでした。近所に親戚もいないし、そこまで信頼できる友人もいませんでした。それで、現地の幼稚園に行くまで、麗名は私が一人で面倒を見ていました。この時までは、麗名は私たちと日本語で会話をしていたのですが、幼稚園に入ってからは段々英語が増えました。そして、段々に私たちにも英語で答えることが多くなってきました。ところで、麗名の日本語は私の影響が強く、私の世代の女性の話し方に近いかもしれません。私自身あまり流行りの言葉を使うタイプではなかったので、私の同世代よりさらに古く感じられるかも知れません。

アメリカ人は一般に数学が苦手です。麗名が特別に数学や他の科目が得意だったとは思いませんが、単に相対的によくできたのでしょう。２年生の時飛び級を勧められて私たちもそれに応じてしまいました。今思うと、これは正解だったかどうかよくわかりません。その後も麗名は学校の勉強で困ったことはないし、背も飛びぬけて小さいわけではなかったのですが、やはり一才上の子供たちと一緒にいることもあっていつも幼い感じがしていました。ただ、これはもっと性格的なものかもしれません。今思えば、私自身どちらかというと同年代の子供たちより幼い感じだったと思います。

また、自己主張の強いアメリカ人の子供たちの中にいると、麗名はいつもおとなしく、ボーッとしているような感じでした。ただ、好奇心は旺盛の様で周りのことは大変注意深く見ているのですが、人前にどんどん出ていくような性格ではありませんでした。家の周りの友達とは幼少時から遊んでいたため、仲が良かったのですが、新しい友達をすぐにたくさん作るというタイプではありませんでした。

私たちの住んでいたところはラテン系の人種の多いところで、麗名の一番の友達はメキシコから来たばかりの女の子でした。この子はアメリカに来たころ英語ができませんでした。その子と遊びたかった麗名は実に早くスペイン語を覚えてしまいました。その子の家に遊びに行ってそこの一員のようにスペイン語でやり取りをしていました。

近所には他にもブラジル人とかハイチ等の元フランス植民地から来た人も多く、商店街では地区や業種によってブラジルのポルトガル語や元植民地のフランス語も飛び交っていました。麗名はスペイン語を覚えると、これらの関連原語は簡単だと言って、ごく自然に覚えていきました。

また、それほど遠くないところに日本人学校もあったのですが、私たちは週末も麗名を学校にやるのは行きすぎだと思い、行かせませんでした。何回か麗名自身にも聞いたと

ころ、やはり、週末はゆっくりしたいとのことでした。

そして、麗名が中学生の時、夫のプロジェクトが急に終了することが決まり、仕事が片付き次第日本に帰るということが決まりました。タイミングとしては麗名が丁度高校生になるときだったのです。この時は麗名はまだ日本語の読み書きができませんでした。しかし、日本で高校に入るのには読み書きが必要なので、彼女はそのころから急に慌てて読み書きを練習し始めました。それでも、日本語での会話は不自由なかったので、日本語をまったく初めて学ぶ人たちに比べれば楽だったと思います。約一年で、とりあえず簡単な読み書きができるようになり、日本の高校へ進むことが出来ました。高校は帰国子女受け入れ校だったので、それなりの配慮があったと思います。そして、高校に行っている間に日本語の読み書きも普通に出来るようになりました。それから、やはり、高校の友達は麗名の話し方が少し古臭いと言っていたようです。大袈裟だと思うのですが、「平安朝風」とか言われていたらしいです。わたしに言わせれば、最近の日本の女性の話し方は少し中性化、あるいは男性化しているような気がします。まあ、そんな調子で、無事高校を卒業し、大学では、それまでの経験を生かという意味で、英語とスペイン語を専攻しました。

麗名はアメリカで生まれたので自動的に日米の二重国籍を取得し、今までずっと両国のパスポートを使ってきました。ただし、日本の法律では２２歳のころにどちらかを選ばないといけないそうです。麗名がどうするかは彼女の問題なので、いずれ彼女が自分で選択するでしょう。

夫は仕事でかなり忙しかったので麗名の育児にはあまり関与しませんでした。それでも、家族の時間はなるべく保つように努めていたので、麗名と夫の関係は極めて良いと思います。夫はずっと麗名のことを「幼稚園児」と言ってからかっていました。これは麗名が大学生になっても続いていました。これは、麗名の幼さを思えば極めて的を得た表現で、麗名も反論は出来ないようでした。麗名が中学生の頃は段々体も大きくなり、このころは、夫は麗名のことを「カピバラ」と呼んでいました。それは、体ばっかり大きくなって、それでも情けない動物に見えたからだそうです。あまりに的を得ていたので、これには私も笑ってしまいました。

そんな状況で、麗名は真剣に異性と付き合ったことはなかったようでした。どちらかというと家でごろごろしているようなタイプでした。そして、麗名の一番苦手なことは身の回りの整理整頓でした。なんだかつまらないと思われるものでもため込んでしまうのです。そして、ため込んでしまったものをうまく片付けたり、処分することができずに

いました。そんな訳で、麗名の部屋はいつもごみ溜め状況でした。「彼氏でも出来たらどうするの？」と問い詰めると「そんなのいらない」といった調子でした。

麗名は大学４年の時にいろいろ考えていたようですが、自分の得意分野を使うという理由で高校の英語教師になる道を選んだのだと思います。その高校は私たちの家から通うのには遠くて不便だったので、麗名は簡単に電車で通えるところにアパートを借り、一人暮らしを始めることにしたのです。正直言って、あの幼い麗名がほんとに一人暮らし出来るのかと不安でした。

そして、麗名が勤め始めてまだ数週間目だったでしょうか。麗名から電話があり、恋人ができたというのです。夫と私はたいへんびっくりしました。どうした風の吹き回しかと思いました。一人暮らしが寂しく、怖かったからかなとも思いました。そしてもっと驚いたのはそれから何時間も経たないうちに麗名の交通事故の知らせを受けたことです。目の前が真っ暗になりました。私たちのたった一人娘、幼い一人娘、幼稚園児。

夫と私が病院に駆け付けたとき、麗名は意識不明の重体でした。生死の境と言われ、気が動転しました。そして、麗名が意識を失う直前に「しんごさん」、「アパート」と言ったということを聞きました。私はすぐわかりました。そんな状況で言った名前なので、麗名の恋というのは真剣なんだと。今まで恋愛の経験はなかったけれど、今は違うんだと。

病院で初めて慎吾さんを見たとき、私は慎吾さんの真剣さも直感しました。私たち夫婦は改めてあの幼い麗名がこの人に恋をしているのだと実感したのです。それなのに、あの時の残酷な状況。麗名にもまして、意識のある慎吾さんが気の毒でなりませんでした。

慎吾さんにはずいぶん驚かされました。まず、麗名が意識不明の間、四六時中麗名の横に居てくれたこと。急に、意識不明に効く薬草を取りに南米まで行くと言い出したこと。そして、ほんとにその薬草を取ってきて、麗名の意識を回復してくれたこと。とても普通の高校三年生の出来ることではありません。とても頼もしい人だと思いました。この人だったら、きっとあの幼い麗名と一緒に生活していけると確信しました。この二人が最初の夜から一緒に生活するつもりでいたことを知ったとき、私は素直に喜ぶことできたのです。麗名が教師を辞めても、慎吾さんが高校を中退しても、この二人だったら納得できる道を切り開いていけると思いました。二人が一緒にエコツーリズムのツアーガイドをすると聞いたときは感心しました。大変ユニークな道を良く考えついたなと思いました。二人の幸せを願ってやみません。

５．旅の合間の変遷

慎吾と麗名のエコツーリズム・ガイドとしての仕事は順調であった。二人の最初に企画したペルー北東部の未開地への旅は同社のエコツーリズムの中でも最も人気のあるツアーの一つとなった。何回も通ううちに、あのリマの出入国審査官とは顔なじみになった。元気な麗名を見ていつも喜んでくれた。そして、自分も一役買ったと自負し、英雄気取りであった。そして、慎吾は言われるまで気が付かなかったが、なんと彼は日系人で、姓はヤマカワといった。顔つきも日本人離れしているし、日本語も話せない。しかし、ペルーにはそのような日本人がたくさんいるということだった。

慎吾と麗名は、その他にもカナダ最北端のツンドラの旅、アメリカ南西部のナバホ・ホピ部落の旅、コスタリカの山岳地帯探索、アマゾン川の船旅、アルゼンチン南部パタゴニアの旅等、多くの旅を企画した。さらに、同僚の企画した他の旅のツアーガイドとしても活躍し、同社でも経験豊かなツアーガイドのうちとなっていった。顧客の評判は良く、二人のツアーに度々参加する人々もいた。

それでも、その間に失敗がなかったわけではない。ある時コスタリカで共同テントに宿泊中のことだ。参加者が寝静まったころ、麗名が熱くなってしまって興奮している慎吾をテント外に連れ出した。共同テントから少し離れたところ、満天に輝く星空の下、携帯用シーツを敷いて二人だけの世界を作り上げていた。ちょどそのころ、共同テントの中にサソリが侵入し参加者の一人が刺されてしまったのだ。参加者は何が起こったかすぐにはわからず、フラッシュライトをつけた。慎吾と麗名がいないことに気が付いた参加者はびっくり仰天して、大騒ぎ。それを聞いた慎吾と麗名は慌てて服を着て共同テントに戻った。サソリの傷の処置は、何とか救急箱にある医療品でこなし大事には至らなかった。一段落した時、参加者の一人が言った。「ところで、慎吾さんと麗名さんのシャツが入れ替わってますね。」皆大笑いであった。この話は会社でも後々まで語り継がれることになる。

またある時、カナダ北部のエスキモーの部落に滞在したことがある。かなり大きな氷の家イグルーに参加者全員と宿泊していた時のことである。この時も、麗名が熱くなってしまって興奮状態の慎吾の寝袋に無理やり潜り込んで来た。一人用の寝袋に二人入ってしまったので、身動きが出来ない。中から締めたファスナーの金具に二人とも手が届かなくなってしまった。これらの寒冷地用の寝袋は強靭な素材でできており手では引き裂くこともできない。仕方なく、二人は大きな声を上げて参加者を起こし、外からファス

ナーを開けてもらわざるを得なかった。これもまた社内の語り草となった。

７年ほどの間にツアー回数は視察を含めて１００近くに及んだ。慎吾のスペイン語も上達し、麗名の自然に対する感覚も養われた。二人とも、もう一人でもツアーガイドとして活躍できる状況にあった。それでも、周知の通り、この二人はいつも一緒に居たかったので、ツアーは必ず二人で遂行した。ツアーのない時は時折オフィスで事務をしたり、同社内の不動産部門の手伝いをすることもあった。それでも、ツアー以外の多くの時間は自由であり、それなりに二人の自由な時間も持てた。

ところが、ある日事情は激変した。二人は同社特殊ツアー部門のリーダー、橋和太郎から次のように言われたのだ。
「慎吾さん、麗名さん、私はあなた方にほんとに感謝しています。同社の特殊ツアー部門が盛況なのはひとえにあなたたちの努力によるものです。それなのに、たいへん言いずらいことが生じてしまいました。当社の不動産部門で大規模な失敗があり、当社は本日付で倒産を余儀なくされました。一般旅行部門は同業の大旅行会社に吸収されましたが、特殊ツアー部門は採算性の事情で完全撤廃を宣告されました。」
慎吾と麗名は愕然となった。二人はやっと自分たちの道が見えてきたと思ってきていたところだ。しかし、単なるツアーガイドの二人には何もできることはないと悟った。しばらくの沈黙の後、慎吾が口を開いた。
「そうですか。残念です。それで、橋和さんはどうなるのですか？」
「私も特殊ツアーの一員ですから当然解雇となりました。実は、最近実家で農業を営む父の様態が悪くなっていたので、戻ってきて手伝わないかと言われていた矢先です。どうやら、運命はそれをしろと言っているように思われるのです。家業を継ごうと思っています。」

慎吾と麗名にとって、橋和の決断は意外であった。橋和と農業は全く結びつかなかったからだ。それにしても、慎吾と麗名も何かしらの決断をしなければならなかった。慎吾と麗名の給与はそこそこで、悪くはなかった。それに、一年の半分近くは旅行中である。出費は極めて少なかった。そのため、二人はそれなりに貯金をする余裕もあった。しばらくは生活できる。その間に何か考えようと思った。

ちょうどその頃、慎吾の祖母の老化が激しくなっていた。祖父が最近他界してからは、自活型の老人ホームに住んでいたのだが、段々身のまわりのことが難しくなっている。ホームのケアマネジャーはそろそろ特別養護老人ホームを考えた方がよいと言っている。しかし、慎吾の両親は祖母が特養に入ると急速に弱ってしまい死期を早めるのではない

かと言う。そうかといって、大学教授の両親二人とも今だ研究・教育生活に忙しい。そこで、急に時間の出来た慎吾が祖母の手伝いをすることになった。慎吾はほぼ毎日祖母のところへ行くようになった。

これは慎吾にとっては今までと全く違う生活で、慣れるまでかなり難しかった。祖母の世話は、ただ単にすべて助ければよいというのではない。必要以上に手助けすれば、余計に弱ってしまうからである。そのため、祖母の自活力を出来るだけ保持しつつ、ほんとに必要な部分だけ手助けをする。どこで線を引いたら良いか、慎吾は祖母の状態を注意深く見守っていてあげなければならなかった。おかげで、特養を勧められた祖母であるが、慎吾の助けを最小限に借りつつ当面自活型のホームに留まることが出来るということが明らかになった。

数か月間この状態が続き、慎吾の活躍はもう少し長期戦になることが予想された。慎吾と麗名は、何かしら収入源が必要と悟った。そこで、麗名が職探しを始めた。また英語教師という可能性もあったが、麗名はまだ慎吾と恋に落ちた記憶が強く、それには抵抗があるようだった。いくつか履歴書を出し、下調べのための会社訪問などもしてみた。そして、数週間後、麗名は慎吾に言った。
「あなた、わたし仕事みつけたわ。ラテンアメリカ連盟日本支部のコーディネーターなの。コーディネーターというのは、実は何でも屋みたい。秘書、通訳、翻訳、多分お茶くみも。でも、外国語の能力が必要で、わたしには合っていると思って。」
「ほんとう。それは良かった。オレが収入がなくって悪いんだけど、今のところ祖母の手伝いをしてやりたいと思っているので仕方ない。」
「それから、こちらはパートなんだけど、週末はスペイン語の観光ガイドもしようと思って。」
「えぇ！それはたいへん過ぎない？そこまでしなくてもいいんじゃない？」
「そうかもしれないけど、連盟の仕事あまりお給料よくないし。それに、スペイン語のガイドはそんなに需要がないかもしれないので、忙しくはならないんじゃないかと思うの。」
「それならいいんだけど。無理しないようにね。無理する前にちゃんと言ってね。そして、自分勝手だけど、疲れすぎちゃって夜までもたなかったりしても困るし。」
「やだぁ。あなた、わたしのことよく知ってるでしょ。コスタリカや北極圏での過激なツアーの最中でも、夜には、わたし熱くなってしまったじゃない。」
「それもそうだね。でも、ほんとに言ってね、忙しすぎる前に。」

麗名が働き始めてからは慎吾が家事・炊事をすることになった。これは慎吾の得意な分

野でも好きなことでもない。しかし、麗名が忙しく、時に週末さえ働く状況で、ぶらぶらしているわけにはいかない。それで、慎吾は最低限のことをして、出来るだけ手を抜いた。もともと麗名も家事が得意なわけではないので、それほど文句を言うわけでもなかった。

その後の慎吾の祖母の状態は悪くはなく、現状維持が可能だった。祖母の好きな桃の季節が、何回か過ぎた。そして、ある日、祖母の手を引いてホームの庭を散歩しているとき、慎吾はハッとした。見覚えのある老女が車椅子に乗って押されていた。
「あのぉ。人違いだったらお許しください。もしかして、あなたは新宿の婆婆ではありませんか？」
老女は慎吾の方を向いて言った。
「ほう。どれどれ。わしも年で、だいぶ目も記憶も悪くなった。ようくあんたの顔を見せておくれ。」
老女はじっくりと慎吾の顔を見ている。何か思い出そうとしているようだ。
「そうだな。高校三年生だな。失礼。その時の話はという意味だ。英語教師は元気かい？」
慎吾はほっとした。あの婆婆にまた会えた。そして二人のことをまだ覚えている。
「婆婆、その英語教師、麗名さんは元気だよ。元気なのは婆婆があの薬草のことを教えてくれたからだよ。オレは慎吾。ずっとお礼を言いたくて、麗名さんと何回か婆婆のとこに寄ってみたんだけど、いつも体調不良とあって。心配していたんだ。ところで、これは、オレのばあさん。ばあさん、こちらは新宿の婆婆。オレの彼女の命の恩人さ。今、オレが麗名さんと幸せにくらしているのはすべて婆婆のおかげなんだ。」

婆婆の車椅子を押していたワーカーによると、婆婆は隣にある特養に入所してきたということだった。身内は誰もいないそうだ。婆婆の部屋を訪れることを約束して、その日は別れた。アパートで慎吾は麗名の帰るのを待ち構えて婆婆のことを話した。麗名はたいそうびっくりしたが、婆婆に会ってお礼を言いたいということで、ガイドの仕事の入っていない週末に会いに行くことにした。

麗名はその時初めて婆婆に会った。それなのに、なんだか幼いころから知っているような、あるいは自分の祖母のような親しみを覚えた。
「婆婆さん、慎吾さんに薬草のことを教えてくれて本当にありがとう。わたしの命を救ってくれて本当にありがとう。」
「もう、えぇわ。昔のことじゃ。それより、あんたがたは幸せにやっとるか？」
「えぇ。わたし幸せ。数年前まで慎吾さんとわたしはツアーガイドをしていて、大変

だったけど、とても楽しかった。今は、わたしが働き、慎吾さんはおばあさんのお手伝い。婆婆さんも会ったでしょう？」
「そうだったな。段々記憶力も、体力も、魔力さえ衰えてしまった。昔はいろんなことが見えたんじゃよ。他人の話を聞き、顔を見ていると、そこにはいろいろなことが書いてある。ほとんどの人にはそれらが見えないだけなのじゃ。よく注意すればほんとにいろいろなことが見えてくる。それがわしの魔力じゃった。だが、わしももうそう長くはなかろう。魔術というのは現実を逃避することではない。現実を理解することじゃよ。まぁ、気が向いたらわしのところに来てあんたらの話でもしてくれ。」

その後も、慎吾は相変わらず祖母の手伝いを続け、たまには婆婆のところによって話をしたりした。麗名と一緒に訪れたときは、天気が良ければ、麗名が婆婆の車椅子を押し、慎吾が祖母の手を引いて一緒に庭を散歩したりした。婆婆が弱ってきてからは、慎吾は毎日婆婆の様子を見に行った。婆婆は徐々に自分で食事をする力を失い、そして食事をする気力をも失った。言葉数が減り、目を閉じている時間が増えた。数週間後、婆婆は昏睡状態に入った。数日後、慎吾が婆婆の部屋に行ったとき、もう婆婆はいなかった。麗名にそのことを伝えると、彼女は静かに泣いた。

慎吾の祖母はその後もしばらく現状維持が出来たが、それでも次第に弱ってきた。ある日、慎吾が着く前に、部屋のトイレに行く途中で転倒し、大腿骨を骨折してしまった。すぐ入院して、折れた骨を固定する手術をした。その状態で三か月間様子をみることになった。入院中は慎吾の出来る手伝いは減ってきて、慎吾が祖母と一緒にいる時間も減ってきた。それでも、暫くして、何とか歩行器を使って歩けるようになった。

祖母の入院中、慎吾はすこし時間が出来たので、二つ趣味を始めた。一つはピアノの練習で、もう一つは小説を書くことだ。慎吾は高校時代ユーチューブでよく音楽を聞き、ピアノくらい弾ければと思っていたが、麗名との恋に落ち、お預けになっていた。最近は、高品質の電子ピアノも比較的安く入手できるので、気軽に練習を始めることが出来た。小説の方は、ツアーガイド時代の話を書きたいと思っていたので、少しずつ下書きを始めていた。

その頃、慎吾と麗名は橋和太郎から封筒を受け取った。開けてみると、なんとそれは橋和の結婚式の招待状であった。二人はびっくりしたし、何となくおかしくもなった。あの自由気ままと思っていた橋和が農業を継ぎ、結婚までする。二人は喜んで参加する由返事をした。

橋和の結婚式は彼の大きな家で行われた。そこは埼玉県の北西部の過疎の町で、高崎線の駅からバスに乗っていく。最近は都内のほとんどの主要駅から直接高崎線に乗れて便利になった。慎吾と麗名は少し早めに着いたので、橋和とゆっくり話す時間があった。
「橋和さん、結婚おめでとうございます。」
「慎吾さんに、麗名さん、来てくれてどうもありがとう。埼玉県と言っても、こんな田舎なんで、来てくれるかなぁと思っていたところです。」
「実は、この高崎線、以外に便利なことがわかりましたよ。都内からそこの駅まで一本でしたから。」
「そうなんです。本数は少ないが、ちゃんと計画すれば都内通勤さえ可能です。さぁ、こちらにどうぞ。私の妻を紹介します。典子です。」
簡単な挨拶の後、典子は式の準備で呼ばれていった。
「橋和さん、典子さんとはどのように知り合ったんですか？」
「その辺でばったり会ったんですよ。といっても、私たちは中学まで同級生でした。最近までは、何の気もなかったんですが、こんな年になると、この町では出会いも少ないもんで。それにしても、少しずつ付き合っているうちにあいつの良さがわかってきたんですよ。あいつは高校を出てずっと町の保育所で保母さんをしてきました。子供の好きな、やさしいやつなんですよ。でも、若い男はどんどん町を出て行ってしまって、売れ残っていたんです。まぁ、私は女性がたくさんいる東京で売れ残っていたので、ひとのことは言えませんが。そして、人口減少に伴い、最近あいつの務めていた保育所が閉鎖されてしまったんです。そしたら、あいつはうちの農家の仕事を手伝ってもいいと言い出したんですよ。これは、言ってみれば、プロポーズですよね。その後、話は急速に進んで今日にいたった次第です。ごく平凡な田舎の結婚ですよ。」
慎吾も麗名も素直に喜んだ。結婚式に呼ばれて来た客のほとんどは近所の顔見知りのようで皆、完全に打ち解けている。

帰りの電車の中で、麗名は慎吾に言った。
「あなた、良い式だったわね。橋和さんも典子さんもうれしそうだったし。」
「ほんとだね。オレも嬉しかった。彼らが落ち着いたら、また行ってみたいな。」
「そうね。絶対行きたいわ。」

書き忘れていたが、慎吾と麗名は毎年必ず、麗名が事故にあった時期に、加害者の高梨直義から手紙と包みを受けとるのが慣例になっていた。高梨は麗名の両親から二人の住所を聞いていたのである。彼は毎回必ず自分の非を謝り、麗名たちの幸福を祈る。包みには何かしらの菓子折りが入っている。その年の便りでは、高梨は仕事が順調だと書いてあった。確か、小さな出版社に勤めていたはずだ。

慎吾と麗名は一緒に生活してもうかなりになる。当然、少なからず問題も生じてくる。慎吾が家事をしているわけだが、整理整頓の苦手な麗名の持ち物が掃除の邪魔になるというのだ。
「でも、あなた、初めはわたしの整理整頓が苦手なところが可愛いなんて言ってくれたのに。わたしのこと嫌になってしまったの？」
麗名は泣きべそをかいている。
「そういうわけじゃないよ。泣かないでよ。参ったなぁ。これはきみに対する感情じゃなくて、ただ掃除が大変だと言っているんだよ。もう少し、片付けてくれると助かるんだけど。」
「じゃ、あなた、手伝ってくれる？」
「また、それかぁ。まぁ、しょうがないなぁ。」
と、そんな調子であった。

他の時には、麗名が慎吾に小言を言うこともあった。
「あなた、ピアノの練習や小説書くのもいいんだけど、ちょっと蛇口の漏れを直してくれない？」
「うん。すぐやるよ。」
と、言っておきながら、慎吾は自分の趣味に夢中になっている。
「あなた、これ早く直さないと洗面所の下がびちょびちょになってしまうわ。」
「わかったよ。わかったよ。すぐやればいいんでしょ。」
慎吾は熱中しているとほんとに取りつかれてしまうので、それでもやってくれないことがある。ある時、しびれを切らした麗名が雑巾で水を吸い取ってそれを慎吾の頭の上で絞った。これには慎吾も即座に反応した。
「わぁ！！何やってんだよ。わかったよ。今やればいいんでしょう！」
「ありがとう。随分手間のかかる人ね。」
「そうだよ。手間のかかる人間で悪かったね。」

そして、慎吾が一番弱ったのは、ごく稀に麗名が相当な癇癪を起すことだ。慎吾にとっては、些細な切っ掛けで、いつもの麗名とは別人のような大声でわめくのだ。例えば、麗名が話している途中に、慎吾の注意が少し他のものにずれたときなど、
「あなた！！どうしてわたしの話をきいてくれないの！！！」
と言って真っ赤な顔で怒り出す。見方によっては、麗名が何かに取り付かれてしまったかのようでもある。そして、しばらく赤い顔のままで今度はプンとして黙ってしまう。そんな時、慎吾はどうしていいかわからず、ただ大人しくしている。幸いなことにそのような状態は、そんなに長続きするわけではない。麗名は直にいつもの状態に戻って、

けろっとしている。だが、一番ひどかったときは、慎吾は真剣に精神科にでも診てもらった方がいいのではないかとさえ思った。それでも、そのようなことはそう頻繁に起きるわけでもなく、二人の関係が損なわれるほどでもなかった。

それから数年後、慎吾の祖母の状態がだんだんと悪くなってきた。骨折したところが徐々に悪化し、どうするか家族で話し合いがあった。祖母がもっと若ければ股関節全取り換えの手術も可能だが、この年ではリスクの方が大きい。結論としては、特養に移るということになった。つまり、事実上寝たきりの状態になってしまったのだ。これは、慎吾の両親が心配していた状態で、祖母の状況が急速に悪化する可能性を意味する。

祖母が特養に移ってからも、慎吾は毎日のように祖母のところに通った。ただ、祖母はほぼ寝たきりで、昼間も眠っていることが多くなり、慎吾の出来ることはどんどん減ってきた。このころ慎吾の一番できることは昼食の手助けであった。一年ほどこのような状態が続きいた後、祖母は急に衰弱してきた。もう食事も欲しがらない。それでも、ワーカーさんたちは必死に、無理やり食べさせようとする。慎吾にはその様子を見ているのが辛かった。毎日通い、祖母を見守ってあげた。慎吾の祖母がさらに衰弱し、呼吸に変化が生じ、そして最後に目を閉じたとき、そばにいたのは慎吾だけだった。

慎吾は婆婆と祖母の衰弱と死を見届けて、人がどのように死んでいくかということをしっかりと体験したのだ。日本での死に方は、慎吾が知っている未開部族の死に方とは違う。未開地では人々はもっと簡単に、ほとんどの場合、もっと若く死ぬ。死ぬことは普通のことだ。悲しいが、乗り越えていかなければならないことだ。日本では、おそらく他の開発国でも、死は避けたいもの、ひょっとしたら避けられるもの、いずれにしても、汚らわしいものとしてさえ捉えられている。

慎吾はすぐ看護師を呼び、状況を話した。数時間の間に、慎吾の両親他親類たちも来た。麗名が来た時に慎吾は言った。
「オレ、ばあさんの死を看取れてほんとに良かったと思う。みんなもっと自分の家族の死を見届けるべきだ。そして、ありがとう。きみに感謝している。何年もの間、オレがばあさんの面倒をみれたのはきみのおかげだ。週末まで働いてくれた。ほんとに、ありがとう。」
「あなた、良かったわ。あなたはずっとわたしのそばにいてわたしを助けてくれた。わたしもあなたの力になりたかっただけよ。後のことはあなたのご両親がしてくれるって言ってるから、今日のところは、わたし達は家に帰りましょう。また明日があるわ。」

慎吾と麗名は寄り添って、アパートに帰っていった。今晩アパートに帰った時、麗名は慎吾に何というのだろうか。

６．慎吾の兄の乱舞曲

祖母の老後の世話をしている時期に、慎吾は小説を書き始めた。その中に彼の兄をモデルにしたものがあるので、ここではそれを紹介する。

オレには兄貴があった。「あった」と言うのはもう長いことどこにいるかわからないからだ。このあいだ実家に帰ったところ両親が兄貴の部屋を整理していた。そこにはかなりの分量の書き物があった。日記とか手紙とかたくさんあった。オレはその全部に目を通した。今まで知らなかった兄貴の姿が浮かび上がってきた。

兄貴の性格を理解するためには、生い立ちから始める必要がある。オレの両親は二人とも大学院博士課程へ進むころに学生結婚をした。その後間もなく兄貴が生まれた。両親は大学院の研究が忙しく子供を育てる余裕がないと判断し、兄貴を祖母に預けることにした。兄貴は５年間ほど祖母に育てられた。そして、オレが生まれた。この時までに両親は二人とも博士号を取得しており、兄貴を引き取り、オレと一緒に家族４人の生活をすることにした。

人生の最初の５年間を実の親に育てられなかったというのは大変なことだ。しかし、もっと大変なことは、人生の５年目で保護者が変わるということかもしれない。これは祖母から実の親に代わる場合でも同じだ。兄貴は知る知らずにかかわらず、生涯この断続のしがらみから抜け出せずに生きることになったのだろう。この点では、オレは幸運だったと言わざるを得ない。

兄貴はかなりの優等生で、スポーツもできた。いつも学級委員をし、部活の役職もしていた。中学の時は数人、女友達と文通していたこともあったが、付き合っていたというわけではない。高校時代は女関係はほとんどなかった。

兄貴はオレが中学の時に大学に入った。それは、理科系の男子ばかりの国立大学だった。そして、入学式の日、会場から出て来るや否や数人の女子学生に捕まった。みんな魅力的な女性というわけではなかったが、中に一人可愛いと思う女子学生がいた。先に書いたとおり、この大学にはほとんど女子学生はいない。兄貴の会った女子学生はみんな他の大学から来ていたのだ。女子学生のいないこの大学の舞踏研究部は近隣の数校の女子大学とパートナー関係にあり、新入生勧誘を共同で行うのだ。

というわけで、兄貴は女子学生と戯れることが出来そうな舞研に入った。舞研の政策としては、新入生をくぎ付けにするため、夏の合宿までは練習という練習はせず、簡単な社交ダンスを上級生の女性が教えてくれる。その後は、コンパと称して飲みに行くといった按配で、動機不純な新入生はクラブから抜け出せなくなる。そんな作戦だった。

ある日のコンパで、兄貴はパートナー女子大学の新入生と話をする機会があった。彼女は澄恵と言った。兄貴は入学式の時に捕まった先輩の女子学生に気があり、澄恵には特に興味を持っていなかった。ただ、話のなかで、澄恵が兄貴と同じ誕生日だということを知る。が、その時はその時で終わった。

また別なコンパの後、兄貴は電車で帰るときにたまたま澄恵と一緒になる。他の連中は先の電車で帰ってしまったか、まだ他の場所で飲んでいるかのようだった。兄貴の電車は澄恵とは反対方向だったが、澄恵の駅まで送っていこうということになった。兄貴はデートというデートはしたことがなかったので、これはちょっとしたデートの気分であった。ただし、澄恵の駅と言うのはかなりの遠方で、電車を３本乗り継いでいかなければならなかった。

それから、偶然か、意図的か、兄貴は澄恵をよく送っていくようになる。そして、次第に澄恵の家の前まで送って行くようになった。ある日、送って行く途中の公園で兄貴は澄恵とキスをした。初めての兄貴に対して澄恵は積極的だった。そして、澄恵は兄貴に「見たい」と言った。

その後の展開は急速だった。舞研の練習があるないに関わらず、二人はデートをするようになる。そして、ある日、兄貴は家に澄恵を連れてきた。どういう訳か、澄恵は和服を着ていた。二人は兄貴の部屋に入ったきりずっと出てこなかった。この日が兄貴の初めての経験であった。澄恵がどうやって脱いだ和服を一人でまた着れたのか不明だが、兎に角やってのけた。兄貴は何回か澄恵とラブホテルに行ったこともある。

この間、二人は手紙のやり取りもしていたし、頻繁に電話もかけあっていた。二人が関係を深めていくと、澄恵は兄貴に「どういうつもりか」と迫った。兄貴は始めはその意味が分からなかったのだが、話しているうちに、「結婚するつもりがあるか」という意味だと分かった。

兄貴はその時まで結婚のことは考えたことがなかった。ただ、澄恵にぞっこんで、彼女を手放したくないという気持ちだけは強かった。そして、誕生日が同じということが、

何か運命的なものではないかと考えていた。それなら、結婚も悪くないと思った。そして、正式ではないが、二人は婚約者ということになった。付き合ってから初めての正月には、澄恵は兄貴に熱烈な年賀状を送ってきた。

二人はそんな状態で一年ほど付き合ったろうか。しかし、どういう理由かはっきりはわからないが、二人の仲は次第に疎遠になる。次の年には年賀状も来なかった。別れてしまったというのではないのだが、会う回数が減り、あっても以前のような情熱がなくなる。それでも、兄貴は澄恵を失いたくなかったし、婚約を解除したくもなかった。より正確なところは、兄貴は澄恵を失いたくなかったのではなくて、恋人がいるという状態を失いたくなかったのではないか。

それから数か月ほどたって、二人の仲はさらに疎遠になった。澄恵は兄貴に、嫌いになったわけではないし、他に好きな人ができたわけでもないと言った。ただ、もう続けたくないのだと。兄貴は最後に一回澄恵を送って行った。そしてもう全く連絡を取らなかった。

兄貴にとって、これは人生で最大の衝撃だったに違いない。兄貴はもう恋をすることはないだろうと思っていたようだ。そして、恋人を失ったという状態を他人に見せたくなかったのかもしれない。兄貴は家出をした。それっきり、オレは兄貴に会ったことはない。

オレとしては兄貴がどうしてそんなに追い詰められたのか分からない。世の中、恋人を失った人間は億といる。そんな時、いつも考えるのが兄貴の生い立ちだ。人生の最初の５年間を親元から祖母のところに出されてしまう。はっきりとした認識はないのだろうが、親には兄貴より研究の方が重要だったのだろうという悲しみが付きまとったのではないか。

オレは幸いだった。祖母のところにも送られなかったし、大した失恋もしたことがない。そして、初恋の人ともうしばらく一緒に暮らしている。オレと兄貴の立場が逆だったらどういうことなっていたのだろうか。

そして、兄を育てた祖母はもういない。オレは祖母に育てられたわけではないが、祖母の最後の数年間の手伝いをすることになったし、最後を看取ることにもなった。祖母はオレには兄貴のことを言わなかったが、ほんとは、兄貴に居て欲しかったのかもしれない。兄貴だって、祖母の最後は見届けたかったのではないか。今のオレには行方不明の

兄貴に祖母のことを伝えるすべがない。

７．モンゴルで何が

婆婆が亡くなり、慎吾の祖母が亡くなり慎吾の生活は変わった。時間は出来たが、
ちょっとした歯抜け状態であった。そんな中、橋和氏の結婚は明るい話題だった。そして、悶々とした中、慎吾はピアノの練習と小説書きに使う時間が増えていた。そんなある日、慎吾は麗名に話しかけた。
「前にちょっとだけ言ったことがあると思うんだけど、オレには兄貴がいたんだ。」
「えぇ。ちょっとだけ聞いたわ。どうして？」
「実は、最近のオレの小説の中でオレの兄貴をモデルにしたんだ。どこまで事実に基づいていて、どこまで創作なのか、オレ自身にも分からなくなってきた。」
「あなた、あれだけ、精を込めて書いていたからいいものできたでしょう。」
「いいかどうかはわからない。よくなくていいんだ。オレがものを書くのは、自分の感情や考えを整理するためだ。頭の中をきみの持ち物みたいな状況に置きたくないからね。」
「あなた！またわたしの片付けのこと！？もう少し優しくしてよ。」
「悪かったよ。きみと最初の夜に言ったことは今でも変わらないよ。整理整頓が苦手な安城先生なんて可愛いよ。」
「胡麻化してないよね？城ケ崎君、赤点つけるわよ。」
「参ったな。怖い先生だな。その兄貴のことなんだけど、行方不明だってことはいったかな？」
「えぇ。全く消息不明だって。」
「ばあさんが亡くなったことを伝えたいと思ったんだけど、やっぱり、無理かな。」
「そうねぇ。それこそ、婆婆の分野じゃない？婆婆の言ったこと覚えてる？よく見れば現実が見えてくるって。それが、魔術だって。」
「そうだったな。オレはまだ、いや永遠にできないな。そういうこと。」

それから何か月か経ち、慎吾の両親は４回目のサバティカルをまたモンゴルで過ごすために出かけた。それから数か月後に、慎吾はモンゴル大使館から外務省経由で緊急連絡を受けた。その内容は、父親は他殺死、母親は行方不明という衝撃的なものだった。慎吾と麗名は動転した。慎吾の祖母が亡くなってまだ間もないのに。それにしても事態があまりに怪しい。本当だろうか。大使館と外務省が言うのだから本当だろう。でも、どうして、他殺と行方不明？慎吾はモンゴルに行かざるを得ないと思った。
「困ったな。どうなってるんだ。全く分からない。」
「あなた、モンゴルに行くのね。わたしも一緒に行きたいけど、残るわ。仕事があるか

らっていうんじゃなくて、こちらで待機していた方がいいと思うの。」
「わかってるよ。確かに、今回はオレ一人で行ったほうがいいと思う。何せ、向こうで何が待っているかわからない。これから何が起こるかわからない。」
「でも、あなた。気を付けてね。安全第一でね。」

翌日、慎吾はモンゴルに向けて出発した。麗名は仕事場に状況を伝え、成田まで慎吾を送ってから出勤することにした。慎吾が最後にモンゴルに居たのは小学生の時なので、それからもう２０年以上も経つ。いろいろ変わったことだろう。首都ウランバートルまで飛び、そこで飛行機を乗り換え、サインシャンドという町まで行った。そこからバスでエルゴンという小さな村に行く。村の中心から砂漠のような土地を歩いて２０分ほどのところに両親の仮の住居がある。慎吾が小学生の時一年過ごした家だ。外から見たところ、あまり変化はない。中は空だったが、乾いて変色した血の跡が未だ生々しい。父の遺体は村の簡易診療所に移されていた。体の血は拭き取られていたが、銃痕とみられるものが何か所もある。慎吾はしっかりと父の遺体を見た。当然、慎吾は父を失った悲しみを抑えきれずにいたが、その他に、誰にともいえない怒りも生じた。何が起こったのか。父は考古学者、その地域で恐竜の発掘をしていた。どうして父が殺害されなければならなかったのか。誰かの悪意がなければこんなことは起きない。過去３回、慎吾の両親はこの地でサバティカルを過ごしている。慎吾の記憶にある範囲では両親と村人との関係は良好であったし、村人は平和を好む人々だ。理由なくこんな残酷な事態が起こるはずがない。

しかし、もっと不可思議なのは母が行方不明になっているということだ。この平和な村で起こるような事件ではない。何かが怪しい。村人たちはまだ子供だった慎吾をおぼえている。皆優しく慎吾をいたわってくれる。彼らもどうしてこんな事態になってしまったのか皆目見当がつかないという。そして、実は彼ら自身にも悲しむべき事実があった。村人の一人も行方不明になっているというのだ。それは慎吾が子供のころ一緒に遊んでいた子供だ。慎吾にはこれも耐えられないことであった。どうして、あいつが。ただのいたずら小僧だったあいつが。

慎吾は、最近祖母を失い、今父を失い、兄貴と母が行方不明という多重苦を背負わされた。今すぐ麗名の元に帰りたかった。だが、今は何かをしなければならない。慎吾は両親の仮の住居に戻った。血痕の他は、何も異常なことは見られなかった。とりあえず、両親の持ち物をすべて集め、持参のずだ袋にしまった。もう遅かったので、慎吾はそこで夜を明かすことにした。一人っきりで過ごす夜。たまらなく寂しかった。麗名を抱きたかった。

次の朝、寝ぼけた目をこすり、寝床から立ち上がり、アパートにいるときの要領で、裸足で歩き始めた。その時、何か硬いものを踏みつけた。拾ってみると、それは、どうやら銃弾のようであった。慎吾は、それが父を襲った人間が使った銃からのものに違いないと思った。慎吾は簡易診療所に戻って、そこのスタッフに父の遺体からすべての銃弾を取り出してくれるように依頼した。それらの銃弾はすべて同一のものに見えた。慎吾は急に婆婆を思い出した。婆婆が生きていたら何が起こったか教えてくれたかもしれない。今は、婆婆の残してくれた言葉に従おう。よく見れば、現実がわかる。慎吾はその銃弾をよく見た。慎吾にとって意味があるような情報はなかった。それでも、これが事件を探る唯一の鍵だということは確かだ。慎吾は銃弾を大事にしまった。

一段落すると、簡易診療所のスタッフが慎吾に父の遺体をどうするかと尋ねた。慎吾には良い考えがなかった。遺体を日本に連れ帰るのは現実的ではないと思えた。スタッフに埋葬法のことを訪ねると、その村では風葬が普通だという。これは、遺体を村から離れた場所に放置して、後は自然に任せるというのだ。ただし、しばらく後にもう一度遺体の場所を訪れて、遺体がまだある場合は他の場所に移すという。これは、遺体が完全に自然に戻っていないことを意味し、成仏できないからだと言う。慎吾には全く馴染みのない方法だが、現地のやり方に従おうと思った。スタッフに埋葬の手続きをしてもらうことを頼み、慎吾はまた両親の仮の住居に戻った。その時まで、気がつかなかったのだが、部屋の片隅に布切れが落ちているのが見えた。なんだか破り取られたような感じだ。慎吾はこれも証拠の一つになるかもしれないと思い大事にしまった。

その日の午後には父の埋葬も済み、慎吾は次の日のバスで村を立つことにした。来たルートを戻り、ほぼ一週間でアパートに戻った。麗名はしっかりと慎吾を抱きしめてくれた。この時は、３才年上の麗名に素直にすがった。
「会いたかったよぉ、先生。」
「城ケ崎君、よく頑張ったわね。」
今や、身内が誰もいない慎吾にとって、麗名の存在は何事にも変えられないものだった。慎吾は事の一切を麗名に話した。

数日後、慎吾は銃鑑定士のところに行った。持ってきた銃弾を見せると、鑑定士はいとも簡単に言った。
「Ｍ６１ですね。アメリカ軍の秘密部隊がよく使う銃ですよ。まぁ、銃弾は秘密でも何でもありませんね。当然、これらの銃は盗まれることもあるため、使っていた人間がアメリカ軍の秘密部隊と断定することはできませんが。モンゴルの場合、ロシアも関与していることが考えられますが、襲った人間がロシア関連だとしたら、違う銃を使ってい

たでしょうね。私の想像では、９９％アメリカ軍の秘密部隊が絡んでいると思います。」

慎吾は驚いた。もし、これが事実だとしたら、どうしてアメリカ軍の秘密部隊が父親を殺さなければならなかったのだろう。母親と村人の行方不明とどういう関係にあるのだろう？

アパートに帰って、慎吾は麗名に出来事を話した。
「ほんとうに？信じられないわね。でも、あなた、証拠物件を持っているんだから、当たってみないわけにはいかないわ。」
「きみに何か考えがあるの？」
「はっきりとではないけど。あなた、アメリカに行って調べるより他にないような気がしない？わたし、明日、ラテンアメリカ連盟の上司と相談するわ。」

次の日、麗名の持ってきた話は慎吾には驚きだった。
「あなた、アメリカに行くわよ。」
「え？！それ、どういうこと？」
「今日、上司と話したんだけど、わたし、連盟のワシントン支部の仕事をもらえるらしいの。ここでの経験を買われて、ワシントンでも働けるって。」
「でも、わざわざきみの仕事を変えなくても。それに、仕事を変えるほど長いことアメリカに居る必要があると思う？」
「それはわからないわ。上司の言うことには、いつでもまた日本支部に戻ってきてもいいんですって。それに、これはわたしの直感なんだけど、これはかなり込み入った問題で時間がかかるんじゃないかって。もちろん、すぐに解決してほしいのだけど。どっちにしても、向こうで新しく仕事を探すとなると大変だし。」
「そうか。そういうことか。きみ、連盟では随分貴重な存在なんだね。見直したよ。」

麗名と慎吾は引っ越しの準備を始めた。散らかった寝室を片付けるのは大義であったが、例の積み重ねてあった段ボール箱は依然そのままだし、荷物がまとまった後は麗名の両親が車で引き取ってくれた。冷蔵庫、テーブル、電子ピアノなどの大物は橋和が移動を手伝いに来てくれた。

一週間も経たずに慎吾と麗名は米国の首都ワシントン特別区に飛んだ。とりあえず郊外のモーテルに滞在して、アパートを探した。麗名はエコツーリズム・ガイドをしている間に日本のパスポートを更新した時、米国籍は返上するということを宣言しなければな

らなかった。それで、今回の渡米は日本のパスポートで入った。ところが、一度来てしまうと、麗名は事実上アメリカ人である。社会保障番号、出生証明書等、生活・就業に必要なものはすべて持っている。これは大変役に立った。

二人は郊外の地下鉄駅から歩けるところに小さなアパートを借りた。慎吾も麗名も運転免許を持っていないので、車社会のアメリカでも地下鉄の利用は不可欠であった。必要な諸々の準備をして二人のアメリカ生活が始まった。麗名は来てから一週間後にラテンアメリカ連盟のワシントン支部に通い始めた。ここでもコーディネーター、つまり雑多な仕事をする。大きな違いは職場の言葉が日本語から英語に変わったくらいであろうか。

落ち着くと、慎吾はすぐに活動を開始した。米国国防省に出向き、事情を説明して情報を求めた。一応丁寧に対応してくれるのだが、機密保持に最も厳しい機関の一つであり、慎吾のようなどこの誰とも知れない人間に簡単に情報をくれるわけがなかった。慎吾はCIAにも出向くが何も新しい情報はつかめなかった。いくつか図書館にも出向いて相談したが役には立たなかった。

何も進展がないまま数週間が過ぎた。ある日、麗名が慎吾に連盟の関連の法律事務所を紹介した。このままでは拉致が開かないので、何とか弁護士に頼まなければならないのではということだ。しかし、よく知られているように、米国の弁護士費用は異常に高い。慎吾は予約を取って、無料の初回面談を頼んだ。この弁護士、マーク・ステッドマンによると、これは非常に複雑で難解な仕事だ。おそらく想像を絶する費用が掛かるだろうとのことだった。ただ、マークは、どうやら本心慎吾のことを心配してくれているように見受けられた。面談の最後に、無償で一回国防省に一緒に行ってくれるというのだ。

慎吾は麗名にその話をした。その翌日、慎吾はマークとともに国防省に出向いた。対応は前回とは少し違う。どうやら、少し上のレベルの士官が出てきたようだ。慎吾の話とマークの解説を聞き、慎吾の持ってきた銃弾と布切れを見て、真剣な顔をしている。士官は一時席を外した。戻ってくると、やはり真剣な顔をしている。彼の返答は「慎吾の父が米国関連の組織によって殺害された可能性を否定しない」ということであった。また、それ以上の返答は出来ないとも言った。その場を離れたときに、マークはこれは大変なケースだ、莫大な費用がかかるだろうと言った。慎吾はマークに丁寧にお礼してアパートに戻った。

慎吾が麗名にこの話をすると、麗名はきっぱりと言った。
「城ケ崎君、弁護士になりなさい。」

「えー！！！」
慎吾には他に言葉はなかった。日本で高校中退、学校嫌い、勉強嫌いの慎吾。弁護士になれというのは問題外の発言だった。
「先生、そりゃ無理だ。できない。オレはそういう人間じゃない。」
「あなたがそういう人間じゃないのはわかっているわ。でも、今やらなければならないことはたった一つ。あなたのお父さんがどうして殺害されたか、あなたのお母さんと旧友がどういう状態か調べることでしょ。今のわたし達には弁護士を雇うだけのお金がないわ。それだったら、あなたが弁護士になるしかないじゃないの。婆婆の言葉を覚えている？よく見ると、現実がわかるって。それが魔術だって。わたし達も婆婆に授かった魔術を使うのよ。」
「参ったなぁ。とんでもないことを言う先生だなぁ。」

慎吾は頭が痛かった。確かに、麗名の言っていることは正しいと思った。だが、たとえ父のため、母のためでも、もう勉強はしたくないと思った。慎吾は次の日、アパートでごろごろしていた。麗名は仕事から帰ってくるや否や慎吾の前に買い物袋を放り出した。
「はい、あなた。がんばってね。」
訳も分からず袋の中を見ると、そこには本が何冊か入っていた。一つにはGEDと書いてある。慎吾には何のことかわからない。麗名が言うには、大学受験資格試験と言うのがあり、受かれば高校卒と同様に大学を受験する資格がとれるというのだ。慎吾の頭痛は悪化した。しかし、他にどうしようもない。そうだ。麗名が意識不明の時、不審な薬草を求めてチチカカ湖にいったのは、「もうそれしかない」と思ったからだ。今回もそうかもしれない。慎吾はぼそりと呟いた。
「それしかないかぁ。」
「え？」
「ありがとう。きみが道を示してくれなかったら、オレはもうすでにあきらめていたかもしれない。だめもとだ。やってみるよ。」
「うれしいわ。あなたは意識不明のわたしを目覚めさせた人よ。不可能ではないわ。」

その日から、慎吾は変わった。当然法律なんてものは好きではないし、興味もなかった。ただ、それは重大な目的のための手段だ。必要なのだ。慎吾は熱中するととことんやるタイプだ。今の慎吾には米国の大学受験資格は容易であった。数か月のうちにパスした。それに、慎吾の英語は麗名のお墨付きだ。実践で身につけた力を発揮して、TOEFLでは大学院に入学できるレベルの点数を取れた。そして、メリーランド州立大で教養科目の聴講をし始めて、冬には同大の刑事司法専攻学科に受け入れられた。同時に学生ビザを取得出来た。米国の大学入試は試験だけでなくもっと総合的だ。慎吾の入試エッセイは

モンゴルでの事件に端を欲する彼の弁護士への道と彼のエコツーリズムの経験を基にした世界観を交えたもので、入試委員全員に強烈な印象を与えた。入学後、慎吾は基礎科目は手早くこなし、早い時期から国外暗殺や不法に監禁されている人々の救済に関する法律を学んだ。３年で、順調に刑事司法専攻で学士を取得した。そして、引き続き、同大学の法科大学院に進んだ。

この間、麗名は連名で働き、ほとんどの週末に観光ガイドもした。ワシントンにはかなりの数の日本人観光客が訪れるので、日本語ガイドは引っ張りだこだ。二人とも忙しい日々だったが、設定した目標に向かってまっしぐらだった。麗名は一生懸命働いたし、慎吾は公立大学で学んでいるので、経済的には恵まれていた。それでも、学費と生活費すべては賄えず、慎吾は学生ローンを組まざるを得なかった。アメリカでは多くの人が学生ローンを返済できず、問題になっている。慎吾は心配であった。

法科大学院は３年間みっちりと法律を叩きこまれる。たくさんのケーススタディと時にはインターンシップもこなす。慎吾は目標が定まっているので、自分のために役立つと思われるケースを数多く研究した。そして、以前手助けをしてくれたマーク・ステッドマンの元でインターンシップもこなした。ラテンアメリカ諸国の人々も米国関連組織に暗殺されたり、不当監禁されたりしたことが多い。そのため、マークも慎吾の取り組みには他人事ではない興味を示し、多くの助言を与えてくれた。

当然、この間の道のりは簡単ではなかった。もともと嫌いな勉強をがむしゃらにしなければならいのだ。時には、勉強の途中で居眠りしてしまうこともあった。そんな時は麗名がはっぱをかけた。
「城ケ崎君、起きなさい！居眠りしてると赤点付けるわよ。」
「あぁー。眠い。正直言って、これ、早く終わらないかなぁと思うよ。恋人が元先生っていうのはまちがいだったかなぁ。」
「何言ってんのよ。そのケースが終わったらベッドタイムって約束したじゃない。」

アメリカに来てから、あの有名なポトマック川の満開の桜並木を６回は見たろう。慎吾は法化大学院を無事修了、弁護士資格を取得した。快挙ではあったが、苦闘の期間であった。その後、一年間実務研修生として学生ビザの許容範囲内で就業できるので、マークのアシスタントとして働くことにした。

この時までに、慎吾は、必要な法律を学んでいたので、自ら弁護士として国防省を訪れたときにはもう何をすべきか分かっていた。証拠品の銃弾と布切れを材料に次々と関連

の人々何人にも会っていった。そして、とうとう父の殺害の状況と母と旧友の誘拐についての報告書を手に入れた。なんと、彼のモンゴルの旧友が中東からの逃亡者と間違えられたのが事の発端だった。たまたま母が仮の住居でその旧友に文化人類学に関するインタビューをしているところをスパイの連絡中と誤解されたのだ。そして、旧友と母が誘拐されまいと父が介入したところ射殺された。慎吾の発見した布切れはその時の秘密部隊が来ていた服の切れ端を父がつかみ取ったものだった。

その後は、事態はトントン拍子で進み、母の監禁先を見つけ出し、釈放にこぎつけた。実は、かなり前にこの事件は間違いによるものだと内部判定されていたにもかかわらず、米国側は体裁を保つため事実を認めなかったのである。この間の監禁で、母はやせ細り、疲れ切っていた。慎吾を見てもしばらくは現実を把握できずにぼーっとしていた。施設を出て、タクシーに乗り、しばらくして、慎吾の母は急に泣き出した。アパートに着いたときには慎吾の腕の中で眠っていた。母は、アパートに入ると今度は麗名を見てまた泣き出した。３人は一緒に泣いた。

慎吾にはもうひとつ仕事があった。彼のモンゴルの旧友のことである。慎吾には残念で仕方がなかったのだが、この旧友は拷問の途中で死亡してしまっていたのだ。慎吾はもう一度モンゴルに行って、村人に事実を告げなければならないと心に決めた。

慎吾と麗名は日本に帰る準備を始めた。母はパスポート等必要書類がなかったため、新たにそろえた。母の航空券は米国国防省が購入した。アパートを引き払い、ホテルに移った。そして、マークをはじめ、世話になった人々に挨拶した。

三人は久々に日本に帰った。成田には麗名の両親が迎えに来てくれた。全員麗名の両親の家に向かい、しばらくそこで過ごすことになった。その間に、慎吾はモンゴルに行って旧友のことを村人に伝えた。村人は驚き、怒った。そして、慎吾に感謝した。その旧友の弔いの行事は慎吾がいる間に行われた。村人たちは慎吾の母によろしくと言っていた。日本に戻った慎吾は母に村人のことを伝えた。母はあの時を思い出していたに違いない。おそらく慎吾の父のことも。

８．安心～の家

母を無事日本に連れ帰った慎吾と麗名はしばらく麗名の両親の家で過ごしていた。帰国後、麗名はラテンアメリカ連名の日本支部に戻るはずだったが、今は休暇を取っている。

小さな家で５人暮らすのは大変だし、慎吾と麗名は何かしないといけないという気持ちに浸っていた。
「あなた、こんな時にしたらいいことって決まっているわね。」
「何それ？」
「橋和さんのところに行ってみましょうよ。お子さんもできたという話だし、ひょっとしたら泊めていただけないかしら。」
「それは、名案だ。ぜひ行ってみよう。」

橋和太郎はエコツーリズム・ガイド時代の上司で、会社倒産後は埼玉県の安里町という過疎の町で、実家の農業を継いでいる。慎吾と麗名が渡米する前には同窓生と結婚している。
「慎吾さんに、麗名さん、久しぶりですね。慎吾さんは弁護士になってアメリカ軍に監禁されていたお母さんを救出されたということで、それはそれは、良かった。物騒な世の中ですね。いずれにしても、お二人の行動力にはほんとに感服します。今回は泊まっていけるということで、ゆっくりしてください。田舎だから、スペースはたくさんありますから。」
「ありがとうございます。橋和さんはもうお父さんになって、お子さんはお幾つ？」
「こないだ３才になりました。いたずらっ子ですよ。」
「楽しそうね。典子さんは元気？」
「あいつはほんとに辛抱強い女で、畑仕事もよくやってくれます。元保母さんだから子育てにも慣れているし。私が旅行会社で働いていたときには想像できない生活です。良かったと思いますよ。こんな田舎で、若い人はどんどん出て行ってしまうけど、都会にない温かみがあります。ところで、この町には空き家が増えてしまって、このままでは町の存続にも係わるということで、空き家を無償で新しい住人に貸そうという構想が出来ました。だれか希望する人がいたら知らせてください。この町に住んで、高崎線で都心に通うということだって不可能ではないんです。この辺の人は埼玉新幹線と呼んで得意ですよ。」

慎吾と麗名にとっては久々の休暇であった。二人の泊まる部屋に案内された後に、麗名

が口を開いた。
「あなた、例の空き家を貸してくれる話なんだけど、ちょっと考えてみない？」
「あれ、きみ、あのパンフレットをちゃんと見なかったの？そこには３５才までで、子供がある夫婦って書いてあったよ。」
「それ、見落としてたわ。そうなの。残念ね。この辺、なんだかすごくいいところだと思うわ。」

二人は橋和家でとれる野菜を使った典子の手料理をご馳走になり、すっかりリラックスした。次の日、慎吾と麗名は橋和に町の近辺を少し案内してもらった。その後は、橋和は農作業があるので、二人だけで町の中を歩いた。途中、安里町役場の前を通った時、麗名が言った。
「例の空き家を貸してくれる話だけど、あの条件って全く例外なしかしら。ちょっと役場の人と話してみない？」
「きみはずいぶんしぶとい人だなぁ。まあ、話してみるのはいいんじゃない。」
麗名はどんどん役場に入っていき、担当の人を探し当てる。
「例の空き家を貸してくれる話なんですけど。あの条件は例外なしでしょうか。」
「あぁ。あの件ですね。わたしの経験では例外なしと言う訳ではありませんね。現に、結婚してない同性のカップルが養子と住んでいるという例もありますし。あの条件は出来るだけ長い間住んでもらうためのチェックポイントのようなものだと思います。」
「それではお尋ねしますが、例えば、わたし達は３５才以上で、結婚はしてなんですがもう２０年くらいですか、一緒に暮らしているものなのです。これからこの人の年老いた母を引き取る予定です。あの条件には当てはまらないのですが、可能性はありますでしょうか？」
それを聞いて慎吾は少しい怪訝な顔をしている。役場の人は答えた。
「そうですね、確かに条件は満たしていませんね。ただ、もし本当に興味があるんでしたら、申請してみてはどうですか？各々の申請について委員会全員で検討するものですから、可能性がないわけではありません。ところで、どうしてこの町にいらしたのですか？」
「わたし達二人とも、この町に住んでいる橋和太郎さんと以前東京で一緒に仕事をしていたんです。昨日からわたし達の休暇を利用してそちらにお邪魔しています。」
「そうですか。橋和さんのご知り合いですか。それは好都合です。橋和さんも委員会の一人ですから。」

村役場を出てから慎吾が麗名に問いただした。
「ねぇ、オレのおふくろを引き取るって言っちゃったけど、オレ達そんな話をしたこと

ないじゃない。」
「それは知っているわ。あの時は、単に子供の代わりになる人がいないかなって考えただけよ。だけど、あなた、お母さんのこと真剣に考えないとね。何年も監禁されていてほんとに気の毒だわ。」
「それはそうだ。どうするかな。」

橋和の家から麗名の両親の家に戻った二人には高梨直義から手紙と包みが届いていた。高梨は麗名の交通事故の加害者だが、事故の季節になると必ず手紙と包みを送ってくる。二人も、普通は返事を出す。ただし、アメリカにいた間は出していなかった。そして、今回の手紙はいつもより長いようだ。そこにはこう書いてあった。

「麗名さん、慎吾さん、またこの季節がやって参りました。私の過失が消えるわけではありませんが、あなた方が元気に過ごされていることを期待しています。ただ、ここ数年お便りがなかったため、気になっております。今回はどうしても私どもの状況をお伝えしなければならなくなったので、少し長くなります。お許し下さい。私の仕事は予想外に順調に進みました。私は昇進し、今は社長に就任しています。当社で出版した本が直木賞を取得し、また私に良くしてくれる宗教法人のリーダーの書物を出版させていただいているため、信者の皆さまが多数購入してくれます。会社の収益は大幅に増え、私の財産も同様です。ところが、私は近年パーキンソン病に悩まされて、もうじき仕事が出来なくなります。また、私の息子は引きこもりでずっと家にいます。そこで、ある決心をしました。私は来月早期退職をしてパーキンソン病の施設に入ります。それには私の退職金と財産の一部をあて、誰にも経済的負担がかからないように計画しました。息子にも、十分な資金を残します。それでも、まだ比較的大きな資産が残ります。それをすべて麗名さんに受け取ってほしいのです。当然私の過失はお金で片が付くものではありません。それは十分承知の上です。私の申し出を受け入れてくれるようであれば、ご一報いただければ幸いです。また、お二人の都合がつくようであれば、お会いして話が出来れば思います。」

慎吾と麗名は驚いた。身の回りであまりに多くの変化が起きている。何事も留まっていない。二人は高梨の手紙を消化するのに少し時間が必要であった。後で、慎吾が言った。
「高梨さんも気の毒だな。パーキンソン病には若すぎるような気がする。なんだか、あの人のためにも何かしてあげたい。」
「ほんとに気の毒ね。こんなに何もかも移り変わる世の中で、わたし達はずっと一緒に暮らしていられる。わたしはしあわせだわ。わたしも高梨さんのために何かをしてあげたい。今思いついたのだけど、高梨さんの息子さんも空き家計画の一部に加えられない

かしら。わたし達二人と、あなたのおかあさんと、高梨さんの息子さんで、空き家を借りられないかしら。高梨さんがほんとに資産を分けてくれるというなら、それも使って共同生活ができないかしら。」
「きみはほんとにすごいことを思いつく人だ。いいよ。高梨さんに会ってみよう。」

慎吾と麗名は、麗名の事故の後居た病院のそばの喫茶店で高梨と会った。高梨直義はもう５０才くらいであろうか。確かにパーキンソン病と思われる動きをしている。彼が会話を始めた。
「麗名さん、そして、慎吾さん、今日は会っていただいてありがとうございます。私の勝手な申し出を受け入れてくれてありがとうございます。」
「高梨さん、毎年私達のことを考えてくれて、こちらこそありがとうございます。最近まで、７年ほど慎吾の母を不当監禁から救出するため、アメリカで過ごしていました。そのことで頭がいっぱいでお返事できずに申し訳ありません。」
「そうだったのですか。お母さまは大丈夫ですか。」
「おかげさまで、私達が日本に連れて帰ることが出来ました。これからは母と私達と一緒に暮らそうと考えています。今、埼玉県北西部の安里町に、無償で家を借りられないかと検討中なのです。そして、実は、その計画中に思いついたのですが、高梨さんの息子さんも一緒に住めないかと。」
「え？！私の息子もですか？私の息子はご存じのように、引きこもりで、おそらくだれとも会いたくないと思うのですが。何か良いアイデアでもあるのでしょうか。」
「ありません。正直言って、わたし達は引きこもりのことはよく知っているわけではありません。それで、高梨さんに相談したいと思ったのです。」
「そうですか。息子のことまで考えていただいているとは、なんと言っていいかわかりません。ご存じのように息子は幼少時に交通事故で母を亡くし、私も仕事があったものですから、誰も十分に面倒を見てやれませんでした。今の状態がそれに関係ないわけがないのです。残念ながら今からではどうにもなりません。」
今度は慎吾が言った。
「実は、息子さんの状況が全く分からないわけではありません。僕の兄は５才まで祖母に育てられ、僕が生まれてから両親のもとに戻されました。そして、大学の時の失恋が切っ掛けで家出し、もう長いこと行方不明なのです。兄の幼少期が違っていたら、こうならなかったと思うのです。」
「慎吾さん、そうだったんですか。お気の毒です。世の中思うようにいかないものですね。それで、本当に、お二人が私の息子を引き取っていただけるというのであれば、私の息子のためにとってある資金もあわせてお二人で受け取っていただけないでしょう

か。」

数日後に、慎吾と麗名は再び安里町役場に出向いた。二人は申請書を提出した。橋和にも連絡した。橋和には彼の作る農産物を定期的に購入したいと言った。二人は今までとは違う新しい生活を考え始めていた。

橋和の計らいもあったろうか、二人の申請はすぐに受け入れられ、申請に即した空き家があてがわれた。それは、橋和の家から歩いて５分ほどの所だった。その間、二人は高梨との話をまとめ、麗名名義の銀行口座に資産を振り込んでもらった。この資産の一部を使い、空き家を修復した。高梨に相談の結果、資産の一部を慎吾の学生ローンの返済にも使うことにした。

三か月ほどして、空き家は住める状態になった。まずは、慎吾と麗名が入居し、内部を整えた。次に、慎吾の母が入居した。最後に、高梨の息子、義男を連れてくる計画だった。どのようにことを進めるか慎吾と麗名は高梨に相談した。三人とも強硬策は無理だと察していた。そこで、まずは義男の部屋に手紙で状況を伝えようということになった。高梨はパーキンソン病で退職し、施設に入る。高梨の家は処分しなければならない。高梨の知り合いの慎吾と麗名が義男のために部屋を用意することを考えている。慎吾と麗名が食事とその他必要な手伝いをする。義男は自分の部屋から出る必要はない。部屋から出ることも構わない。義男が必要な資金はあらかじめ設定された範囲内で消費できる。高梨の家から安里町の新しい家まで希望の交通手段を選べる。交渉に応ずる。気に入らない場合は他の選択をしても構わない。等々と書かれていた。

三人は辛抱強く待った。２週間ほど経ったころ、義男から文書で返答があった。「申し出に応じる」というものだった。移動の交通手段にはタクシーを用意して欲しいとのことだった。また、身のまわりのものは義男が梱包するので、運送会社に義男の移動日に運んで欲しいとも書いてあった。その後、全員で移動日を決めた。

慎吾と麗名は、慎吾の母にはもう義男のことは伝えてある。母には全く異存はなかった。義男の引っ越しは幸い無事完了した。慎吾と麗名は、この日初めて義男を見た。挨拶をしたわけでもない。ただ、見たのだった。彼は高梨の若い時に似ていた。

慎吾と麗名にとって、安里町での共同生活は新しい経験の連続だった。いつも二人だけの生活に慣れていた彼らは、二人の間ではもう何も言わなくともお互いの生活パターンがわかり、それに応じて行動できていた。今はそうはいかない。他の二人の要望を伺い

ながら生活しなければならない。慎吾の母は家族なので、抵抗感は少ないが、義男は見ず知らずの他人。そして、引きこもり。三度の食事はお盆に載せて、誰かがドアの外まで運び、食後のお盆が出ていたらそれを下げる。用事があるときはお互いに書き物で意思の疎通をするといった按配だ。家にはトイレが２つ、風呂が一つある。それぞれ、入り口に札を設け、間違いがないように努めた。それでも、慎吾と麗名は二人だけの部屋があり、夜は二人だけの世界を持てる。麗名が熱くなってしまっても、慎吾が興奮してもよいのだった。

四人の共同生活が始まって、麗名はラテンアメリカ連盟の仕事を正式に辞めた。慎吾と麗名は家の管理人兼世話人といった感じで、家事、炊事を担当した。これらは麗名の得意分野ではなかったが、避けてはいられない。相変わらず整理整頓の苦手な麗名であったが、慎吾は麗名にこう言ったこともある。
「きみに整理整頓の術教えてあげるからね。」
「それは助かるわ。あなたは、意外となまけもののくせに、うまく散らかさずに済んでいるものね。」
「違うよ。なまけものだ、か、ら、散らかさないんだよ。後片付けが嫌だから散らかさないんだよ。」
「わたしも後片付けは嫌だけどそれでも散らかすのはどうしてかな。」
「それは重傷だな。まあ、今まで何年も治らなかった病気が簡単に治るわけないよな。」
「そんなこと言わないで、早く整理整頓の術教えてよ。」
兎に角、今は、これが慎吾と麗名の仕事だ。ある意味では、共同生活の世話をすることは、家の中でツアーガイドをするようなもので、かつての経験が役に立っていたことは否定できない。

食材としては、農産物の多くは橋和家の作物を安く提供してもらう。それでも近所のスーパーに買い出しに行く必要もあった。古い家なので、補修のための費用もかかった。多額ではないが、光熱費も支払わなければならなかった。そういった支出は高梨からの資産を少しずつ使った。

７年間もの米国での監禁状態のため、慎吾の母は実際の年より老けて見え、体力も衰えていた。それでも、慎吾は数年間祖母の手伝いをした時のことを思い出し、母に対しても必要最低限の手伝いだけして、母が出来るだけ自力で生活するように努めた。

しかし、この共同生活で何といっても一番難しかったのは引きこもりの義男に対する対

応である。義男はもう成人しているが、これからどのような人生を送るか全く見当がつかなかった。慎吾と麗名は少しずつ引きこもり対応方法を検討した。関連の文献や報告書などにも目を通した。慎吾は心理学に興味を持ち、いろいろと調べた。慎吾と麗名は、義男にまずこの場所に慣れてもらうことに専念した。ここが彼の家と感じられるように努めた。義男に対して、決してこうしろ・ああしろということは避けた。

そんな調子で、一年はすぐ過ぎた。その間、何度となく町役場の人々や、橋和家の人々が訪ねてきた。訪問者たちは共同生活がうまくいっているかどうか非常に気に掛けてくれた。

それから寒い冬を２回越したある日のこと、義男のビデオゲームの端末が壊れてしまったようだ。ビデオゲームが義男の毎日のほとんどを占めていたので、これが使えないと重大事である。書き物の交換でどうするかを決めることになった。この町にはそれを直せるような店はない。おそらく高崎線の駅まで行けばあるだろう。新しいものを買うのだったら、通信販売も可能だろう。義男は何でもいいから一番早くゲームを再開できる方法を望んだ。その日のうちにゲームを再開するには、高崎線の駅までバスで行って、代替えの品を買うしかなさそうだった。慎吾は行ってきても良いと思ったが、実はビデオゲームのことはさっぱりわからない。義男は絶対一人で外に出歩かない。そこで、慎吾と義男と二人で出かけることになった。

二人はバス停まで黙って歩き、黙ってバスを待ち、黙ってバスに揺られ、駅に着いた。黙って駅の近くのゲームショップへ行き、中に入った。義男は壊れた端末を出して、ぼそっと言った。
「これの代わりになるものをください。」
それは、慎吾が初めて聞く義男の声だった。義男は黙って何種類かの代替品を吟味していたが、そのうちの一つを選び、慎吾の方を向いた。慎吾は黙ってその代金を払った。二人は黙って来た道を帰った。後で気が付いたことだが、慎吾は一言も口をきかなかった。

その夜、ふとんの中で、慎吾は麗名に義男とゲームショップに行った時のことを話した。麗名は黙って聞いていたが、ポツリと言った。
「あなた、良いことをしたかもしれないわね。」
「ん～？」
「だって、義男さん、あなたの方が引きこもりだと思ったかもしれないわ。」
慎吾は何も答えなかった。もう寝てしまっていた。

ある日、麗名は橋和家へ農産物を分けてもらいに行くときに、慎吾の母を連れて行った。その日は日和も良く家からあまり出ない母にも良い散歩になると思ったからだ。橋和家で、慎吾の母は初めて橋和の母に会った。二人は似たような年ごろで、話があったようだ。橋和の母はその当時の女性には珍しく大学で社会学を学んだ人だ。慎吾の母の分野の文化人類学に近く、共通の話題が多いことに気が付いたのだ。橋和の母は、この町ではそういった会話をする人もなかった。それからは、この二人、双方の家に行ったり来たりするようになった。これには慎吾と麗名は大変喜んだ。慎吾の母がやっと元気を取り戻してくれると思ったからだ。

これは次の冬だったろうか。義男の様子は相変わらずだったが、ある日、紙に書いて質問をしてきた。「どうしてオレの世話をしている？」と一言書いてあった。慎吾と麗名は顔を見合わせた。どう答えたらいいだろう。二人の一致した見解は、うそをつかないということだった。慎吾が紙に、「１．この町で無償で家を借りるために、共同生活をする人が欲しかった。２．義男さんの父が自転車で麗名に衝突したことに対して、麗名に見舞金が支払われた。３．義男さんの父がパーキンソン病で施設に入るに際し、義男さんの将来が心配だった。」と書いてドアの下から差し入れた。

またしばらくして、義男から「オレのお袋のことが知りたい」と質問された。慎吾と麗名は答えられなかったので、「義男さんの父に聞いてくる」とだけ返答して、高梨を訪ねることにした。二人で行きたかったが、後の二人だけを残すわけにはいかないので、麗名だけが行くことにした。麗名が訪れて、高梨は大変喜んだ。今や、高梨はほとんど満足な動きが取れない。ただし、頭はしっかりしていた。麗名は義男のことを報告し、質問のことを伝えた。高梨は少しためらっていたが、ゆっくりと話し始めた。

「話すのが難しくなっているので、大事なことだけ言います。私の妻は義男を非常に可愛がっていました。いつも自転車の後ろに乗せて出歩いていました。ある日、義男が２才の時、これは聞いた話ですが、妻の自転車は横から車に衝突されました。二人は路上に放り出され、義男が泣きやまず、妻は自分では動けなかったにもかかわらず、胸をはだいて義男に授乳したそうです。その時、義男はまだ離乳していませんでした。周りには多くの目撃者がいたということです。救急車が駆け付け、義男がまだ妻の胸にすがっている時に、救急隊員は妻が出血多量ですでに息を引き取っていることに気が付きました。それが最後です。」

麗名は悲しかった。なんで、この家族がこんなに苦しまなければいかないのだろうと気が動揺した。その後、麗名は高梨に挨拶してその場を離れた。そして、電車の中で泣い

た。家に帰った麗名はその話を慎吾にした。慎吾も神妙な顔をして言った。
「それでも、やっぱり、事実を伝えないといけないよね。」
「そうね。あなた、伝えてくれる？」
「あぁ。明日するよ。」

翌日、慎吾は義男に書置きをした。「お母さんのことを話したい」と。その後しばらくして、義男が部屋から出てきた。慎吾は義男を外に連れ出して、歩きながら高梨の話を出来るだけそのまま伝えた。義男は何も言わなかった。慎吾は義男の目が赤くなっているのに気付いた。義男は黙って部屋に戻った。

そして、二か月ほど後に高梨の施設から電話があった。高梨が急に弱っているという。明日まで持たないかもしれないと。慎吾と麗名は、義男にそのことを伝えた。すぐに、返信があった。「会いに行きたい」と。バスと高崎線両方の時刻表を調べると、その日のうちに高梨の施設につくことはできない。慎吾は橋和に電話して車を出してもらえるかどうか聞いた。橋和はすぐに来てくれた。橋和は麗名と義男を乗せて直ちに高梨の施設に向かった。

夕刻、高梨の施設に着くと、看護師が高梨の状態はまだどうなるかわからないと言った。橋和は家のこともあるので、麗名と義男を残して家に帰った。麗名は義男を高梨のベッド際に残して部屋の外で待機した。中では何か話している。時折、泣き声も聞こえる。麗名はそのままにしておいた。その間何回か慎吾に電話で連絡した。何時間か経ったころ、モニターの音が消えた。呼び出された医師が高梨の死亡を確認した。もう夜中に近かった。麗名は義男を連れ出し、外でタクシーを呼び、安里町まで随分長い距離をタクシーで帰った。途中、義男は疲れたようで麗名に寄りかかって寝ている。麗名はそのままにさせた。前回、義男がタクシーに乗って初めてこの家に来た時、彼は一人だった。今日は、一人ではない。家に帰ると慎吾が二人を出迎えた。義男は寂しそうに自分の部屋に戻って行った。

次の日、慎吾と麗名は義男のことが気掛かりだった。大丈夫だろうか。成人したとはいえ、ほとんど虚の世界しか体験のない大人。それでも、慎吾と麗名はそっと見守ってあげようと決めていた。慎吾と麗名は今や義男に近い年齢の子供が居てもいい年だ。なんだか、両親を失ってしまった義男が二人の子供のような気さえしてきたのである。

その後、義男はどうやら持ちこたえたようだった。以前のような、彼の普通の生活に戻った。ただ、一つ変わったことがある。いつも食べ終わった食事の盆に「ごちそうさ

ま」と一言、書置きがあることだ。

共同生活を生活を始めて５回目の梅雨時だった。町の人々も相変わらず応援してくれる。慎吾と麗名はそれなりに自信をつけた。やっていけそうだという感じが出来た。麗名にはまた新しいアイデアがあった。
「あなた、わたし達の共同生活少しずつ軌道に乗ってきたみたいね。わたし、考えたことがあるんだけど。確かに、無償の貸家に、橋和さんの農作物を安く分けてもらっているから、この家の運用資金は小さいわ。それでも、諸経費で、資産は減っていくでしょ？高梨さんの資産をわたしの銀行口座に入れておかないで、公共の基金としてもっと有効に運用できないかしら。そして、この家も公共の組織として使えないかしら。そうすれば、もっと多くの人々がわたし達の経験を共有できるような気がするの。つまり、このような家を少しずつ増やして、みんなで協力していけるような組織を作れないかと思って。だれでもが安心して住める家、そして、安心のところをすこ～し伸ばす感じで、『安心～の家』て言う名前はどう？社会福祉法人として登録できない？」
「さすがは安城先生。よくいろいろ考えてくれるね。法人登録ね。悪くないかもしれないな。もっと大変になるかもしれないけどね。だれか弁護士知ってる？」
「あなた！何年もかけてわたしが養った弁護士がいるでしょ。しっかりしてね。」

と言う訳で、慎吾が法人登録の準備をすることになった。慎吾と麗名にはもうすでにいろいろな考えが浮かび上がっていた。

９．新宿の婆婆の幻夢曲

ある朝早く、麗名はハッとして目を覚ました。横では、慎吾がすでに目を覚ましている。なんだかボーっと天井を見ている。
「あなた。わたし、凄い夢をみたの。婆婆が出てきたのよ。随分リアルだったわ。こんなことを言っていたわ。」

高校三年生と英語教師、いや、失敬。慎吾と麗名だったな。最後までわしを訪れてくれて有り難い。今日はわしの生い立ちを伝えたくてちょっと出てきた。わしは三人姉妹の真ん中。姉は最初の子供ゆえ両親に可愛がられ、妹は末っ子ゆえ可愛がられた。と、わしは思っていた。わしはいつも妬んでいたんじゃ。そして、母はわしら娘たちにいつも指図をした。こうしろ、ああしろと。わしはそれが嫌でしたかなかった。全く従おうという気は起らず、ことあれば反抗した。

あまりに嫌で、わしはまだ学校もろくに終わらない頃に家を出た。家出と言う訳ではないが、それに近かった。安ホテルのメイドと給仕をして、そこの従業員寮に住まわせてもらった。親元は嫌だったが、一人暮らしはある意味ではもっと大変だった。すべてが恨めしく、何も希望とか夢がなかった。メイドを十年はやったはずじゃ。少し余裕が出来たため、自分だけの風呂もない安アパートに移った。その時は、それでも御殿に思えたもんだ。

そのアパートに住んでいた時のこと、ある夜中、早朝と言った方がいいかもしれない、電話が鳴った。こんな時間に、何か重要なことかもしれんと思い、受話器を取った。相手は誰だか分らん。女がすすり泣きをしている。こちらは熟睡の真っ最中に起こされ、何が何だかわからん。その内にその女が「もう生きていく気がしないんです」と言って話し始めた。まだ泣いている。もう何も出来ることがないとか、誰も相談する人が居ないとか言った。わしはいくら辛くてもそこまで思い詰めたことはなかったんで、なんだかひどく気の毒になった。とはいえ、何が出来るわけではない。ただ、ひたすらその女の話を聞いたんじゃ。

一時間以上も聞いていたじゃろう。その女は少し落ち着いてきた。盛んに礼を言っている。「聞いてくれてありがとうございます」と。そして、また電話していいですか？と聞く。その女は命の電話と思っていたんじゃのぉ。わしが間違い電話だったと言うと、

その女はまた泣き出した。また、「それでは尚更、ありがとうございます」と繰り返し言う。覚えとるか？慎吾が初めてわしのところに来る前に間違い電話をしたことがあったろう。そんな按配だったんだな。

その電話があってから、わしも人に話を聞いてもらいたくなった。特に行くあてもなく、新宿の占い師がおるところへ行った。ところが、貧乏だったわしには料金を払うことが出来なかった。しかたなく道端に座っていると、誰か知らん人が来てわしの前に座り、いろいろ話しを始めた。わしが話を聞いてもらおうとして行ったのに、ミイラ取りがミイラになってしまったんじゃ。

それが、わしの占い師としての始まりだった。それからは、時折、メイドの仕事のあと、少し年寄のかっこをして新宿に出て、占い師として座る。人が来て話をする。当然わしは本当の占い師で何でもなかったので、ただ人の話を聴く。ほとんどの人はそれで充分であった。時々、調子に乗って下手な忠告でもすると、相手は怒ったりする。まぁ、師匠のいない見習いみたいなもんだな。メイドの仕事ばかりでは気が滅入るので、そんなことでも気分転換になっていたんじゃよ。

占い師をやって一番良かったことは、実は、わし自身が変わってきたことだ。段々と自分のひがみが減ってきた。姉や妹に対する妬みも減ってきた。落ち着いてきた。すると、いろんなことをじっくりとみる余裕が出てきた。途端に、今まで見えなかったことが見えるようになったのじゃ。相談に来るものには全然見えていないものがはっきり見える。そんな時でも、必ずまず相手の言うことを十分に聴いた。そうやっているうちに、わしは本当の占い師になったのではないかと思った。世にいう超能力ではない。よく見、よく聴くことによって、現実を把握すること。それが魔術だとわかったのだ。どうやら、あんたたちはそれを分かってくれたようじゃな。わしの言ったことを覚えていてくれて有り難い。

それから、占い師の経験を通してやっとわかったんじゃが。わしの母は指図ばかりして結局わしら娘を疎遠にしてしまった。自分のことばかり重んじて、相手の気持ちや考えを無視してきた。気の毒な人だわ。それに対して、相手のことを聞いてやることは、相手の気持ちや考えを大事にしているという姿勢を明確に示している。相手は自然に心が休まるのだ。そうすれば、自然と良い関係が生まれる。

慎吾に麗名、あんたたちはそれに気がついているようだな。よくいろいろなことに気がついたのう。それに、たいそう良いことを始めたもんだ。年寄りや引きこもりの気持ち

を大事にして、指図をしない。あんたたちの共同生活はこの世で失われつつあるものを培っている。元気でな。

慎吾は依然ボーっとしている。
「あなた。どうしたの？」
やっと慎吾は反応した。
「実は、」
まだ何かためらっている。
「実は、それを言うなら、オレも全く同じ夢をみた。」
今度は、麗名が黙ってしまった。しばらくしてから、
「あなた、それじゃ、あれは夢じゃなかったの？」
「わからない。ただ、きみが言うようにやけに生々しかったのは事実だ。そして、二人共おんなじ夢だ。今日は何日だろう？」
「１０月２１日だけど。」
「やっぱりそうか。婆婆の命日だ。言い残したことを伝えに来たのかな。それとも、オレ達の経験が増えるまで待っていたのかなぁ。それにしても、きみはほんとに大したもんだよ。よく安心～の家のことを考えついたものだ。これは、婆婆の太鼓判付きだね。」

１０．安心～の里

慎吾と麗名は、約一年の準備期間を経て社会福祉法人「安心～の家」を設立した。この法人は高梨の残した資産、「高梨基金」を基に運用される。基本的な姿勢は慎吾と麗名がここ数年経験してきた共同生活に基づいているが、将来複数の同じような家々を統合して運用できるような形態を考えている。地盤は引き続き、埼玉県北西部の安里町に置き、町と共同体制を維持・強化する。家々は歩いて行き来できる範囲にある町の空き家を無償で貸してもらう。法人としての規約上、慎吾と麗名の二人が理事長、その他に、橋和、町役場の人などが理事として列記してある。

安心～の家を運営するにあたって、慎吾と麗名がよく思い起こすのは、二人のエコツーリズムの経験から学んだ未開部族の生活である。未開部族の非経済的相互介助、生死感等。人間の生活にとってほんとに必要なことは何か。ほんとに重要なことは何か。そして、この施設において、なんと言っても、最大の理念は住人が安心して住めるということである。多くの現代人が数々の不安、恐怖、ストレス等に侵されている中でのオアシスを作るという趣旨である。

実際に安心～の家に住む人々は皆「住人」と呼ばれ、あらかじめ決められた役割を設定しない。当初の住人、慎吾、麗名、慎吾の母、義男は皆、単なる住人である。共同生活の中で、それぞれが出来る役割を自ら見出し、自主的に実行していく。この点が、この施設を「家」と呼び、完全に組織化された規制の施設と異なる大きな特徴である。

もう一点の特徴は、経済活動を最小限に留めるということである。そして、それが高梨基金の利息の範囲に収まれば、基金は減らない。言うなれば、これは未開部族の経済活動を模試している。つまり、限られた経済活動として、捕獲した動物をマーケットで売って、ボートのエンジンや燃料等、必要最低限の物資を購入するようなものである。現代社会がまぎれもない経済社会、金銭社会であるため、このような方法を実践するにはいろいろな工夫が必要である。

現実的には、共同生活で重要なことに家事、炊事等の作業がある。そして、一番は食事の用意である。これまでは、橋和家の農作物を安く分けてもらってきていた。安心～の家として出発してからは、食費の出費を限りなくゼロに近くする。橋和家を含む町の農家と農作物の協力的供給体制を作る。例えば、農作物を無償で供給してもらう代わりに、農繁期の手伝いをする。保育、家事などの手伝いをする等々。そして、いずれは自家菜

園もやってみたい。また、光熱費は地元のガス・電力会社と提携し、無償で提供してもらう。その代わり、家々の屋根を太陽光発電のために利用してもらう。

当初一軒の家は徐々に増やす。家を一軒増やすときは住人全員で協議し、新しい住人構成を一緒に考える。そして、それぞれの家がある程度独自に共同生活を営みつつ家々の間で共用できるものはするし、相互に助け合う。これは、共同生活版の分家とも言えるかもしれない。ビジネス社会のフランチャイズに共通する点もあるかもしれない。しかし、全員一致の決断方法は基本的に直接民主主義の手法である。

さらに、当初の住人は誰も運転免許を持っていないが、将来的には、法人としての車を地元の自動車販売店に無償で貸し与えてもらう予定だ。車の整備・維持も受け持ってもらう。その代わり、車には販売店の宣伝を掲げる。

このような謳い文句を掲げて、安心～の家はスタートした。当初は、四人の共同生活が続いているだけである。しかし、徐々に、運用上の変化を遂げ、計画したような組織に変わっていった。

法人としてスタートして何回か梅の季節が過ぎた。少しずつだが、義男の状況が変わってきていた。まず、食事の盆を自分で台所まで返すようになった。次に、盆を自分で台所まで取りに来るようになった。それから、一緒に食卓で食事をするまでになった。この間も、全く口は利いていない。それでも、顔を見せることに抵抗がなくなってきたのは事実である。

ある日、食卓で、慎吾と麗名が法人の会計の話をしていた。農繁期とかに、慎吾と麗名が橋和家の農作業を手伝うと会計の事務とかが忙しいというような内容だった。何気なく聞いていたと思われる義男が急に口をはさんだ。
「その仕事、俺、やってもいいけど。」
慎吾と麗名はびっくりして顔を見合わせた。そして、麗名が喜んで答えた。
「義男さん！ほんと？それ、すごく助かるわ。」
慎吾も加える。
「そりゃ助かる。ありがとう。」
義男は少し照れているようだったが、また口を開いた。
「それから、俺のこと義男、さ、ん、って言わないでくれるかな。義男でいいんじゃないかな。」

共同生活を始めてもうどのくらい経ったろうか。慎吾と麗名の努力がやっと実ったと言ってよい。それからの義男は、もう別人になったと言える。あの引きこもりの義男はもういなく、ごく普通の若者になっていった。その後、義男は自動車学校に通い、運転免許を取得した。これで、実際に法人としての車を借りられることになった。日常生活に車が必要なわけではなかったが、特別な時、非常時には大変役に立った。そして、徐々にではあるが、義男は慎吾と麗名を両親のように、慎吾の母を祖母のように慕っていった。

暇になったわけではないのだが、慎吾はピアノの練習と小説を書くことを再開した。いつも追われているだけでなく、生活にゆとりが欲しいと思ったからだ。義男も興味を持って、慎吾が使っていない時にピアノを練習するようになった。義男は長年のビデオゲームで鍛えたせいか指先が器用で、皆が驚くほど上達した。また、何億万回と聞いたゲーム音楽を覚えきっているようで、それらを簡単に弾くし、絶対音感とまではいかないにしても、ゲーム音楽の音程を正確に把握している。時には慎吾と義男が連弾したりしてみせた。「どんなに下手でも音楽のある家は良い。」慎吾はそう思っていた。また、小説の方は、今までの麗名との経験に基づいた準長編を書き始めた。その第一話として麗名との出会いを「もう先生と呼ばないで」という題で書いてみた。

丁度その頃、麗名の父の健康状態が悪くなっていた。リウマチが徐々に悪化し、手足が腫れ、歩くのが難しくなってきていた。麗名は時折実家に帰って様子を伺っていた。その時は、いつも決まって、安心～の家の状況を説明した。両親はあの幼い、整理整頓が苦手な麗名が共同生活の世話役をしていることに驚いてはいたが、喜んでくれた。そして、ある日突然、麗名に彼らも安心～の家に住めないかと相談する。

慎吾と麗名はすぐに検討し始めた。今の家の寝室三つはすべて利用されていて、麗名の両親が入居するのは現実的ではない。二軒目を借りようという話になった。さっそく、食卓でその話を持ち上げ、どのような住人構成にするか話し合った。いろいろな案が出たが、新しい二軒目には慎吾の母と義男が移り、麗名の両親は慎吾と麗名の残る一件目に入ることになった。この時までには義男も住人として立派に貢献していたし、祖母の面倒も見るようになっていたので、誰にも心配はなかった。特に、義男は慎吾と麗名のやり方を模して、慎吾の母に不必要なことをせずにほんとに必要な手伝いだけをする習慣が出来ていた。それに、この二軒目は一件目から歩いて２分という近さだ。当初は食事も一緒にすることにした。

麗名の両親はほとんどの家財を売却あるいは寄付し、家を売った資産は安心～の里の資

産、高梨基金に寄贈した。引っ越しの日は義男が法人の車を運転して麗名と二人で迎えに行った。こうして、安心～の家は二件時代に入る。依然慎吾と麗名が麗名の両親の家に滞在していたこともあって、麗名の両親もすぐに共同生活に慣れた。慎吾の母と義男も問題なく過ごしていた。慎吾は自分が祖母の手伝いをしていたころを思い返して、義男の姿を頼もしく思った。

さて、安心～の家に入居した麗名の両親であるが、一番の心配は父のリウマチのことであった。東京にいるときは複数の大学病院に通い、治癒を期待していた。しかし、このような慢性疾患に対して現代西洋医学は極めて無力である。いろいろな治療法を試したが、何一つ有効なものはなかった。多くの場合、薬の副作用が苦しみを増した。麗名の両親は次第に希望を失い、諦め気分になっていた。家に入居してからはどうしようか迷っていた。この近くには大した病院はない。大きな病院は高崎か大宮まで行かないとない。そんな状況の中、麗名の父はホコ先を変えた。もう病院に行かなくても良い。ここで出来るだけのことをしよう。自分は十分に生きた。１００才まで生きなくたっていい。自然に任せよう。そんな感じであった。

安心～の家では住人の医療について特にはっきりした取り決めはない。慎吾と麗名は住人の希望を尊重するというつもりであった。しかし、現実問題としてあまり病院がないような過疎地なので、住人が最新の医療を希望した場合等は困難が生じる。そんな状況で、麗名の父の状態は試験的なケースであった。病院通い無しの老後で皆満足いくのだろうか？麗名の父はそれなりに人生に満足していたし、なんと言っても麗名が幸せなことが一番であった。そのため、人生に対する執着は強くなく、自分の余生を静かに全うすることに納得がいったのだろう。確かにリウマチから来る痛みは時折耐え難いものでもあったが、今や自分なりの方法で対応しようとしていた。今まで使っていた薬は一切やめた。その代わりと言う訳でもないだろうが、瞑想も始めた。これは、痛さから逃れようとするのではなく、痛さを含めて現実を直視することによって自分なりの納得を得ようという気構えである。他の住人も麗名の父の意志を尊重して必要な手助けだけをする姿勢に徹した。その後も父のリウマチは進行するが、皆の心はそれなりに落ち着いていた。

それから暫くして、安心～の家二軒目に新しい住人が入った。大学中退の引きこもりで、ちょうど義男の若いころと似通った状態だった。ただ、引きこもりには比較的珍しく、この人は女性だった。このころから、義男が二軒目の炊事を始めた。今義男がこの新しい住人にしていることはまさに義男が何年か前に経験したことだ。義男はその心理をよくわかっていたし、何が自分を変えたのかもよく分かっていた。義男は出来る限りのこ

とをした。そして、そのような純粋な心に導かれた努力は常に報われるものである。義男はさらに自信を増し、過去の自分のような人たちの助けになりたいと思った。

二件時代に入ると、安心～の家は町の内外でちょっとした評判となり、また、マスコミや福祉関係者の興味も持ち上がった。ボチボチ問い合わせが来るようになったころ、町役場広報部が安心～の家のウェブサイトを作成した。慎吾と麗名は外部との直接の交渉はしないことにしていたので、すべての問い合わせは町役場の広報部に行く。広報部の担当は状況をよく察知していて、それらの問い合わせに注意深く対応した。大きなマスコミの取材は、原則として断った。福祉関係者の問い合わせについては、限られた範囲で見学を許した。家の住人の生活が第一だということを十分理解していてくれたからだ。

町役場にきた希望者の中で真剣なものは住人にあって相談を受けるということになる。ある日、義男が若い女性の相談に応じた。この女性には５才になる男の子がおり、おねしょで悩んでいる。この子供だけ安心～の家に入居して他の住人に世話してもらえないか、という希望であった。義男の心は痛んだ。彼が思い起こすのは、自分の幼少時の経験であり、慎吾から聞いた慎吾の兄の話である。義男はこの女性にそれらの話をし、彼がいかに苦労してきたかということを伝えた。だが、義男には、彼の気持ちがこの女性に伝わったとは思えなかった。義男にそれ以上出来ることはなく、丁寧に入居を断った。

またある時は、麗名が著名なファッションデザイナーの女性の相談に応じた。この女性には登校拒否の中学一年生の娘がいた。どうやら、学校でいじめにあったらしい。やはり、子供を単独で入居させたいというのである。言葉の節々に、自分の仕事が大事だというニュアンスが漂う。麗名の返答はこんな具合であった。
「それは大変お気の毒です。そして、わたし達はそのような事情のある子供たちを助けてあげたいという気持ちでいっぱいです。現に、わたし達は引きこもりの若い男性を住人として受け入れ、大きな変化をもたらした経験もあります。ただし、今のわたし達の現状では未成年の方の単独入居は受け付けることが出来ません。これは、法律上とか手続き上と意味ではなく、わたし達がまだそのような未成年の子供たちを住人として受け入れる能力がないからです。いえ、この安心～の家では、原則として永遠に未成年の単独入居を受け入れることは出来ないでしょう。」
「原則として、というのは？」
「まだわたし達は経験がないのですが、孤児の場合は考慮せざるを得ないかもしれません。それから、もう一つの可能性は、母子で一緒に入居するということです。」
「その、二人で入居というのは問題外です。私の仕事に差し支えますから。」
と言う訳で、その女性も帰って行った。

その後、安心～の家は非常に遅いペースで拡張した。数年に一軒新しい家を追加するという状況だった。これは、住人の全員決済のため時間がかかることにもよる。しかし、雨後の竹の子的成長を追求する一般企業形の成長に対する住人の不信感も働いていた。遅いペースでの拡張というのは良いことでもあり、問題点でもあった。入居希望者の数が次第に増加するなか、安心～の家にはなかなか空き部屋がなかった。慎吾と麗名は、希望していて入れない人がいるのは、残念だが仕方がないと思っていた。その他にも、緊急で一日でも滞在出来ないかとか、今晩泊まるところがない、といった人たちも現れたりした。

そのような状況を踏まえて、慎吾と麗名は新しい施設、「安心～の宿」を設立することを計画した。この施設は同じ高梨基金を基に運営されるが、いくつかの点で安心～の家とは異なる。まず、安心～の宿は一時的な滞在を目的とする。あらかじめ滞在期間の限度は設定していないが、滞在者はいずれ独自の道を探し、出ていくという想定だ。実際には安心～の家の空き部屋待ちの人が入ることもあったが、それはそれであった。

もう一つの大きな違いは、安心～の宿はスタッフと滞在者が明確に区別されていることである。この点では、宿は通常のホームレスシェルターと変わらない。それでも、安心～の家の姉妹施設として、家の特徴を多く取り入れている。例えば、一般社会経済へ依存度が低い。農作物の無償入手と、農繁期の手伝い。光熱費の補助、安心～の家との車の共用等だ。そのため、多くの点では両者は区別しがたい。そこで、関係者はこの二つの施設のことを総称して、「安心～の里」と呼ぶことにした。それは、まさに安里町にふさわしい名前であった。

安心～の宿は、すでに安心～の家が知れ渡っていたため、比較的すぐに軌道に乗った。当初一軒、直に二軒目の宿がオープンした。一番最初の常駐スタッフには義男が就任した。宿も支出ゼロを目指すので、スタッフも原則としてボランティアだ。安心～の家の住人で収入を必要としない義男がリーダーとなることは宿の運営開始にとって大きな意味があった。その他の安心～の家の住人や町の住人もボランティアを務めた。

安心～の里が町から借りている家は皆古いので、頻繁に修理が必要になる。部品等が必要な時は、慎吾はバスか義男の運転する組織の車で高崎線の駅に近いホームセンターに行く。小さな店なので、レジは一つしかなくいつも決まって若い女性が働いていた。いつもニコニコしていて気持ちがいい。この女性は全く日本人のように見えるのだが、日本語が少したどたどしい。ある日、慎吾がどこから来たか聞くと、ミャンマーだと言う。それからしばらくするうちに、慎吾は毎回徐々に彼女の表情が暗くなってきていること

に気づいた。どうしたのかなと、思っていると次に来た時には彼女の姿はない。慎吾は心配しだした。だが、何週間か後には、彼女がまたレジに戻っていた。依然表情が暗い。どうしたのかと聞くと、母国の母親が重病だったという。しばらく休んでいたのは母を見舞ってきたからだと言う。そして、彼女は突然泣き出した。母は亡くなったのだ。そして、日本に戻ってくると、長く休んでいたので、今日で解雇になると言う。会社の寮も引き払わなければならないらしい。慎吾は安心～の宿の事を伝えて帰った。次の日の夜、その彼女はボストンバッグ一つの荷物を持って宿にやってきた。しばらく経って、この女性は、安心～の家に入居し、やがて宿のスタッフとなった。

ある時、麗名はかつて働いていたラテンアメリカ連盟の元上司から連絡を受けた。話の内容は以下の通りだった。ペルーでの政権交代に係わる内戦のため多くの人々が国を去らなければならなかった。その内のほとんどは近隣中南米諸国やアメリカに移った。その他に、ペルーの日系人の子孫は日本にもやってきた。日系人と言っても二世、三世、四世ともなると親戚を探すのも困難だし、たとえ見つかっても、なかなか受け入れてはくれないことが多い。そのような状況の一家族を安心～の宿へ泊めてくれないかということだった。その家族は日系人といえど、日本語は話せなかったので、宿に着いたときは麗名がスペイン語で対応した。麗名は家族の情報を記帳したときにすぐに気が付いたことがあった。彼らの姓がヤマカワだった。あの慎吾を助けてくれたリマの出入国審査官と同じである。ペルーの日系人の何人が同性だろうか。麗名がこのことを聞くと、この家族は皆泣き出した。彼らの年老いた父親は確かにリマの元出入国審査官であり、内戦の時にいずれかの武力によって殺害されたと聞いていたのだ。この家族は慌てて国外に脱出したため、事実を確かめる余裕もなかったという。麗名はあの審査官の安否を気遣った。麗名がこの家族の世話が出来るのはあの審査官が慎吾を助けてくれたからだ。あの薬草がなかったら麗名は意識不明のまま他界していたかもしれない。その後、この家族はラテンアメリカ連盟の助けも借りて、就職を得、都心に近いところに自分たちのアパートを借りた。

安心～の家が出来て２０年ほど経ったころ、町の人口減少が止まった。単純に安心～の里のせいと言う訳ではないが、この組織が町の活性化に関与したことは否めない。町には見学の希望が絶えないし、空き家の借り手も増えた。ここから都心に通勤するものもいれば、この地域で仕事を探すものもいた。確かに、安心～の里は町の経済活動に直接貢献していない。しかし、町の人々はこの組織がもたらす数々の公益に盲目ではない。例えば、安心～の里および安里町への、様々な企業や個人からの寄贈が着実に増えつつある。高梨基金が増えるにつれ、里の運用資金である利息も増えた。この利息に余剰分がある場合は町へ寄付されている。そして、なんと言っても一番感じられるのは、人口

減少と共に失いかけていた町ぐるみの活動の地盤が再生しつつあるということである。近年になって、町は安心～の里の存在に感謝の意を表し、毎年、住人と関係者のための日帰りバス旅行を実施してきた。今年からは、それに加えて年に一回の一泊バス旅行も追加した。これらの企画は主にバス会社や宿泊施設の寄贈で支えられている。

そんな中、慎吾と麗名は関係者に常に警告してきた。安心～の里はユートピアではない。それは、本来必要ないものである。今、安心～の里が求められるのは、世の中が安心でないからである。問題の本当の解決には、どうしたら世の中すべてが安心になるかということを考えなくてはならない。社会のあらゆる側面を見つめなければならない。その中には、子育て、老後、教育、労働環境等々多くのことがある。本当に必要なのことは、社会全体が安心～の社会に、世界全体が安心～の世界になることだと。そして、皮肉なことに、現代社会が学ばなければならないようなことは未開部族たちが日々実行しているようなことでもある。

慎吾と麗名が安里町に住み始めてもう２５年以上経った。そして、高梨の死から丁度２５年が経とうとする頃、義男が父、高梨の供養をしたいと言った。義男の母の死からは丁度４５年になる。義男ももうすぐ５０才だ。母の墓は不明、高梨は検体の後、共同墓地に収まっていた。参加者の便宜を図り、義男は、供養は安心～の家でしたいと言った。義男の希望で、無宗教の人前式の簡単な供養だった。これには安心～の家の住人全員のほか、町の内外からも数多くの参加者があった。

義男は引きこもり時代、父、高梨に多大な心配をかけたことを後悔している。しかし、それは義男だけの責任とは言えない。それと同時に、義男は今立ち直り、何人もの他の引きこもりの人々に尽くしたことを自負している。満足している。それを伝えたかったのだろう。もう一点、義男が伝えたかったのではないかということがある。彼は、若い引きこもりの、女性の住人を長年に渡って世話してきた。義男の努力の甲斐あり、この女性はすでに家や宿の仕事を手伝えるようになっていた。そして、この供養の間、この女性はずっと義男に付き添っていた。誰の目にも二人の間に親密な関係が芽生えているのは明らかだった。

当然、麗名と慎吾にも高梨の強烈な思い出がある。麗名の事故の加害者、義男の父、安心～の里の設立基金提供者。彼らの半生の多くが高梨に影響されたといっても過言ではない。二人は心から高梨の冥福を祈った。

この時までに、多くのことがあった。橋和夫妻は農業の第一線を子供たちに託し、安心

～の宿のボランティアとして働いていた。残念ながら、慎吾の母と麗名の両親は亡くなっている。しかし、慎吾も麗名も親の最後をずっと見届けられたことを幸いだと思っていた。誰も過剰な医療に頼らずに済んだ。そして、慎吾が祖母の最後の手伝いをしていた時の特養とは大きな違いがある。どんなに「完全」と言われる介護でも給料で働いている人に世話してもらうのと、身内や知り合い、いや他人でも、お金のためではない人に世話してもらうのでは違う。麗名の母が自分で麗名を育てたように、麗名は自分で両親の最後を看取った。慎吾の母が自分で慎吾を育てたように慎吾は自分で母の最期を看取った。それらの行為は、経済活動に伴う価格が付けられないものである。

残念ながら、慎吾の兄は依然行方不明だ。両親の最後のことも知らないはずだ。慎吾は自分から積極的には兄を探そうとはしなかった。それでも、何年か前に自分の簡単なウェブサイトを作って、「城ケ崎慎吾」というキーワードで検索すると連絡先が分かるようにしておいた。万が一、兄が慎吾に連絡を取りたいときに出来るようにと考えてのことである。だが、今のところ、連絡はない。

１１．初めての観光旅行

慎吾と麗名は、ともに定年を過ぎた。慎吾の関節は痛み始め、麗名は少し認知症の気配があった。そこで、施設の関係者とも相談の結果、二人は理事長としての役職から引退して、単なる住人となることに決めた。次の理事長の選択は簡単だった。皆に押されて、義男がなった。高校も卒業していない、普通の就業経験もない人間。元引きこもり。にもかかわらず、今や義男は安心～の里で皆に大いに信頼されている。

引退パーティの最後に二人は関係者から北海道旅行をプレゼントされた。旅行の日、慎吾と麗名は羽田から網走に飛び、そこから直通バスで屈斜路湖畔のホテルに向かった。
「わたし達、ずいぶんと旅行したけど、これが初めての観光旅行じゃない？なんだか、新婚旅行みたい。」
「うん。そんな感じだね。」

夕食の後、二人は家族用の小さな露天風呂を予約して入った。
「オレ達の最初の夜、覚えてる？」
「えぇ。」
「そして、翌朝、オレがシャワー入っていたらきみも入ってきて、朝の支度が出来なくなっちゃったよね。」
「それは、はっきり覚えていないわ。なんだか、そのわたし、子供じみてない？」
「そりゃそうだよ。だから、親父さんに幼稚園児と言われたんだろ。まぁ、スーパー幼稚園児だけどね。幼くて可愛いのに、今まで、何回も大胆で奇抜なアイデアを出してくれたもんね。アメリカではオレに弁護士になれとか。日本では安心～の家を作るとか。きみが言ってくれなかったら、起こらなかったことだよ。」
「一応褒めてくれているのね。」

二人は部屋に戻るとベランダに出てお茶を飲んだ。二人とも飲み終わったところで、麗名が企み顔で言った。
「城ケ崎君、もう一杯飲む？」
そして、空の茶碗を慎吾の前に差し出した。
「あぁ、お願い、先生。でも、お茶が入っていないよ。」
と言うと、慎吾の手も茶碗まで伸び、二人の手が触れ、唇も触れた。
「丁度あの時みたい。わかるでしょ。わたし、もう熱くなってしまって。それに、ホテルっていいわね。わたし、部屋を片付けなくて済むから。こっちに来て。」

麗名は興奮する慎吾の手を取って、ベッドルームに連れて行った。この今や年老いた恋人たちにはホテルの、片付けが不要なほどの簡素さはお誂えだった。

二日目、二人は摩周湖までのワゴンバスツアーに参加した。バスの運転手とガイドは二人とも若い。
「あの二人仲がいいわね。なんだか、わたし達が二人でツアーガイドをしていた時を思い出すわ。」
麗名がその二人に声をかけた。
「あなたたち、仲がいいわね。とても微笑ましいわ。」
「僕たち、恋人同士なんです。でも、今思いついたんだけど、それは今日までにしようと。」
これを聞いた彼女はたじろいだ。
「えぇ！どういうこと？！」
彼氏は急に真剣になって彼女に向かって言った。
「実は、もう少し待とうと思っていたんだけど、もう待ちきれなくなった。れいなさん、僕と結婚してくれるよね？明日からは夫婦になってくれるよね？！」
これを聞いた彼女はもう一度びっくりした様子で言った。
「ほんと！？もちろんよ、しんごさん。その言葉を待っていたの。嬉しい。」
年老いた慎吾と麗名は顔を見合わせて微笑んだ。そして、若いカップルに言った。
「お幸せに。」

夕食後二人は屈斜路湖畔を歩いた。慎吾が話し始めた。
「あの二人も、れいなにしんごだったね。」
「ただの奇遇にしたら随分ね。あの二人、これからどういう人生をたどるのかしら。このまま、この地方に留まるのかしら。それとも、わたし達みたいな冒険をするのかしら。」
「さぁ。どうだろう。これは何かのサインかな。新宿の婆婆がいたら聞いてみたい。ところで、湖畔を歩いていたら、あのチチカカ湖への旅を思い出したよ。あの旅は苦しかった。と同時に希望に満ちていた。半信半疑の希望に。でも、良かった。きみと一緒に過ごせて良かった。それから、あのコスタリカのツアー覚えてる？」
「それがぁ。」
「いいんだよ。その時はね、共同テントの夜だったんだけど、きみがまた熱くなってしまって、二人でテントの外に出ていたんだよ。」
「あら、なんだか、わたしばっかり発情していたみたいに聞こえるけど。」
「これは失礼。当然、オレも興奮してたよ。そして、それも湖畔だった。少し離れたと

ころに、草地があって。丁度こんなあんばいで。草地にシートを敷いて。こうやって、寝たよね。熊とか山猫とかが出るぞぉ、と脅かしたけど、きみはオレが守ってくれるって信じていた。北海道も熊ぐらいいるはずだけど、怖くない？」
「思い出してきたわよ。その時はもうあなたが熊だって分かっていたの。原住民の動物捕獲用の穴に落ちてしまったりしてね。忘れてしまったと思ってるんでしょ。ちゃんと覚えてますよだ。でも、素敵な熊なんで、早く一緒に寝たいな。そうそう、はっきり思い出したわ。サソリ事件で慌ててテントに戻った時に二人のシャツを間違えてしまったわね。」
「長いこと会社でからかわれたよな。」
二人は一瞬そこで一夜を過ごすかと思われたが、すぐにそこを立ち去った。せっかくのホテル泊だからホテルで、ということになったのだ。二人はもうあの時のように若くはなかった。

網走から羽田への帰りの飛行機は巡航高度に達するところだった。麗名が話し始めた。
「あぁ、楽しかった。ゆっくりできたわね。」
「今まで、ずっと忙しかったからなぁ。」
「その間、あなた、いつもわたしを見守ってくれて、ありがとう。城ケ崎君、満点付けてあげるわ。」
「初めてだよね、それ。それも最後の学期かなぁ。きみと初めて過ごしたあの夜、こんな一生を送ることになるなんて全く想像もしなかったよなぁ。でも、オレの気持ちは正しかったんだろうな。まあ、運が良かっただけかもしれないけど。」
「わたしも、あの夜はあなたに夢中で、その時に夢中で、先のことなんか何も考えられなかった。わたしも、あの時の自分の気持ちは正しかったと思う。でも、あなたの言うように運も良かったと思う。世の中多くの恋人たちが分かれて、多くの夫婦たちが離婚してしまうのに。わたし達、それなりに努力したと思うけど、やっぱり、たくさんの人々に助けられたわね。ありがたいわ。ほんとにいろいろあったわね。でも、わたし達、まだ一つしていないことがあるわ。」
「なに？」
「結婚。」
「えっ？」
「わたしはあなたと一緒にいるだけで幸せだったんだけど。言ったでしょ？なんだか、この旅行が新婚旅行みたいな気がしてきて。おじいさんとおばあさんの新婚旅行は変だけどね。そして、新婚旅行の後の結婚はもっと変だけど。でも、ちょっと、結婚してもいいかなって、考えちゃったの。」

「それって、ひょっとして、あの若いれいなとしんごに刺激されたかな？」
「そういうわけじゃないけど、ただなんとなく。」
「スーパー幼稚園児の直感には従わざるを得ないかな。今まで、すべて正しかったものな。それじゃ、家に戻ったら早速、結婚しよう。みんな、びっくりするだろうな。そうだ、オレが、安城慎吾になるよ。憧れの安城先生の姓を名乗れるなんて照れちゃうな。」

丁度その時、機体の後方から異様に大きな衝撃音がして機体が上下左右に激しくきしみながら揺れだした。機内のあちこちから悲鳴が聞こえた。
「あっなったっ、こっわっいっ！」
恐怖のせいとも、激しい振動のせいともつかず、麗名の声は震えていた。シートベルトを締めたまま、二人はしっかりと抱き合った。

すぐに機内アナウンスがあった。
「機長です。お伝えします。機体後部で障害が発生した模様です。帯広空港に緊急着陸をしますので、シートベルトをしっかりと締めて準備してください。」
この時、機長は障害の詳細については触れなかった。パニックを抑えるために言えなかったというのが正しいかもしれない。何しろ、何らかの衝撃で垂直尾翼および水平尾翼が両方とも操作不能になってしまったからだ。機長たちは左右両エンジンの噴射力を微妙に調節したり、主翼のエルロンを操作して必死に機体を帯広空港に向けようとしていた。しかし、その努力は報いられていなかった。機体はどんどん予期しない方に行く。帯広とは反対方向で、飛行機は日高山脈に差し掛かっていた。もう緊急着陸をできるような場所はない。機長は墜落時の爆発と火災を最小限に抑えるためジェット燃料を放出し始めていた。

「わたし達もう助からないかもしれないけど、あなたが抱いてくれて嬉しい。今までも大変な時はたくさんあったけど、いつもあなたが支えてくれた。あなた、最後まで一緒に居てくれたのね。」
「安城麗名さん、結婚しよう。たった今。」
「わたし達、ずいぶん長いことかかったけど、やっと夫婦ね。」
「そうだ。オレ達、ずいぶんかかったけど、やっと夫婦だ。」

その日の夕刻のニュースで、「〇×航空７０５便、網走発羽田行きは機材損傷によるとみられる事故のため日高山脈に墜落、乗客と乗務員１２１人全員について生存の見込みはありません」と報道された。

。

。

。

それから何回桜の季節が訪れただろうか。ある日、安心～の宿に若いカップルが現れた。女性が訪ねた。
「このパンフレットを見て来たのですが、今晩泊めていただけますでしょうか。」
スタッフと思われる女性が答えた。
「どうぞ。どうぞ。こっち来てください。どこから来ましたか？」
カップルにはこの女性が完全に日本人と思えたが、日本語に多少訛りがあると感じた。
「北海道です。観光業界の不振で私たち二人とも働いていた観光会社が先週倒産してしまいました。町には他に産業もなく、新しい土地で仕事を探そうとして出てまいりました。このパンフレットは何年か前に私たちがガイドをさせていただいた老夫婦が落としていったものだと思います。」
「そうですか。大変ですね。安心してください。ここにいる間にきっと新しい仕事が見つかりますよ。」
「ありがとうございます。ほんとに助かります。」
「で、あなたたちの名前は？」
「夫が、いしだて、しんご。私はれいなです。」
「え？」
スタッフが驚いて聞き返した。
「しんごさんに、れいなさん？」
「そうです。なにか？」
そのスタッフは黙って、何かを思い起こしているようだった。
「あなたたちは知らないと思いますが、この施設を作ったカップルが慎吾さんと麗名さんと言いました。とっても仲の良い二人でした。」
「『でした』と言うのは？」
「悲しいですが、二人は６年前の北海道旅行の帰り、飛行機事故で死んでしまいました。施設の人たちが二人の引退を祝ってプレゼントした旅行なのですが、残念です。」
「え？！まさか。あの７月５日の飛行機事故ですか？」
「そうです。７月５日でした。」
二人は急に黙ってしまった。二人にはもう疑いの余地はなかった。今度は、しんごが口を開いた。

「６年前の７月５日、決して忘れることはありません。その日に僕たちは結婚したからです。それは、その前日、このパンフレットを落としたと思われる老夫婦が僕たちに声をかけてくれたのが切っ掛けでした。『仲がいいわね』と声をかけてくれたのです。その瞬間にもう待ちきれなくなって、僕はその老夫婦の目の前でれいなにプロポーズして、すぐ翌日結婚したんです。まさか、あの事故機に乗っていたとは。」
「そうですか。その二人がここを作った慎吾さんと麗名さんに間違いありません。でも、あの二人は最後まで恋人で、一生結婚はしていないのです。」
もちろん、慎吾と麗名が墜落の間際に「結婚」していたということは誰も知る訳はない。

その時、若いしんごとれいなの胸の内ではあの年老いた慎吾と麗名の残した言葉「お幸せに」というのが何回も何回も繰り返されていた。そして、それは新しい活力となって二人に押し寄せていた。

作者注：この小説の時代設定は初めから終わりまで、すべて執筆当時を想定しています。

慎吾と麗名の旅奏曲（２）：東日本編

２０１９年9月1日（若干修正：２０１９年１１月８日）

蓮　文句

１．修学旅行

高校三年の時、慎吾と麗名は同級生だった。それでも二人は全く話をしたこともなく、慎吾は麗名の存在さえ気に留めていない様子だった。そんなある日、慎吾は親と隣町での買い物の帰り、町はずれのコンビニに寄った。慎吾はハッとした。そこのレジで働いていたのは麗名だった。話をしたこともない同級生が一生懸命働いている。なぜかとてもけなげに、と同時にしっかりして見えた。レジに行くのがなんとなく照れ臭く、何も買わずにそこを出た。それから、慎吾は麗名のことを気に掛け始めた。人並外れておとなしい。授業中もほとんど発言しない。休み時間には他の女子と静かに話していることもあったが、一人で窓の外を見ているようなことも多かった。

クラスでは、一学期の間にすでに東京への修学旅行の計画が持ち上がっていた。自由行動の班を決める時、慎吾は麗名が一人だけ話し合いに加わっていないことに気が付いた。後で噂を聞いたところ、麗名の家庭は旅行費用が払えないため修学旅行には行かないということだった。慎吾の家は飛びぬけて裕福ではないが経済的に困ったこともなかったので、この噂はショックであった。

修学旅行の三日前の夜、慎吾は町の中心部まで出かけ、バーに入った。酎ハイをオーダーして飲んでいるところを巡回とみられる警察官に未成年飲酒で補導された。ことの次第は翌日高校に報告され、慎吾は一週間の停学処分を言い渡された。と同時に、この期間にある修学旅行への参加も禁止された。

級友たちが修学旅行に出かけてしまった朝、慎吾は麗名に電話して湖畔を散歩しないかと誘った。
「石館君、散歩に誘ってくれてありがとう。でも、どうしてお酒なんか飲んでいたの？まさかわざと捕まるようなことをしたんじゃないよね？」
「そんなことないよ。たまたまそういう気分だっただけだよ。ところで、同じクラスに居るのに、鹿野内さんとはまだ一回も話したことなかったよね。」
「そうね、私無口だから。石館君はサッカー部で随分活躍していたの知ってたけど。」
「あ～引退するまではね。今は時間が出来た。みんな受験勉強に躍起だけど、僕はなんだか気が抜けたような感じだ。」
「石館君は優秀だからもう大学のこととかしっかり考えているんでしょ？」
「いや、全然。正直言って気が進まない。何を勉強したいとか、何かになりたいというものがまだないんだ。そんな状態で大学に行ってしまっていいのかなと思っている。それより、困ったことに、両親の方が真剣なんだ。」
「そうなの。知らなかった。」

二人は暫く何も話さなかった。突然慎吾が立ち止まり、湖に小石を投げた。その波紋だけが観光シーズンの終った湖面に広がっていった。
「鹿野内さん、気に障ったらごめん。実は、前に街はずれのコンビニに寄った時、レジで働いているのを見たんだけど。」
「そうなの。毎日働いているの。」
「えっ、毎日？大変だね。土日も？」
「そうなの。うち、貧しいから。」
「そんな。詮索するつもりじゃなかったんだけど。」
「いいの。わかっているわ。これは事実だからしかたがないの。修学旅行に行けなかったのもそのせい。それは知っているでしょ？」
「うん。噂で聞いた。で～、鹿野内さんが働いているところを見て、大人と一緒に働いているところを見て、なんだかすごく立派だなって思ったんだ。」
「ただ、お金のためにしていることなのに。私は年取った父と二人暮らしで、父は警備員の仕事。父の前の事業からの借金もあるので、なかなかまともな生活が出来ないの。」
「そうだったのか。大変だなぁ。ねぇ、ポテトチップス持ってきたけど食べる？」
「ありがとう。」
二人は近くのベンチに腰を掛けた。二人はじっと静かな湖面を見つめている。何をするというわけではないが、二人ともそれなりに落ち着いた時間を過ごしているようだった。

午後になって、麗名が言った。
「石館君、この後、またバイトがあるので行かないと。近くのバス停から行くの。今日誘ってくれてありがとう。みんな修学旅行に行ってしまって寂しかった。」
「来てくれてよかった。バス停まで送って行くよ。」
「ありがとう。」
慎吾は麗名がバスに乗る直前に尋ねた。
「鹿野内さん、明日も会ってくれる？」
「えぇ。」
「じゃ、また同じ時間に同じ所で。」
麗名はうなずいた。慎吾は麗名のバスが来るまで待ち、見送った。

次の日、慎吾は少し時間に遅れてきた。
「ごめん。出際にちょっと両親と言い争いがあって。停学になって怒っているんだ。そして毎日ぶらぶらしているとか。大学受験にも差し支えるとか。もう嫌気がさす。」
「ごめんなさい。私に会ってくれるためにそんなこと言われて。それに、どうしても石館君はわざと修学旅行に行かないようにしたと思えて。」
「そんなことないよ。それに、もう修学旅行のことは忘れよう。それより、こうして鹿野内さんと会っていると気が休まる。うちの家族にはない暖かさがある。今日も会えて嬉しいんだ。」
「それだったらいいんだけど。もし昨日石館君が誘ってくれなかったら、私、多分家でずっと泣いていたと思う。私、何の取柄もないのに誘ってくれて、ありがとう。」
「来てくれて、嬉しいよ。」

二人は暫く黙って湖畔を歩いた。今日は少し風が出ている。昼に差し掛かったころ、麗名がバッグから何やら取り出した。
「石館君、よかったら、お昼食べない？おにぎり作ってきたの。」
「ほんと？お腹空いていたんだ。おにぎりいいな。昨日はポテトチップスだけでごめん。」
「当たり前の鮭のおにぎりだけど、いい？」
「鮭、大好きだよ。」
「父の夜食にいつも鮭のおにぎりを用意するの。うちではご馳走なの。父はほとんど毎日夜働いているでしょ。いつも入れ違いで寂しいことが多いの。それに、私の母は私が中学の時に病気で死んでしまったし。」
「そうだったんだ。」

おにぎりを食べ終わると二人はまた歩きだした。また少し風が強くなっている。
「この分だと明日は雨かな。今日のうちにちょっとボートでも乗ろうか。」
「えっ？ボート？」
「うん。そこにあるじゃない。もう観光客もいないし、僕らが少し乗ったって構わないよ。」
麗名はためらっている。それでも、慎吾はさっさとボートの所へ行き、湖岸まで引っ張っていった。
「鹿野内さん、おいでよ。」
麗名は依然ためらっていたが、やっとボートに飛び乗った。慎吾はボートを押しながら、自分も飛び乗った。しばらく慎吾がオールを操り湖上を巡った。誰もいない少しうす暗くなってきた湖面で二人だけ、ボートに乗っている。少し波立つ湖面をすうっと、だが当てもなくさ迷っている。しまいに、慎吾が勢いよく湖岸にこぎ着け、自分が飛び降りた。ボートをさらに引っ張ると麗名の手を取ってボートから降ろした。この時、慎吾は初めて麗名の手に触れた。暖かかった。

この日も麗名のバイトに間に合うように慎吾がバス停まで送って行った。麗名がバスに乗るときに、慎吾がまた尋ねた。
「鹿野内さん、また明日も会ってくれる？」
「えぇ。じゃ、また明日。」

修学旅行の三日目の朝は、雨だった。慎吾は麗名に電話して、町の郷土資料館に行こうと誘った。建物の前で待ち合わせ、二人は中に入った。季節外れのため他には誰も見学者はいない。静かな館内を二人は無言で見て回った。小さな町の資料館なので、そんなに大きくはない。二人は館内をすべて見終わってしまうと、館内の図書室で腰かけた。そこで、麗名の用意してきたおにぎりを食べた。飲食禁止と書いてあったが、他には誰もいなかったし、汚すわけでもないので構わないと思ったようだ。

その後、二人が自動販売機で缶コーヒーを買おうとしたところ、近くの床にコオロギが居た。動きが少し鈍っているように見えた。麗名はコオロギをそっと掴むと、窓を開けて外に出してやった。慎吾が思わず口に出した。
「優しいね。」
「うちはボロやだから、いろいろな虫たちが入ってくるの。いつも私が外に返してあげる役なの。」
外は相変わらず雨だった。麗名がぽつんと言った。
「今日は一日雨ね。そして、その内雪になるわね。冬は少し悲しい。母が死んだ季節だ

から。」
「そうだったのか。僕にはわからないけど、その寂しさは消えないんだろうね。大事な人だもんね。どうしたらいいんだろう。それに比べ、うちの両親は。文句たらたら。」
「それも気の毒ね。どうしたらいいのかしら。」

午後になって資料館を出たとき、慎吾が傘を広げ麗名の上にさした。そして、自分も一緒に入った。麗名も自分の傘を持ってはいたが、それは使わなかった。雨が降り、少し肌寒いその日、二人は寄り添って歩いた。水たまりを避けようとして重心がずれたりするとお互いの体に強く触れたりした。慎吾は麗名の肩を抱きたいと思った。

バス停まで行って、いつものバスを待っていたが、予定時刻に来なかった。慎吾は雨のせいかなと思った。そして、やっと遠くにバスが見えたとき、慎吾は麗名の方を向き、麗名の額にそっと唇をつけた。麗名はちょっと恥じらいでいるように見えた。
「鹿野内さん、また会ってくれる？電話してもいい？」
「えぇ。またね。」
麗名はバスの中から小さく手を振った。

２．けなげな麗名の悲壮曲

これは麗名が子供の頃の話です。

麗名が小学校三年生の時のことだ。休み時間が終わって教室に戻る直前に、隣のクラスの男の子に声をかけられた。その子は他のクラスでも知られている人気者で、ここでは人貴君と呼んでおこう。人貴君は麗名に、学校が終わってから二人で遊ばないかと誘った。麗名はすぐに承知して近くの公園で待ち合わせた。麗名は人貴君には憧れていたので、凄く嬉しかった。学校が終わって、人貴君と公園で会った。人貴君も嬉しそうにしている。二人は両手をつなぎ、そのまま、つないだ手の所を中心にぐるぐると回転した。どうしてそうなったのか分からないが、小学三年生の二人にはそれが相手への好感の表れであったのだろう。

二人の気持ちが高まると、回転スピードは上がり、気が付いた時は遠心力が二人の手を握る力より強くなっていた。二人の手は離れ、麗名は後ろに転んでしまった。擦り傷の痛さとショックで麗名は泣き出した。その時、人貴君は何もできずにたたずんでいた。どうしていいかわからずに麗名は泣きながら家に帰ってしまった。それからは、二人は一度も話したことはない。

これは、麗名が四年生の時のことだ。学級担任は新卒の男の先生だった。この先生は教育熱心で、どうしたら子供たちが精神的に成長できるかということを真剣に考えていた。先生の最初に試したことは、座席を班編成にすることであった。班の中で、共同学習・作業をすることによって、集団生活の基本を身につけて欲しいという意図である。３５人ほどのクラスに５人ずつ、７班作った。麗名は3班であった。同じ班に、クラスでは一番成績の良い男子がいた。この子供のことは清石君と呼んでおこう。３班には男子が２人、女子３が人居た。実は、清石君は他の班に少し気に入った女の子がいた。しかし、日々の活動は班の中でするので、班の中の女の子に注意を向けてきた。その三人のうちでは、麗名が一番気に入ったと見え、毎日、麗名にいろいろと話しかける。麗名はうれしく思い、清石君のことを好いた。そして、麗名は清石君も麗名のことを好きだと思っていたかもしれない。

そんな状態がしばらく続いていたころ、このクラスの中で、ちょっとした出来事が起こりつつあった。クラスの中の男女、７～８人くらいが秘密のグループを作ったのだ。どういう訳か、この中に麗名が入っていた。おそらく、麗名の友達が引きずり込んだのであろう。ところが、これもなぜか、清石君は入っていなかった。このグループは、一応秘密ではあったが、清石君はある友達からそのグループのことを聞いた。その友達の言うことには、グループの集まりで麗名が清石君のことが好きだと言ったらしい。清石君は麗名のその発言よりも、自分がグループに入っていないことが無性に苛立たしかった。腹立たしくもあった。どうして、自分が誘われなかったのか。そして、麗名がそのグループに入っていることさえ気にくわなかった。

この怒りが清石君に予想外の行動をさせた。麗名にとても卑劣な手紙を書いたのだ。内容は、清石君は麗名のことを好きではない。好きな人は他に居ると。そして、この手紙を麗名の机の中にそっと入れた。それからは、清石君は麗名のことを無視した。麗名は事の次第がまったくわからず、どうして、急に清石君が麗名に冷たくなってしまったのか嘆いた。その日から、麗名の表情は暗くなった。麗名はもうあまり話さなくなった。そして、誰にもこのことは話さなかった。母親は優しい人で、麗名のことをいつも思ってくれていたが、その母親にさえも話さなかった。母親はどうして麗名が急に暗くなってしまったのか分からなかったが、追求することはしなかった。黙って、麗名の好きなクッキーを焼いてくれた。

それからしばらく経った。麗名が中学二年の時、麗名は仲の良い女の友達と放課後を過ごすことが多かった。徐々に気が付いたのだが、同じ中学の男子二人連れがよく麗名たちのことを見ている。そして、ある日、麗名の下駄箱に小さな封筒に入った手紙があることに気が付いた。それには、あの二人連れのうちの一人であると書いてある。この男子のことは、手賀見君と呼んでおこう。手賀見君は一年生で、麗名と文通したいと書いてあった。麗名は手賀見君のことは全く知らず、少しためらったが、きりっとしたその子に興味もあって、返事を書いた。

それからはほぼ毎日のように、二人は手紙を交換した。麗名は少しずつ手賀見君のことが分かってくる。どうやら、麗名に強い興味を持っている。麗名のどこが気に入ったのかはよくわからない。それでも、二人は手紙にいろいろなことを書き合った。中学の陸上競技大会の時、手賀見君は走り幅跳びに出場して学年で一位だった。麗名と女友達はそれを見ていて思わず。「きゃー」と言って手を叩いていた。ところが、ある時から麗名は手紙をパッタリ受け取らなくなる。どうしたのか手紙で尋ねるが、もう返事がない。バレンタインデーの後暫くして分かったことだが手賀見君は彼と同学年の女子からチョ

コレートをもらい、付き合いだしたということだった。麗名と手賀見君とは付き合っていたと言う訳ではないが、麗名は寂しかった。また家で寂しい顔をしていると、母は気を使ってくれた。何も言わずに、優しく対応してくれた。だが、この優しい母は麗名が中学を卒業する前に病気で亡くなってしまった。麗名は今までにも増しておとなしくなった。この寂しさを乗り超えられる日が来るのだろうかと不安に思っていた。

３．高校卒業後

修学旅行は終わり、慎吾も含め皆、学校に戻った。その日、学校では、慎吾と麗名は相変わらず話もしなかった。それでも、二人の視線が何度か合った。そして、学校が終った時、慎吾はそっと麗名の所へ行って呟いた。
「一緒に帰ってもいい？」
麗名は少しはにかんでいるようだった。他の学生の視線を気にしているようでもあった。そして、何も言わずに首を少し縦に振った。二人はそそくさと校門を後にした。
「鹿野内さん、まずかったかな？」
「ううん。嬉しかったんだけど、ちょっと照れちゃって。だって、私たちだけ修学旅行に行かなくて、そしたら、急に一緒に帰るようになってるなんて。」
「そうだね。でも、僕にはもう一緒に帰るのが自然のような気がしてきたんだけど。」
「それは、私も。私、もう気にならない。」
「じゃ、よかった。付き合ってくれるよね。」
「えぇ。」

それからは、二人は毎日一緒に学校を出た。麗名はバイトがあるので、二人でバス停まで行って、慎吾はそこで見送った。時には慎吾は学校まで自転車で来て、麗名を後ろに乗せてペダルをこいだ。麗名はしっかりと慎吾につかまっている。その姿は誰の目にも恋人同士と映ったろう。

毎日の放課後のひと時の他に、二人は休日の昼間も町のあちこちでデートを重ねた。だんだん寒くなる中、二人の寄り添う度合いも増していくようだった。
「慎吾さん、今だから言うけど、私、修学旅行、行けなくて良かった。」
「僕もそう思う。いや、僕たち、あの三日間、二人だけの修学旅行だったんじゃないかな。おかげで、麗名さんと知り合えて。」
そして、いつも別れるときに二人は抱き合って口をつけるようになっていた。この頃までには二人とも周りの目は気にならなかった。

ある日、麗名がバイトがないと言う。コンビニの改装工事で３日間休みになったのだそうだ。その時、慎吾は初めて麗名を家まで送って行った。着いた時、麗名は少し恥ずかしく思っているようだった。それは、麗名の家がバラック寸前の状態だったからだろう。慎吾も少し驚いた様子だ。

「慎吾さん、凄い家でしょ。でも、私たち直すお金がないの。」
「そんなこと関係ないよ。麗名さんが好きで付き合ってもらっているんだ。麗名さんの家と付き合っているわけじゃないよ。」
「そうよね。少し気が楽になったわ。」

こうして、約半年が過ぎた。寒い冬の日も二人は外でデートを重ねた。寒さを凌ぐためにいつも寄り添って歩いた。時々雪の深いところを歩くときは慎吾がしっかりと麗名の手を取って、バランスが崩れるとしっかりと体全体で支えた。慎吾と麗名の絆が深くなるにつれて、逆に慎吾と両親の隔たりはますます広がっていった。両親には慎吾が大学受験のことを無視しているのが耐えられなかった。もし大学に行かないなら家を出ていけとさえ言っていた。これには慎吾も閉口したが、それでも形式のためだけに大学に行こうとは考えていなかった。

慎吾と麗名が高校を卒業した時、二人にははっきりした将来の計画がなかった。初めは、平日の昼間に二人の時間が持てることで幸せであったが、いつまでもそうしているわけにはいかない。麗名が話し始める
「私たち高校を卒業して、一緒に過ごせる時間が増えて嬉しい。だけど、これからは何かしないと。仕事見つけないと。」
「そうだね。うちでは両親はカンカンで、今にも僕のことを追い出さんとしている。もし追い出されたら、麗名の所に泊めてもらえる？」
「そうしてあげたいけど、うちは狭いし汚いし。父と一緒だし。」
「そういえば、まだお父さんには挨拶もしていないしな。なんとかいい考えはないかな。何か一緒に出来ることはないかな？」

残念ながら、その小さな町には高卒の慎吾と麗名が一緒に出来るような仕事は多くはかった。そんな中、やっと見つけた一つの可能性は、観光会社の見習いであった。麗名はガイド、慎吾は運転手として一緒に働けるのではないかということだ。ただし、まず、慎吾が運転免許を取らなければならなかった。今の家庭事情では、慎吾は両親に免許を取りたいから費用を出してくれとは言えない。そこで、二人で考えたのは、麗名の父が警備をしている会社の社用車を夜間無断で借用してそこの駐車場で練習するという案であった。当然まっとうな計画ではないが、誰にも迷惑をかけるわけではないので問題ないのではと思ったのだ。

ある夜、麗名のバイトが終った後に慎吾と麗名は麗名の父の職場を訪ねた。慎吾は麗名の父に挨拶した。

「麗名さんのお父さん、初めまして。僕は石館慎吾と言います。去年の秋から麗名さんとお付き合いしています。実は、麗名さんと僕は町の観光会社で一緒に働きたいと考えているのですが、僕には運転免許が必要なのです。そこで、麗名さんと相談した結果なのですが。ここの社用車を借用して、言いずらいですが、無断で借用して夜間にこの駐車場で練習できないものでしょうか。お父さんは鍵を持っていると聞きました。」
麗名の父は少なからず驚いた様子であった。
「慎吾さん、用件はわかりました。ただし、それは普通のやり方ではないですな。どうして普通のやり方ではできないのですか？」
「実は、僕は両親とうまくいっていないのです。両親は僕が大学を受験しなかったので、勘当寸前なのです。僕は麗名さんと付き合う前から無意味に大学に行くことは避けたいと思っていました。そして、今は、麗名さんと一緒に働くことが僕の第一の希望なんです。麗名さんは僕の家族にはない優しさを持っています。一緒に働きたいのです。そのためには、今、第一に必要なのは運転免許なんです。」
「そうですか、慎吾さんの気持ちはわかりました。私の娘をそのように思ってくれてうれしくもあります。ただし、今、二人の頼んでいることは私の就業規則に反するので、発覚すれば私は職を失う可能性もあります。慎吾さん、もしそうなったらあなたはどうしますか？」
これには慎吾は即答できなかった。愛おしい人の父親が自分の責任で職を失うかもしれないということは問題外であった。
「お父さん、わかりました。もう少し他の方法を考えてみます。」

ところが、数週間後に、状況は急変した。麗名の父が一か月後に解雇されるというのだ。そのため、この際、慎吾と麗名の初めの計画通り、社用車を使って運転の練習をしても構わないというのだ。慎吾は麗名の父が職を失うのは気の毒に思ったが、この機に運転免許を取るしかないと判断した。そこで、一か月間、夜の駐車場で運転の練習をした。麗名は縦列駐車の時等、手助けをした。麗名の父も時折アドバイスをしてくれた。慎吾は麗名の父のためにも免許を取らなければと思っていた。

筆記試験は昼間に十分準備できたので、慎吾はすぐに合格した。そして、二回目の挑戦で仮免許を取得した。その頃までには、麗名の父は職を失っていたが、知り合いの自動車修理工から修理中の車を何回も借りてくれた。その車に麗名の父が同乗してくれ、路上練習をした。そして、約一か月後にすべて終了して免許を得ることが出来た。

その後すぐに、慎吾と麗名は見習いとしてその観光会社に雇用された。ただし、慎吾は普通免許のみなため観光バスは運転できない。そこで、この会社は地域の複数のホテル

と契約し、ホテル遂行の無料ワゴンバスツアーという形でホテルから直接支払いを受ける仕組みを設定した。観光用のワゴンバスに初心者マークがついているというのもおかしな話だが、慎吾はなるべく目立たないように工夫していた。こうして、慎吾がワゴンバスを運転し、麗名がガイドをする状況にこぎつけた。実は、麗名は近隣の有名な観光地にさえ全く行ったことがなかったので、ガイドブックを読んだり、先輩から教わったりしなければならなかった。観光で一番良く行ったのは摩周湖までの半日ツアーだった。麗名が初めて摩周湖を見たときは、観光客よりも感激していたようだった。当然、観光客はガイドが初めてそこに来たとは思うまい。残念ながら、仕事は毎日あるわけではなく、二人の収入は不安定であった。それでも、麗名のコンビニの仕事よりはマシで、丁度、麗名の父の元の収入はカバーできるようだった。

ある日、二人が定番の摩周湖ツアーに行った時、参加者の中にたいへん仲の良い老夫婦がいた。ツアーの最後にこの老夫婦が慎吾と麗名の様子を見て、
「あなたたち、仲がいいわね。とても微笑ましいわ。」
と言った。それを聞いた慎吾は思わず返答した。
「僕たち、恋人同士なんです。でも、今思いついたんだけど、それは今日までにしようと。」
これを聞いた麗名はたじろいだ。
「えぇ！どういうこと？！」
慎吾は急に真剣になって麗名に向かって言った。
「実は、もう少し待とうと思っていたんだけど、もう待ちきれなくなった。麗名さん、僕と結婚してくれるよね？明日からは夫婦になってくれるよね？！」
これを聞いた麗名はもう一度びっくりした様子で言った。
「ほんと！？もちろんよ、慎吾さん。その言葉を待っていたの。嬉しい。」
老夫婦は顔を見合わせて微笑んだ。そして、慎吾と麗名に言った。
「お幸せに。」

その翌日はたまたま仕事がなかったので、慎吾と麗名は町役場へ結婚の届出をしに行った。ただ一つ、見逃したことは、二人とも未成年で、両親の承諾がいるということだった。慎吾は自分の両親は絶対承諾してくれないと悟った。そこで、麗名にこう言った。
「麗名さん、年齢のことを見逃してしまってすまない。でも、法律なんかどうでもいいよね。僕は麗名さんと結婚したいんだ。非公式にでも結婚してくれる？高校時代の友達何人かに非公式の証人になってもらおうよ。あと２年もすれば僕らも成人だ。親の承諾なしで法律上の夫婦になれる。兎に角、今日を僕たちの結婚の日にしよう。」
「私は構わない。それじゃ、私たち今日で事実上の夫婦ね。法律なんて構わない。」

「ただぁ。」
「何？」
突然、慎吾が少し変な表情をしている。
「ちょっと、違う話なんだけど、今、急に心臓がどきどきした。」
「私は、少しお腹が絞られるような感じがした。」
「どうしたのかな。二人同時に。」
二人とも落ち着いてから慎吾が続けた。
「え〜と、さっき言おうとしてたことなんだけど。ただ一つ、厄介なのはうちの両親だ。このことを言ったら、確実に勘当だ。僕はもう家にはいられない。麗名の所にいけないかな？」
「前に、無理だって言ったんだけど、実は、私もそれ考えてたの。今は、それしかないかも。私の父は大丈夫。いつも私に苦労させていると言って、私のことを気の毒に思っているから。私が結婚して幸せになるのに反対するわけがない。そして、父はほとんど毎日夜の仕事でいない。私たちとは入れ替わりになる。なんとかなる気がするの。」
「ありがとう。すぐに荷物をまとめて麗名の家に行くよ。」
「うちで待ってるね。」

慎吾が麗名の家に着いた時には麗名の父親はいなかった。
「私たちのこと、父が仕事に出る前に、急いで話したの。少しびっくりしていたようだけど、私の好きなようにしていいって。」
「それは良かった。助かる。」
「さぁ、夕飯作ってあるから食べて。」
「嬉しいな。ほんとに夫婦の生活だね。」
「嘘みたいね。たぶん、他の人には、ままごとみたいって言われるかもしれないけど。」
「美味しいね。みんな自分で作ったの？」
「そう。うちはお金がないから安い材料を買って工夫しないとならないの。これみんな母から教わった料理なの。」
「凄いね。」

夕食の後、お茶を飲んでから、片付けようとした時に、慎吾も手伝おうとしたのだが、足がテーブルの脚につまずき、茶碗を落として割ってしまった。麗名は一瞬慌てる。
「あっ！困った。これ大事なお茶碗だったの。」
「ごめん。慌ててしまって。」
慎吾はがっかりしている麗名の肩を抱いて慰めた。

「ほんとにごめん。いつか償うよ。残念だけど、物はみんな、いずれ壊れてしまう。ほんとに残念だけど。」
「そうね。仕方ない。」
二人は粉々になった茶碗の破片を片付け始めた。最後に二人で床を吹いているとき、ぶつかってしまい、慎吾が麗名に抱き着いた。
「麗名。僕たち夫婦になったね。二人だけの修学旅行の時から一緒に居るのが楽しくて、最近はもう待ち遠しかった。あの老夫婦に声をかけられてもう我慢が出来なかった。」
「そうね。あの老夫婦どうしているかしら。それから、なんだか、私、熱くなってしまって。ねぇ、こっちに来て。」
麗名は慎吾を自分の部屋に連れて行った。それは、部屋というには小さすぎるぐらいのスペースだった。麗名は押入れから寝具を一式だして床に敷いた。
「ごめんなさい。一組しかないの。」
「それ以上いらないよ。」
その言葉は正しかった。次の日の朝、慎吾は麗名を起こすのに苦労した。

４．慎吾の父の憤怒曲

これは慎吾の父の言葉です。

慎吾には全くもって憤慨している。両親がせっかく大学進学を奨励、援助しようというのに、その好意を無視し、踏みにじっている。いつからこうなってしまったのか。確実に、あの貧困家庭の娘と付き合いだしてからだ。それまでは、こんなことはなかったのにだ。

慎吾は成績も良かったし、サッカー部でも活躍していた。誰から見ても優等生と言えるだろう。親の言うこともよく聞くし、家の手伝いもしていた。事の次第が発覚したのはあの停学事件のころだろう。なぜ、慎吾が急に町の飲み屋で補導されたのか。後で聞いた話だと、どうも自分で警察署に通報したらしい。どうやら、わざと停学になり、修学旅行に行けないようにしたと思われる。そして、その三日間毎日ほとんど家を空けて、あの娘とデートしていたようだ。それからというもの、今までの慎吾はもうどこかへ行ってしまった。

我が家は経済的には恵まれている方だろう。私は不動産業でそれなりに頑張っているし、妻は家でしっかり家事をしている。何不自由ない生活が出来る。小さいころから慎吾が欲しがるおもちゃは皆買ってやったし、行きたいところへは大体連れて行ってやった。まぁ、北海道の田舎だから、簡単に都会へは出れないが。今まで、慎吾は特に文句を言うでもなかった。

我々としては、慎吾に我々よりさらに良い生活をして欲しい。それには、良い成績を取って、良い大学に進み、良い仕事について欲しい。そのためには、借金をしてでも協力しようという気構えだ。今が一番重要な時だ。それなのに、慎吾ときたら、大学で何を学んでよいかわからないとか、大学に行く意味がわからないとか、大学に行く必要がないとか、勝手なことを言っている。我々はもうすでに道内外の有名大学から入試情報を取り寄せて検討し始めていたというのに、本人が全く乗り気でない。我々の努力を無視さえしている。こんなことだったら、家を出て行けと言ってやった。これは本気だ。

そして、一番わからないのは、あの娘のことだ。あの娘の年取った父親は夜の警備員の仕事をしているようだ。噂では、前の事業に失敗している。そして、猫の額ほどの土地にある掘っ立て小屋に住んでいる。何を好んで、そんな娘と付き合わなければいけないのか。

そんな中で、一つ気になったことがある。我々、夫婦間の仲のことだ。若い時、私と妻は熱烈に愛し合っていた。そして、私たちは双方の両親の反対を振り切って結婚した。反対の表向きの理由は、私たちが若すぎるということだった。だが、私は知っていた。私の両親の真の理由は、私の妻が明らかにアイヌの出身だったからだ。その後、私たちは一生懸命に働き、今の生活を築き上げた。ところが、慎吾が生まれてしばらくしてから、夫婦仲が疎遠になった。これは子供の出来た夫婦によくあることかもしれない。私は相変わらず仕事が忙しかったこともあるが、一番の原因は、妻が子供優先の生活になって、私のことを構わなくなったことだろう。これも、当たり前のことかもしれない。母親は、子供を育てなくてはならない。しかし、母親は妻でもある。その妻が妻としての務めを十分できなかったらどうなるか。私は食事と睡眠をとるために家に帰るが、家でのそれ以上の意味がなくなってきた。

このことは、何回も妻に言ったことがある。妻は百も承知だ。それでも、やはり、子供のことで頭が一杯なのだ。慎吾が中学、高校と進むにつれて、それまでのような母親の用事は段々不要になってくる。すると今度は、妻は慎吾の進学について真剣になってきた。この点では妻と私は全く合意するのだ。ただ、妻は妻で自分の好きなように話を展開したがる。私は仕事で忙しいので、どうしても、妻に任せることが多くなる。

慎吾はそんな我々の状態をどう思っているのか。そんなことは聞けないし、率直な意見など聞きたくもない。ただ、直感的に、夫婦間の疎遠な状態が慎吾の態度に影響を及ぼしているかもしれないと思うのだ。

もう一点は、私たちが親戚付き合いをしないということも関係しているかもしれない。ことの始まりは、私たちの結婚が両家の反対を押し切ってなされたことだ。自然と、親戚付き合いがなくなった。慎吾の友達が正月や、お盆に親戚に会うところ、慎吾は私たちとだけ過ごした。また、親戚からたくさんお年玉を貰うところ、慎吾は比較的多額を私たちからもらうだけだった。前に、慎吾から、私たちに親戚はいないのかと聞かれた時、あまり良い答えが思い浮かばなかったため、お茶を濁したことがある。それが、どれだけ慎吾に影響したかはわからない。今、慎吾が何を知っているのかもはっきりとはわからない。

だが、いずれにしても、重要なことは我々、両親が慎吾の事を思っているということだ。慎吾に良い生活をして欲しいと思っていることだ。それをわからずに、両親の好意を踏みにじるのは、親不孝も甚だしい。これは、許されるべきことではない。

５．旅立ち

慎吾と麗名の仕事は相変わらず不安定だった。特に冬の間、極寒の北海道を好む愛好家の他にはなかなか観光客が来ない。二人の収入は減り、またコンビニでバイトをしなければならないこともあった。ただ一つの違いは、時には麗名と同じシフトに慎吾も勤務することがあった。出来るだけ一緒に居たい二人にはお誂えだった。

そして、慎吾が２１歳になった冬、暇な時間と会社の補助を得て、念願の大型二種免許を取得することが出来た。これで、慎吾もやっと一人前の観光バス運転手となり、二人の仕事も増えた。やっと、状況は好転した。二人は多少なりとも貯金する余裕も出てきた。

ところが、それから２年と少し経った頃、大きな変化が生じた。麗名の父親が急死したのだ。心臓疾患だった。麗名はもう親族が全くいなくなってしまったと観念した。こんな時には、慎吾だけが心の支えだった。そして、数週間後に、もう一つ予想もしていなかったことが起こった。麗名のところに父の妹と名乗る人が現れる。そういわれれば、確かに父に似ているところがある。そして、この妹の言うことには父が遺言を残しており、全財産をこの妹に譲るというのだ。慎吾と麗名には納得がいかなかった。まず、全財産というのは現実的には、このバラック寸前の家のことだ。どうして、大して価値のない不動産を父と深い交流があったとは思えないこの人が取り上げなければならないのか。この妹はまず、家の鍵をすべて取り上げておいて、今度は慈悲深いそぶりをして、慎吾と麗名は土地を売るまでそのまま滞在しても良いと言い、一つだけ鍵を渡してくれた。慎吾と麗名はすぐに自分たちのアパートを見つけなければと思った。

そして、それからそんなに経たないうちに、今度は、二人は会社の上司から会社が倒産したと伝えられた。観光業界の不振が大きく降りかかっていたのだ。二人は落胆したが、それまでも難関を乗り切ってきた経験から、絶望はしてはいなかった。ただ、麗名は父を失い、慎吾も両親と絶縁状態である。二人とも事実上この地での親密な親族関係はなくなっていた。そして、会社の倒産を予期していなかったせいもあり、麗名の父の借金の返済と葬儀のために二人の貯金を完全に使い果たしてしまったところだったのだ。

この時、慎吾と麗名が思い出したものがあった。６年ほど前の摩周湖ワゴンバス・ツアーに参加した老夫婦が落としていったと思われるパンフレットである。そこには、埼玉県にある「安心～の宿」の事が書かれていた。二人は不安定な生活を体験してきたの

で、無料で滞在できる施設ということに気を留めていた。この際、そこに行って新しい生活を始めようと決心した。

二人の今の経済状況を考えると、航空券を二人分買うお金はない。北海道の奥地から埼玉まで行く陸路も安いとは思えなかったが、それしかないと思った。二人は一つずつ、身の回りの物をバッグに詰めた。そして、翌日の早朝、慎吾が目覚ましで起き、麗名を起こした。
「麗名、朝だよ。出発の日だよ。」
「～。」
あまり反応がない。
「麗名。列車に遅れるよ。」
「ねむ～。」
「参ったなぁ。朝起きられないのだけは困りもんだな。麗名。」
麗名は両手をぬ～っと伸ばしては引っ込めた。
「ちょっと。麗名。」
慎吾は麗名の布団をはがして、体を揺さぶる。それからもうしばらく経って、やっと麗名が起き上がった。髪の毛はめちゃめちゃ。顔にはよだれの跡がある。あまりにぼーっとしている。
「麗名。出発の朝だよ。埼玉まで行くんだろ。」
「わかりました。あっ。早くおにぎり作らないと。」
麗名は慌てて起き上がり、台所へ行った。

二人はあたふたと用意をして家を出た。麗名はあのバラック寸前の家の方を一回振り向き、少し悲しそうな顔をした。慎吾はそっと麗名の肩を抱く。町の駅まで歩き、朝一番の普通列車で釧路に向かった。当面、あるいは一生この地を踏むことはないだろう。一緒に歩いた屈斜路湖畔、一緒に自転車に乗った高校からの道、一緒にガイドをした摩周湖等の思い出がよぎる。二人は黙って窓からの景色を眺めていた。朝食は列車の中で取った。鮭のおにぎりだ。釧路についた時、麗名は少し興奮していた。麗名の見る初めての都市である。二人はバスターミナルまで歩き、札幌までのバスに乗った。網走平野を超え、日高山脈を越えた。山道は険しく、バスは左右に大きく揺れた。途中、山火事かと思われるような煙が見えた。二人は事故でなければいいがと思った。昼食は、やはり、麗名の作った鮭のおにぎりだった。

札幌についた時、麗名はもっと興奮している。バスから見える市内の景色を一つも逃すまいとしているようだった。この人が観光ガイドをしていたようには見えなかった。そ

れに対して、慎吾は家族で道内一周の自動車旅行をしたこともあるし、他にも何回か札幌には来ている。本土に行ったこともある。札幌のバスターミナルでは少し時間があったので、喫茶店に入り、コーヒーを飲み、クッキーを食べた。麗名は大喜びだった。慎吾にはこれがたいそう愛おしく思えた。この麗名には、もう、あの意地の悪い叔母しか親族はいない。札幌からまたバスに乗り、函館についた時はもう夜であった。バスターミナルで簡単な夕食を取り、タクシーでフェリー乗り場まで向かった。

青森までは深夜フェリーに乗った。お座敷のような仮眠スペースで、二人は寄り添って横になった。多少波が気にはなったが、かなり疲れていたので眠ってしまった。到着後、青森側のフェリー乗り場からタクシーで青森駅まで行った。そこで、朝食のサンドイッチを買って、すぐに仙台行きのバスに乗りこんだ。二人はまだ寝足りなかったようで、すぐさま寝入ってしまった。昼過ぎには、仙台に着いた。予想はしていたことだが、この時点で、二人は残り予算があまりないことに気が付いた。しかし、もうここまで来ている。何とかして安心～の宿にたどり着きたい。そこで、街道沿いまで歩いて、ヒッチハイクをしてみようということになった。

「埼玉方面」と書いた札を持って、じっと待った。だた、男女二人連れのせいか、なかなか車が止まってくれない。そこで、慎吾が「大トラ免許有、運転します」と書いた札も作り、二人で一つずつ持った。すると、しばらくして、一台のトラックが止まった。会津若松に行くので、郡山までなら乗せても良いということだった。慎吾と麗名はトラックの運転手と三人でベンチシートに腰かけ、出発した。高速に入ったところで、運転手が尋ねた。
「免許あるって書いてあったけど、少し運転してくれる？運転し通しで疲れてるんで。それに眠いし。」
慎吾が答えた。
「わかりました。これが、免許証です。」
「ほぉ。２種免かい。大したもんだね。えぇ～、慎吾さんね。じゃ、お願い。郡山の出口降りる前のサービス・エリアまで。そこで、起こしてくれる？後ろで寝ているから。」
というと、座席の後ろの簡易ベッドに入り、一分も経たないうちに大いびきをかき始めた。慎吾と麗名は顔を見合わせて笑いをこらえていた。麗名がそぉっと言った。
「よかったね。」
「あぁ、よかった。」

約束のサービス・エリアに着いて、運転手を起こすと、運転手は二人に缶コーヒーを２本くれた。お礼だという。二人も運転手に礼を言って別れた。二人はサービス・エリアでトイレ休憩をして、また次の車を探し始めた。前に使った札２枚を持って、サービス・エリアの中をうろついた。すると、そこを通ったトラックが止まり、来いと指図をしている。トラックの横には大きな竜の絵が描いてある。行ってみると、東京まで行く途中なので、大宮近辺まで乗せてくれるという。運転してくれるのは助かるが、今は大丈夫だという。

二人が車に乗ると、運転手は話しかけてきた。
「二人でヒッチハイクは結構大変じゃない？」
「それは実感しました。それで、トラックを運転するという札も作ったんですよ。」
「えっ。じゃ、あれは嘘なの？」
「いや、いや。ほんとです。僕は北海道で観光バスの運転手だったんです。ついこの間会社が倒産してしまったんです。妻も同じ会社にガイドとして働いていたんで、二人とも同時に失業になってしまって。住んでいた家も親戚に取り上げられてしまっていたので、これから埼玉県のある施設に行くところなのです。」
「それは、気の毒だな。ところで、オレは、大介。よろしく。」
「僕は、慎吾、妻は、麗名です。乗せてくれてありがとうございます。」
「それは、いいんだよ。いつも一人で、退屈だし。少しでも人の助けになるんだったら、大歓迎だ。それに、同業者だしな。大型は楽じゃないよな。」
「そうですね。免許取るのは苦労しました。会社が補助してくれたのでなんとか出来たようなものです。それより、普通免許を取るときは、もっと苦労しました。親に勘当されている最中で、教習所にも行けず、妻の父の助けを借りて飛び込みで取ったんです。」
「努力家だね。報われるよ。他の大型の運ちゃんともよく話をするけど、みんな努力家だよね。訳も分からずに普通の道を行くことが出来ない奴らだよね。まぁ、オレの場合はそんな偉そうなもんじゃないが。」
「大介さんはどうして運転してるんですか？」
「オレは、事情があって、高校中退。最初は寿司屋の住み込みの見習い。それなりに良いとこだった。面倒見のいい親爺だった。だけど、数年のうちに死んでしまった。そしたら、今度はオレの爺さんが死にそうになり、しばらくその面倒を見ていた。その間に、介護の仕事に興味を持って、資格も取った。爺さんが亡くなってからは暫く介護の仕事をしていたんだ。そして、やはり介護の仕事をしている彼女も見つけた。知ってるかどうか、介護の仕事はキツイ割に金が悪い。食っていくのさえ大変なのに彼女と付き合う

余裕もない。それで、もっと金がいい大トラをやろうと思ったのさ。ところが、大型免許合宿の最中に彼女に逃げられた。悲しかったな。それからは、ずっとトラックさ。今度は、金はいいが女に巡り合えるチャンスが少ない。すべてうまくはいかないもんだ。」
「そうだったんですか。」
「それから、慎吾さん、奥さんを大事そうに連れて歩いているのを見てうらやましかったよ。奥さん、良い旦那さんで良かったね。」
麗名は恥ずかしそうに下を向いている。
「それに、良い奥さんだ。しっかり旦那さんにくっついている。いい夫婦だなぁ。どうやって、そんなにぴったりの相手を見つけられるのかな。教えてほしいよ。まぁ、気にしないでくれ。独り者のボヤキだ。そこにお茶があるから、勝手に飲んで。それから、その辺に何かしらスナックがあるはずだ。」
二人は空腹だったので、早速スナックをむしゃむしゃ食べだした。大介はそれを横目で見ていたが、急に言い出した。
「なんだか、急に腹が減ってきた。次のサービス・エリアで一休みしようか。」

サービス・エリアで止まると、大介は二人にご馳走すると言いだした。二人は丁寧にお礼を言って一品ずつ注文した。大介は食べすぎると太るからと言って、結局コーヒーだけ注文した。食べ終わると、三人はトラックに戻った。
「慎吾さん、少し二種免の腕前を見せていただけるかな？」
「まだまだ、未熟ですよ。でも、大介さんが少しでも休めるんだったら、運転させてください。」
慎吾が運転し始めると、大介がコメントした。
「ほぉ、やっぱりバスの運ちゃんだね。大トラ以上に前に出る感じだし、ハンドルの回し方が粋だね。」
「この車、なぜか不思議な感じがしますね。ちょっと、飛んでるみたいな気分になる。」

それからは、あっという間に大宮近辺まで来た。高速を降りる前に、運転は大介に変わった。その後、大宮駅まで寄り道をして、そこで二人を降ろしてくれた。その時、大介は紙に電話番号を書いた。
「これはうちの会社だ。いつでも運転手を募集している。言い忘れたが、会社自体は埼玉の南のはじにある。もし、大トラをやろうと思ったら電話してくれ。大介から聞いたと言えば皆すぐわかる。じゃ、お達者で。」
「大介さん、どうもありがとうございました。」

二人は大介のトラックが完全に見えなくなるまで見送った。
「慎吾、大介さんて、良い人ね。なんだか、神様みたい。」
「そうだな。ほんとにありがたいな。」

そろそろ日も暮れてきた。二人は、今日中に目的地まで行くのは無理だと察した。だが、二人でカプセルホテルに泊まるだけの予算もないし、宿泊可能な温泉というものの存在も知らなかった。そこで、最終電車で安里町に近い高崎線の駅まで行き、そこで夜を明かすことにした。それまでは大宮で時間を潰そうということになった。駅の周りにある電化製品店をみたり、デパートに入ったりした。麗名にとってはこれらどれも初めての体験であり、めまいがするほどの刺激であった。中でも、一番麗名に衝撃的だったのはデパ地下の食品売り場だった。こんなに多くの種類の食べ物を見たことがない。すべて食べてみたいと思った。少し味見をしてみた。しまいに、二人は小さなちらし寿司を一つだけ買って、外で半分ずつ食べようということになった。駅前から少し歩いたところにある広場のベンチに座ってゆっくりと食べた。
「慎吾、埼玉ってすごい都会ね。」
「このぐらいで驚いてはいられないよ。もう、埼玉、神奈川、千葉は、東京とつながっていて、巨大都市になっている。でも、こんなに人が住んでいて、いざっていうときは大丈夫なのかなって思うよ。麗名は、札幌や大宮で驚いているけど、東京の都心部に
行ったら気絶しちゃうんじゃないかな。」
「そんなに凄いの？その内行ってみたい。」
「その内行けるよ。」

その後、電車に乗り、安里町に近い駅に着いたのは午前１時過ぎだった。二人は駅の外のベンチに寄り添って腰かけた。幸い、この時期は寒くはなかった。いや、あの厳寒の北海道で毎日デートを重ねた二人である。埼玉の夜が寒いわけがなかった。二日に渡る旅の疲れで、二人はいつしか寝っていた。それでも、硬いベンチなので、さすがの麗名でさえ、急に目が覚めた。そのときはもう夜が明けていて、朝早い通勤客が駅に入っていく。朝の柔らかい日差しの中で駅の周りを見ると、昨日の大宮で受けたのとは対照的な印象を受けた。
「慎吾、なんだか昨日の大宮は夢だった見たい。だって、この駅、あまり都会とは思えないよね。これでも、同じ埼玉なの？」
「あぁ。あまり気に留めていなかったけど、埼玉はかなり大きいということだな。都会から、田舎から、山岳地帯まである。北海道のようなものかな。」
「それは大げさじゃない。それに北海道は海に囲まれているし。」

「それもそうだ。埼玉に海はなかった、と思う。」
「とにかく、バス停を見つけて、バスに乗ろう。」

二人は近くのコンビニでおにぎりを買い、安心～の宿方面の最初のバスに乗った。なんと、バスの本数は極めて少なく朝の時間帯でも３０分は待ったろうか。そして、バスが進むにつれて益々田舎になってきた。バス停で降りたとき、麗名は多少なりともショックを受けているようだった。
「慎吾、何もないね、この辺。農地の中に家がぽつぽつっていう感じで。私たちの町より田舎かも。」
「そこまではいかないんじゃない。結構交通量もあるじゃない。」
その時、軽自動車が２台ほど通った。
「だけど、確かに田舎だ。この辺に仕事あるのかな？」

パンフレットに従って、しばらく歩くと、そこに安心～の宿があった。普通の家だが、確かに看板がかかっている。そして、「第一宿」と書いてある。
「これって、第二とか第三もあるってことかな。兎に角、ベルを鳴らしてみよう。」

６．安心～の宿

すぐにエプロンをかけ、宿で働いていると思われる女性が出てきた。
「はい。おはようございます。安心～の宿です。」
麗名が口を開いた。
「このパンフレットを見て来たのですが、今晩泊めていただけますでしょうか。」
スタッフと思われる女性が答えた。
「どうぞ。どうぞ。こっち来てください。どこから来ましたか？」
慎吾と麗名にはこの女性が完全に日本人と思えたが、日本語に多少訛りがあると感じた。
「北海道です。観光業界の不振で私たち二人とも働いていた観光会社が先週倒産してしまいました。町には他に産業もなく、新しい土地で仕事を探そうとして出てまいりました。このパンフレットは何年か前に私たちがガイドをさせていただいた老夫婦が落としていったものだと思います。」
「そうですか。大変ですね。安心してください。ここにいる間にきっと新しい仕事が見つかりますよ。」
「ありがとうございます。ほんとに助かります。」
「で、あなたたちの名前は？」
「夫が、石館、慎吾。私は麗名です。」
「え？」
スタッフが驚いて聞き返した。
「慎吾さんに、麗名さん？」
「そうです。なにか？」
そのスタッフは黙って、何かを思い起こしているようだった。
「あなたたちは知らないと思いますが、この施設を作ったカップルがしんごさんとれいなさんと言いました。とっても仲の良い二人でした。」
「『でした』と言うのは？」
「悲しいですが、二人は６年前の北海道旅行の帰り、飛行機事故で死んでしまいました。施設の人たちが二人の引退を祝ってプレゼントした旅行なのですが、残念です。」
「え？！まさか。あの７月５日の飛行機事故ですか？」
「そうです。７月５日でした。」
慎吾と麗名は急に黙ってしまった。二人にはもう疑いの余地はなかった。今度は、慎吾が口を開いた。
「６年前の７月５日、決して忘れることはありません。その日に僕たちは結婚したから

です。それは、その前日、このパンフレットを落としたと思われる老夫婦が僕たちに声をかけてくれたのが切っ掛けでした。『仲がいいわね』と声をかけてくれたのです。その瞬間にもう待ちきれなくなって、僕はその老夫婦の目の前で麗名にプロポーズして、すぐ翌日結婚したんです。まさか、あの事故機に乗っていたとは。」
「そうですか。その二人がここを作ったしんごさんとれいなさんに間違いありません。でも、あの二人は最後まで恋人で、一生結婚はしていないのです。」

スタッフの女性は早速二人を開き部屋に通した。
「二人なので、この部屋を使ってください。私はモモです。ほんとはモーモーなんですが、牛の鳴き声みたいなので、こう呼んでもらってます。私はミャンマーから来ました。」
「モモさん、どうもありがとう。ミャンマーですか。」
「疲れていると思いますから、まずはゆっくりしてください。」
「ありがとうございます。」

モモが出て行った後、二人はすぐに布団を敷いて寝てしまった。麗名が目を覚ましたのはもう夕方だった。慎吾はすでに目を覚まして天井を見上げている。
「あ〜、疲れていたから長いこと寝てしまった。慎吾、モモさんにお話ししないとね。」
「じゃ、様子を見に行こう。」
二人は部屋から出てモモを探した。モモは、台所で夕食の用意をしていた。
「モモさん、二人ともすっかり寝込んでしまって。」
「旅の疲れは取れましたか？北海道からは遠いでしょう。」
「いろいろな乗り物を使って、二日と少しかかりました。フェリーと駅前のベンチで一泊ずつして。」
「それは大変でしたね。もうすぐ食事ができます。そしたら、みんなで一緒に夕食にしましょう。」
「ありがとうございます。」

夕食時には、慎吾、麗名、モモの他にも滞在者が数名いた。皆独り者のようだった。その内の一人は、かなり暗い表情をしていた。その人に、モモが優しく声をかけている。途中で、宿の管理をしているという高梨義男とその奥さんも現れて慎吾と麗名と挨拶を交わした。義男とその奥さん、両名とも引きこもりだったと聞いて、慎吾と麗名は少なからず驚いた。今の二人はとてもそうは思えない。

食事の後は、慎吾と麗名も食器洗いを手伝った。モモが礼を言った。
「手伝ってくれて、助かります。」
「だって、モモさんは、一人でたくさん仕事をされているでしょう？」
「最近は、この第一宿は私一人のことが多いんです。管理人の義男さんと他のボランティアの人たちは第二と第三の宿の方で忙しくて。」
「モモさんは、ここに長いのですか？」

「そうですね、もう８年ぐらいでしょうか。最初は、あなたたちのように泊まらせてもらいに来たんです。私はミャンマーから憧れて日本に来ました。日本語学校の学生として来たんです。ただ、十分にお金もなくて、駅の近くのホームセンターで働いていました。ところが、ミャンマーの母が病気になり一度ミャンマーに帰ったのです。母は死んでしまいました。日本に戻ってくると、仕事はくびになり、そこの寮も出されてしまったのです。ちょうどその日、この前も言った、亡くなったしんごさんがホームセンターに買い物に来ていて、この宿の事を教えてくれたのです。次の日、私はここに来ました。」
「お気の毒です。大変でしたね。」
「その時は、ほんとにどうしていいかわかりませんでした。しばらくはここで何もせずに泣いていました。ここの人たちはほんとに親切で、私の気持ちが落ち着くまでじっと待っていてくれたのです。それから、私は少しずつここの手伝いをするようになりました。そうしているうちに、管理人の義男さんから、ここのスタッフにならないかと誘われました。それから、亡くなったしんごさんとれいなさんは、もう一つ、関連の施設を作っていました。それは、安心～の家と言って、お金をほとんど使わずに共同生活をする施設なのです。ここのスタッフになって、そちらの家の住人にならないかという誘いでした。それは、私にはありがたい話だったので、すぐにそうさせてもらいました。」
「そうだったんですか。そのしんごさんとれいなさんはずいぶんと素晴らしい人ですね。私たちはほんの数時間お会いしただけですが、そんな人にお目に書かれて、そしてお二人の施設にお邪魔させていただいて、ほんとに嬉しく思います。」
「しんごさんとれいなさんはここを作る前に随分と世界中を冒険されたらしいです。初めはエコツーリズムのガイドとか、その後はモンゴルで行方不明になったしんごさんのお母さんを救済するため、アメリカで、れいなさんが働きながらしんごさんが弁護士になったそうです。どうも、しんごさんのお母さんを誘拐したのはアメリカだったらしいのです。当時のアメリカの友達には米国政府を訴訟すべきだと言われたそうですが、しんごさんたちは、訴訟するために弁護士になったのではないと言い切ったそうです。」
「凄い方たちですね。」

「でも、お二人でいる時はずいぶん可愛かったんですよ。なんだか、いつも二人でじゃれているような感じでした。」
「なんとなくわかります。北海道に来た時は新婚旅行の若い夫婦みたいな感じでした。」

７．新しい仕事

慎吾と麗名は安心～の宿で十分に休息を取った。そして、その後の事を考え始めた。
「慎吾、ここの人たちは皆親切だし、ここはすごく落ち着くところだと思う。だけど、予想以上の田舎で、仕事があまりないんじゃないかと思うんだけど。」
「僕も全く同感だな。ほんとに、そろそろ仕事を始めないと。僕たち、全くお金ないからね。そうすると、やっぱり、大介さんの勤めている会社に頼むしかないかな。」
「電話して聞いてみたら。」
「そうするよ。」

次の日、慎吾は大介からもらった紙に書いてある電話番号に電話をかけた。先方は、確かに、何某トラック会社と言って電話に出た。慎吾は恐る恐る大介のことを言う。
「そちらで運転手をしている大介さんからこの電話番号をいただいたのですが、運転手を募集していると聞いて。」
「はい。いつでも募集していますよ。免許はお持ちですか？」
「はい。大型二種です。観光バスの運転をしていました。」
「そうですか。それなら、すぐに始められます。ところで、誰に聞いたと言われましたか？」
「大介さんです。」
「それはかなり前の話ですか？」
「いいえ、一週間ほど前ですが。」
「変ですね。確かに、大介さんはこの会社の運転手だったのですが、何年も前に事故で亡くなっていますよ。」
「えっ！！！」
「あの、〇×大震災の時に、車ごと、地震で崩れた高架橋の下敷きになってしまったのです。」
「そんな。あの、あの、大きな竜の絵が描いてあった車でしょうか。」
「そうですよ。あのトラックも全損でした。会社の人みんなが悲しがりました。いい人でした。ところで、仕事はいつから始められますか？」
「あ～。すいません。ちょっと待ってください。」
慎吾には少し気を取り戻す時間が必要だった。
「すいません。ちょっと大介さんのことが気になってしまって。仕事は、すぐにも始めたいのですが、今は埼玉の田舎に滞在中でそちらに簡単に通えるようなところじゃない

んですが。」
「それだったら、会社の寮に入っても構いませんよ。」
「えっ、寮があるんですか。妻もいるんですけど、一緒に入れますでしょうか。」
「あいにくですが、運転手のための施設なので、男性だけに限られています。」
「そうですか。ちょっと妻と相談してまた電話していいですか？」
「どうぞどうぞ。会社の近くにはいろいろとアパートもありますよ。ひと月も働けば、入居に必要な費用は作れるはずです。では、電話をお待ちしてます。」

慎吾は早速、麗名に話の内容を伝えた。
「麗名、一番信じられないのは、あの大介さんが何年も前に亡くなっているというんだ。」
「なんだか、不思議なことが多いわね。ここのしんごさんとれいなさんのことといい、大介さんのことといい。」
「ひょっとして、大介さんと全く同じような他人が居るってこともあるよね。」
「だけど、それだったら、どうして、大介さんの働いていた会社の電話番号をくれたの？」
「そうだな。一番簡単な説明は、」
慎吾はためらっている。麗名が続けた。
「幽霊かなにかっていうこと？あの大きなトラックごと？」
「うん。信じられないよね。」

二人は、暫く黙って考え込んでいた。そして、慎吾がまた始めた。
「兎に角、仕事はあるということなんだけど、寮が男性のみだって。一か月働けば近くのアパートを借りられるということも言っていた。」
「そうね。私、もちろん慎吾と離れたくない。だけど、今のところ、他に方法がないみたいだから、一か月というのだったら我慢できるかもしれない。私たち、あの湖畔の修学旅行から今まで、一日も離れたことがないの気が付いてる？そして、結婚してからは昼も夜も毎日一緒だった。だから、今回が初めての別々の生活になるわね。」
「僕も辛いけど。麗名、一か月我慢しよう。」
「分かったわ。」

慎吾は会社に電話して、その翌日に会社に出向きその次の日から運転したいと申し出た。そして、一か月寮に入りたいとも伝えた。会社側は喜んで受け入れてくれた。その夜、慎吾と麗名はあたかも二人の最後の晩のような情熱で過ごした。

翌日、慎吾は埼玉南部にある会社に向かって出発した。麗名はバス停で慎吾を見送ると宿に戻った。もうすでに、麗名は宿の雑務の手伝いを始めていた。仕事に必要なため目覚ましは慎吾が持って行ってしまったので、麗名は朝起きられるか心配であった。それで、宿の人に頼んで、慎吾がいない間は起こしてもらうようにした。

慎吾は電車を乗り継いで、昼頃その会社に着いた。早速、雇用と入寮の手続きを済ませた。そして、運転するトラックと次の日の仕事について説明を受けた。その日は寮で夕食を食べ、早く休んだ。翌朝は早く起きて、仕事の準備をし、さっそうと出かけた。同じ大型と言っても、観光バスとトラックの仕事は全く勝手が違う。最初の数日は戸惑うことが多かった。途中トイレに行きたくても、観光バスのようにちょくちょく駐車場に止まる訳ではない。そして、どこのコンビニにも簡単に駐車できると言う訳ではない。だが、次第に仕事にも慣れてきた。

一週間ほど経ったころ、慎吾は新潟までの仕事が入った。関越自動車道を通って行く。安里町のそばを通るのだ。そこで、慎吾は麗名に電話して、一緒にトラックに乗りたいか聞いた。関越道の安里町付近のバス停に朝７時ころに来れれば、乗せられると思ったのだ。麗名は大喜びで、宿のスタッフにどうやってそのバス停に行ったらいいか相談した。
「麗名さん、私はそのバス停行ったことないけど、関越道までは少し遠いのでは。義男さん、どうやって行くか知ってる？」
その話を横で聞いていた義男が口をはさんだ。
「そこに行く便利なバスはないな。歩くと一時間くらいかかりそうだし、オレが車で送ってやるよ。帰りも電話してくれれば、向かいに行くよ。」
「ほんとですか、義男さん。どうもありがとう。明日の朝お願いします。それから、もう一つお願いなのですが、私とても朝に弱いのです。すいませんが、万が一、起きていなかったら起こしていただけますでしょうか？」
「あぁ、いいですよ。でも、オレは慎吾さんみたいに優しくないよ。」
「分かりました。努力します。」

次の日、案の定、麗名は自力では起きられず、義男の助けが必要だった。麗名は顔を洗っただけで、朝食も取らずに義男の運転する車に乗り込み、関越道のバス停まで行った。そこには、すでに、大きなトラックが止まっていた。トラックの横には何枚か画用紙をつなげたものに何やら動物の絵が描いてあるものがテープで貼ってある。麗名は義男に礼を言うと、バス停までの階段を一気に駆け上り、トラックに乗り込み、即座に慎吾に抱き着いた。

「慎吾、寂しかった。会いたかった。」
「同じだよ。今日は最高だな。ところで、竜の絵見た？」
「あれ、竜だったの？猫かと思った。」
「ひどいなぁ。いずれは、大介さんのトラックのように大きな竜の絵を描きたい。今のところは、あれで勘弁。」

慎吾の運転で、トラックは走り始めた。麗名は相変わらず、慎吾に寄り添っている。
「僕の方は仕事も覚え、順調だよ。麗名は？」
「宿では皆親切にしてくれるので、ほんとにありがたい。今日は義男さんが私のこと起こしてくれたの。あの人ぶっきらぼうな感じだけど、凄く親切で。」
「それは、参ったな。麗名の朝起き苦手はもう有名になっているようだな。」
「私、これでも努力しているつもりなんだけど、ひょっとしたら、どこか体でも悪いのかしら。」
「心配だな、そんなこと言われると。健診でもした方がいいかな？」
「ううん。他に何ともないし、大丈夫だと思う。」
「じゃ、もし、気が付いたことがあったら、早く言ってね。」
「うん。そうする。それで、今日寝坊しちゃったから、お弁当作れなかったんだけど。」
「今日は、寮母さんがおにぎり作ってくれたよ。二人分だよ。」
「ありがたいね。慎吾も、いいとこに住んでるんだね。」
「あぁ。でも、順調に行けば、来月は僕たち二人のアパートが借りられる。それまでの辛抱だ。そして、今日は新潟で一泊だ。お金を使わないために、車でいいよね。」
「もちろんよ。慎吾と一緒だったらどこでもいい。」

二人にはあの観光バスの運転手とガイドの生活がわずかに蘇っていた。途中はサービス・エリアで昼食を食べ、新潟のはずれの目的地で荷物を降ろすと、近くで夕食を食べた。その後は、二人で後ろの簡易ベッドに潜り込んだ。
「これ、狭くてごめん。一人分だからね。」
「私たちの初めての夜覚えてる？私たち一式の布団で寝たよね。」
「あぁ、そうだった。いつも一人分の広さがあれば十分だよ。あぁ、たったの一週間そこそことは思えない。長かったなぁ。」
「私も。でも、今日は最高。」

翌朝は、慎吾が先に起きて、車を動かし始めた。麗名はまだ起きられないでいる。少し走ったところで、やっと麗名が起きたので、二人はお土産屋に立ち寄ってコーヒーとサ

ンドイッチを仕入れた。
「そして、宿の人たちにお土産を買っていこう。」
「そうね。何がいいかしら。」
二人はあれやこれやとみていたが、少しありきたりではあるが、やっぱり笹団子にしようということになった。
「よかった。私、宿ではお世話になってばかりで、申し訳ないと思っているの。それで、最近は少しずつ宿の仕事を手伝うようにしてるの。この前は、私の母から教わった料理を少し作ったのよ。みんな喜んでくれた。」
「そりゃ、よかった。いいな、みんな。麗名の手料理が食べられて。」
この二日間はあっという間に過ぎた。気が付いた時はもう降りる予定のバス停に差し掛かっていた。二人は抱き合い、口をつけて別れた。その後、麗名は少し歩いて電話のある所まで行き、義男に電話して迎えに来てもらった。そして、最初の一か月のうちに、もう一回同じようなことが出来た。

やがて、一か月が過ぎ、慎吾は最初の月給を受け取った。すぐに、近くの安アパートを借り、麗名を呼び寄せた。宿のスタッフは麗名が居なくなるのは寂しいと言ったが、なんと言っても慎吾と麗名が一緒に生活できることを喜んでくれた。慎吾は最寄りの駅まで麗名を迎えに行き、寄り添ってアパートまで歩いた。アパートに入った時、慎吾は言った。
「麗名、やっと、僕たちのアパートだ。実は、まだ寝具がないのだけど、今日はいいかな？」
「そんなの構わない。自分たちのアパート嬉しいなぁ。寝具は、明日私が買い物に行ってくるよ。キャンプ用の軽いのにしようか。」
「うん。それでいい。ところで、お茶碗だけは買っといたよ。あの壊してしまったものに出来るだけ似ているものを探したんだ。」
「ありがとう。じゃ、早速お茶飲もうね。」

そして、次第に、麗名もいつも一緒にトラックに乗って行くようになった。こうして、二人の一緒の生活が復活した。毎日毎日、二人はいろいろなところに出向くことになる。東京の都心を始め、関東全域、甲信越、東海、そして、東北地方を旅することになる。

８．東京見物

アパートの生活が落ち着いてきた頃、麗名がまずしたかったのは、東京観光であった。修学旅行で行けなかったところ、そして、憧れた大都会である。麗名は慎吾に希望を伝えた。
「慎吾、はい。これ、私の作った東京見物のリスト。安心～の宿に居るときに人から聞いて作ったの。そして、これを修学旅行と同じ日数の三日間で見たいんだけど。実際には、日曜日三回でいいかな。」
「どれどれ。ちょっと、麗名。このリスト大きすぎない？三日で見るのはとても無理だと思うけど。」
「そうかしら。それじゃ、三日って決めることないわね。どうせ私たち、もう東京から川一本隔てただけの所に住んでるんだから、全部見たい。」
「わかったよ。早速今度の日曜から始めようか。」
「うれしいなぁ。」

麗名のリストの一番は、新宿の高層ビル街であった。地面から見上げる高層ビル群は麗名の想像以上の圧巻で、二人はそこにあるビル何本もの周りをずっと上を見ながら歩いてみた。ビル街に働く人々には、典型的なお上りさんと映ったろう。その後、都庁の展望デッキに行った。そこから見える東京メガロポリスの景色に麗名の眼は奪われた。制限時間がなければいくらでもそこで過ごせると思った。
「これ、ほんとに凄いね。慎吾が前に、東京近辺の大きさが異常だって言っていたのがよくわかる。こんなにたくさんの人たちがここに住んでいる。そして、ほとんど誰も農作物や食料を作っていないんでしょう。どうなってんだろう？」
「いい質問だね。世界七不思議の一つだ。それから、さっき、誰かが喋っているのを聞いたんだけど、平日に六本木ヒルズに行くと、展望台でゆっくりといくらでも景色が見えるらしいよ。」
「それ、素敵！もし、代休とかで平日に休みが取れたら行こうね。」
「あぁ。多分そう日もあるだろう。」

次の目的地は渋谷と表参道。麗名は渋谷の交差点で、長いこと通行人を見ていた。人々のかっこを見ているだけで面白いと言うのだ。表参道のしゃれた店には縁が遠かったが、喫茶店でコーヒーを飲んでくつろいだ。少し、高級な気分に浸った。

その後、地下鉄で浅草に向かった。東京の下町は新宿や渋谷とは対照的なところだ。そして、浅草で麗名の一番びっくりしたのは、外国人観光客の多さだった。
「ここ、ほんとに、日本？って感じね。」
「なんだか、喋っている言葉は中国語ばっかりに聞こえるけど。」
「それは、慎吾には何語がわからないだけじゃないの？」
「そうかもしれないけど。見てごらん。お土産の札だって、英語や中国語で書いてあるよ。」
「そうね。それにしても、なんだか、ここはほんとの東京の下町ではなくなってしまったみたいね。慎吾、あそこにスカイツリーが見えるけど。」
「あぁ。すごく高いね。こんな、視界のいい日には飛び込みでは展望台へは行けないだろうな。」
「そうね。私、あの、平日の六本木ヒルズの方に興味がある。」
「じゃ、スカイツリーはパスして、次に行こうか。」
「次は、上野動物園。恋人にはいいとこだって。私たちに向いてるでしょ？」
「そうだね。」

二人は動物園でいろいろな動物を見た。
「私は、ほんとは、動物たちがオリの中にいるの可哀そうだと思うんだけど。私たちの育ったあたりには動物園はなかったけど、結構いろいろな動物がいたよね。作物を荒らすとか問題になっていたこともあったけど。」
「うん。あそこ見てごらん。確かに、あの白熊の行動がどうも変だよね。左右に行ったり来たりしている。なんか、精神障害のある人の行動みたいだよね。」
「そう言われてみればそうね。私はさすがに北海道でも熊は見たことないけど、白熊さんは寒いところから無理やり連れてこられて可哀そうだ。」
二人は、少し複雑な気持ちになってきて、動物園を後にした。若い恋人が寄り添って歩くのにはどこでも構わなかった。

それから、二人は銀座へ行った。ここも外国人観光客が多いことに気が付く。いろいろな店に何気なく入ってみた。その一つは、山野楽器であった。５階か６階のビルのすべてのフロアで楽器や音楽関係のものを売っている。
「慎吾、凄いね。一遍にこんなに沢山の楽器を見たことないよね。ねぇ、何か一つ楽器を買っていい？」
「えっ？麗名、何か弾けるの？」
「何も。私は慎吾が知っている通り、貧困家庭の子供だったから何にもできないよ。学校の音楽の時間にハーモニカと縦笛を習っただけ。」

「そうか。いいよ。うちはアパートだから、トランペットとかバイオリンはうるさすぎるよね。それにしても～、ちょっと、この値段見たら、びっくりするなぁ。」
麗名はいろいろな楽器を見ていたが、嬉しそうな顔をして言った。
「私、決めた。ハーモニカがいい。学校時代に習ったから取り敢えず吹けると思う。それに、小さいし、安いし、トラックで練習するのに最高じゃない？」
慎吾は、ほっとした。
「そりゃ、いいや。ピアノが欲しいとか言われたらどうしようかと思ったよ。」

その後、二人はデパートに入った。一通り、上の階から見て、地下の食品売り場へ行った。
「慎吾！私は、あの大宮のデパ地下でかなり興奮したけど、ここはそれどころじゃないね。そして、これだけの食べ物全部売れるのかしら？ねぇ、何か買っていってアパートで食べる？」
「いいよ。実は、僕は肉まんが食べたい。」
「じゃ、私は餃子にしようっと。分けようね。」

という按配で二人の盛りだくさんの東京見物一日目は終わった。その後も、何回か日曜日に東京に出かけた。二日目は、お台場と羽田空港。二人とも、まだ飛行機は乗ったことがない。そして、只々、飛行機の離着陸を見ていても飽きなかった。三日目は、変わったところで、屋外博物館あるいは公園といった感じの江戸東京たてもの園、地元の買い物の街として楽しい吉祥寺、最後に、深大寺で野草そばを食べてきた。また、東京ではないが、四日目には、横浜と鎌倉へも行った。それで、ほぼ麗名のリストを制覇した。当初は多摩動物公園もリストに入っていたが、上野動物園で、動物たちが可哀そうに思い、行かなかった。修学旅行で行けなかった東京をたっぷりと体験出来て、麗名はそれなりに満足したようであった。
「楽しかったね、東京見物。それでもね。私は、やっぱり修学旅行は行かなくて良かったと思う。だって、慎吾が湖畔のデートに誘ってくれなかったら、こんなに楽しい東京見物は出来なかったから。慎吾が居なかったら、私はまだあの町のコンビニで働いていたと思うよ。」
「でも、修学旅行に行っていたら、麗名はもっと素晴らしい人生を送っていたかもしれないよね。」
「変なこと言わないでよ。でも、確かに、修学旅行に行けなかったことが良かったんじゃなくて、慎吾が居たことが良かったんだ。修学旅行に行けなくて幸せになったなんて、稀なケースだよね。多分、私みたいな子供は他にもいるんだろうなぁ。」

９．麗名の免許

いつものように二人でトラックに乗っている時、麗名が少し恥じらいながら聞いた。
「慎吾、私にはトラックの免許取れないかしら。」
「えっ？本気？この車は大型一種が必要で、普通免許よりかなり大変だよ。麗名はまだ普通免許さえ持っていないじゃない。」
「そうなんだけど、私が免許持っていたら、交代で運転出来て良くない？」
「それは、凄くいいアイデアだけど。まぁ、麗名がやってみたいんだったらいいよ。まずは、普通免許を取らないと。その後、三年で、大型受験資格が出来る。麗名も良く知っている通り、普通免許を取るとき、僕は教習所に行けなかった。それで、かなり、てこずった。僕たちは今は少し余裕があるから、麗名は教習所に行った方がいいかもね。その間は、僕一人で仕事に行ってもいいし。それでも、泊りの時は一緒に来てくれると嬉しいんだけどね。」
「じゃ、そうするね。ありがとう。」

正直言って、慎吾は麗名が運転に向いているかどうか分からなかった。自転車さえ乗ったことのない人だ。ただ、料理の様子を見ていると、手先は器用に思える。さて、実際に、麗名が教習所に行き始めると、慎吾は少なからずびっくりした。まず、仮免まで最短時間で進み、仮免も一回で通った。その後も最短時間で進み、路上試験も一回でパス。麗名は当たり前のような顔をしているが、慎吾にはすこし理解できなかった。どうやら、麗名は教官に言われたことを律儀にこなし、丁寧に運転する。危ないことや、無茶をしない。そのため、意地の悪い教官でも落とす理由がないのではないかと思われた。と言う訳で、麗名はいとも簡単に普通免許を取った。その後は、時々会社のワゴンを借りて、近くをドライブしたりした。しかし、免許を取るのと、実際に運転するのではかなり訳が違う。慎吾から見ると、麗名の運転は極めてとろい。うまく交通の流れに乗れないし、ゆっくりすぎて、後ろの車にラッパを鳴らされるということが少なくなかった。それでも、麗名は自分で車が運転できるということに、それなりに自信を持ったようで喜んでいた。ある休みの日、二人はやはり会社のワゴンを借りて、安心～の宿までドライブした。もう尋ねる親族のない二人にとって、ここが実家のようなものになっていた。スタッフ一同、麗名が運転しているのを見てびっくりしたが、大変喜んでくれた。その後、麗名の運転で、宿の人を数人連れて駅の近くの食堂へ昼食を食べに行った。

そして、それから二年半を過ぎた頃、慎吾は会社の人たちと麗名が大型一種を取ることについて話し始めた。会社にはトラックがあるし、まずは駐車場で練習をしても良いということになった。その後は、慎吾がトラックを運転して、自由に使える練習場へ行き、麗名の練習に利用したりした。さすがに大型の車両感覚は難しいようで、普通免許よりは時間がかかるようだった。それでも、半年の準備期間を経て、普通免許取得から三年と少しで大型一種の仮免を取得した。この時の麗名の喜びはただものではなかった。自分で大いに手を叩いて喜んだ。慎吾もたいそう喜んだ。そして、お祝いとして、会社の許しを得て、二人のトラックの横に大きな竜の絵を描いてもらった。二人は亡くなった大介の思い出をそのまま残したいと思ったのだ。

その後は、慎吾の仕事が路上実習の良い機会で、いくらでも練習出来た。数か月後、麗名は難なく大型一種免許を取得した。これで、正真正銘、夫婦での仕事が出来るようになった。当然、二人で一台なので、給与が増えるわけではない。それでも、いつでも交代で運転できるのは非常に便利なことであった。そして、ごくまれに、２台同時に必要な時には慎吾と麗名が一台ずつ運転して行くということもあった。いずれにしても、麗名のような女性が大型を運転しているとよく冷やかされたり、馬鹿にされたりした。そんな時は、いつも慎吾が麗名をかばった。

二人は、トラックに乗っている時にラジオで音楽やその他の番組を聴くこともあった。慎吾も麗名も全く音楽の素養はなかったが、ラジオで少しずついろいろな音楽を聞いて、それなりに好き嫌いも生じてきた。例えば、麗名はある種のクラシックが気に入ってきていた。それは、ベートーヴェンでもなく、モーツァルトとでもなく、シューベルトとでもない。なぜか、ドビュッシーとか、ラベルとか、リストであった。また、ある時、何かの番組で、何十年も前に海外で活躍していた日本人の大道芸人のカップルのことを聞いた。女性がハーモニカを吹き、男性が手品をするというのだ。そして、番組の終わりに、彼らの名前を言ったのだが、電波が弱いところではっきりは聞き取れなかった。
「麗名、今の聞き取れた？なんだか、シンゴとレイナって言ってたようだけど。」
「私にもそう聞こえた。だけど、ちょっと雑音が多くてはっきりはわからい。その頃って、ひょっとすると、安心～の里のしんごさんとれいなさんがエコツーリズムのガイドをしてた頃だと思うけど、まさかあのふたりじゃないよね。宿に居たとき、しんごさんがピアノを練習していたという話は聞いたし、その電子ピアノを義男さんが弾いてくれたのは知ってるけど。ハーモニカとか手品とかっていう話は聞いたことがない。それに、ガイドの仕事の途中にパフォーマンス出来るわけないよね。」
「うん。そうだね。聞き間違えかな。それとも、他にも同じ名前のカップルが居たのかな？」

「でも、ちょっと刺激になった。もう少し、ハーモニカ練習しとこうかな。万が一、仕事がなくなった時に大道芸人という道があるかもしれないし。」
「それには相当練習しないとな。」

１０．岩手

そんなに頻繁にではなかったが、慎吾と麗名はヒッチハイクしている人を乗せることもあった。彼ら自身、ヒッチハイクの恩恵を受けたので、ヒッチハイクしている人たちには十分同情する。ある時、高速に入る少し手前の街道で、「岩手」と書いた札を持っている人がいた。丁度青森まで行く仕事だったので、乗せてあげることにした。麗名が真ん中にずれてその若い男性をはじに座らせた。
「ありがとうございます。助かりました。僕は武良義明と言います。人に言わせると、苗字と名前が混同しがちだそうです。」
「僕たちは、石館慎吾に麗名です。それでは、岩手ですね？高速のサービス・エリアとか高速バスの停留所で良いですか？」
「そうですね、岩手県に入って最初の安全に止まれるところで結構です。それから、釜石方面に行く方法を考えます。」
「分かりました。」

暫く、三人は無言でいたが、武良が突然口を開いた。
「実は、僕はまだ会ったことのない父親に会いに行くのです。あまり期待はしていないのですが、今は仕方がないのです。」
麗名が。
「そうですか。大変な事情がありそうですね。」

「僕が生まれてすぐに両親は離婚し、僕は祖父母の所へ預けられました。母は時折やってきましたが、その後再婚して子供が出来ると、その後はめったに会ったことはありません。学校では『親なしっこ』といっていじめられました。僕はいつも、『禿げ頭のじじいがいるからいい』と強がっていました。高校を卒業と同時に一流自動車会社に職工として入社し、社員寮に入りました。その時、僕はもう母親には会うまいと決めました。一人でやって行こうと決めたのです。仕事は楽ではないし、これといった楽しみもない毎日でした。それでも、独立出来たことに対する満足感はありました。それで、もう十年くらいそのまま務めていました。ある時、工場の事務をやっている女の子から声をかけられました。お茶でも飲みに行かないかと言うのです。僕は全く女性と付き合ったことがなかったし、もう誘われただけで嬉しくて、早速ついて行きました。その子はまぁ、特に目立つところのない普通の女の子でした。当然、僕がそこの支払いをしました。その後は、その子に良く誘われるようになったのです。お茶に、食事に、都内の観光とか。

当然、費用はすべて僕が払いました。その子は、九州の田舎の出身と言っていました。僕はもう彼女が出来たと思って毎日ウキウキしていました。何か月かして、今度は、その子が、一緒に住まないかと言うのです。これにはびっくりしました。僕は、もうこんなチャンスはないだろうからとすぐに応じました。二人でアパートを探し、僕が契約しました。そこは、僕の給料には少し高すぎるくらいの所でした。まず、初めに、僕が引っ越しました。そして、しばらくして、その子も引っ越してきました。僕はもう気が気ではありませんでした。ところが、最初の夜、その子は頭が痛いから一人で寝たいというのです。僕は物凄くがっかりしました。それでも、彼女の体の方が大事だからと思い言われるままにしたのです。僕はリビングのソファーで寝ました。ところが、最初の日だけでなく、毎日、毎日、いろいろな理由で同じことが起こるのです。僕は、その子が僕のことを好きかどうか疑い始めました。ある時、その事を聞くと、『好きじゃなかったら、一緒に住もうなんて言わないでしょ』という返事でした。それで、僕はもうその事は口に出すことが出来ませんでした。それでも、毎日夕食を食べに行き、休日は映画を見たり、ゲームセンターに行ったり、お金を使うことばかりしていました。そんな調子で、僕は持っていた貯金は使い果たしてしまいました。そして、これはつい最近なのですが、会社で事件がありました。その子は経理部に居たのですが、非常に巧妙な手口で会社の資金を使い込みしていたそうなのです。その事件が発覚する直前にその子は失踪し、さらに悪いことに、僕が共犯として記録に残されていたのです。その子はいずれ発覚するということを分かっていたようです。その後は、僕にとっては大惨事で、会社は即刻くびになり、昨日の夜でアパートを追い出されました。荷物の整理をする暇もなく、もう入ってはいけないと告げられました。昨日の夜は飲めない酒を飲み、街をさまよいました。今朝、慎吾さんと麗名さんに拾ってもらってほんとに感謝しています。」

慎吾と麗名自身、苦労はしてきたが、人には助けられてきた。それに比べると、武良の経験はあまりに不幸に思えた。なんと言っていいか分からないうちに、また武良が口を開いた。
「すいません。あまりにつまらない話で。ただ、どうしても吐き出したかったのです。」
「お気の毒です。」
それが、麗名の言える一言だった。
「ところで、慎吾さんと麗名さんはどうやって知り合ったのですか？」
麗名は簡単に自分たちの事を話をした。武良はずいぶん熱心に聞いていた。何度も、何度も相槌を打っていた。

「それは、素晴らしい話ですね。いつも二人で一緒に居られるなんて羨ましい限りです。僕も一時はそんな生活を夢見ていました。」
「武良さん。岩手のお父さんの所へ行くと言っていましたが、どのようにして所在が分かったのですか？」

「それは、彼女の様子がおかしいと思い始めた矢先でした。なんの前触れもなく、少し年がいっていると思われる男性から電話があったのです。僕の父親だと言うのです。いろいろ調べて僕のことを見つけたと言いました。父には生まれてから一度も会ったこともないし、向こうから連絡してきたのも初めてです。僕としては、あまり真剣に取ることは出来ませんでした。それでも、母とは縁を切っているし、彼女の状態もおかしいので、一応話だけは聞こうかと思いました。父の話では、今、岩手県の釜石に住んでいるそうです。数年前の大津波で後妻と子供二人、そして、後妻の家族全員を失った。その上、今まで営んできた小さな電気店も失ったらしいのです。これから、何とか、その電気店を再建して経営したいので、一緒にやらないかということでした。そして、連絡先を言い残しました。僕は、今までのこともあるし、１００％父を信用することは出来ません。それでも、何かあたらしい発見があるかもしれないと思い、兎に角会ってみようと思っているのです。」

途中、郡山のサービス・エリアに止まり、昼食を食べた。慎吾と麗名は武良にご馳走すると言った。武良は始め遠慮していたが、慎吾がすでに他界していた大介にやはり、郡山でご馳走になった話をしたところ、素直に応じた。食事の後、今度は麗名がハンドルを握ると、武良はびっくりした。
「えぇ！麗名さんも運転するんですか？」
「さっき言い忘れたかもしれませんが、私たち交代で運転するんですよ。これでも私も大型持ってますので。」
「それは驚きました。ほんとに、良いですね。ほんとに、羨ましい。僕はつまらない出会いで人生を無駄にしてしまった気がする。」
今度は、慎吾が言った。
「そんなこと、まだ先はわからいじゃないですか。」
そして、この時、慎吾の頭になぜかモモの顔が浮かんだ。
「武良さん、まだまだ、良い女性はたくさんいますよ。お父さんとはうまくいくといいと期待していますが、万が一、無料の宿泊施設が必要だったら、僕たちのお世話になった、『安心～の宿』というのが埼玉県安里町にあります。とてもいい人たちで、親族のいない僕たちの実家みたいになっているんです。」
「それは、良いことを聞きました。ひょっとするとお世話にならないといけないかもし

れません。なんせ、これから会う父とは初対面ですから。それから、無理は言いませんが、もし、慎吾さんと麗名さんにまた連絡したいときはしてもいいですか？」
「もちろんです。僕たちのアパートの電話番号はこれです。念のため、会社の番号も書いておきます。いつでも連絡してください。気を付けて。うまくいきますように。」

武良は岩手県に入った最初のパーキング・エリアでトラックを降りた。丁寧にお礼を言い、何度も何度も頭を下げていた。どうやら、目の下にはしずくが落ちていたようだった。麗名は慎吾に、言った。
「大変ね、武良さん。私は慎吾に会うまでいい男性と巡り合えるとは思っていなかったのだけど、慎吾に救われた。」
「いや。僕が救われた。そして、僕たちの今までも結構大変だったと思っていたけど、どうやら、僕たち、今は幸せすぎる気がする。」
「ほんとね。ありがたい。」

１１．福井

今回の仕事は二人には珍しい西日本行きとなった。目的地は福井県福井市。帰りはいつものように空荷だが、会社の人と話して、目的地近辺で休暇として２泊してから帰ってきてよいということになった。せっかくだから、往復で違う経路をということになった。行きは、関越自動車、上信越自動車道、そして、北陸自動車道。帰りは、北陸自動車道、名神高速道路、そして、東名高速あるいは新東名高速道路と言う計画を立てた。両方向とも早朝に出発し、その日の夜にその日の行程を終える計画だ。すると、中日は丸一日自由時間となる。

慎吾と麗名が福井に向かって走っている頃、若い女性二人がやはり福井市方面に向かっていた。理奈と佐保子は金沢から福井まで快速で行き、そこからえちぜん鉄道に乗り換え三国港まで行った。二人はどういう関係だろうか、しっかり寄り添っている。そして、全行程黙ったままである。二人とも表情は異常に厳しい。駅からは徒歩で、全国でも有数の観光名所東尋坊の方へ向かっている。空には重い雲が立ち込め、ひょっとしたら雨が降るかもしれないような空模様だ。二人は、観光客で込み合っているお土産屋や食堂が立ち並ぶ通りを進んでいったが、急に食堂に入って昼食をとった。依然黙っている。それから、海岸の方へ向かって行って、遊覧船に乗った。二人は船から崖っぷちを注意深く見ている。その後、二人は崖っぷちをゆっくりと歩いていた。所々で立ち止まり、あたりの様子を注意深く観察している。二人は午後、ずっとその辺で過ごした。普通の観光客はそんなに時間を費やさないだろう。そして、夕暮れ時、また先程のお土産屋の通りに戻って、コーヒーを飲んでいた。佐保子は二杯飲んだ。もうほとんどの観光客は帰ってしまった。お土産屋も締まり始めている。二人はそこを出ると、駐車場を抜けて、バス通りの方へ行った。そして、そのそばにある公園に入り、ベンチに腰かけた。二人は恋人のように寄り添っている。以前言葉はない。そして、日が暮れ、黄昏時も終わり、しまいには、真っ暗になった。佐保子が「行こう」と囁いた。二人は立ち上がり、ゆっくりと海岸の方へ歩き出した。もう人影はないが、誰かがいるようだと、二人は立ち止まり、様子を伺っているようだった。そして、直に、崖っぷちについた。そこは大池と呼ばれる場所であった。

佐保子は理奈の手をとり、また「行こう」と言い、飛び出した。その時、理奈は突然佐保子の手を放し、全力で反対の方向へ戻った。気が付くと、そこにはもう佐保子の姿はなかった。理奈は体中が震えていた。「私も行ける、私も行ける」と小声で言いながら、

両足は硬直してそこから動けない。その時、遠くの方に、懐中電灯の光が見えた。理奈は慌てて、お土産屋の通りを抜けて、またあの公園に戻った。さっきと同じベンチに座った。ただ一つ違うのは、もう佐保子がいないということだった。理奈はどこにも行けず、何もできずに、ただそのままそこにいた。

慎吾と麗名にとって、信州から日本海岸に抜けて福井市まで来るのは初めてのコースで、特に麗名は新しい景色を楽しんだ。昼食には日本海でとれる魚の定食を食べた。そして、無事福井市に到着し、仕事を終えてトラックで寝るところだった。宿泊代を使わないように、二人はほとんど毎回トラックで夜を明かす。座席の後ろの小さな簡易ベッドでも苦ではなかった。

そして、翌日は休暇ということで、自由日だった。朝食は街の喫茶店でモーニング・サービスをオーダーした。その後、もう帰路につき、途中の琵琶湖あたりでゆっくりと泊まろうかという案が出て、二人は北陸自動車道に入った。ところが、どういう風の吹き回しか、少し走ったところで、麗名がここまで来たからには、やはり全国的に有名な東尋坊を見たいと言い出した。そこで、急きょ引き返し、東尋坊に向かった。幸い、大きな観光地は観光バスの駐車できる場所がある。そのため、大型トラックでも簡単に駐車場に止めることが出来た。

いつの間にか昼食時に近く、二人は食堂に入って、かに弁当なるものを食べた。その時、二人の目に留まったことがある。若い女性が一人、もの寂しそうにしている。というより、何か思い詰めた様子である。慎吾と麗名は顔を見合わせた。とても重たい雰囲気があたりを漂う。それでも、何とはっきり言えるわけではなく、そこを出て、遊覧船に乗った。遊覧船の中で、東尋坊が自殺の名所であるということを聞く。それから、崖っぷちを歩いた。確かに、怖い崖だ。遠くにヨットが何艘か見えるが、頻繁に出ている遊覧船は崖の真下を通るためか見えない。しばらく歩いていると、二人は電話ボックスがあることに気が付いた。外からでも、中に「命の電話」と書いてあるのがわかる。十円玉がいくつも置いてあり、お金がなくても電話が出来るようになっている。その他にも、あちこちに自殺予防の立て札があった。二人は、この地の人々が必死に自殺予防に取り組んでいることを実感した。

崖っぷちの来た道を戻って行くと、またあの若い女性がいた。崖っぷちに立って海の方を向いている。慎吾と麗名はまた顔を見合わせた。麗名が慎吾に囁いた。
「慎吾、またあの人。まさか、自殺を考えているんじゃないよね。」
「僕も同じ気がした。とても普通の観光客には見えないよな。」

二人はゆっくりと来た道を戻った。お土産屋の通りを通って、そこで、コーヒーを飲んだ。その後、近くの公園で一休みした。今日はもう走らずにまたこの辺で泊まろうかと話をしていた。

理奈はその日、東尋坊の周りを何回も回っていた。昼食を食べたが、全く味を感じない。佐保子が飛び込んだ大池のそばにも行ってみた。「私には怖くて飛び込めない。でも、ここでいつまでもうろついていることは出来ない。」と思った。その時、ふと、命の電話に気が付いた。電話ボックスに入り、何気なしに受話器を取った。不思議なことに、お金も入れてないのに、声が聞こえる。
「もしもし。大介です。どうされましたか？」
理奈は少し変だと思ったが、救急のためにお金を入れなくても通話ができるようになっているのかもしれないと思った。思い切って話してみた。
「あの。死にきれないでいるんです。私のパートナーは昨日飛び込んでしまいました。私には怖くてできなかったのです。」
「そうですか。そうでしょう。死ぬのが怖くない人はいませんよね。」
「それでは、どうして佐保子は飛び込めたんでしょうか？」
「それは、よくわかりません。ところで、申し訳ありませんが、もう電話を切らないとなりません。もし気が向いたら、駐車場に止まっている大きな竜の絵が描いてある大型トラックに行ってください。必ず助けになると思います。」
「ありがとうございます。」
電話はそこで切れた。

理奈は大介という電話の相手が言っていることの意味はよく理解できなかった。それでも、どうすることもできずにいた。「私にはもう残されているものはない。どういう意味があるかわからないけど、大きな竜の絵が描いてある大型トラックの所に行ってみよう。」と思った。

そして、慎吾と麗名がトラックに戻った時、ドキッとした。トラックの竜の絵を眺めている人が居る。そして、その人は、あの悩んでいる様子の若い女性だったからだ。また、二人は顔を見合わせた。そして、麗名がその女性に優しく声をかけた。
「あの～。どうされましたか？」
その女性はハッとして振り返った。何も言わない。三人とも何も言えなかった。少しして、麗名がもう一度口を開いた。
「あのぉ、急に失礼しました。私たち、このトラックの運転手なんです。今日は仕事の合間の休暇でここに来たんです。」

「お二人でトラックに乗っているのですか？」
「そうなんです。こう見えても、私も運転するんですよ。私たち夫婦で交代するので、長距離も比較的楽にこなせるのです。」
「そうなんですか。珍しいですね。実は、私がこの竜の絵を見ていたのは、先程電話で話した人が大きな竜の絵が描いてある大型トラックに行ってみなさいと言うものですから。」
「どうして、私たちのトラックのことを知っていたんでしょうね。私たちは埼玉県が拠点でこの辺に来たのは初めてなんです。それで、観光でもしようかと思ったわけです。」
「それでは、どうしてあの大介さんという人がこのトラックのことを知っていたんでしょう？」
「えっ？今、大介さんと言われましたか？」
「そうです。私が先程海岸の電話ボックスで受話器を取ると、お金も入れないのに男の人の声がしたのです。その人が、大介と名乗りました。」
麗名は返答に困った。慎吾の方を向いて様子を伺っている。二人とも、この女性の様子と電話ボックスということで、命の電話の事を言っているのだと分かった。

今度は慎吾が話し始めた。
「あのぉ。僕は慎吾と言います。妻は麗名です。これは、少し信じがたい話なので、信じていただけなくてもしょうがないのですが。実は、僕たちも大介さんという人を一人知っています。僕たちがほとんど無一文で北海道から埼玉まで来るときに、大介さんと言う人が丁度このような絵のあるトラックで僕たちをヒッチハイクさせてくれたのです。ところが、一週間後にそのトラック会社に電話すると、大介さんはそれよりも何年も前に亡くなっているというのです。僕たちは、結局、そのトラック会社に就職し、大介さんへの思いを込めて、僕たちのトラックにも同じような竜の絵を描いてもらったんです。」
今度は、その女性が返答できずにいた。どうも、今聞いたことをうまく呑み込めないでいるようだ。やっとのことで、また話し始めた。
「それでは、もしかして、私の話したのは、そのすでに亡くなっている大介さんで、大介さんが私をあなた達に引き合わせたと言うのですか？」
「そうかもしれないということです。僕には理論だった説明は出来ません。」
「不思議です。その大介さんはどうして私がこんなに悩んでいることがわかったのでしょう。もう他に出来ることがないので、私のことを言ってもいいでしょうか。私は理奈と言います。」

麗名が答えた。
「理奈さん、外ではなんですから、トラックに乗りませんか。居心地のいいものではありませんが、私たちの家のようなものなので。」
「ありがとうございます。もう、どこにも行けるところはないので、お願いします。」
慎吾がハンドルを握り、理奈を真ん中に座らせ、麗名が反対のはじに座った。これは、万が一理奈がトラックから飛び出さないようにとの、麗名のとっさの判断だった。

走り始めたところで、理奈が話始めた。
「もうお気づきかもしれませんが、私は自殺をしにここに来たのです。実は、私は同性愛者で、佐保子も私も両親から反対され、親子の縁を切られました。思い詰めた私たちは、一緒に心中するつもりでここに来たのです。私には佐保子が唯一の頼れる人だったのです。それが、昨日でした。ところが、崖っぷちから飛び込もうとした時、私は怖くて、怖くて、佐保子を振り払って留まってしまったのです。佐保子は真下に落ちていったので、間違いなく死んでしまったと思います。私は途方にくれました。本当に一人になってしまったのです。佐保子を恨みさえしました。昨夜、そこの公園のベンチで眠れぬ一夜を過ごし、今日はこの辺りをうろうろしていました。その間に、あの電話ボックスで大介さんの言葉を聞いたのです。」
「そうだったんですか。なんと言っていいのか。ご両親はお二人がお互いに思いあっているのにどうして反対するのでしょう？夫の慎吾も、貧しかった私と付き合っていたことも理由のひとつで親から勘当されてしまいました。」
「そうだったんですか。それでも、お二人は、立派に生きて、私のような人を助けてくれている。そういえば、お二人はほとんど無一文で埼玉にやってきたとか。」
「そうです。埼玉県安里町に『安心～の宿』という無料の宿泊施設があるのです。そこに滞在させていただいたのです。その間に慎吾が、そのすでに亡くなっていた大介さんの紹介でこの会社に就職し、後に私も加わったのです。」
「ところで、その施設は誰でも泊まらせてくれるのでしょうか？」
「えぇ。誰でも。そこの人たちはほんとにいい人ばかりで、私たちは物凄くお世話になりました。いつも言うのですが、もう親族のいない私たちには実家のようなものです。」
「私は、死にきれず、家にも帰れず、どこにも行く当てがないんですが、その施設に入れていただけますでしょう？」
「もちろんです。当然、これは私たちが言うべきことではないかもしれないのですが、私たちはそこのことをよく知っていますから。連絡してみましょうか？」
「お願いします。」

「ところで、ここから埼玉までは丸一日の行程なので、今日はこの近くで泊まり、明日の朝早くに出発しましょうか？この近くで泊まれるところを探します。そこで、安心～の宿に連絡してみます。」
「ありがとうございます。」

この日は、慎吾と麗名はもうお互いに話もせずに三人で泊まれるところを探すことに同意していた。最初に見つけた旅館に入って、三人で一部屋を取った。これは、理奈が気が変わって自殺を図らないようにという心遣いからだった。旅館で夕食を取り、布団を三つ敷いてもらって休んだ。理奈は前の晩ほとんど眠ていなかったので、一瞬のうちに寝入ってしまった。慎吾と麗名は部屋の外に出て、少し打ち合わせをした。麗名が部屋に残り、慎吾が安心～の宿に電話してくることになった。

慎吾は義男と話した。義男はすぐに了解した。安心～の宿のスタッフは皆自殺予防の訓練を受けているので、最低限のことは知っている。慎吾と麗名のトラックは翌日の夜に会社に着く。そこで、安心～の宿の車で、誰かが理奈を迎えに行くことにした。ただ、義男は、老年のため長距離、ましてや夜の運転は避けている。そのため、比較的最近免許を取ったばかりであるが、スタッフのモモが来ることになった。それに、女性の方が理奈にとって安心だろうと言う配慮もあった。慎吾は、途中で、会社到着予定時刻をモモに連絡し、時を見計らって、モモが会社に来るという計画を立てた。

翌日は早朝の出発だった。理奈は問題なかったが、また麗名がなかなか起きられずに、出発時間が若干遅れた。トラックの中で、麗名は理奈に謝った。昼食と２回のトイレ休憩を手短にしただけで、三人は一気に埼玉の会社へ着いた。その時までにはモモが車で来ており、モモと理奈はその車で安心～の宿へ向かった。理奈は車の窓から重ねて慎吾と麗名に礼を言った。

１２．大型トラック無料便乗サービス

ある日、麗名は運転中の慎吾に話しかけた。
「慎吾、理奈さんどうしているかしら。」
「どうしてるかなぁ。モモさんたちがいるから大丈夫だと思うけど。」
「そうね。私、考えたことがあるんだけど。私たち、せっかくいろいろなところへ行くわけで、もう少し積極的に、ヒッチハイクをしたい人たちを乗せてあげられないかしら。」
「それ、僕も考えたことがある。トラックの横に宣伝するとか～」
「それは、ちょっとまずいかも。ヒッチハイクってほんとは非合法なんじゃない？」
「そうだったけ。僕は昔からあまり規則に従わないタイプだったからな。あの、最初の頃の湖畔のデート覚えてる？僕が使ってないボートを引っ張り出したら、麗名はかなりためらっていたよね。」
「それはそうよ。それにね、ボートの底に穴でも開いてないかとかも考えっちゃって。」
「僕はそんなことは全然頭になかったな。ところで、ヒッチハイクのことだけど、ウェブサイトを作ってこのトラックと直接結びつけられないようにして宣伝したらどうだろうか。」
「それだったら、大丈夫かもしれない。慎吾、どうやってウェブサイトって作るの？大体、私たち、あまり機械を使うタイプではないし。」
「え、大型トラックはたいそうな機械だけどね。まぁ、正直言って、僕たちは生きた化石だよな。携帯電話も持っていない人はもういないよな。」
「でも、それは、私たちいつも一緒だから要らないよね。」
「そうなんだけど。いずれにしても、この機会に少しコンピュータのこと覚えてみようか。会社の人に聞いてみようよ。」
と言う訳で、二人は新しいチャレンジに挑戦してみようということになった。

二人は運転中に時間はたっぷりある。その時間を使って、コンピュータの使い方を覚え、それからウェブサイトを作ろうということにした。まずは、会社の人に助言をしてもらって、適切なラップトップ・コンピュータを買った。これを家とトラック両方で使えるように、トラックにはコンピュータを置ける台を設置した。どこからでもいろいろなウェブサイトを見られるように、モービル・WiFi と言うものを購入した。これで、とりあえず準備は整い、二人は徐々にいろいろなウェブサイトを訪れて、インターネット

の世界がどんなものか発見した。これは、時代遅れの二人にとって画期的な出来事だった。

いろいろ調べているときに、慎吾が言った。
「もうすでに、いくつかヒッチハイクや、ライド・シェアのサイトがあるね。みんなそれなりによくできているみたいだ。僕たちもそういったものに登録してもいいね。だけど、僕たちのケースは結構特殊だよね。まず、僕たち二人とも運転する。女性の中には男性運転手一人のトラックに乗るのに抵抗がある人もいるんじゃないかな。僕たちの車にはそういった心配はいらない。ただ、一回に一人しか乗せられないよね。」
「そうね、少し特別ね。それじゃ、やっぱり、私たち、自分のウェブサイトを作ってみない？私は、全くわからないけど、どうせ急いでいるわけでもないし。」
「あぁ、いいよ。これも勉強のうちだね。」

よく様子がわからないので、とりあえず無料の簡単なウェブサイトを作れるサービスに登録しようとした。ところが、二人は、登録に必要な電子メールのアドレスさえ持っていないことに気が付いた。慎吾がいくつかの無料メールサービスを調べて、登録した。
「僕たちのメールアドレスだけど、『しんご、ハイフン、れいな、アット、何某メール、ドットコム』にしたよ。これ、他の人との連絡にも使えるね。」
そのアドレスを使って、やっと、ウェブサイト作成の登録をした。そこの説明に従って、少しずつテンプレートを変えていって、「大型トラック無料便乗サービス」というタイトルを作った。大体、一回にそのくらいで疲れてしまい、それ以上はまた今度という状態だった。

メールを見たり、ウェブサイトを作っていくのは慎吾と麗名と運転していない方が交代でするのだが、二人の会話はいつもこんな調子で始まった。
「慎吾、またパスワード忘れちゃったんだけど。教えてくれる？」
「また、忘れちゃったの？えーと、ところで、何だったけ。こりゃ、どこかに書いておかないとだめだな。」
「慎吾、私、料理とか運転とか実物があるものの方がいい。コンピュータの中身って見えないから何をしていいか分からないことが多くて困る。」
そこで、二人はパスワードを紙に書いて、ダッシュボードの下の方に張り付けておいた。二人がブラウザにパスワードを覚えさせることが出来ると知ったのはそれから何か月も経ってからだった。今度は、ブラウザのマスター・パスワードを紙に書いて貼っておかなければならなかった。

それでも、二人は何とか自分たちのウェブサイトを作成した。そこには、こんなことを書いた。

大型トラック無料便乗サービス（事前予約制ヒッチハイク）ホームページ

私たちは夫婦で交代しながら大型トラックを運転しています。そして、時折、ヒッチハイク希望の方々をお乗せすることがあります。また、古い話ですが、私たち自身、ヒッチハイクをさせていただいて大変助かったことがあります。そんな経験も踏まえ、この度、ご希望の皆さんに無料で私たちのトラックに便乗していただけるサービスを開始しました。私たち二人がすでにトラックに乗っているので、便乗できるのはお一人に限られます。それから、大型トラックとしては、おかしな話ですが、お荷物は座席に一緒に収容できる範囲にしてください。これは、仕事上、荷台を商用のスペースに限らなければならないためです。また、私たち夫婦はいつも一緒に乗っていますので、女性の一人旅でも安心してご利用できます。

このウェブサイトには私たちのすでに決まっている日程・行程が記されています。ご希望の区間があれば、そこをクリックすると、予約画面に移りますので、そこで、お名前、連絡先と、コメントを記入して送信してください。私たちの電子メールに転送されます。出来るだけ早く返信するようにつとめていますが、もし、数日たっても返信を受け取っていない場合は、お手数ですが、もう一度やり直してください。なお、私たちのトラックを見つけるのは簡単です。横にはっきりわかるような絵が描いてあります。何の絵かは、予約が成立した時にお伝えします。

また、もしご希望の日時、区間がない場合でも、将来ご希望に沿えるかもしれませんので、その場合は、このウェブサイトの下にある連絡先に電子メールを送ってください。

それでは、皆さんにお会いできる日まで。慎吾と麗名。

こんなあんばいであった。その後も、慎吾と麗名は時々、見かけたヒッチハイク希望者を乗せていた。そして、ウェブサイトを作って、数か月たったころからボチボチ予約も

入るようになった。また、後に、安心～の里のウェブサイトと相互にリンクすることにもした。当然、運転中に、ラジオに加え、ネット上のいろいろなサイトに行くことも増えた。たまたま、ネットでエコツーリズムのことを調べていたところ、ペンネームが城ヶ島慎二と言う人の小説を見つけた。その小説には、エコツーリズムのことがかなり詳しく書いてある。慎吾がそのことを麗名に言った。
「麗名、これおそらく城ケ崎慎吾さんのペンネームじゃない？内容がエコツーリズムのことだし、間違いないと思うんだ。そして、今読んでいたら、気になることがあった。この小説の中に、南米のリマ、ブエノスアイレス、そして、リオデジャネイロの街中で日本人らしい大道芸人のカップルを見たと書いてある。それも、ハーモニカと手品をやっていたとある。これって、前にラジオで聞いたカップルのことと同じじゃない。すると、多分、このカップルは実在で、もしかすると、やはり、シンゴにレイナっていう名前かも。」
「それ、気になるね。もっと、ネットで調べられない？」
慎吾は暫く調べていた。
「だめだ。何も見つからない。もう、何十年も前の話だし、大道芸人の記録なんてあまりないんだろうな。」
「そうかもしれないね。」

１３．会津若松

大型トラック無料便乗サービスの最初の予約は、紫藤初代という人からだった。東京から会津若松までの往復の行程を希望している。コメント欄によると、この人は貧困老人で、死ぬ前に一度、故郷を訪れたいというのだ。予約は本人に代わって、担当の訪問相談員が行ったと記述してある。

慎吾と麗名はどうしたものかと思った。普通のヒッチハイクは、旅人をトラックの止まる一地点から他地点に便乗させてあげればいい。今回は、そう言う訳にはいかなそうだ。そこで、連絡先になっていた相談員に電話をしてみた。
「もしもし、大型トラック無料便乗サービスの麗名というものですが。」
「あぁ、あの。連絡ありがとうございます。私は紫藤さんの相談員の宮本です。紫藤さんを連れて行っていただけますか？」
「ぜひ、そうしたいのですが、普通のヒッチハイクとは少し状況が違うと思って、相談したかったのです。」
「わかりました。紫藤さんはかなりのお年で、背中も曲がっていますが、歩くことは問題ありません。ただし、大型トラックが簡単に止まれるようなところに一人で行くのは難しいと思います。もし、この辺に近くて簡単に止まれるところがわかりましたら、私達の車で紫藤さんをそこまでお送りすることは出来ます。」
「そうですか。それでは東京側は大丈夫そうですね。それで、会津若松に着いた時はどうしたらいいのでしょうか？」
「じつは、正確には会津若松の隣の会津坂下町と言うところなのですが、そこには遠い親戚がいるようです。まだ、連絡が取れていないのですが、もしその方々が車で紫藤さんを案内してくれれば一番いいのですが。そして、もし、あなた方が一時間ほど時間をくだされば、その間に紫藤さんが故郷の様子を見て来れるのではと考えています。帰りはやはり同じ方法で、私たちが紫藤さんを自宅まで車でお送りすることが出来ます。」
「そうですか。それだったら、大丈夫そうですね。」
「ただ～、もし、向こうの親戚に連絡が取れないか、対応ができない場合、どうしたらいいかです。」
「もし、一時間程度であれば、向こうでタクシーを頼んでご希望の所を回ってもらうという可能性もありますが。」
「そうですね。それは、いいかもしれません。いずれにしても、一両日中に向こうの状

況をお知らせしたいと思います。こちらの電話でいいですか？」
「はい。これは、私たちのアパートの電話です。」

二日後に、相談員のから電話があった。
「こんにちは。紫藤さんの件で、相談員の宮本です。先日はどうも。」
「こんにちは。いかがですか？」
「残念ながら、紫藤さんの唯一の親戚の方は向こうの老人ホームに入っていて助けることは出来ないようです。その他にはもう親族も友人もいないようです。」
「わかりました。それでしたら、タクシーを使いましょう。そのくらいでしたら、私たちの方で何とかします。それに私がご一緒して手助けもできます。」
「そうですか。ありがとうございます。紫藤さんもきっと喜ぶと思います。では、予約の日にお目にかかります。」
「では、その日に。」

予約当日の朝早く、慎吾と麗名は東京で荷物を積み込み、少し離れた待ち合わせ場所まで行った。そこにはすでに紫藤を乗せた軽自動車が止まっていた。皆、挨拶をして、この日の計画を手短に確認した。そして、慎吾と麗名は紫藤を二人の間に座らせて、出発した。
「紫藤さん、改めて、おはようございます。こちらが夫の慎吾で、私が麗名です。」
「慎吾さんに、麗名さん、おはようございます。今日は私のこと連れてってくれてどうも。なにせ、毎日、やーっと生きとる。いっそ死んでしまったらいいと思う。ただ、死ぬ前に一度私の生まれた所行きたいと思って。」
「すこしでもお役に立てれば。会津坂下町と聞いていますが、どのへんでしょう？」
「阿賀川沿いの、喜多方との境です。駅は喜多方の方が近いんです。そこからだったら、まだ私でもわかると思います。」
「そうですか。」

「なんせ、今となっては、一人じゃどこにも行けませんで。今いる安アパートから出るときは、近くのスーパーに行くぐらいです。そこで、一日２百円から３百円ぐらいのおかずを買って、ご飯半杯で食べるのです。今は、体もどこも悪くないのですが、どこか悪くなったら、死ぬだけです。私も、初めからこうだったわけじゃないんです。夫と浜松町の駅前で小さな蕎麦屋をやってました。ほんとに小さな土地に、ビルを建て、１階は店、２階と３階に住まいがありました。うまくいっていたんです。ところが、ある時、不動産ブームにつられて、夫が他の物件を買ってそこで２号店を出そうとしたんです。悪いことに、バブルの崩壊で２号店は開店前に失敗し、持っていた店まで取られてしま

いました。それで今いる安アパートに移ると直に、夫は都合よく死んでしまったのです。初めは、恨めしかったです。私達には娘がいるんですが、全然助けてくれません。それどころか、夫の遺族年金さえ取られてしまったのではないかと思います。どうして、私の支給額がこんなに少ないのかまったくわかりません。」
「その事は、相談員の宮本さんはご存知ですよね？」
「あの人はとても良くしてくれます。今回も、お二人の便乗サービスを見つけてくれたのです。以前に、娘のことも調べてくれました。どうやら、弁護士を使って、正式に処理されているので、私には何もできないのです。なーしてなんでしょうね。私が育てた娘なのに。」
「お気の毒です。ほんとに、どうしてなんでしょう。私は父が死んだ後、会ったことのない叔母が突然現れて、もうおんぼろの家を取り上げられてしまいました。とても悲しい思いをしました。」
「そうですか。大変でしたね。」

途中で、一回休憩をして、昼過ぎに会津若松に着き、まず仕事を片付けた。そして、そのまま喜多方に出向いた。町役場の駐車場にトラックを止め、近くのラーメン屋で昼食を取った。この辺はラーメンで有名なところだ。その後、慎吾はトラックに残り、麗名が紫藤と一緒にタクシーに乗り込んで、紫藤の故郷へ向かった。途中、何回か道を間違えた。紫藤によると、記憶が薄らいでいるところに、かなり様子が変わってしまったので、思ったよりも難しいと言う。それでも、川や橋の位置は変わっていないようで、どうにか紫藤の生まれ育った家にたどり着いた。紫藤は感慨深げに眺めている。言葉遣いも変わった。
「確かに、ここだ。おらはここで生まれ育った。おらい（家）は少し変わっているがもしれん。げんども、ここだ。今は知らん人が住んでるんじゃろ。この裏さ川がある。
行って良いがな？」
「どうぞ。一緒に行きます。」
「ここで、よう遊んだ。みんなで遊んだ。川で泳いだ。ほら、あそごさ井戸があるじゃろ。夏でも冷でえ水が出た。今はもう使っておらんようだべ。」
紫藤は懐かし気に子供の頃を思い出していた。その辺を３０分ほど歩いた。
「どうも。気が晴れだ。」
「それでは、戻っていいですか？」
「はい。」
二人は待たせてあったタクシーに乗って、慎吾の待つトラックに戻った。

東京へ帰る途中、紫藤はまた話し始めた。
「私は、末っ子で、隣町の良い家の息子、仁助と縁組されたんです。仁助は跡取りだったんだが、農家を嫌がり、東京に出てしまった。それで、私も一緒に行ったんです。初めは北千住で、長屋暮らしをしていたんです。それから、やっとの思いで、お金を借りて、浜松町にあった壊れんばかりの蕎麦屋を買ってそのまま店を続けたんです。努力の甲斐あって、ある時そこにビルを建てました。大変だったが、楽しかったんです。そのころ、私は蕎麦屋の手伝いが忙しくて、娘に十分注意がいかなかったかもしれません。娘は、よく店に来て店の中を行ったり来たりしてました。そして、高校生と時、突然妊娠してしまったんです。夫はカンカンでした。私は気が動転してどうしていいかわからない状態でした。娘はもうその彼とは付き合っていなかったんですが、子供は生みたいと言います。どうやって育てるのかと問いただすと、はっきりした答えはありませんでした。私達は子供を育てるのだったら、完全に自力で育てなさい。家に居たいのだったら中絶しなさいと言いました。娘にはどちらも嫌だったようです。まだ自力で生活することのできなかった娘は、中絶をしました。その後、娘の様子はすっかり変わってしまいました。すべて投げやりになってしまったんです。そして、高校を卒業する前に、新しい彼氏の所に行ってしまいました。はっきりしないんですが、その彼氏はかなり年上で、それなりに収入もあったようでした。が、あまり良い人とは思われませんでした。それは、娘が時折うちに帰ってきたからです。と言っても、私達に何を打ち明けるでもなく、相談するでもなく、自分の部屋に閉じこもり、そして、しばらくすると、またその彼氏、だと思うんですが、の所に出て行くのでした。もう、ずっとそんな感じでした。そして、前にも言ったように、店を取り上げられて、私達はアパートに移ったのです。」

慎吾と麗名は黙って聞いていた。紫藤が言葉を終えても何を言っていいかわからなかった。三人が朝出かけた地点に戻ると、相談員の宮本が待っていた。
「慎吾さん、麗名さん、今日はほんとにありがとうございました。私は故郷に行くことが出来、これで、心置きなく死ぬことが出来ます。ごきげんよう。」
「紫藤さん、話を聞かせていただいてありがとうございます。どうぞ、お気を付けて。宮本さんもお元気で。」

慎吾と麗名は黙って会社に車を戻し、アパートに帰る所だった。
「麗名、今日はここの飲み屋で一杯やっていいかな？」
「うん。私も、少しお供するね。」

１４．秋田

ある日、大型トラック無料便乗サービスのウェブサイトに予約が入った。それは、一週間後の秋田から東京までの区間だった。連絡先とコメントを見たときに、麗名は何かに気が付いた。
「慎吾、この予約なんだけど、鹿野内美夜子と言う人だよ。そして、お金がないと書いてある。これ、あの、私の父の家を取り上げた叔母と同姓同名なんだけど。そして、鹿野内もこの漢字の美夜子も珍しいでしょ。私は、この人、あの叔母に違いないと思うんだけど。私たちのウェブサイトは慎吾と麗名としか書いてないし、おそらく、伯母は私たちのこと気が付いてないか、覚えてもいなんじゃないかしら。」
「そうかな。もし、その人があの叔母さんだったら、麗名、どうする？僕たち、ごくまれに便乗を断ったこともあるよね。例えば、爆発物を運びたいとかの時。」
「私にはどうしていいか、わからない。当然、あの人のことは良く思っていない。だけど、今はもうかなり忘却の彼方と言う気もする。私、慎吾との生活があまりに幸せで、今は、他の人が苦労しているのを見るのが辛い。そういう意味では、この依頼も私たちの全く知らない、一人のお金のない人と見るのが正しいのかもしれない。」
「確かに、そういう考え方もあるな。じゃ、もう少し考えて、一両日中に返事をしようか。」
「うん。考える。」

最終的には、二人は、叔母を乗せようということにした。その時にどういうことになるか、全く予想できなかったが、麗名の言ったとおり、知らない、一人のお金のない人として対応しようということになった。秋田に行くに際して、二人は他に会ってみたい人が居た。この人はある本で紹介された人で、自殺の多い秋田でその予防に力をいれているというのだ。会社に相談して、秋田での一日休暇をもらった。

この、全国的に知られている秋田の人は、加藤房雄と言った。慎吾と麗名はあの東尋坊の経験依頼、自殺の予防のことに注意してきた。一日は、安心～の里での講習に参加したこともある。その時に、この人のことが話題になったのだ。慎吾と麗名は次に秋田に行くときに皆を代表して会ってくると約束した。その後は、ネットでも情報を収集した。

加藤は彼の作った非営利団体の事務所で会ってくれるこになった。
「加藤さん、始めまして。石館慎吾と麗名です。今日は時間を作ってくれてありがとう

ございます。」
「慎吾さんに麗名さん、よく来てくれました。お二人は安心～の里の皆さんを代表して
ということですが、こちらでも、安心～の里のことは話に上がりますよ。この辺にも同
様の施設があれば、私達の仕事ももっとやりやすいと思いますよ。私自身、もしそう
いった施設があったら、自殺することを考えずに済んでいたかもしれません。」
「そうですか。僕たちも北海道からほとんど無一文で出てきたのは安心～の宿の創始者
にお会いしたことが切っ掛けでした。もし助けていただかなかったら、今頃、熊の餌に
なっていたかもしれません。」
「それは、いけません。いずれにしても、どうして自殺が後を絶たないか、これは重要
な社会問題です。動物の世界では、寿命を全うしようとしているもの、あるいはけがや
病気でそれ以上生存が不可能なものを除いて、自殺をしようとはしないんじゃないで
しょうか。それなのに、人間社会では、自殺は増えています。これは、日本だけではな
くて、差はあるにせよ、どんな国でもあるようです。そして、ここ秋田は残念ながら、
悪条件がそろっていて、かつては自殺日本一の悪名を着せられました。私達の努力もあ
り、今は少しは改善していると思います。それでも、まだまだ、ですが。」
慎吾と麗名は彼らの東尋坊での経験を話した。加藤が尋ねた。
「そうだったんですか。その後の理奈さんはどうしていますか？」
「僕たちが聞いたところでは、とりあえず落ち着いているそうです。宿のスタッフとの
対応は普通だということです。まだ、先のことを考えるところまでは行っていないと
言ってました。」
「そうですか。ところで、自殺予防の関係者は皆実行することですが、私達の第一の道
具は傾聴です。まず、相手の話をとことん聞く。ただし、その間に一つだけ注意しなく
てはならないことがあります。相手の人がすでに自殺の過程を開始しているか、もしく
は今にも開始しようとしている場合です。そのような気配があった時は、傾聴と同時に、
即座に実行を阻止する手段を講じます。そして、十分に傾聴している中から、もし、相
手が必要としている情報あるいは資源が判明したら、相手の人がそれらを得られるよう
に補助します。いずれにしても、世の中が安心でないから自殺が起こると思います。そ
れは、安心～の里のしんごさんとれいなさんが生前仰っていたことと同じです。あっ、
失礼しました。お二人はもう自殺予防の訓練を受けられているのに、こんな初歩的なこ
とを言ってしまいました。」
「いえいえ。私たちはまだまだ未熟です。加藤さんは実際に相当の数の人と話をされて
いるから言えることだと思います。」
「恐縮です。それでは、この事務所の他の人も呼んできますから、お茶でも飲みながら
話をしましょうか。」

加藤は事務所の数人を呼んできて、皆の経験を分かち合った。最後に、麗名と慎吾は丁寧に礼を述べて、安心～の里の人々にも伝えると言った。皆、連絡を続けることを約束した。この時は、慎吾と麗名は電子メールのアドレスも残した。

その日の残りの時間、慎吾と麗名は急いで駅前に行き、市内観光のバスに飛び乗った。観光バスに客として乗るのは初めてだった。今は寒くもない、暑くもない季節だが、秋田の冬も長く、暗い。ある意味では二人の故郷とも共通する。そんな中、なぜか、自殺は春に多いと言う。寒さに閉じ込められた人々が春の暖かさを感じていく中、春になっても暖かさがやってこない人たちもいると言うのだ。そんな時に、うつ状態になりやすいし、症状が進めば、自殺を考えることもある。それに対して、慎吾と麗名の一緒に過ごした最初の春は経済的な苦境にも拘わらず、二人の間に限りない暖かさがあった。希望があった。

慎吾と麗名は休暇ということもあり、秋田の情緒ある旅館に泊まった。ゆっくりと夕食を食べ、家族風呂につかり、部屋で二人だけの時間を持った。そして、翌日は鹿野内美夜子と会う日だった。この日も麗名はなかなか起きられず、しょうがないので、慎吾は布団をはがしてしまった。今度は、麗名は寒くなると、寒いと余計起きれないと言う。困った慎吾は、麗名の体に巻き付いて温めてやった。

二人は急いで朝食をとり、待ち合わせの場所へ向かった。そこで待っていると、かなり年の女性がトラックを見つけてやってきた。慎吾も麗名もはっきりとはそれが麗名の叔母であるとは認識できなかった。もともと、父の死後に一回会ったきりであった。二人は美夜子を座席に乗せた。車が走り始めると、美夜子が言った。
「ありがとうございます。私は自分の財産を使い果たしてしまい、どうすることもできずにいました。身寄りもなく途方にくれていたのですが、何年も前の話を思い出したのです。確か、姪っ子が東京の方へ行ったということを思い出したのです。これから東京に行き、その姪っ子を探して世話になろうかと思っているのです。」
麗名は、ここまで聞いたとき、嗚咽に近い感覚を覚えた。もう、どうしていいかわからなかった。慎吾もそれを察したようである。
「あの～、申し訳ないんですが、ちょっとトラックの様子がおかしいようなんです。次のサービス・エリアで調べてもらうため、立ち寄ります。」
もう麗名は真っ赤な顔で怒りをこらえているのがわかる。５分も経たないところにサービス・エリアがあった。そこで、二人は美夜子には休憩所でお茶を飲んでいてもらうように頼んで、車をガソリンスタンドの方へ動かすふりをした。

美夜子をおろした途端に、麗名が泣き出した。美夜子は麗名のただ一人残された親族である。麗名の父が遺したバラック寸前の家を麗名から取り上げた人である。その人が、今しがた、麗名の横の席で、麗名を探し当てて世話になるつもりだと言ったのだ。その麗名が横に座っている人と知ったらどうするであろうか。そして、実の麗名を目の前にして認識できないような人がどうやって広い東京近辺でその人を探し出そうと言うのか。美夜子からは麗名と言う名前さえ出ていない。それに、どうやって、あのウェブサイトから予約が出来たのか。まさか、わかっていて芝居を演じているのだろうか。あるいはすべてが嘘なのであろうか。

麗名は、慎吾と一緒に様々な人々に会ってきた。それらは皆他人であったが、一概に皆良い人間だった。良い以上だろう。それなのに、この身内の人間だけが悪人に思えた。あまりのショックで麗名は泣き止むことが出来ない。慎吾もどうしていいかわからなかった。
「麗名、思いっきり泣いていいよ。こんなにひどいことはない。僕は美夜子さんの所へ行き、何時間かかるかわからないと言ってくるよ。」
麗名は泣きながらうなづいている。

慎吾が戻っても麗名はまだ泣いている。
「美夜子さんは何時間でも待つと言っている。」
実際、麗名はその後、何時間も泣いた。

昼も過ぎ、午後にかかったころ、麗名が初めて口を開いた。
「ごめんなさい。慎吾はどうしてそんなに優しいの？私の叔母はどうしてあんなに醜いの？」
「麗名、今そういう比較しているときじゃないよ。少しは落ち着いた？さっき会社に電話したんだ。個人的な緊急事態でもう一日休暇を伸ばしてくれと頼んだ。だから、明日の朝に出ればいい。」
「ありがとう。多分、少し落ち着いたと思う。今まで、頭の中がごちゃごちゃだったの。」
「あぁ、無理もないよ。僕が麗名の立場だったら、叔母さんのこと首根っこつかんで投げ飛ばしてたよ。刑務所行きだろうな。流石に麗名はよくこらえたよ。」
「ほんとに、どうしたらいいのかしら。キャンセルしてもいい？」
「いいよ。もし、そうしたいなら。他には何か考えた？」
「うん。いろいろ。東京に行けるだけのお金をあげるとか～。私たちの素性を打ち明けて直面するとか～。私だけ電車で帰るとか～。私は後ろの簡易ベッドでヘッドホンかけ

て病気のふりをするとか～。どれも名案とは思えない。」
「そうか～。例えば、これは難しいかもしれないけど、麗名が美夜子さんだったとしたら、どういうことを考えると思う？」
「あまり、考えたくない想定だけど。まず、あてのない親類を探しに全く馴染みのない東京なんかに出ようとは思わないでしょ。あの、武良さんは会ったことはなくても、ちゃんと父親の連絡先があったからああやって岩手まで出かけて行ったわけで。だいたい、東京のどこで降ろしてあげればいいの？すでに、この便乗サービスがどこか泊まれる所へ連れて行ってくれると思っているのかしら？どう考えても、私だったらしないことだ。」
「そうだろうな。それじゃ、時間は出来たから、僕がちょっと探りを入れてこようか。麗名はここに居てね。また話を聞いて気分が悪くなってしまうと可哀そうだから。」
「ありがとう。そうしてくれる？」

と言う訳で、慎吾が一人で美夜子の待っている休憩所に戻った。
「美夜子さん、時間がかかって申し訳ありません。未だどのくらいかかるかわからないんですが、ちょっと様子を見に来ました。お疲れだと思いますが、大丈夫ですか？」
「私も年だし、確かに少しばかり疲れてきました。」
「何か食べるものを持ってきましょうか？」
「でも、私はお金がないもので。」
「今回は僕が買ってきますよ。お待たせしてしまっていますので。」
「すいません。それでは、そばを一杯お願いします。」
「天ぷらか何かのせますか？」
「いえ、かけで結構です。」
慎吾はかけそばを買って、持ってきた。
「はい、どうぞ。」
「ありがとうございます。」
「それで、ちょっとお聞きしたいのですが、東京へ着いた時にどこで降りたいのですか？」
「そうですね～。どこがいいんですか？」
「あのぉ、僕たちは便乗者の降りたいところで降ろしてあげるだけですので、降り場所が決まっていない場合には、申し訳ありませんが、お連れすることは出来ないのですが。」
「そうなんですか。それは知りませんでした。でも、そんなことは言わないで連れて行ってくださいな。」

「どこへ連れて行けばいいんですか？」
「東京のどこでもいいんです。」
「ところで、東京の方で、姪っ子さんを探すと言ってましたが、その人のお名前はご存知でしょうか？」
「それが、はっきり覚えていないのです。なにしろ、だいぶ前のことでしたから。」
「そうですか。それでは、その姪っ子さんを探す何か手掛かりになることはあります？」
「旧姓が私と同じ鹿野内と言うことです。ただ、確か北海道を出るときにはもう結婚していたと思います。旦那さんの姓はわかりません。でも、もし、その姪っ子に会えば、分かると思います。」
「そうですか。その姪っ子さんもここ秋田に居たのですか？」
「いいえ、北海道です。私の兄が死んだときに北海道まで行って、世話をしてあげたのです。それなのに、何の知らせもなく居なくなってしまいました。」
「それから、どうやって、僕たちのウェブサイトで予約したのですか？」
「えぇ？エブサイトって何ですかね。予約は旅行会社でしてもらいましたけど。これだったら、ただでええということで。」
「そうですか。では、また、トラックの状況を調べてきますので、申し訳ありませんが、もう少しここで待っていてください。」

慎吾は美夜子との会話の一部始終を麗名に話した。麗名は明らかに不快な表情を示していた。
「慎吾、残念だけど、私にはどうしようもない。いずれにしても、叔母には間違いない。弱ったな～。」
「麗名、これ以上伸ばしてもいい案は出てくるとは思えない。だけど、僕たちの出発はもう明日の朝になるから、トラックをここに残して、三人で近くの宿で泊まらない？今日は東尋坊の場合と違うから、二部屋取ろうよ。どう？」
「そうしようか。」

そこで、三人はタクシーを呼んで、一番近いビジネスホテルに行って、泊まることにした。具合が良くないということにして、麗名は先に部屋に引き上げ、慎吾が美夜子に夕食を食べさせた。美夜子を彼女一人の部屋に送った後、慎吾が麗名に食べ物を持って行った。
「麗名、とんでもないことになっちゃったね。でも、僕たち出来ることはしているよね。」
「そう思う。慎吾、ほんとに辛抱強く対応してくれて、ありがとう。今日はもう休もう

ね。」
「あぁ。そうしよう。」

翌朝、どういう訳か麗名が慎吾と同時に眼を覚ました。そして、こう始めた。
「慎吾、私、夢を見たの。大介さんが出てきた。そして、こんなことを言ったの。」

「慎吾さんに麗名さん、相変わらず頑張っているね。そして、今回は随分難しい場面のようだね。お二人は、もう、いろいろな人を助けて来たよ。今回はオレがほんの少し手伝おう。三人でトラックに戻る時に隣のトラックを見てごらん。オレのトラックだ。竜の絵があるトラックが二台並ぶのは壮観だろう。オレがその老女を東京まで連れて行ってあげよう。後のことはすべてオレに任せてくれ。決してその老女に悪いことはしない。オレの全力を尽くす。ただ、もうオレの姿をお二人に見せることは出来ない。これは約束だ。その老女には代替のトラックが来たから乗るように言ってくれ。」

「麗名、それは夢じゃないよ。ほんとに大介さんだよ。僕も同じことを聞いたんだ。大介さんにはお世話になってばかりだが、今日も助けてもらうしかないだろう。信頼できる人だ。僕たちの出来ることはしたんだ。」
慎吾と麗名は、美夜子と一緒にタクシーで、トラックまで戻った。麗名は相変わらず何も喋らない。トラックまで来ると、大介の言ったとおりにもう一台竜の絵のあるトラックが隣に止まっている。慎吾と麗名は顔を見合わせた。慎吾は美夜子に言った。
「あぁ、良かった。美夜子さん、代替えのトラックが来ました。こちらのトラックで東京まで行ってください。」
「それは、それは、どうもありがとうございました。ごきげんよう。」
「では、お気をつけて。」

美夜子は大介のトラックに乗り込んだ。そして、大介は全く姿を現さずに走り去った。慎吾と麗名はまだ信じられないという様子で、ポカンと立っていた。そして、麗名がポツンと言った。
「大介さん、どうもありがとう。」
あんなに苦労したのに、あまりにあっけない結末だった。二人はもう美夜子に出会うことはないだろう。二人は、これで良かったとは到底思えなかった。ただ、仕方がなかったというのが正直なところだろう。あれだけ暖かく周りの人々に接してきた麗名にも限界はあったのだ。

１５．沙織

これは便乗サービスの予約ではなく、問い合わせであった。ある高校生が埼玉から京都に修学旅行へ行く資金が足りない。行きと帰りの修学旅行に行く新幹線の代わりになるトラック便がないかという質問であった。これを見たとき、麗名は自分の過去を思い出し、非常に同情した。
「慎吾、この子、まるで私の高校の時みたい。可哀そう。」
「そうだな。この子に対する僕たちの簡単な答えは、僕たちは京都、いや原則として西日本に行くことはないということだけど。ただ、そうだけは言えないような気がする。」
「私たち、今は経済的にゆとりもできて、この子の修学旅行費用を払ってあげることだってできる。それは、はっきり言って、私たちには簡単なことよね。」
「そうだな。そうしたい？麗名にはこの子の状況を見逃すことは出来ないだろう。」
「確かに、慎吾は私の気持ちをよくわかっている。慎吾はわかりすぎて、私のために修学旅行に行かなかった。そして、私たちだけの修学旅行を作ってくれた。おかげで、私たちは幸せになれた。でも、慎吾みたいな人がどこにでもいるわけではない。多分、この子にそういう人が居るとは思えない。そして、日本中にそういう子供たちがどのくらいいるだろう？世界中にもっと貧しい子供たちがどのくらいいるだろう？多分、安心～の里のしんごさんとれいなさんは、世界中歩いて、私たちよりも広い視野を持っていたのだと思う。だから、安心～の里のような施設を作れたのだと思う。」
「そうだね。いつも凄いと思うよ。で、僕たちはどうしたらいいのだろう？」
「私の疑問は、この子だけを修学旅行に行かせてあげて、他の知らない子供たちに同じことをしてあげないのは罪かなということ。」
「罪な訳はないよ。それに、安心～の里のしんごさんとれいなさんの言ってたということがあるじゃない。安心～の里はほんとは不必要だって。世の中が安心ではないからあるんだって。真の解決策は世の中が安心の世になることだって。あの二人はそれをわかっていながら、それでも安心～の里を作った。出来ることをしようとしたんだと思うよ。僕たちだって、出来ることから始めるのは一向に悪いこととは思わない。」
「そうね。じゃぁ、この子と連絡とってみていい？」
「もちろん。」

その高校生の連絡先には家と思われる電話番号が書いてあった。コンピュータは学校のメディア室でしか使えないので、電子メールは便利ではないと書いてある。名前は尾ノ

後瀬沙織と書いてある。麗名は、依然ためらいがちに電話してみた。若い女性が出た。
「もしもし、私は、大型トラック無料便乗サービスの麗名と言うものです。尾ノ後瀬沙織さんとお話ししたいのですが。」
「わたしです。それ、私の問い合わせについてですか？」
沙織の声は期待しているように聞こえた。
「そうです。ただ～、残念ながら、私たちは西日本方面には行かないので、京都に希望の日々にトラックに便乗することは出来ないのです。」
「そうなんですか。」
沙織は明らかにがっかりした様子だ。
「ただ、沙織さん、実は私自身、高校の時、北海道から東京への修学旅行に行けなかったので、沙織さんのことが気になって。近くなので、お会いできませんか？」
「何か、いい考えがあるのですか？」
「いえ、今はっきりしたことは言えません。ただ、まず、あなたにお会いして、話をしたいと思ったのです。」
「わかりました。お願いします。」
二人は沙織の家に一番近い駅の前の郵便ポストの所で待ち合わせをした。

待ち合わせの日が来た。この日は、麗名だけで出かけた。二人はすぐにわかり、近くの喫茶店に入った。
「沙織さん、会ってくれてありがとう。」
「麗名さん、ここまで来てくれてありがとうございます。」
「便乗サービスの問い合わせでは、修学旅行の費用が出せないと。」
「そうなんです。うちは母子家庭で、母は近くのスーパーで毎日長時間働いているのですが、なかなかお金にならず。そして、一番大変なのは、弟の病気なんです。数年前に小児白血病になってしまって、手術、放射線治療、化学療法と立て続けに受けたため、治療費が山積みで、借金もあるんです。どんなに日々の生活を切り詰めても、無理のようです。もし、トラックに便乗して、京都の往復ができれば、あとは何とかなると思ったのですが。」
「そうですか。お気の毒です。私も高校の時は苦労しました。そして、修学旅行は行けませんでした。ところが、それが切っ掛けで今の夫と結婚することになったのです。」
「その頃の話を聞かせてもらっても良いですか？」
麗名は、簡単に身の上話をした。
「そうだったんですか。なんだか、私の今の状況のようですね。ただ、一つ、全く違うのは、慎吾さんの存在でしょうか。お幸せになれて良かったですね。私には、そのよう

な人が居ないし、できそうにもありません。」
「私も、修学旅行の当日まで途方にくれていたんです。その日の朝、慎吾から突然電話があって。その時、初めて慎吾と話したのです。」
「それでは、私にも同じようなチャンスがあるかもしれないと言うのですか？」
「それは私にはわかりません。それより、私は、沙織さんが修学旅行に行ければそれが一番いいと思っています。」
「私も、それが一番いいと。」
「沙織さん、私、慎吾にも相談したいことがあるので、また、今度会ってくれますか？」
「もし、何かいい考えがあるのでしたら。」
「では、また電話します。」
それで二人は別れた。

アパートに帰って、麗名は慎吾に言った。
「慎吾、この沙織さんの状況って、ほんとに私の高校の頃を思い出す。そして、どうやら、彼女にとっては、慎吾のように突然救ってくれる人が現れるのを期待するのは難しいようだし。私はどうしても沙織さんに修学旅行に行って欲しい。」
「よくわかったよ。こういうのはどうかな？麗名が沙織さんに必要な費用を貸す。ただし、返済は出世払い。将来できるときに、沙織さんの希望の人なり団体に寄付をしてもらう。」
「うん。それ、いいかもしれない。ほんとは私なんかが出てこないで、匿名でお金をあげられた方が良かったのかもしれない。でも、私も沙織さんの話を聞きたかったし。」

麗名は沙織に電話して同じ喫茶店で会った。
「沙織さん、今回は提案をしたくて来ました。」
「どんな提案でしょうか？」
「これは、私たちが勝手に考えたことなので、沙織さんがどう思われるか。私が、修学旅行に必要な費用をお貸ししたいと思うのです。そして、返済は、沙織さんが将来できるときに、ご希望のところに寄付をしていただくという考えなのですが。」
沙織の顔に明るさが見えた。
「えっ！！ほんとですか？お金を貸してくれるのですか？それも、返済期限なしで？」
「そう考えているんですが。」
「それは、想像もしていなかったことです。ありがとうございます。ありがとうございます。」
「もう一点、このことは他の人には公表はしないでいただけますか？」

「もちろんです。ありがとうございます。」
その後、沙織が麗名に沙織の母親の銀行口座番号を教え、麗名が振り込みをするということになった。麗名には沙織の母親からも丁寧なお礼の電話があった。

修学旅行の終った頃、麗名に、沙織から電話があった。
「麗名さん、ほんとにどうもありがとうございました。とっても楽しかった。そして、自由行動の時に同じ班になった男の子をちょっと気に入ってしまいました。お土産買ってきたんですけど、八つ橋です。また、会ってくれますか？」
「沙織さん、良かったわね。じゃ、今度の金曜、またあの喫茶店でいいかしら。」
「えぇ。では、金曜日に。ありがとうございました。」

金曜に喫茶店で会った時、沙織はすごく明るかった。麗名も嬉しかった。
「麗名さん、京都きれいだった。私、旅行という旅行はしたことがなかったので、実は東京駅に着いた時にもうすごく感激してしまって。旅行中ずっと興奮状態でした。旅館での夜もあまり眠れないくらいで。帰ってきてからは１８時間連続で寝てしまいました。」
「楽しんできて、ほんとに良かった。私はまだ京都に行ったことないの。今度、沙織さんに案内してもらおうかな。」
「わ～！一緒に行きたい！」
「私はね、北海道で観光バスのガイドになった時、家から５キロか１０キロくらいしか離れていないところに有名な摩周湖があったんだけど、バスのガイドとして初めてそこに行ったの。観光客より私の方が興奮しちゃって。」
「麗名さん、可愛いい。」

それからは、沙織は麗名を慕ってよく電話をしてきた。そして、何回か慎吾と麗名のトラックに便乗してドライブを楽しんだ。

１６．北海道と京都

ある日、慎吾のところに北海道の母から電話があった。慎吾の居所は興信所で調べてもらったと言う。父が亡くなったので葬儀に出席して欲しいという内容だった。慎吾の両親は慎吾が大学受験を拒んで麗名と結婚したのを機に縁を切っていた。慎吾は複雑な気持であった。親に対する純粋な愛情はもうほとんどない。慎吾の家族愛と言えるものは麗名が一手に引き受けていた。慎吾は麗名に相談した。
「麗名、僕は、はっきり言って、父の葬儀に出席したいとは思わない。ただ、母からこうやって頼まれたのに、断ると言う訳にもいかない。」
「その気持ちはわかる。でも、行くしかないみたいね。行ってらっしゃい。残念だけど、私は慎吾の家族の前に出るわけにはいかないし。」
「そうかなぁ。一人で行くしかないかなぁ。麗名と別行動は寂しいよ。」
「それは私も同じ。だけど、一か月も別に暮らしたことだってあるんだし。一週間以内だよね？」
「うん。それ以上は行くつもりはない。」
「行ってらっしゃい。ねぇ。この際に携帯電話買わない？」
「そうだな。生きた化石から脱出かぁ。確かに、便利だよな。特に、二人が離れているときは。」
二人は早速携帯を２台買い、会社の人に教わって、ビデオ電話が出来るアプリを入れた。慎吾はすぐに旅の計画を始めた。それと同時に麗名には別の考えもあった。
「慎吾、慎吾が行っている間の週末に沙織さんと京都に行ってもいい？」
「あぁ。それはいいアイデアだね。沙織さん、気絶するほど喜ぶね。」
「気絶はしてほしくないけどね。」

二日後に、慎吾は北海道へ発った。羽田から網走へ飛行機で行き、そこでレンタカーを借りた。宿泊は屈斜路湖畔のホテルを取った。その間、麗名は沙織と京都へ、金曜の夕方に出て、旅館に２泊して日曜に帰ってくるという計画を立てた。当然、費用は麗名がすべて持つことにした。

慎吾は、その日の午後には屈斜路湖畔のホテルに着いた。麗名と二人で初めて埼玉まで行った行程に比べてなんと簡単で早いことかと思った。もう１５年は経っているだろう。まずは、屈斜路湖畔を歩いてみた。麗名と初めて歩いた日々が思い出される。懐かしい。そして、寂しくなった。麗名に電話してみた。

「麗名、屈斜路湖畔にいるんだよ。これ、見える？」
「見える、見える。懐かしいね～。」
「そうなんだ。だけど、寂しくなって、電話した。」
「私も一人でアパートにいるの寂しかったの。携帯買ってよかったね。」
「あぁ。ほんとに良かった。これから、レンタカーで少し町の様子を見てみるよ。また電話する。」
「今日はずっとここにいるからね。」

その後、慎吾は麗名の家のあったところへ行った。そこは、新しいが小さめの家が何件も立ち並び、麗名の家の跡形もなかった。慎吾はその様子を麗名に電話で見せた。麗名は寂しそうだった。そして、ビデオ電話をつけたまま、町の中をドライブした。あの郷土資料館や、二人で歩いた通りがあった。

翌日、慎吾は実家に行った。そこで久々に母と対面する。やはり、しっくりこない。ぎこちない。まだ、二人の間にわだかまりがあるのは明らかであった。慎吾は母をレンタカーに乗せ、葬儀社に行き最終打ち合わせをした。実は、慎吾の両親自身家族の反対を押し切って結婚しているため、親戚付き合いがなかった。それでも、母親は両家の親族に連絡はしてある。後で、慎吾は父の最後の様子を母に聞いた。父は大腸がんから転移した肺がんが死因だと聞いた。最後はやせ細り、自分の棒のようになった腕を眺めては嘆いていたと言う。それでも、慎吾に来て欲しいとは言わなかったらしい。

その夜、慎吾が麗名に電話した時、麗名と沙織は新幹線の中だった。二人は姉妹のように嬉しそうに並んで座り、何か駅弁を食べている。この日は夜になるので素泊まりにしたらしい。二人は京都駅で降りるとタクシーで旅館に向かった。翌朝は、沙織が麗名を起こした。相変わらず、麗名は起きるのに苦労している。沙織は前の夜遅くまで話をしていたせいだと思ったが、麗名から朝起きが苦手だと聞き、納得せざるを得なかった。

土曜日は沙織が修学旅行で行ったところを中心に麗名を案内した。苔寺から始め、嵐山で昼食を取り、金閣寺へと向かった。途中、麗名は慎吾に電話をしたが、出ない。麗名は今日は葬式の日だということを思い出し、諦めた。

慎吾は、母に付き添い、無事に葬式を終えた。参列者は多くはなかったが、父の仕事関係で知っている人もいた。そして、両親の親族関係の人々も何人かいたが、慎吾にはみな初対面だった。二人、慎吾のいとこにあたるという人にも会った。特に、話をするという気にもなれなかった。ホテルに戻ると、早速、麗名に電話した。

「どう？楽しんでる？」
「慎吾、さっき電話して出ない時はちょっとがっかりしたけど、お葬式の日だと思って諦めたわ。」
「もう終わって、ホテルに帰ってきた。葬式と言っても形式だけで、ほとんど知ってる人もいないし、あまり、感情も湧かない。そうだ、これからちょこっと摩周湖まで行ってこようと思うんだ。その時、沙織さんにも景色を見せてあげられと思って。」
「はい、じゃ、また後で。こちらは今、金閣寺。それから、京都御所と二条城を見れればと言っているの。ちょっと、忙しいかしら。」
「麗名は今日丸一日京都だから、ゆっくり出来ていいね。」
その後、慎吾は摩周湖の映像を二人に見せた。

日曜日、慎吾は母の相続の相談にのった。父の不動産および事業はすべて父名義になっているが、なぜか遺言を残していない。すると、相続は母と慎吾に二分されることになる。母は、できれば慎吾に相続を放棄して欲しいと言った。どうやら、これが、母が慎吾を呼んだ最大の理由のようだった。慎吾は、どうせ勘当された身であるし、相続には興味もなかったので、簡単に放棄に同意し、弁護士の所で、書類に判をついた。後で、電話した時に麗名にその事を言った。
「慎吾も可哀そう。どうして、こう、身内というのは優しくないの？」
これは、麗名の叔母のことも含んでいるように聞こえた。

京都最後の日、麗名と沙織は、駅の近くの三十三間堂、清水寺と回り、最後に京都タワーから市内を一望して、新幹線に乗った。
「麗名さん、一緒に京都に来てくれてほんとにありがとう。なんだか、麗名さんは私のお姉さんみたいな気がして。ねぇ、いっそのこと、ほんとのお姉さんになって下さい。」
「沙織さんを見ていると自分が若いころのことが思い浮かぶの。私もいつの間にか随分と年を取ってしまった。お姉さんにしてはちょっと年が行き過ぎみたいだけど。でも、私も沙織のこと、ほんとの妹と思うね。」
新幹線からJRに乗り換えた後、沙織が言った。
「私、お姉さんに刺激されて、トラックの運転手になりたいなんて思ってきたんだけど。」
「そうなの？それはちょっとびっくりね。私は慎吾がいるから運転手やっていられる。女一人だと大変なことも多いと思うよ。他の運転手からやじられたことも沢山あるし。」
「そうなんだ。でも、可能性の一つとして考えてみる。」

「それから、大型は、３年の免許歴があり、２１才にならないと試験を受けられないの知ってる？」
「知らなかった。教えてくれてありがとう。それでも、考えてみる。話は変わるけど、実は、最近、例の男の子と付き合い始めたの。修学旅行に行けたことが切っ掛けで、それに、修学旅行に行ってから少し積極的になれたような気がする。」
「沙織、良かったじゃない。陰ながら応援するね。」
「ありがとう、お姉さん。」

麗名がアパートに戻ってから慎吾に電話した。
「慎吾、明日ね。」
「そう。明日帰る。待ち遠しいよ。京都楽しんだ？」
「うん。とっても。すごく素敵な街ね。住んでみたいくらい。」
「へ～。」
「そして、妹を作ったの。沙織よ。」
「へ～。そりゃ、良かったね。」
「うん。慎吾は？」
「僕は初めての親類に何人かは会ったけど、一人もほんとの親類は作れなかったよ。結局、相続放棄をもって帰省も終わった感じだ。」
「寂しいわね。じゃ、明日気を付けてね。羽田まで行こうかな。」
「嬉しいな。じゃ、また、明日電話するよ。」

次の日、麗名は羽田で慎吾を迎えた。二人は、何年も会っていなかった夫婦のように抱き合った。

１７．浜松

慎吾と麗名の便乗サービスを利用する人達は経済的に窮地に立たされている場合が多い。しかし、すべての利用者が苦境にあるというわけではない。横浜から浜松へ便乗を予約した白岩夢見はたび重なる取材旅行の費用を軽減したいと言うのが主な理由であった。白岩は東名高速の横浜市内のパーキング・エリアからトラックに乗り込んできた。
「白岩です。今日はどうもありがとうございます。」
「こんにちは。運転しているのが夫の慎吾で、私が麗名です。今回は、浜松までですよね。」
「はい。今回の目的地は舘山寺なので、新東名のその辺で止まれる所で降ろしていただければ幸いです。そこから、歩けます。ただし、浜名湖サービス・エリアまで行ってしまうと、浜名湖を渡ってしまうことになり、ちょっと歩くのは困難です。」
「わかりました。その辺になったら、注意します。白岩さんも仰ってください。」
「そうします。」
「ところで、白岩さんは生活には苦労していないが取材にかかる費用を軽減したいと書いてありましたよね。」
「そうなんです。実は、私は作家の端くれで、まぁ、端くれの作家で経済的に恵まれている訳はないのですが、生きるか死ぬかというほどではないと言うことです。それでも、何回も取材で浜松に来るには出費がかさむので、便乗をお願いした次第です。それに、夫婦お二人で運転されていると知って安心できたし、実は、仕事柄、お二人の仕事にも興味がありまして。」
「そうですか。それは、結構ですよ。」
「ありがとうございます。ところで、今、取りかかっているのは舘山寺出身のピアニスト志望の女性の話です。こんな話なんです。」

彼女はそれなりの才能もあり、練習にも励んでいたのですが、父親が若年性のアルツハイマー病となり、失業とかさむ試験治療の費用のため生活苦に陥ります。母は、長時間働いて家庭を守ります。彼女にも高校だけは普通に卒業させてやりたいと努めました。それでも家にあったグランドピアノは売却する羽目に陥りました。彼女はピアニストの夢はあきらめますが、まだピアノのそばに居たいという気持ちから、高校卒業後は浜松近郊のピアノ工場の職工になるのです。ご存知でしょうか、浜松とその周辺は楽器の街

です。ヤマハにカワイ、二大ピアノメーカーを始め、各種の楽器製造業者が集中しています。工場では、好きなピアノを毎日目の前にしていながら、実際の仕事はピアノの鍵盤に必要なフェルトを付けて調節するだけの単純作業でした。休み時間に折を見てショウルームに置いてあるピアノを弾こうとするのですが、職工は触ってはいけないと言われます。その頃、同窓会で、同じ舘山寺出身の幼馴染みの男性に会います。彼は、中学に入るときから、事情があって浜松市街にいる親戚と同居していました。そのため、二人はその間会っていなかったのでした。そして、そこで知ったことは、この男性がやはりピアニスト志望で、中学から始めたにも拘わらず、音大のピアノ専攻に進んでいたということだったのです。彼女は羨みます。と同時に彼氏に惹かれても行きます。彼氏も彼女に惹かれるのですが、彼氏の両親は職工の彼女と付き合うことは禁止します。彼氏もそこまでして彼女と付き合おうとはせず、二人の仲はそれ以上進みませんでした。

その後、彼女はもっとピアノに触れる機会が多いと思い、調律師になる道を目指し、同じピアノ製造会社の運営する調律師学校に入ります。彼女はそこを優秀な成績で卒業し、すぐに調律師として活動し始めました。その間に、彼女は同じ学校を出た女性の調律師と仲良くなります。それが、友達以上の関係になり、彼女は自分が男女ともに惹かれる両性愛者だと気付くのです。二人は同棲します。同時に、彼女は徐々に調律師としての経験を積み、浜松では最も優秀な調律師の一人として認められていきます。そして、いずれは調律師として最高の地位である、有名ピアニストのコンサート調律師として働くことを夢見ます。

その夢を追い求め、彼女は悲しがる相棒の女性を残して、東京に出てコンサート・ホールに仕事を探します。また、何人かの有名ピアニストにも直接接近し、試して欲しいと頼みます。しかし、こちらの方はなかなか希望通りにはいきませんでした。実際には普通の調律師としての仕事で生計を立てなければなりませんでした。それでも、彼女は諦めず、希望を捨てません。そして、ある時、名の知れたコンサート・ホールから連絡があり、専属のコンサート調律師が急病で予備の人も旅行中のため、代わりを務めて欲しいと依頼されます。

そこに出かけて行った彼女はびっくりします。その時のピアニストは、あの彼氏だったのです。彼氏は、彼女を見てかつての欲望が蘇ります。彼氏は、彼女と別れて以降ピアノ一本やりで、女性とは付き合っていませんでした。彼女がコンサート調律師になっていたので、もはや家族からも反対されないのではと思います。彼氏と彼女は再び付き合い始めます。暫く経って、コンサートの後のパーティーに彼女の浜松の同性愛の相棒が突然現れます。相棒は彼女が東京でこのピアニストと付き合っていることに嫉妬し、

パーティーの場で、彼女の同性愛関係を暴露します。彼氏は悩みますが、そこに居た彼氏の家族が怒って、再び彼氏の付き合いを禁止します。

その頃、彼女の父はなくなり、母も膵臓ガンを告知されます。愛する男女を二人とも失った彼女は、舘山寺に戻り、母の面倒を見始めます。数年後に母もなくなり、彼女は一人残されます。すべての夢を失い、その後の希望がありませんでした。毎日、浜名湖の湖畔を無意味に歩いていました。そこで、彼女はまた彼氏に遭遇します。彼氏は実家に戻っていると言います。その理由は、交通事故で右手を怪我してピアニストとしての活動は完全に停止したからだと言うのです。東京でピアノ教師としての仕事はあったらしいのですが、うつ状態に陥って、親元に戻ってきたと言うのです。二人は、共に希望の人生を失い、慰めあいます。ピアニストとしての人生が終わった彼氏に対する両親の対応はあまりよくありませんでした。どちらかと言うと、邪魔者扱いにするのです。彼氏は今までの成功から、それなりの貯蓄はありましたが、それで何をするというあてもありませんでした。

それから、彼女と彼氏は毎日湖畔を連れ立って歩くようになります。そして、二人の間にはお互いに対するかつての愛情が蘇り、彼氏が彼女の家に同居するようになります。そして、次の彼女の誕生日に彼氏はグランドピアノをプレゼントしたのです。彼女はもう忘れていた、ピアノを弾くことに対する情熱を取り戻しました。彼氏は彼女の専属の教師として彼女を鍛えました。彼女は徐々に昔の感覚を取り戻し、何年か経つと、彼氏も認めるほどの才能を発揮したのです。

彼氏に連れられて、彼女は舘山寺温泉近辺にあるいくつかのホテルに足を運び、ピアノを弾くサービスをすると申し出ます。あるホテルの支配人が、無償で暫く試しをする気があるのだったら受け入れると言いました。二人は了解して、彼女はそのホテルで、毎日のように、かなり長い時間ロビーのピアノを弾くことにしました。普通は静かなバックグラウンドのようなピアノ曲を、時には難度の高いクラシックを取り交ぜたりしました。次第に、このホテルは彼女のピアノで知られるようになり、支配人は彼女と正式に契約を結ぶことにします。

ある日、たまたまそのホテルに保養に来ていた人が居ます。この人は、世界中で活躍する著名なピアニストでした。ロビーでくつろいでいる時に、彼女の演奏に気が止まります。普通のホテルのピアニストではないと感じます。そして、彼女の演奏に、この著名なピアニストがかつてピアノ・コンクールで競った相手のピアニストの技量を聞きつけます。滞在中の著名なピアニストは彼女と所へ来て、教師は誰かと聞きます。彼女は彼

氏の名前を言うと、この著名なピアニストは「やっぱり」と言います。聞いていて分かったと言うのです。そして、彼女に東京に来てピアニストとして一緒に活動をしないかと誘います。同時に、彼氏にも会いたいと言います。普通は彼氏も彼女に伴ってロビーに居るのですが、この日は体調を崩して家で休んでいました。そこで、彼女は彼氏に電話をして、この著名なピアニストと話させます。当然、彼氏もこの著名なピアニストのことはよく覚えていました。そして、この著名なピアニストは、ニューヨークのジュリアード音楽院に対抗するような、そして日本の学校制度の枠にとらわれない音楽学院を東京に構想中だと言います。彼氏にそこの講師にならないかと言うのです。

彼女と彼氏は二人同時にそのような誘いを受け、びっくりしました。その夜は、二人で長いこと話し合いました。そして、次の日、その著名なピアニストにホテルのカフェで会い、二人の返答を伝えました。二人とも仕事の誘いは辞退すると言うものでした。その著名なピアニストは相当に驚き、がっかりしていました。いつでも気が変わったら連絡してくれと言って、連絡先を残しました。二人は丁寧にお礼を言ってそこを去ります。この二人は、遅ればせながら、やっと何が幸せかということをわかってきていたようでした。彼女は弾けなくなるまで、そのホテルでピアノを弾き、歩けなくなるまで、彼氏と浜名湖畔を歩きました。

「あっ、すいません。こんなに長いこと一人で話をしてしまって。最近は、この話の構想に夢中になっていて、ついつい話してしまいました。」
「いいんですよ。わぁ～、いい話ですね。なんだか、思い当たることもあって。すっかり、のめりこんでしまいましたよ。」
「それは、嬉しいです。ところで、麗名さんはどんなところに思い当たったのですか？」
「いくつかあるんですよ。まず、私たちに近いところでは、彼女と彼氏が浜名湖を歩くところです。慎吾と私の初めてのデートは北海道の屈斜路湖畔を歩いたのです。」
麗名は簡単に二人のなれそめと今までの経緯を話した。
「麗名さん、そうだったですか。お二人の話も小説ものですね。その内、書かせていただこうかな～。それに、仲が良くて、羨ましい。私は、残念ながら、まだ生涯の伴侶を見つけられていないので。実は、私は釧路出身なんですよ。屈斜路湖も摩周湖も子供の頃、何回か行ってます。懐かしいなぁ。」
「えぇー、釧路ですか。私は故郷を出るときに初めて見た都市が釧路で、興奮してしまったんですよ。ほんとに田舎ものでした。」

「でも、都会に住んでいると、地方の良さを懐かしく思います。なんだか、都会では、すべてお金お金だし、兎に角何でもお金で買えるような錯覚に陥ってしまいます。」
「そうなんです。私もそれは痛感してます。あっ、それから白石さんの小説ですけど、その他にも、私たちが知り合った人の事を思い出させるシーンがいくつかありました。ところで、白石さん自身にも関連しているところがあるのですか？お気に障らなければですけど。」

「そうですね、小説を書くときはやはり、自分の経験というのはどこかに入っているような気がします。時には誇張し、時には他の事象にすり替えたり、でも、ほとんどは想像ですよね。私自身の経験に一番関連があるとすれば、私が両性愛者だということでしょうか。小説のようにドラマチックではありませんが、それなりに板挟み状態を経験したこともあります。私は両性愛とか同性愛と言うことが恥ずかしいことでも何でもないと思うのですが、周りにはすごく偏見を持っている人が居るので、いつも気を付けています。今、抵抗なく言ってしまえたのは、麗名さんの私の話に対する反応がとても自然に感じたからです。なぜか、隠す必要を感じなかったんです。」
「そうですか。私たちは依然、東尋坊で自殺未遂の同性愛の女性に出合い、『安心～の宿』という無料で滞在できる施設にお送りしたことがあります。ご両親に縁を切られてしまい、とても気の毒な状況でした。」
「そういえば、お二人のウェブサイトからリンクされている、その安心～の宿のサイトも見てみたのですが、許しを得られればぜひ訪れてみたいと思いました。素晴らしいですよね。」
「皆さん親切で、すごくいいところですよ。連絡してみてください。ところで、白石さんのお話の中では主人公の二人を彼女と彼氏と呼んでいましたが、名前は決まっているのですか？」
「実は、まだ試案中なんです。お二人の話を聞いて、『麗名』と『慎吾』もいいかなぁ～、なんて思ったりしましたよ。」
「それは、どうでしょうかね。ところで、私たちはもう一組慎吾と麗名というカップルを知ってます。それは、その安心～の宿を作った人たちなんです。」
「えぇー！そうだったんですか？随分奇遇ですね。」
「そうなんです。そして、奇遇と言えば、」
麗名はその時の様子と飛行機事故の事を説明した。
「ほんとですか。お気の毒ですね。」
「それに、これは定かではないのですが、シンゴとレイナという大道芸人が南米で活躍していたということをラジオで聞いたことがあります。女性がハーモニカを吹き、男性

が手品をしていたそうです。」
「もしほんとなら、それも随分な偶然ですね。それに、それも小説のネタになりそうですね。すいません、仕事柄、いつもそういうことを考えているものですから。」
「楽しそうなお仕事ですね。」

そうしているうちに、車は浜松近辺を通過し、舘山寺に近づいた。出口のそばでトラックを止め、白石を降ろした。白石はお礼とともにまた連絡したいと言った。慎吾と麗名は運転を交代し、その日の目的地に向かった。

１８．武良

この日の、便乗サービスの依頼者はかつて岩手に送ったことのある武良義明であった。
今回は、数日後の岩手から埼玉までの行程にチェックをしている。
「麗名、武良さんからの依頼が入っているよ。」
「どうしたのかしら。」
「兎に角、返信をしておくよ。それから、二人の携帯の番号も渡しておくよ。」
「わかったわ。」

武良を乗せる日は、携帯で連絡を取り、何年か前に武良が降りたパーキング・エリアで待ち合わせた。
「慎吾さん、麗名さん、お久しぶりです。また、お世話になります。どうも、自分の力がないせいか、人のお世話にばかりなって、情けないのですが。今だって、状況が良いわけではありませんが、前回ほど落ち込んではいないんですよ。」
「それは、喜んでいいのかどうか、複雑なところのようですね。」
「まぁ、前回のどん底に比べればという程度で。もう低空飛行に慣れてしまっているんで、墜落してないということ自体、いい方なんですよ。いずれにしても、前回、トラックに乗せてもらって、ほんとにありがとうございました。そして、今回はお二人のウェブサイトを見つけたので、また、お世話になりたいと思いました。」
「いつでもどうぞ。その後どうされましたか？」

「あの後、初めて、父に会いました。思ったより老けていると思いました。なるほど、自分も年取ったらこうなるのかなといった感じでした。いくら血がつながっていると言っても二人とも初対面で、長いことぎこちない毎日でした。二人とも、自分で食べたいものを勝手に用意して勝手に食べてました。それでも、何とか二人で電気店を再建しました。関連の仕事は、父が、他人に教えるような感じで私に教えてくれました。小さい電気店なのでそれほど複雑なことはありませんでした。数年経つと、段々相手の気心が知れ、それなりに、共同生活のようにもなってきました。あまり、楽しいことはなかったのですが、特につらいとか苦しいと言うこともありませんでした。店の経済状況はトントンといったところで、とりあえず生活が出来る程度でした。まぁ、僕も他にすることもないし、他に行く当てもなかったので、なんとなしに何年も過ごしていました。そして、数年前からでしょうか、父の飲酒が急に度を越してきました。やはり、自分の子と言っても、僕は見ず知らずの人間で、今まで一緒にいた家族がみないなくなってし

まった悲しみは消えなかったのでしょう。数週間前に、父は急性の肝臓疾患で亡くなりました。取り敢えず、葬儀を済ませ、僕はどうしようかと思いました。そのまま、電気店を続けようかとも思いました。ところが、父の生前の借金が発覚し、暴力まがいの取り立てが始まりました。僕は事情を知らないためどうすることもできずに、店を手放すことで手を打ちました。そんなわけで、振出しに戻った感じです。ただ、前回と違うのは、惚れていた彼女に裏切られるといった苦悶がないことです。また無一文になったわけですが、なんだか、割り切れた感じです。それで、お二人の仰っていた安心～の宿にお邪魔しようかと思いました。丁度、この便乗サービスのウェブサイトにもリンクされていたので、電話してみました。一両日中に、そちらに行っても良いと言われました。そう言う訳なのです。」

慎吾と麗名は納得した。そして、武良の手伝いをしたいと思った。慎吾が麗名の顔を見ながら言った。
「じゃ、武良さん、今日、埼玉に入ったら、安心～の里に寄って行きますよ。」
「ほんとですか？ありがとうございます。」
「僕たちもたまに顔を出さないと。」
「よく行くんですか？」
「よくではないんですが、時折。前にも言ったと思いますが、僕たちの実家ですから。」

道中、三人はそれまでのいろいろなことを話した。武良は、電気店の仕事を覚えたので、できれば、どこかでそれをしたいと言った。今は、大規模家電量販店が軒を並べ、小型店は肩身が狭い。それでも、武良の経験から行くと、大型店にない持ち味を生かせば、生き残ることは可能だと言う。そして、その持ち味というのは、地域に密着した隙間産業的な分野を開発することらしい。どうやら、今までの経験を通して、何らかのアイデアがあるようだ。慎吾と麗名は最近起こったいろいろなことを話した。

安心～の宿に着くと、モモが出迎えた。
「いらっしゃい、慎吾さんに麗名さん、そして、この方が武良さんですね？電話で話したものです。モモといいます。ミャンマーから来ました。ほんとの名前はモーモーなんですが、牛の鳴き声と間違えられないように、モモと呼んでもらっています。」
「武良義明です。苗字と名前を間違えても通じるような名前になってます。お世話になります。」

せっかくだからというので、慎吾と麗名もお茶を飲んでいくように勧められて中に入った。中では義男がピアノを弾いていた。ドビュッシーだった。麗名が喜んで、叫ぶ。
「義男さん！お上手ね。私、ドビュッシーが大好きなの。」
「いや～、オレは全く自己流だから。でも、弾いていて気持ちがいいんだ。」
「いい感じが出てますよ、それ。聞かせてくれてありがとう。」

仕事の帰り道に寄り道をしているので、慎吾と麗名は長居は出来なかった。武良を残して、二人は帰路についた。慎吾が麗名にこぼした。
「実は、一番最初に武良さんに会った日に、なぜか、モモさんの顔が浮かんだんだよ。」
「あら、そう。慎吾にも霊感が付いたかな。」
「なんだか、あの二人うまくいくような気がする。」
「その霊感、悪くないわね。」

それから、一年も経たないうちに新しい展開があった。まず、宿に入って間もない頃に、武良は高崎線の駅のそばにある小さな電気店に仕事があるか聞きに行った。そこは、老夫婦が経営していたのだが、丁度、老夫が脳腫瘍で入院したところだった。老妻はその場で、経験のある武良に手伝ってほしいと頼んだ。武良はその日から働き始めた。仕事も良くわかり、熱心で誠実な性格が気に入られ、どんどん仕事を任されるようになった。武良の地域密着型の構想も受け入れられ、徐々に仕事をその方向に向けて行った。店内には無料のコーヒー・コーナーを設け、武良は、店の車で顧客の要望にこまめに応じた。時には、狭い店内で、無料省エネ講座を開いた。これは参加者がたった一人でも実施した。半年ほどして、老夫は一応退院し、店にも顔を出したが、武良の頼もしい姿を見て、まかせっきりにした。その後、残念ながら、老夫の脳腫瘍は悪化し、それ以上手の打ちようもなく、どんどん衰退してしまった。そして、直に亡くなった。その後、老妻も急に元気がなくなり、肺炎を起こして急に亡くなってしまった。武良は店の仕事の傍ら、老夫婦の子供のように二人を病院に連れて行ったり、看病したりしていた。そして、老妻も亡くなってしまった時、弁護士から連絡を受けた。子供のいなかった老夫婦は全財産を武良に残したのだ。武良は老夫婦にもっと長生きして欲しいと思っていたが、店を継ぐことが老夫婦の意向と理解し、全力で店を運営した。

もう一つ、並行して起こっていたことがある。武良が仕事に精を入れる傍ら、宿では、モモが一生懸命に武良のサポートをしたのだ。通常は滞在者が自分でするはずの洗濯も手伝った。毎日、弁当を作って武良に持たせた。武良が老夫婦の入院の世話をしているときは、モモが電気店の店番をしたこともある。

そして、モモが電気店の手助けに時間を費やすようになると、東尋坊で自殺未遂だった理奈が宿の手伝いを始めた。宿の中の人々の分担が微妙に変化してきたのだ。そして、武良が老夫婦の家兼電器店を相続したときのことだ。モモが武良と同居して電気店を一緒に運営すると発表した時には、誰も驚かなかった。モモの代わりには理奈が安心～の家の住人になり、安心～の宿のスタッフとなった。

１９．再び京都

慎吾と麗名のトラック便乗サービスも今や随分長いこと続いている。ほとんどは新しい便乗者だが、時には安心～の里の住人や滞在者がちょっとした息抜きに同乗することもある。最近では、あの東尋坊で自殺未遂の理奈が茨城県までの比較的短い行程に同乗した。
「慎吾さん、麗名さん、私にはあの東尋坊の頃がもうだいぶ昔のような気がする。そして、今でも私の相棒の佐保子のことは気の毒に思う。もし、安心～の宿の事を知っていたら、二人で訪れていたかもしれないとも思う。だけど、今は、私は佐保子の分も生きることが自分の役割だと感じている。慎吾さんと麗名さんが秋田での自殺予防への取り組みを実地で聞いて伝えてくれたのも大いに参考になった。武良さんとモモさんや、他の人たちの生きざまも参考になった。今日は大洗海岸で太平洋を見て、私の将来の糧にしたいと思っている。どうもありがとう。」
「理奈さん、それを聞いて僕たちも安心できる。食堂や海岸で理奈さんを見かけた時は理奈さんの様子にすぐ気が付き心配しだった。でも、正直言って、どうしてよいかわからなかった。大介さんが理奈さんを僕たちのトラックに導いてくれたおかげで、僕たちは自分たちにも出来ることがあると気が付いたんだ。おかげで、トラック便乗サービスを始めることが出来た。」
「そして、良く思うのは、どうしてうちの親は私が同性愛者というだけの理由で私と縁を切らなければならなかったのかということ。何が悪いのかなぁ。」
麗名が同情する。
「全くだよね。どうして、子供をそのまま受け入れてくれないんだろうね。慎吾の親にしてもそうだし。」
「世の中には、そうやって、親が無理やりにいろいろ押し付けているために苦しんでいる子供たちが沢山いる。親だけじゃない。私の高校は進学校だったんだけど、大学受験について、学校ぐるみで子供にはっぱをかける。私の友達で落ちこぼれた人たちはほとんど麻薬をやっていた。悪いのは子供じゃなくて大人のような気がする。でも、私達も大人になって、同じことをするのじゃないかという不安も残る。どうして、世の中は悲劇を繰り返さなければならないの？」
「安心～の里のしんごさんとれいなさんは、エコツーリズムのガイドの経験を通して、未開部族と接することが出来た。そして、未開部族でごく普通に行われていることに影響されてあの施設を作った。私たちは三人ともその恩恵に授かったわけだけど、私たち、世の中の普通の大人であってはいけないのかもしれない。私たち、安心～の里の、そし

て未開部族の精神を継承できる大人でなくてはいけないのかもしれない。」
「そうかもしれない。私達が、次の世代の子供たちを苦しませないようにしないといけない。簡単なことじゃないなぁ。」

理奈は、大洗海岸で太平洋を眺め、気持ちを新たにしていた。
「そうだ。子供たちだ。大人が何とかしてあげなくては。子供たちを理解し、助けてあげなくては。」
おぼろげではあるが、理奈には、新しい進路が見えてきたと感じた。

さて、麗名の妹となった沙織はと言えば、高校卒業後すぐに普通免許を取り、荷物配達の仕事を始めた。それから四年目には、慎吾と麗名の助けを借り、大型一種の免許を取得した。その後、慎吾と麗名の会社に入社し、新米運転手として一人で働き始めた。そして、最初の給料をもらった時、麗名に借りた修学旅行の費用を返すと言って、全額を貧しい子供のための基金に寄付した。それから数年後、沙織の彼氏はパイロットになった。パイロットとトラックの運転手では、なかなか一緒の時間は取れないが、それでも二人は結婚してアパート生活を始めることにした。二人は東京駅の近くのレストランで結婚のお祝いをした。東京駅は二人が修学旅行で付き合うきっかけになった出発点で、その時を思い出していたのだ。そして、沙織は、来た人皆に麗名が姉だと言って紹介した。二人の様子を見て、多分それが本当だと思った人もいたろう。

ある日、慎吾と麗名はトラックを会社に戻し、二人でアパートに戻る途中だった。麗名が言った。
「ねぇ、慎吾。今度、ドビュッシーの音楽のコンサートに行ってみたい。」
「そういえば、麗名は最近ハーモニカでドビュッシーの『月の光』を練習しているよね。あれ、難しいよね。ハーモニカでよく頑張っている。」
「うん。でも、この前、義男さんにピアノの楽譜をもらって、メロディーの所だけ吹いているから、少しずつ出来るようになるかもしれない。とても大道芸人は無理だけどね。」
「少しずつ練習するところがいいんだよ。僕もそのうち吹いてみようかな。実は、小学校の時は、ハーモニカが吹けなくて、吹いている振りだけしてたんだよ。」
「慎吾らしいね。でも、誰にも悪いことはしてないよね。」

そのまま夜道を歩いている途中で、突然、麗名が慎吾に倒れかかった。慎吾はびっくりした。今までなかったことだ。心配して、慎吾は至急携帯で救急車を呼んだ。近くの病院に運ばれた時、麗名はもうぐったりしていた。慎吾は麗名の父が心臓疾患で亡くなっ

ている事を思い出した。麗名にも同じ問題があるかと思うと気が気ではなかった。麗名はもう目をつぶりかけている。病院では緊急病室ですぐに心臓疾患の可能性を告げられる。しかし、翌朝まで何もできないと言う。

翌朝、麗名は精密検査に送られた。その間に、慎吾は沙織にメッセージを送った。検査の結果は絶望的なものだった。もう何も出来ない。いつ亡くなっても不思議はないと言うのだ。慎吾は病室で苦しい時間を過ごした。そして、その日の午後、麗名は最後の力を振り絞るように、慎吾に言った。
「私は何の取柄もない高校生三年生だった。慎吾はそんな私のことを気遣ってくれた。私のために修学旅行を諦めてくれた。その人に、私は一生を捧げてもいいと思った。慎吾はそれを受け取ってくれた。そして、今日、私は一生を捧げ終わる。何の取柄もない妻で終わる。その間中、いつも一緒に居てくれて、ありがとう。」
「麗名、麗名だけが僕のただ一人の本当の家族になってくれたんだよ。最高の取柄だよ！」
そして、麗名は目を閉じた。慎吾は、もう麗名が目を覚まさないと悟ったとき、麗名に最後の言葉をかけた。
「麗名はいつも起きるのが苦手だったよな。もう苦労して起きなくてもいいんだね。ゆっくりお休み。そして、大介さんによろしく。」

突然、大きな足跡がしたと思うと、沙織が部屋に入ってきた。慎吾は目を伏せた。沙織は大きな声で泣き出した。
「お姉さん！」

慎吾はどうしようもない絶望感に打ちひしがれていた。そして、この時初めて、理奈が自殺未遂に走った経過を実感した。その時、沙織が慎吾の肩を叩き、言った。
「お兄さん。私は悲しい。お姉さんを失ってどうしようもなく悲しい。だけど、私はわかる。お兄さんの悲しさはそんなもんじゃない。お姉さんと高校時代からずっと一緒に過ごしてきたんだから。お兄さん、悲しいのはわかるけど、私達をこれ以上悲しませないでね。」
慎吾は何も言わなかった。だが、沙織の気持ちは受け取っていた。

数日後、麗名の葬儀があった。安心～の里から、武良、モモ、理奈、そして年老いた義男が車で駆け付けた。次の日、慎吾は会社から退職した。会社の計らいで、慎吾と麗名のトラックは沙織が受け継ぐことになった。慎吾は身の周りの物を処分し、アパートを引き払った。

慎吾は旅に出た。何十日もかかって、歩いて京都まで来た。今、嵐山の橋げたに立っている。その隣には、沙織がいる。慎吾が旅の途中に連絡していたのだ。
「麗名、僕たちにとって、もう北海道は故郷ではない。それで、京都に来たよ。麗名は、前に、京都は住んでみたいぐらい素敵な街だと言ったよね。この素敵な街に住んでくれよ。」
そこまで言うと、麗名の遺灰を嵐山の橋げたから保津川に放った。そして、慎吾が楽譜を見ながら麗名のハーモニカで、必死にドビュッシーの「月の光」の最初の部分を吹いた。途切れ途切れであったが、少なくとも沙織にはその音楽がわかった。
「ごめんね、ドビュッシーのコンサートに連れていけなくて。だから、僕が吹いたんだよ。聞こえた？」

丁度その頃、京の西の山々には日が沈んだ赤みが映え、東の空にはおぼろげながら月が光っていた。慎吾と沙織が川岸に戻った時、慎吾は沙織に言葉をかけた。
「お幸せに。」
沙織は黙ってうなずいた。そして、慎吾は西に、沙織は東に向かって歩き出した。

２０．山寺

ここは山陰地方のある山寺だ。夕刻に、旅人風の男が尋ねてきた。
「ごめんください。」
返事はない。男はまた言った。
「ごめんください。」
かなり長いこと経って、誰かがやってくる音がした。
「はい、はい。お待たせ。年取ると、耳が遠くなるし、足も弱る。どんなご用件かな？」
「ぶしつけですが、今晩ここに泊めていただけないでしょうか。無銭旅行の旅のものだのです。」
「そりゃ、構いませんよ。何も大したことはできないが、ここは、来るものは拒まずの寺ですから。」
「ありがとうございます。」

「僕は、しばらく前に妻を亡くしました。その後は、こうやって、徒歩で、あちこちとさまよっているのです。何かしらの安堵を求めているのです。」
「そうですか。お気の毒に。私も未だに安堵を求めていますよ。その気なら、いくらここに居たっていいんですよ。ところで、あなたのお名前は？私は、京和大慈と言います。」
「僕は石館慎吾です。」
「はぁ～。慎吾さんですか。前の住職から聞いた話では、その昔、ここに『慎』さんと『おれい』と言う夫婦が奉公していたらしいよ。二人の話はこの寺で代々語り継がれているんです。」
「そうですか。それは奇遇です。僕の死んだ妻は麗名と言いました。ところで、奇遇と言えば、僕はもう一組慎吾さんと麗名さんいう人たちを知っています。僕たち夫婦はたった一回、ほんの少ししか会ったことがないのですが、その夫婦には間接的に大変お世話になりました。」
「それはそれは、確かに奇遇ですな。」

そこに滞在中、慎吾は寺のまわりを散歩するようになった。庭の裏の方には外へ出る小さな門があった。そして、ふと、その横の木の壁に掘ってある文字に目が留まった。そこには、どうやら、「慎」、「麗」と二文字彫ってある。特に、麗の字が複雑だからか、

率直に言ってうまく彫れているわけではない。その二文字の上には横長の三角形が、二文字の間には縦線が引いてある。丁度、相合傘のようだ。慎吾は「これは、京和さんの言っていた夫婦に違いない」と思った。同時に、麗名との三日目のデートで郷土資料館から出るときの相合傘を思い出していた。そして、よく見ると、それぞれの字の下にもう一字ずつ字が書いてあるようだ。ただ、それは彫ってあるのではなく、何か硬いものでこすったような跡である。どうしても、「慎」の字の下には「吾」、「麗」の字の下には「名」とあるように見える。それで、慎吾は、自分の思い出をそこに重ねるかのように、「吾」と「名」の所を指で何回も、何回もなぞった。

作者注：この小説の時代設定は初めから終わりまで、すべて執筆当時を想定しています。

慎吾と麗名の旅奏曲（３）：大西洋南下編

２０２０年２月６日（若干修正　２０２０年３月２３日）

蓮　文句

１．ロンドン（イギリス）

アメリカから国外追放となった慎吾と、名目ばかりのイギリス短期留学を終えた麗名は、ロンドンの安ホステルに滞在していた。ある日、麗名が外出から帰ってくると、ラウンジでは滞在者の多くがテレビでサッカーの観戦に夢中になっている。その中、片隅で慎吾が一人、日本語の本を読んでいた。麗名にとっては、このホステルで初めて見かける日本人であったので声をかけてみた。
「あの～、日本人ですよね。」
「そうです。」
「ここに座ってもいい？」
麗名は向かいのソファに座るとそこに置いてあった雑誌をパラパラとめくり始めた。慎吾はちょっと気になっているようで、ちらちらと麗名の方を覗いている。そして、口を出した。
「ここで日本人は珍しいね。旅行中？」
「ううん。短期留学が終わったところ。日本に帰りたくもないからここに来てみたんだ。」
「ふ～ん。気楽だな。」
「あんたは？」
「どこに行く当てもなくここに来た。アメリカで国外追放になった。」
「へ～。かっこいいじゃない。スパイかなんか？英語も得意なんだ。」
「かっこいいわけはないだろ。向こうでは小型機のパイロットだった。英語は得意じゃないけど、何とか使える。それじゃなきゃパイロットにはなれない。」

「なぜ国外追放なんかになったの？」
「ビザ無しだよ。見つかると厳しい。多分誰かが通報したんだろう。」
「お気の毒に。」
「大きなお世話だ。」

それからは、この二人、毎日顔を合わせることになる。数日後、ホステルのトーストと紅茶の簡単な朝食の時、麗名が尋ねた。
「あんた、なんていう名前？あたしは麗名。」
「吾輩は慎吾。」
「アッハッハ！！！」
周り全員が麗名の方を見る。
「うっ。まずい。それで〜、その『吾輩』っていうのおかしいよ。古臭いんじゃない？」
「また大きなお世話だな。『オレ』とか『僕』とか『私』とか、どれも馴染まないだけだ。それだったらと、いっそのこと古典調にしてるだけだ。それより、その『麗名』っていうの、ちょっとおまえには似合わないんじゃないの？それ、もっとおしとやかな人のための名前じゃない？おまえだったら、いっそのこと『じゃじゃ馬』とか似合うよな。」
「この！まぁ、いいか。たしかにじゃじゃ馬かもしれないし。その〜、吾輩君。ところで、いつまでここに居るの？」
「わからない。」
「これからどうするつもり？」
「またまた、大きなお世話だな。おまえこそどうするつもりだ？」
実は二人とも答えがなかった。

数日後の朝食の時、また麗名が声をかけた。
「あたし、ちょっと暇を持て余してるんだけど、町の中一緒に歩いてくれない？」
「ほぉ？ストレートだな。デートのお誘いかい。」
「いい気にならないでよ。今、暇だって言ったでしょ。他に日本人も知らないし、短期留学じゃ英語で恋人を作るほどの語学力も身に着かなかったからしょうがないんだよ。それに、自慢じゃないけど、少し方向音痴ですぐに道に迷っちゃってさ。」
「なんだ。口が悪い割には、なかなか素直じゃないか。いいよ、吾輩も暇と言えば暇だし。一緒に行ってやろうか。」
「偉そうな口をきくなぁ、この吾輩君は。まぁ、いいや。吾輩でも猫よりはましだろう。早く行こうよ。」

その日、二人は普通の観光客が行くようなところに行った。実は二人共それまで市内観光などしてはいなかったのだ。ゆっくりと流れるテムズ川を覗きながら、慎吾が話し始めた。
「のどかだな。おまえとデートもまんざらではないかな。」
「それ見たことか。あんたも意外と素直じゃん。」
「そうさ。ずっと一人だったし。」
「へ～、何にもなかったの？」
「何にもと言う訳じゃないが。結論から言えば大したことはなかったな。」
「おかわいそうに。」
「大きなお世話だ。おまえは？」
「あたしは、少しはもてたよ。昔の話だけどね。高校の時はハーモニカ部でつきあってた。最後は振られちゃったけどね。」
「そうか。それは気の毒だな。」
「大きなお世話だよ。人は失恋で強くなる。あんたはパイロットだったていうけど、他に何かしてた？」
「吾輩は手品師であった。」
「また、その吾輩～。でも、ちょっとおもしろいな。その、手品なんて。」
「高校の時のクラブさ。今でも出来るよ。ほら。」
慎吾は麗名のカバンからコインを取り出してみせる。
「へ～。やるじゃない。」
「それだけじゃない。ほら。」
今度は何かカードを取り出した。それを見て麗名はびっくりしたと同時に怒り出した。
「ちょっと、あんた！それは手品じゃなくて『すり』っていうんだよ。勝手に人の免許証抜き出さないでよ。返して！」
「これは失礼。ちょっと効果が強すぎたかな。まぁ、吾輩の実力がわかったかな。」
「わかりましたよ。それって、かなりすごいな。尊敬するよ。」
「へ～。素直だな。ところで、お前のハーモニカはどんな具合だ？」
「聞いてみたい？」
麗名はカバンからおもむろにハーモニカを取り出して吹き始めた。慎吾はびっくりして聞いていたが、やや長い一曲が終った時、思わず拍手してしまった。だが、拍手したのは慎吾だけではなかった。周りに数人、立ち止まって聴いていた観光客も皆拍手していた。
「これは驚いた。ただのじゃじゃ馬じゃなかったな。恐れ入りました。ところで、その曲なんていうの？心に染み入るいい曲だな。」

「『タイスの瞑想曲』だよ。元はバイオリン用だけど、ハーモニカでも少し工夫すれば吹ける。ほんとにいい曲だよね。」
「ところで、おまえいつもハーモニカ持ち歩いているのか？」
「そうだよ。まさかピアノは持ち歩けないだろ。だから、ハーモニカ、命。ホステルに帰れば、低音用のバス・ハーモニカもあるよ。」
「これは参った。気に入ったな。」
「なにが？ハーモニカ？それとも、あたし。」
「ハーモニカじゃないよ。まぁ、その曲とそれを吹いた人間のことだよ。」
「そうだろ。人は見かけによらないもんだろ。少しは麗名っていう名前が似合うだろ。」
「そうかもしれないな。あれだけいい音をだせるんだったら、中身が悪いわけはないな。」
「あんたの手品はどうなの？人の免許証さえ盗み出すんだから、中身が良いわけはないよな。」
「やっぱり、口が悪いのは治らないな。まぁ、目をつぶるか。」

それからは、二人は毎日一緒に出歩くようになった。二人共何の計画もなく、何となく日々が過ぎて行った。しかし、当然そんな日々には限界がある。
「あんた、蝶々がいるよ。なんていうのかな？」
「どれ？アゲハ蝶みたいだけど、随分綺麗だな。今度、誰かに聞いてみよう。それにしても、いい日だな。」
「あんたと毎日ぶらぶらしてるの楽しいんだけど、あたしの予算はそろそろつきそうだよ。」
「実は、吾輩も同じだ。いつまでもこうしている訳にはいかないな。」
「あんた、何か考えはあるの？」
「ない。おまえは？」
「ある訳ないよ。わかってんだろぅ。」
「あぁ。わかってる。一応聞いてみただけだ。」
この日も、二人はテムズ川沿いを歩いた。どんよりと低い雲が空を覆う。ロンドンの普通の日だった。麗名が静かに話し始めた。
「あ～、このまま時間が止まってしまえばいい。」
「えっ？それ、どういう意味？」
「あんたと二人で、こうして何もしないで過ごしたい。」

「えっ？それ、ほんとぅ？」
「ほんと。高校の時、失恋したって言ったよね。辛かったな、あの時は。どうしようかと思ったよ。そして、それからは、誰も付き合ってくれなかった。」
「どうしたんだよ、急に。」
「あたしの友達はみんな彼氏を作って夢中になっていった。あたしと一緒に遊んでいた悪友達でさえ、なんだか急に女っぽくなっちゃってさ。彼氏とイチャイチャしているとこを見せつけられて。あたしだけ取り残された感じだった。ずっとそんな調子で、いっそのこと、どっか行ってしまおうと思って短期留学をしてみた。だけど、英語が喋れるようになるわけではないし、親しい友達や恋人が出来るわけではないし、寂しかったんだよ。」
「おい、おい、あのじゃじゃ馬がどうしちゃったんだよ。なんだか、子猫みたいになっちゃってさ。」
「そうだよ、私は子猫なんだよ。寂しい子猫だったんだよ。そこに、あんたが現れた。そして、兎に角一緒にデートしてくれた。あんたはどうか知らないけど、あたしには数少ない幸せな日々だったんだよ。」
「そうだったのか。実は、吾輩も偉そうなことは言ったけど、まぁ、似たり寄ったりかな。女とはろくに付き合ったこともない。ちょっと文通したことがあるだけだ。そして、アメリカから追放されて、日本に戻る気もなかった。この年まで、大した恋愛経験がないなんて寂しいことだよな。だから、おまえがデートに誘ってくれて、嬉しくないわけがないよ。正直言えば、毎日朝が待ち遠しかったんだよ。」
「ほんとに？じゃ、あんた、あたしのこと少しは好き？」
「あぁ。少しよりももっとかな。」
「じゃ、どのくらい？」
と言うと、麗名は慎吾の方を向いて静かに目をつぶった。そして、唇が微かに震えているように見える。
「このくらいかな。」
と言って、慎吾はそこにそっと自分の唇を付けた。
「いや、このくらいかもしれない。」
と言い直すと、麗名の肩を抱いて、今度はもっとしっかりと、そして長いこと付けた。その後、二人とも深く息をした。
「あんた、それ本気？」
「あぁ、本気だ。吾輩は手品クラブで演劇部じゃない。好きでもないのにそんな演技が出来るわけがないだろ。文句あるか？」
「ある訳はないよ。久々だったから嬉しくって。ちょっと、人前で、照れたけど。」

「みんなしてるよ。」
確かに、観光客の中には恋人らしいカップルも多かった。強く抱き合っているカップルもいる。
「吾輩にはこれだって初めてなんだよ。もう一度していいか？」
「何回でも。」
暫くの間、二人は抱き合ったままの時間が過ぎた。そして、慎吾が囁くように言った。
「おまえのこと、恋人と思っていいか？」
麗名は黙ってうなずいた。そして、ポツリと言った。
「吾輩でも、猫よりはましだよ。」

少し落ち着くと、麗名はまだ持っていたコーヒーの紙コップを地面に置き、おもむろにハーモニカを取り出した。そして、静かに吹き始めた。慎吾はうっとりと聴いている。麗名が３曲吹いて一休みすると、そばで何気なく聴いていた観光客が一斉に拍手し、その内の一人がコインを地面の紙コップに投げ入れた。慎吾と麗名があっけにとられている間に、他の観光客もコインを入れて行った。
「おい、おまえすごいな。金稼げるじゃないか。」
「あたしもびっくりしたー。ただ吹いただけなのに。あんた、昼ご飯食べに行こう。」
今回の麗名の稼ぎで一人分の卵サンドイッチが買えた。それは、この二人には驚くべき出来事であった。
「しかし、おまえのハーモニカほんとに凄いな。どうやって、あのメロディと伴奏と一緒に吹けるんだ？」
「テクニークがあるんだよ。舌を使って、間の音を鳴らさないようにするんだ。」
「おどろきだよな。だから、キスがうまいのか？」
「変なところに気が付くな。」
「それにしても、ひょっとしてハーモニカ吹いて暮らせるんじゃないの？」
「実は、あたしもそれ考えた。大した金にはなんないだろうけど、ゼロよりはましだよな。ところで、あんたは、あたしの『ひも』になろうなんて考えてないよね。」
「とんでもない。吾輩だって恋人のために何かしらしたいよ。」
「じゃ、手品はどう？」
「えっ？おまえ、まさか、吾輩に街ですりをしろって言うんじゃないよな。それは、まだ少しは残っている吾輩の正義感に～」
「バカ！あたしだって、あんたに盗みをさせるほど落ちぶれてやしないよ。あたしがハーモニカを吹いている間に、手品を観客に見せるんだよ。」

「そうか、おまえ、結構あたまもきれるんだな。やっぱり、ただのじゃじゃ馬じゃなかったかな。」

次の日、二人は準備にかかった。まず、近くのデパートに行って、良質の紙製のトランプを買った。慎吾が言うには、安物のプラスチック製トランプは手品には使えないらしい。そして、そのトランプの一枚一枚にろうそくのろうを塗った。すると、確かに、トランプが扇のように開くようになった。それから、公園に行って練習を始めた。慎吾は手品担当だが、見物客が集まるまではバス・ハーモニカで伴奏をすることにした。麗名が慎吾に吹き方を教えた。慎吾も小学校ではハーモニカを習っていたから、取り敢えず何とかなりそうだった。そして、見物客が一人でも居れば、慎吾が手品を始める。テーブル・マジックと言われる、コイン等の小物とカードが中心だ。パフォーマンスはすべて無言だ。これは英語が流暢でもなく、演劇派でもない二人には好都合だった。

その日の午後、二人は早速、例のテムズ川沿いに出かけ、まず抱き合った。麗名がボソッと一言言った。
「あたし、日本では恥ずかしくてとてもこんなこと出来ないな。つまり、旅の恥はかき捨てってやつかな。」
そして、ハーモニカを吹き始めた。次第に、一人、二人と見物客が足を止める。そこで、慎吾がバス・ハーモニカを中断し、手品を始める。慎吾はコインをいたるところから取り出す。カードをいたるところから取り出す。そして、そのカードを使って、何種類かカード・マジックをする。客の引いたカードを当てたり、空中に飛ばしたカードをもう一方の手で受け止めたり、普通の手品師がするような技を一通り披露した。慎吾が手品をしている時は麗名はハーモニカで伴奏したり、音響効果を出したりする。手品の合間には、曲を演奏する。一段落すると、慎吾が二人の前に紙コップを置き、バス・ハーモニカを取って伴奏に戻る。

最初のセッションが終わった時、紙コップの中には二人の夕飯に値するだけのお金が入っていた。紙幣もあった。荷物を片付けると、慎吾は麗名の髪に口を付け、肩を抱きながら歩き始めた。二人は近くのレストランまで行って、ささやかなお祝いをした。二人ともめったに口にしていなかったローストビーフのサンドイッチなぞ食べてみた。
「おまえ、ほんとに凄いな。おかげで、吾輩たち、大道芸人の仲間入りじゃないか？」
「ほんとに。これ、初めてにしてはうまくいきすぎだよ。あんたも頑張ったじゃない。」
「珍しいな、そのほめ言葉。取り敢えず、ありがとう。」
「たまには、どういたしまして。だけど、また、あのホステルかぁ。夜が寂しいな

～。」
「そうだな、男女混合なんだから、同じ部屋にしてもらおうか。」
「それは、もっと辛いかもしれないな。あんたと同じ部屋に居ても周りに知らない連中がゴロゴロしているんだから。」
「それもそうだ。」

それから数日の間、二人は毎日いろいろなところへ出かけてパフォーマンスをした。ところが、ロンドンは雨が多くて屋外のパフォーマンスが出来ないことも多い。そこで、地下鉄の駅を使おうとして準備を始めていた時、警官が寄ってきて質問された。
「君たち、許可証はあるのか？」
「えっ？」
慎吾と麗名は顔を見合わせた。答える言葉がなかった。警官は続けた。
「ロンドンでは許可証がなければストリート・パフォーマンスは出来ない。今は、まだパフォーマンスに入っていなかったので、注意だけにしておこう。違反者は逮捕されるので、十分に気を付けるように。」

二人は愕然とした。せっかくの希望が完全に崩れ落ちて行った。仕方なく、その場を片付け始めた。確かに、二人は無知だったし、無茶だった。法律や規則のことは一切調べもしなかったのだ。これは、二人の性格を考えれば、不思議でも何でもないことだ。ただ、アメリカから追放された慎吾にとっては、イギリスからも追放されることは痛手である。また、そんな経験のない麗名にとっては、逮捕されるかもしれないという状態は想像もできなかった。

丁度その時、一人の中年男性が立ち止まって、二人に声をかけた。
「あれ、もう終わったの？この前、テムズ川沿いにいたハーモニカと手品の人たちだよね？私は楽しんだよ。」
慎吾も麗名も全く話をする気分ではなかった。うなだれて黙っていた。男性は少し不思議がって、続けた。
「どうしたの？二人とも随分落ち込んでいるね。」
慎吾がボソッと言った。
「許可証がないんだ。」
少し考えてから、男性は「アー」という顔をしてまた話し始めた。
「そうか。それだったら、私のレストランでパフォーマンスをしてくれるかな？私はサ

ウスバンクでレストランを経営しているんだ。」
あっけに取られている二人を前に、男性はどんどん続ける。
「最近はレストランの経営は楽ではない。何か変わったことをしないと、と思っていたこころだ。君達のパフォーマンスはそれにうってつけだと思う。私は場所を提供し、君達はパフォーマンスをして、食事客からチップを受け取ることが出来る。レストランから給料を貰う訳ではないので、就業ビザがなくても証拠も残らないし。それに、今日みたいに雨でも、毎日出来る。そして、君達には何かしら夕食を出すよ。お互いに得じゃないかな。」

英語の苦手な麗名には内容がよく分からなかった。それで、慎吾が素早く麗名に説明した。これは、今となっては唯一のチャンスかもしれない。二人は、男性にレストランの場所を聞き、今晩にでも行きたいと言った。男性はレストランの名刺を二人に渡し、その場を去った。その名刺にはビストロ・ピエール、経営者ピエール・モリンと書いてあった
「おまえ、これは不幸中の幸いかな。せっかく始めたパフォーマンスだから、今すぐに辞めたくはないよね。」
「ほんとに。まぁ、あたし達は所詮素人だから少しでもできればいいよ。」

早速その日の夕方にビストロに行き、ピエールに挨拶した。彼は二人を更衣室に連れて行って、そこを控室に使って良いと言った。客の様子を見て、好きなようにパフォーマンスをして構わないと言った。そして、ラストオーダーの後に何かしら夕食を出してくれるとも言った。この日、客足はそれほど良くなかった。それでも、二回ルーティンをこなした。屋外の時と違うのは、慎吾が手品を披露するとき、テーブルごとに違う手品を見せることであろうか。麗名は慎吾の後を追うような形でハーモニカを吹いた。この時までに、二人は紙コップの代わりになる小さな竹細工のチップ用受け皿を入手していたので、各テーブルを回った時、それにチップを入れて貰った。

その日のパフォーマンスの後、チップを数えると、屋外の時の一日分より少し多いくらいの額があった。そして、出された一応フランス料理風のニンニクと白ワインの効いた夕食を食べ、ピエールに礼を言ってから、ホステルに向かった。
「あんた、これはラッキーだったね。まだ、ホステル代すべては賄えないけど、夕食は出してくれるし、取り敢えず、支出を最低限に食い止められる。」
「そうだな。これで、しばらくは生きながらえられそうだ。あともうひねりというところかな。どこか、あのホステルより安いところがないかな？公園で野宿なんてどう？二人で一部屋だよ？」

「大した一部屋だな、それ。まぁ、確かに、ホステル代の節約にはなるけど、現実的なの？」
「どういうこと？」
「安全性とか、寒さとか、また、あの合法かどうかとか。それに、育ちのいいあたしにはどうかな。」
「へ～、育ちがいいねぇ。」
「そうだよ。あたしは、確かに下町育ちかもしれないけど、うちは結構裕福なんだよ。小中高とピアノを習っていたんだ。」
「へ～、おまえは良く驚かしてくれるな。じゃ、ピアノもそうとうなのか？」
「まぁ、そこそこだ。高校の時は音大のピアノ専攻に進むことを勧められた。つまり、これでも結構お嬢様だっていうことだよ。参ったか。」
「恐れ入りました。お嬢様。」
「それに、子供のころは、お嬢様言葉を押し付けられたんだから。だけど、なんか白々しいし、学校の悪友と付き合うにはそれじゃやっていけないよな。」
「まぁ、そういうもんだろうな。親より友達だろうな。吾輩はマイペースだから、人のことは気にしないけどな。」
「そりゃ、そうだろう。まともな人間の間で、『吾輩』は通用するわけないよ。」

それからは、毎日夕方にビストロに行ってパフォーマンスをする生活になった。それで、日中は時間があるので、もう少し安いホステルかゲストハウスを探そうということになった。地下鉄とかバスを使うとそれなりの支出になるので、３０分かかっても歩ける範囲にしようということになった。それは、ビストロのあるサウスバンクから２キロくらいまでの範囲である。ロンドンの街の大きさからすると、これは極中心部のかなり密集度の高い地域である。したがって、格安の宿を探すのは容易ではない。

数日間、二人はその範囲を歩き回った。観光案内の無料地図を頼りにあちらこちらと歩くのだが、これは、方向音痴の麗名一人ではできないことであった。能率は悪いが、足で探す方法には利点もある。ネットや新聞に広告を出さないような隠れた宿が見つかることもある。その途中、何回か例の綺麗なアゲハ蝶を見た。ありふれた蝶のようだ。やがて、二人は若干２キロを超えた所に一軒よさそうなゲストハウスを見つけた。今までのホステルよりはかなり安い。そして、二人が一番気に入ったのは、特別にクロゼットを改造したような極小さな二段ベッド設置の部屋が借りられるということである。当然、トイレとシャワーは他の男女混合の大部屋と共用である。二人共喜んで、そこの管理人

のお婆さんに頼んだ。
「それじゃ、今日から泊まらせてください。」
「あぁ、良いですよ。」
「それから、一つ質問があるんですが。今頃どこでも見かける大きくて綺麗な蝶々は何というのですか？オレンジと黒と白の模様があるんですが。」
「あれは、姫赤立て羽蝶って言うんですよ。綺麗に彩られたお嬢様という意味ですよ。ヨーロッパとアフリカを股にかけて旅をするそうですよ。」
「そんなに長い距離を？！教えてくれて、ありがとう。」
二人は早速もとのホステルに荷物を取りに行って、新しいホステルの二人部屋に収まった。
「あんた、あたしは嬉しいよ。ついに二人だけの部屋だよ。」
「そうだな。今までのたこ部屋に比べたら御殿だよな。それに、これで、黒字になるかもしれない。あっ、もうビストロに行く時間だよ。」

この日、慎吾と麗名はパフォーマンスが終わってから３０数分歩いて新しいゲストハウスに帰ってきた。この部屋は二人には初めてのプライベートな空間だった。共用の洗面所で水筒に水を注ぎ、部屋にもどってから二人で交代に飲んだ。
「おまえ、なんだか、ハネムーンみたいじゃないか？」
「それは大袈裟かもしれないけど。あたしは、あんたと二人だけの世界を夢見ていたよ。なんだか熱くなってきちゃったんだけど。」
「吾輩も、おまえと二人だけで、体が興奮してるんだけど。」
「あんた、こっちに、来てよ。」
麗名は慎吾を下段のベッドに誘った。どうやら、この二人には上のベッドはいらないようであった。

次の朝、もうとっくに日が昇ったころになって二人はやっと眼が覚めた。
「あんた、あたし達、夕方ビストロに行けばいいんだよね。」
「あぁ、もう少しここに居ようか。」
「ここが見つかるまでは、こんなこと想像できなかったよ。あんた、ほんとに恋人同士になったね。」
「ほんとだ。じゃじゃ馬でもタコよりはましだな。」
「どっちのタコのこと？」
慎吾はその質問には答えなかった。二人は朝食も取らずにその後も下のベッドにいた。

昼に近いころ、二人はベッドから起き上がり、朝食を取った。やがて、慎吾がためらい

ながら言った。
「ところで、おまえ、夜中に、いびきかいてたぞ。じゃじゃ馬のいななきってとこかな。」
「それがどうした？」
「かなり、大きかったぞ。大したお嬢様だな。」
「わかってるよ。自分のいびきで目が覚めることもあるんだから。だけど、そんなの普通だろう。シンデレラだって、白雪姫だって、いびきの一つや二つかいたろう。」
「へ～。どうして知ってるんだ。それで、そのいびき、あのホステルの相部屋で大丈夫だったのか？」
「あぁ。案外みんな寛容なんだろうな。ひょっとしたら、欧米人のいびきはあたしよりひどいんじゃないか？まぁ、高校の修学旅行の時はひどい目にあったよ。みんなであたしの顔を枕でふさぎやがってさ。もう少しで窒息死するところだったよ。」
「じゃ、これからは、二人だけで良かったな。惚れてるせいか、吾輩には、おまえのいびきも可愛かったよ。」
「ハッ！」

それからも、ビストロでのパフォーマンスが続いた。パフォーマンスのせいでもあるまいが、そこの客足は少しずつ増えているようにも思われた。収入も増え、少しではあるが、蓄えさえ出来た。
「おまえ、こりゃ、凄いな。」
「ほんとに、そうだ。食っていけるな。あたし達には他に脳はないから、これは、お慰みだ。」

だが、それも長くは続かなかった。数か月経った頃、ピエールが二人に言った。
「慎吾に麗名、言いずらいんだが、私はビストロを他の人に売らならないことになった。当然、君達が新しい経営者と相談することは出来る。しかし、彼女はビストロを全く新しいレストランにするので、改装に何か月か、かかるだろうと言っている。」
慎吾も麗名もがっかりしたが、今までが良すぎたぐらいに思っていたので、感謝の気持ちの方が強かった。慎吾が二人の気持ちを伝えた。
「ピエール、今までどうもありがとう。あなたが助けてくれなかったら、私たちは路頭に迷っていただろう。恩は忘れない。今は、何もお礼が出来ないけれど、許して欲しい。」
「そう言ってくれて嬉しい。ところで、私の友人がパリでレストランを経営している。

以前彼に君達の事を話したことがある。その時、彼は、もし君達がパリに来るようだったら是非彼のレストランでパフォーマンスをして欲しいと言っていた。彼のレストランはここより大きく、パフォーマンスをするにはもってこいだ。もしその気があったら、そこに寄ってみたらどうだろうか。私から連絡もできるし。」
ピエールは二人にレストランの名刺を渡した。そこにはドン・キホーテと経営者の名前らしいペドロ・エスクデロと書いてあった。やはり、このくらいになると、麗名にはわからないところが出てくる。慎吾が要点をまとめた。麗名は慎吾の腕を引っ張って、はっきりうなずいている。それで、慎吾がすかさず返答した。
「ピエール、またもやお願いしていいかな。是非、そこに行ってみたい。連絡してくれる？まだはっきりしたことはわからないが、もうロンドンですることはないので、一週間以内に行けるかもしれない。」
「では、そのように伝えておこう。ほんとに、申し訳ないが、ひょっとしたら、君達はパリでもっとうまくいくような気がする。幸運を祈っている。」
「ピエール、ほんとにどうもありがとう。」

ゲストハウスに帰った二人は、やや興奮気味であった。
「あんた、これは、悲しんでいいのか、喜んでいいのかわからないな。」
「これは、ラッキーとしか言いようがないよ。パリでどうなるか全くわからないが、こんなチャンスなめったにないよな。」

「ところで、話は変わるが、おまえの親は心配しないのか？」
「少しはしているだろう。短期留学の間は、時々絵葉書なんか出していた。その後は、少しだけ旅行して行くと言ってあるだけなんだ。それに、親に言いずらいことは、遊んでいる間に、帰りのフライトを変更するのを忘れた。多分、航空券はもう無効になっているんじゃないかと思う。あんたの家族は？」
「なんと言っていいのかよくわからないな。アメリカで飛行機学校の費用を出してもらっていた頃はちょくちょく連絡していた。その後、一応自活になってからは、ごくたまに電話をする程度だった。そして、ロンドンからは、一回電話しただけだ。ただ、このゲストハウスのことは知らせていない。だから向こうから吾輩に連絡することはできないわけだ。」
「それは、あたしも同じだ。」
「しかし、仮にも親子だ。そして、今や、お互い連れがある状態だ。むやみに心配させるのも良くない。こうしたらどうかな。パリに行ったら、絵葉書を出そう。そして、たまには電話をしよう。」
「あたしにも、そのぐらいは出来そうだ。それから、今思いついたんだけど、あたし、

タダの電子メール持ってるよ。どこかで、コンピュータがあれば、それが使えるはずだ。」
「それは、手だな。吾輩もそれ作っておこうかな。そうすれば、向こうからも連絡出来るし。」
二人はロンドン市立図書館へ出向いた。無料で使えるコンピュータを使って、慎吾は電子メールのアカウントを作った。麗名は自分のアカウントをチェックしたところ、ジャンク・メールがいくつかあるだけで、重要なメッセージは何もなかった。図書館を出ると慎吾が言った。
「それじゃ、ドーバー海峡を超えて、芸術の都、パリだ。吾輩たちも姫赤立て羽蝶を追って旅に出よう。」
「芸術の都ねぇ。吾輩君にはどうかわからないが、あたしには向いてるかな。」
「それから、パリに着いたら久々に親に絵葉書を出して、電子メールの事も伝えよう。」
と言う訳で二人はロンドンを後にすることにした。

２．パリ（フランス）

二人は、ロンドンからパリまで夜行バスで行くことにした。日中の便より少し割高ではあるが、一泊分の宿泊代を省けるし、パリに朝に着くので活動に便利と思ったのだ。途中のフェリーのターミナルでイギリスの出国とフランスの入国審査があった。その時、二人は初めてお互いのパスポートをじっくり見た。
「へ～、おまえの苗字はNIKAIDOかい。どんな字を書くんだ？」
「建物の二階にお堂の堂だよ。あんたは、WATABIKI？それは、綿に引くだろうな。」
「そうだ。吾輩たち、会ってから三か月くらいか？それまで、お互いの苗字を知らないっておかしくないか？」
「そう言われれば、そうだけど。必要なかったからだよ。苗字を知らなくても、芸とベッドを共にしているんだからいいんだよ。」
「確かに。」

翌朝パリのバスターミナルに着くと、早速、計画通り親たちに絵葉書を書き、電子メールの事を伝えた。
「おい。吾輩の絵葉書には、連れが出来たと書いたぞ。いいよな。」
「あぁ、いいよ。あたしのには恋人と書いたよ。文句ある？」
「ある訳はないだろ。それじゃ、正式に恋人ってことだな。文書に残ると、ちょっと照れるな。親がそれで安心するか不安になるかは知らないが、まぁ、一人だけよりはましだろ。この辺にあるかどうか知らないが、そのうち、プリクラでもあったら写真を撮って送ってやろう。ところで、絵葉書にはまだパフォーマンスのことは書いてないんだ。ただ無銭旅行をしているとだけ書いておいた。もし、パフォーマンスのこと書いたら、見つけ出されて呼び戻されても困るし。」
「それもそうだ。あたしも書いてないよ。あたしの親には言えることじゃなくて。」
「そうか。まぁ、いいよな。」
しばらくしたら、パリの公立図書館でも行ってメールをチェックしようということになった。

それから、約一時間ほど歩いて、モンマルトル地区にある目的のレストラン、ドン・キホーテを確認し、そこから歩いて行けるホステルを探した。ロンドンより二人部屋が多いようで、歩いて２０分ほどの所に、ドミトリー・タイプの二人部屋が見つかった。値段的には、ロンドンのゲストハウスより若干高いが、普通のホテルとは比べ物にならな

い。

翌日は観光にあてた。二人はそれなりにパリに憧れていて、見たいものもたくさんあった。だが、せっかくのささやかな資産を無暗に使うことは出来ない。それで、名所を徒歩で回った。やはり、無料の観光地図を使い、慎吾が方向を見極める。麗名だけでは、方角どころか、ろくに地図を読むことさえ出来ない。ノートルダム寺院を少し見てから、ルーブル美術館の前を通過し、シャンゼリゼ通りを上って、凱旋門に向かい、エッフェル塔を下から眺め、さらにモンパルナス近辺まで足を伸ばした。ゆっくりと見物しながら歩いたので丸一日を費やし、仕舞にはくたくたになった。それで、帰りは地下鉄で帰ってきた。

次の日は、昼食と夕食の間のあまり忙しくない時間を狙って、ピエールに紹介されたレストラン、ドン・キホーテに出かけた。経営者のペドロは慎吾と麗名がフランス語を話せないとわかると、英語で対応してくれた。すでにピエールから聞いて待っていたと言い、レストランの中を案内してくれた。中はかなり広く、パフォーマンスをするのに適した場所もある。それから、更衣室兼休憩室を見せてくれた。ペドロは、昼食時も夕食時も両方来てよい、来た時は昼食も夕食も食べてよいと言った。これは、前にも増していい条件である。慎吾と麗名は次の日の昼食時から来ると言った。今日のところはホステルで準備をしようということになった。

パリの住人と観光客の受けをよくしようと、演奏する曲をパリあるいはフランスの音楽を中心に組み替えた。二人の定番であったタイスの瞑想曲の作曲家、ジュール・マスネは、たまたまフランス人であった。そして、やはりシャンソンは逃せない。もちろん、エディット・ピアフの「愛の讃歌」やイブ・モンタンの「枯れ葉」を取り入れた。その他にも、フランスの作曲家のクラシック音楽も取り上げた。麗名はピアノで弾いていたショパンやドビュッシーの曲を、速攻でハーモニカ用にアレンジして吹けるようにしておいた。

新しいルーティンもうまくいき、レストランでのパフォーマンスは順調であった。ロンドンの時より収入は増え、ほぼ毎日ホステルの費用を上回る。そして、食費はほとんどかからない。自由な時間は芸術家の多いモンマルトルの街を散策したり、時間のある時は周りの地域へも赴く。二人はパリの恋人たちの中に混じって、寄り添って歩くようになった。

ある時、何気なしに入ったリサイクルショップで慎吾が中古のスマホに興味を示した。それはもう電話としては使えない代物だが、WiFi があればアプリが使えると書いてある。そして、ただみたいな値段で売っている。
「おまえ、これを買って、レストランの WiFi を使えば、電子メールをチェックしたり、ウェブサイトを見たり出来るはずだ。買ってみていいかな。」
「あたしにはわからないけど、試してもいいんじゃない。」
二人はそれを買って、早速レストランで試してみた。慎吾の思惑通り、電子メールのチェックとウェブサイトを見るのには十分使えることが分かった。そして、二人のメール・アカウントには親からのメッセージが入っていた。

まず、これは慎吾の親。二人で小さな画面を覗きこんで読んだ。
「絵葉書を受け取りました。この電子メール試してみます。旅行中のあなたと連絡の手段ができて、ホッとしました。あなたがアメリカから追放されてロンドンで過ごしていると聞いた時はかなり心配しました。私たちはあなたのアメリカでの滞在先に連絡して、こちらで費用を負担して、荷物をまとめて送ってもらいました。今度は、連れと一緒にパリへ移動すると聞き、少し驚きましたが、あなたにはあなたの人生があるのだから、悔いのないように過ごしてください。あなたは昔からあまり計画性のある人ではなかったから、まだ旅行の計画とかはないと思いますが、何か変化があったら連絡してください。連れの人によろしく。母。」

「これは大体吾輩の予想通りだな。一つやばいことは吾輩のアメリカに残された荷物が両親の所へ送られているということだ。」
「何がやばいのさ。」
「いや、大したことではないが、吾輩の日記のようなものがある。それには、恥ずかしながら吾輩のかなり正直なことが書いてある。一人で寂しかったことや、親に対する不満とか書いてあるんだ。」
「それは確かにプライベートなもんだな。あんたの両親信用ある？」
「一般的なことに関しては、大丈夫だが、やっぱり、日記は気になるな。それから、おまえによろしくだそうだな。」
「それはありがたい。うちの親はそうはいかなそうだ。」

これは麗名の親。
「麗名、絵葉書ありがとう。お父さんに手伝ってもらって、このメールを書いています。あなたが短期留学の後に急に旅行すると言ってきたときは、正直言って、動揺しました。知らない土地で、何をして過ごしているのですか？あなたは計画性に欠けているので、

どうなってしまうのか心配です。ところで、恋人という人はきちんとした人ですか？その恋人と将来の計画はあるのですか？それから、帰りの航空券は変更できましたか？出来るだけすぐに、電子メールで返答してください。真奈美より。」

「あ～ぁ、やっぱりだ。うちの親はやりずらい。どうしてこう、あたしが答えたくないような質問ばかりしてくるんだろうな。」
「そりゃ、心配しているからだろ。娘の親が心配するのはよくわかるけどな。」
「ほんとかい。どうしてだ？」
「え～、女の方が簡単に男にそそのかされたり、襲われたりするだろう？」
「それは、なんだか、性差別的な発言だな。それに、そそのかしたり、襲ったりしたのは誰だったかな。いずれにしても、このメール返事する時、手伝ってよ。」
「あぁ、いいよ。メールの場合、言葉の使い方とか気を付けないとな。でも、おまえ、電話よりはやりやすいんじゃないか？もし、電話でこんな質問されたらどうやって答えるつもりだ？」
「そうだよな。こんな感じかな。『お母さま、私の彼はアメリカでパイロットだったそうなの。残念ながら、ビザが切れてしまって、イギリスに来たらしいのよ。でも、とても素敵な彼で、私のことすごく愛してくれているわ。』」
「えっ、何それ？おまえ、まさか、両親とはそういう話し方してるの？」
「だから、前に、言ったろう。あたしはお嬢様なんだよ。言ってみれば、バイリンガルみたいなもんだよ。日本語と英語のバイリンガルだったらよっぽど良かったけどな。」
「こりゃ、驚きだな。当然、吾輩はいつものおまえに惚れたわけだけど、おまえがお嬢様言葉を使うと～、」
「不気味なんだろ。わかっているよ。田舎から出てきた田舎娘が都会の言葉を話していた、と思ったら急に土地の方言を使い始めたようなもんだろ。」
「ところで、吾輩たち、二人とも計画性がないと思われているみたいだな。」
「反論できる？」
「い～や。反論は諦めた。それから、この、真奈美って、おまえの母親？」
「そうだよ。」
「なぜか、母親が真奈美っていうのピンとこないんだけどな。」
「それは、あんたの問題じゃないの。あんたは、あたしの名前の麗名だってピンと来てないんだから。」
「まぁ、そうだけど。」
「どっちにしても、返事はちょっと保留。今考えたくない。」

ある日の夕食時、レストランの客の一人がフランス語で尋ねてきた。ところが、慎吾も麗名もフランス語が全くわからない。こんな時、慎吾は数少ないフランス語の一つを使う。
「オングレ？」
普通のフランス語の本とかには「アングレ」と書いてあるかもしれないが、慎吾には「オングレ」としか聞こえないのでこう言うことにしている。また、この「レ」の音は、ほんとは「L」であるが、慎吾にはそこまで考える余裕はまだない。その男は今度は英語で話してきた。内容は大体こんな感じであった。
「質問がある。」
「何か？」
「今度私のアパートで仮装パーティーをする。余興として君達の芸をしてくれるか？」
慎吾はここで麗名と相談する必要があった。
「私のパートナーと相談させてくれ。」
慎吾は麗名の方に向いた。
「おまえ、この人のアパートでの仮装パーティーで余興をして欲しいと言うんだけど、どうする？」
「あんた、お金には代えられないよな。」
「吾輩も同感だな。じゃ、やるか。」

慎吾はその男にいった。
「では、行く。どこに、いつ行けばいいのか？報酬はどのくらいか？」
「この招待状に場所と時間が書いてある。君達も仮装してくるように。今、前金として半分、これだけ払おう。仮装の費用はこれを使って、君達で用意してくれ。」
と言って、慎吾と麗名には信じがたい額面の現金を渡した。慎吾はそれを受け取ると、言った。
「わかった。約束の日に行く。どうもありがとう。」
「残り半分は、当日払う。約束はちゃんと守ってくれ。前金だけ取って逃げようとすると、あなたたちに良くないことが起こるだろう。お願いする。ありがとう。」

ホステルへの帰り道、二人は興奮を抑えられなかった。
「あんた、これはすごい金額だけど、あの男は何者だろうね。」
「あぁ、ちょっと怪しい感じだな。」
「でも、もう約束しちゃったから、とにかく無難にこなさないと。」
「そう言うことだろうな。」

仮装の衣装を用意するため、二人は初めてパリのデパートに足を踏み入れた。だが、その途端に、場違いであると感じ引き返した。暫く歩いているうちに、どうやらパリ版の百均らしきものがあったので、今度はそこに入った。慎吾は黒い目だけ覆うようなマスク、白いシャツ、そして黒いマントを買った。麗名は目まで隠れるような魔女の帽子とペラペラの黒い魔女のガウンのようなものを買った。二人とも顔がはっきりわからないように配慮したつもりだ。
「おまえ、これ、随分安上がりだったな。ほとんどお金使ってないよ。」
「あたしたちにはそれで十分だよ。」

さて、仮装パーティーの当日、慎吾と麗名はレストランの仕事を少し早めに切り上げて、約束の時間に約束の場所に行った。ドアベルを鳴らすと、あの男が出てきた。
「よく来てくれた。こちらに来てくれ。」
男は二人を小さな部屋に通した。
「この部屋を準備に使ってくれ。時間が来たら、誰かに呼びに来させる。それから、パーティーで出されている飲食物はみなご自由に。」

慎吾と麗名は仮装をすると、まず飲食物を頂こうということになった。ワインにシャンパン、チーズに生ハム、鮭の燻製にテリーヌと軒並みに試してみる。この日はレストランで夕食を食べてこなかったので、調子に乗って少し食べ過ぎたかもしれない。しばらくして、係と思われる人に呼ばれ、パーラーと呼ばれる大きな部屋に行く。そこで、あの男が何やらフランス語で話している。そして、拍手があり、合図とともに二人はパフォーマンスを始めた。麗名と慎吾はハーモニカを吹き始めた。この日も、パリでスタンダードに使っている、フランスの曲を使う。二人とも若干アルコールの影響と食べ過ぎのきらいはあったが、さすがになれたルーティンなので難なくこなした。今回は、特別に少し長めにした。パフォーマンスが終わると大きな拍手があり、「ブラボー」という声も上がっていた。二人はお辞儀をして退場した。部屋に戻る前に、今度はデザートが用意されてあったので、それもいただいた。マカロン、クレームブリュレ、そしてチョコレート・ムースと立て続けに平らげた。

その後、部屋に戻り、片付け始めたところに、あの男が入ってきた。大変上機嫌で、二人に礼を言い、残りの礼金を支払った。また頼みたいときはどうしたらよいかと聞かれたので、ドン・キホーテに来れば毎日パフォーマンスをしていると言った。その時、慎吾は急に思い出して、電子メールのアドレスも教えた。これからはビジネスにも役立つかもしれないと思った。この日は少し遅くなったし、かなりの礼金が入ったので、奮発してタクシーで帰った。二人とも日本を出てから初めてのタクシーだった。

ホステルに帰った二人は大はしゃぎだった。
「あんた、これはすごい稼ぎだよ。」
「ほんとだな。だけど、今の生活は不安定だから、非常用に取っておかないといけないかな。おまえ、何か使いたいことがあるのか？」
「いいや。今はない。あんたと一緒に居るだけでいいんだよ。」
これで、少し非常用資金ができたことになった。

それまで、二人は毎日パフォーマンスをしてきたが、少し余裕が出来たこともあり、週に一日くらい昼食時のパフォーマンスを休もうということにした。近くの公園でゆっくりしたり、市内の観光地に出向いたりした。この日は、ノートルダム寺院へ出向いた。ここは、相変わらず観光客が多い。二人が寄り添って、前の広場を歩いているとき、どこからともなく現れた小学生くらいの子供数人が二人にどしんとぶつかった。その時、慎吾と麗名は二人だけの世界に入っていたので、何が起こったかわからなかった。急に我に返った慎吾が自分のポケットをチェックすると、そこに入れておいた現金がなくなっていることに気が付いた。その時までには、その子供達はすでに人ごみの中に消え去ってしまった。幸い、被害は慎吾のポケットに入っていた限られた現金だけだった。パスポートと予備の現金などはシャツの中の貴重品袋に入れてあった。いずれにしても、二人にはかなりのショックであった。全く予想していない出来事だったのだ。
「畜生！参ったガキだ。」
「あんた、あの子供達よく見た？」
「そんなの見てる余裕なかったよ。どうした？」
「かなり凄い服着てたよ。」
「それがどうした。」
「あたし、少し可哀そうになったよ。だって、どうしてあんな小さな子供達があんなことしなきゃならないわけ？どういうところに住んでいると思う？」
「そりゃ、金持ちな訳はないよな。それでも、この吾輩でさえ、人様の金や物を勝手に取ろうとは思わないぞ。」
「そうなんだけど。ひょっとしたら、あの子達、ジプシーの子かな？あたしは高校の時、『ノートルダムの背むし男』を読まされたんだけど。その中にジプシーの一族の事が書いてあった。社会の底辺に生まれ育った人間たちと上層階級に生まれ育った人間たちでは全く違った価値観がある。今も、400 年前と何も変わっていないのかもしれない。あたしは、お嬢様階級に育ち、そして今は、吾輩君と下層階級の生活をしている。それでも、まだこの下層階級の価値観に浸っているわけではないし、理解しているわけでもな

い。」
「おい、おい。どうして、急にそんなに同情的に、文学的に、そして社会学的にさえなっちゃったんだよ。あのじゃじゃ馬はどこ行ったんだ。」
「ちゃんとここにいるよ。だけど、ただのじゃじゃ馬じゃないんだよ。」

ノートルダム寺院の周りのような観光地ではすりやひったくりが横行しているのは明らかだった。実際、二人の見ている前でも、何回か観光客が大声を出して盗人を追いかけようとしているところを見た。その他にも、警官がすりと思われる人を捕まえて殴る蹴るの暴行を加えているとこも見た。また、物乞いの数の多さにも驚かれた。慎吾と麗名は、自分たちは一応大道芸人の端くれだと自負していた。自分たちは小さいながらパフォーマンスをして、代替えにお金をもらう。何もせずに、お金を求める物乞いではないと。しかしながら、パフォーマンスの終わった二人と物乞いの終った物乞いとは大した違いはないかもしれない。いずれにしても、僅かな収入の範囲内で何とか生活しているのだ。

麗名はまだ感傷に浸っているようだった。
「あんた、あたしたちもあそこにいる物乞いにお金あげるべきかなぁ？あたしたちは、今や取り敢えず食っていける。少しばかりの蓄えさえある。あの人たちはあたしたちの出来る芸さえない。」
「あまえ、同情するのはいいけど、吾輩たちだって、裕福なわけじゃない。吾輩たちのささやかな余剰金で何万と居る物乞いを救えるか？」
「それはそうだけど。それとも、あたしのこの感情は偽善なのかなぁ。」
「そんなことはないと思うよ。おまえはいろいろ考える前に、あのすりの子供たちに同情していた。吾輩には、おまえの素直な気持ちと思ったよ。」
「ありがと。もう一つ考えたのは、あたしたち、ピエールやペドロが居なかったら今まで生きながらえてこれなかったかもしれない。完全に彼らの好意に頼っていない？悪いことではないけど。ちょっと情けなくもなるな。」
「確かに、それは事実だけど。でも、あのすりのように他人の意志に逆らった行動はしてないよな。どちらかといえば、上等物乞いスタイルだよな。」
「大道芸人は上等物乞いか。まぁ、あたしたちは大道芸人くずれの食堂芸人ってとこだけどね。」

その後は、やや長い距離を歩いた。途中、時々どっちに行っていいかわからない時もあった。麗名が口を開いた。
「あんた、この道合ってる？ちゃんとホステルに帰れるよね。」

「まぁ、いずれは着くだろう。吾輩もまだパリの地理感があるわけではない。その点、飛行機はいい。管制官がどっちに行けとか言ってくれる。」
「もちろん、あたしは完全な方向音痴だ。それに比べたら、あの姫赤立て羽蝶は凄いよな。大陸を超えて旅するって言ってたけど、どうやって行く方向が分かるのだろう。」

パリの街中には大小様々な美しい公園がある。途中は、何回か公園のベンチで休憩が必要だった。ベンチに座っているときに慎吾が感嘆したように話し始めた。
「おまえ、ちょっとこのクモの巣見てご覧よ。」
「どれ？結構大きいね。」
「大きいだけじゃないよ。二本の庭木の間に三本の糸が三角形のように張ってあって、それを放射線に、何重にも同心円状に糸が張ってある。」
「それ、あたしには、数学みたいでついていけない。」
「失礼。他に言い表しようがなかった。兎に角、凄いということだ。こんな小さな体と頭で、どうやってこんな複雑な巣を作るんだろう？これと同じ物を同じスケールで人間が一人で作ろうとしたらどういうことになるだろう？」
「今度は、あんたが感傷的になってるね。」
「こんな小さなクモが小さな頭を使ってこんな凄いものを作っている間に、姫赤立て羽蝶があんなに小さな体で大陸を超えて旅する間に、人間は大きな脳みそを乱用して、弱い者に暴力をふるい、無意味な戦争をしている。おまえは知ってるかどうか、吾輩がアメリカの南部に住んでいたころのことだ。未だに、凄い人種差別なんだぞ。ひどい時はリンチとかさえ起こる。あれには、耐えられなかった。それだけじゃない。ヨーロッパ人はアメリカ原住民からすべてを奪った。アメリカ原住民が今、アルコール中毒や麻薬や自殺で苦しんでいるのはすべてそのせいだと言われている。ひどいと思わないか。」
「確かに、ひどいよね。誰がどうやって償えばいいの？」
「わからない。兎に角、悪いことに加担だけはしたくないよな。」

週に半日の休日は二人にとって、良い息抜きの時間だった。それなりに、パリの観光もした。一回はバスでベルサイユ宮殿にも行ってみた。確かに、凄い庭園と建物で、二人は感嘆はしたが、特に慎吾が感じるのはどうしてルイ 14 世一人のためにこんな施設を作らなければならないのかという疑問であった。世の貧しい人々は、その頃どんな生活をしていたのだろうか。ただ、宮殿内の説明では、庭園は一般大衆に解放されていたと説明されていた。それでも、その趣旨は大衆にルイ 14 世の偉大さを植え付けるための手段とも臆されていた。そして、二人が有名な観光地に行って、いつも感じるのは観光客相手のすりや横行である。ロンドンでもそうであったろうが、二人にはパリの方がより多くの観光地にも行ったためか、パリの街で見る貧富の差の方が強く印象に残った。

パリでの生活も３か月近く経った頃、レストラン経営者のペドロから急な知らせを受けた。彼の父に末期の咽喉がんが発見され、先が長くない。ペドロは至急父の経営しているマドリッドのバー・レストランを引き受けることになった。パリのドン・キホーテは今のマネージャーが引き続き管理を続ける。慎吾と麗名はそのままドン・キホーテでパフォーマンスをしても良い。ただ、ここで、ペドロの提案なのであるが、二人がマドリッドに行く気はないかというのである。もし、そうなら、父のレストランでパフォーマンスをしてくれないかとのことだった。パリの時と基本的には同じ条件で良いという。慎吾と麗名は即座に相談して、その話に乗った。そして、ペドロがマドリッドまで車で行くときに一緒に同乗しても良いと言われた。

マドリッドへの出発の日の早朝、慎吾と麗名はホステルを引き払い、レストランの前で、ペドロの車に乗った。全行程は１０００キロ以上、１４時間くらいはかかると言う。途中９時間程走って、バスク地方モンドラゴンとかアラサテと言われる町にあるペドロの友人宅で一泊させてもらえるらしい。道はほぼすべて高速道路なので、快適だ。長閑なフランスの農園、草原地帯を通り、ワインで有名なボルドーを通過し、バスク地方の海岸線を少し通ってモンドラゴンに着いた。途中３回昼食とトイレ休憩をしただけで皆かなり疲れた。ペドロの友人宅では夕食を出してくれた。ソーセージと豚肉をさっと炙って、じゃが芋と一緒に盛り付けてくれた。

ペドロは長時間のドライブで疲れているようで、ソファーでいびきをかき始めた。ペドロの友人はせっかくだからと言って、慎吾と麗名にモンドラゴンの事を話し始めた。彼はバスク人で、バスク語も話せるが、日常会話はすべてスペイン語だと言う。それでも、英語は問題ないようだった。この地モンドラゴンはその地名に因んだ、経済共同体モンドラゴンの発祥の地である。この共同体は、利益追求を目的とせず、組合員が所有・経営する共同組合を相互に協力するような形で経済発展を遂げようという趣旨を持つ。共同体はバスク地方だけでなく、スペイン全体そしてその周囲にも広がっている。そして、この地には共同体に直結の大学さえある。世界中で資本主義が台頭してきいる中、このような動きが展開しているというのは驚くべきことである。慎吾と麗名は少なからず、感銘を受けた。

マドリッドまでのドライブの途中で、ペドロが慎吾と麗名の予期していなかった質問をしてきた。
「ところで、君たちはもう３か月近くパリに居るが、ヨーロッパ連合の法的な滞在期限

の事を知っているか？」
慎吾が答えた。
「いや。」
「大まかに言って、ビザなしでは６ヶ月の間に３か月しか滞在出来ない。もちろん、これは合法的にの話だ。法律の事を厳しく言うなら、君達がパフォーマンスをして収入を得ることもいけないが、まぁ、チップだけだから、捕まる可能性はほぼないだろう。」
慎吾は即座に麗名に説明する。麗名が慎吾に尋ねる。
「それじゃ、これ以上ヨーロッパ連合にいたら、不法滞在になるって言うこと？」
「そう言うことだ。」
「あんたは、アメリカでもう経験済みだけど、あたしは未経験だし、気になるな。パスポートに記録が残っているから今後の問題にならないかな。」
「わかったよ。何か方法があるか聞いてみるよ。」

慎吾は、今度はペドロと話す。
「ペドロ、麗名は不法滞在は避けたいようなんだけど、何か方法があるかな？」
「そうか、私は一応聞いただけで、君達はその事は気にしないかと思ったよ。ヨーロッパには星の数ほど不法滞在者が居る。まぁ、対応策はある。一つは、またイギリスに３か月行っていれば、ヨーロッパ連合の滞在記録がゼロに戻る。だが、君達は今イギリスとは反対の方向に向かっているし、イギリスはより滞在期限に厳しいとも聞く。ところで、君達はイギリスにどのくらいいたんだ？」
「３か月ちょっとかな。」
「なるほど。君たちのパスポートに滞在期限が書いてあるはずだが、いつになっているかな？」
慎吾はまた麗名に説明して、二人ともパスポートを見る。
「えっ！驚いた。僕のは、僕たちがイギリスを出る２週間ほど前が期限になっている。麗名のはイギリスを出る２か月前が期限になっている。二人ともオーバーステイしている。」
麗名は気になりだしたようだ。
「ただ、ペドロ、僕たちがイギリスからフランスに入るときは何も言われなかった。」
「そうだろう。そのくらいのオーバーステイは特に罰せられるということもないだろう。ただし、イギリスの移民局には記録されているはずだ。つまり、君達がこれからイギリスに入国しようとすると拒否される可能性もある。もう一つの方法は、モロッコで３か月過ごすことだ。もし、滞在期限のことが気になって、それでも私のバー・レストランでパフォーマンスをしたければ、その後で、私の父のレストランに来てくれてもいいよ。

いつでも大歓迎だ。」

慎吾はまた麗名と話し合ってからペドロに返答した。
「ペドロ、分かったよ。それじゃ、僕達はモロッコに３か月行って、その後またお世話になりたい。」
「そうしてくれ。君達は私の電子メールのアドレス持っているから連絡できるよね。」
「出来る。」

ペドロはまず、二人をエル・エスクデロと言う彼の父のバー・レストランまで連れて行って場所を見せた。そして、スペイン南部に行く鉄道の駅まで送ってくれた。慎吾と麗名はペドロに丁寧に礼を言い、３か月後ということで別れた。

そのすぐ後、麗名は慎吾に言った。
「あ～ぁ。このビザのことは異常に面倒だな。あんたがアメリカでビザなしで国外追放になったという様子が少しはわかってきたよ。」
「そうなんだよな。吾輩としたことが、イギリスで不法滞在をしてしまったか。まぁ、大したことはないよな。それより、お前には迷惑をかけたな。」
「しようがないよ。気が付かなかったんだから。これからは、気を付けよう。滞在期限は守ることにしよう。だけど、非合法な訳だけど、パフォーマンスは続けないと生きていけないよね。」
「そう言うことだ。随分勝手な合法主義だよな。一応、現実主義と言っておこうか。兎に角、どうやってモロッコに行くかな。」

いつものように、二人は駅で無料の観光ガイドを入手して調べ始めた。どうやら、スペイン本土南端のタリファと言う町まで行って、そこから対岸のタンジェと言う町までフェリーに乗るようだ。兎に角、一番安そうなので、バスをセビージャで乗り換えてタリファまで行こうということになった。宿泊代を省くため、６時間ほどのセビージャまでのバスは夜行を選んだ。バスに乗るまでに時間があったので、二人は駅でスペインのハムを挟んだサンドイッチを買って、ゆっくり食事をした。その後は、街をゆっくりと歩きながら、バスターミナルに向かった。

疲れていたせいか、バスに乗ってからは二人ともよく眠れた。セビージャでは簡単に朝食を取って、すぐ次のバスに乗った。これで、タリファに昼頃着いた。いかにもスペイン南部の町と言った感じで美しい。海岸線も絶景であった。フェリー乗り場まで１５分程歩いて、次のタンジェ行きフェリーに乗った。これで、ヨーロッパ連合の今回の滞在

はギリギリ３か月に収まった。

３．タンジェ（モロッコ）

フェリーから見るタンジェの街はスペイン側のタリファより遥かに大きく見え、白い家々が小高い丘に立ち並ぶ様子は見ものだった。訪れる価値のある所と思えた。直に、岸壁に着き、モロッコに入国した。この時は少し気を使って、パスポートの査証欄を見た。二人とも３か月の滞在期間になっている。モロッコに居るのには丁度良い期間だ。まずは、遅い昼食を取った。アラビア語の他には、英語も通じるようだが、どうやらフランス語の方が主流のようだ。そして、フェリーターミナルで無料の観光ガイド兼地図をもらい、ホステル探しに入った。タンジェは思ったより大きな都市だ。ガイドにホステルがいくつか載っているあたりを歩いて回った。旧市街は建物が立ち並ぶ細い道が迷路のように交差しており、すぐに迷ってしまいそうな所だ。取り敢えず今日泊まれる所をと思っていたが、ロンドンやパリから比べれば格段に安い。いい値段のトイレ・シャワー共同の二人部屋が楽に見つかった。麗名は嬉しそうに言った。
「あんた、ここ結構いいよね、この値段で。ここで収入がほとんどなくても、パリで稼いだ資産でやっていけるぐらいじゃない？」
「そうかもしれない。それでも、少しは稼ぎたいよな。それから、また新しい国に来た。たまには絵葉書を出そうということだったが、今は電子メールが使えるからメールを出そうか。それに、二人ともまだ親に返事を出してなかったから、それから片付けないと。特に、おまえの母親は手ごわそうだから何とかしなくては。」
「それ、忘れていたかったんだけど。しようがないか。」

慎吾の親は特に問題ない。基本的には、ただ、モロッコにに入ったとだけ伝えた。ホステルのWiFiを使って送信した。問題は麗名の両親である。麗名はこんな風に書いた。
「お母さま、今日、モロッコに着きました。まず、私の勝手な行動をお許しください。私には、どうしても旅をする時間が必要なのです。この旅で、初めて私と一緒に居ることを喜んでくれる恋人が見つかりました。そして、彼と私はロンドンでもパリでも現地の見知らぬ人々の好意に甘え、それなりに生活していくことができました。彼と一緒にもう少し旅をさせてください。この旅がいつまで続くか今の時点でははっきりと言えません。ただ、今の私はどこまでも彼と一緒に行きたいのです。最後に、本当に言いずらいのですが、帰りの航空券は私の過失で失効してしまいました。麗名。」

麗名は下書きを慎吾に見せた。慎吾はじっくりと読んで、まだ下を向いたままだ。
「おまえ、吾輩は涙ぐんでしまったよ。ほんとに、ずっと一緒に居たいのか？」

「うん。そうだよ。これから何をするにしても。」
「ありがたいな。泣かせるよ。吾輩はおまえのそのメッセージいいと思うよ。よく気持ちが表れているし、前の質問に取り敢えず回答している。当然、すべて答えている訳じゃないが、不必要な詳細は書いてない。残念ながら、それでも、おまえの親御さんは満足はしないだろう。ただ、吾輩が思うのは、満足しないのはおまえのメッセージが足りないからじゃなくて、親御さんが、子供の気持ちを理解してくれてないからじゃないかな。」
「そうなのかなぁ。無理かなぁ。兎に角、これで出すよ。」

その日、二人はパリからここまでほとんど一気に来て、相当疲れていたはずである。それでも、お互いの気持ちを分かち合った後の二人部屋ですぐ眠りにつくわけにはいかなかった。翌日ゆっくりすれば良いと思った。

次の日はゆっくり起きて、昼から街を探索した。屋台みたいなところで、スナックを買ってから、レストランを見たり、この土地でスークと呼ばれる市場に行ってみたり、公園をぶらついたりしてみた。何か所かで、ストリート・パフォーマンスもあった。一組はモロッコの伝統音楽、もう一人はポップ風のギターと歌、そして、スタチューとも呼ばれる銅像のまねなど。

麗名は早速、モロッコの伝統音楽の特徴を掴んで、パフォーマンスに取り込めるか考え始めていた。この日少し聞いた限りでは、反復が多く、メロディは比較的単調、テンポは比較的早く、なかなか終わらない感じだが、手品のバックグラウンドに使用できるかもしれないとも思った。ただ、早めの打楽器が重要と思われ、ハーモニカでその効果を出すか、足踏みなどを取り入れると必要があるかもしれない。メロディはあまりハーモニカとは合わないかもしれないが、それでも、いくつか反復する要所を書き留めておいた。慎吾も麗名もまだスペイン南部のアンダルシア音楽には馴染みがないが、バスターミナル等で聞いたものを思い起こすと、モロッコとアンダルシアの音楽に接点があるようにも感じられた。

夕食は二人ともチキンをローストしたものを挟んだサンドイッチを食べた。その後、自分たちでは入らないような少し高級そうなレストランを何件も覗き、パフォーマンスをやらせてくれるようなところがないか偵察した。何件か聞いてみたが良い反応はなかった。その日は、それでホステルに戻った。

次の日は、練習と準備を目的に、公園でパフォーマンスをしてみようということになっ

た。モロッコ版のルーティンを作ろうということだ。まずは、慣れているフランスの曲を演奏する。そして、その後に、麗名がモロッコの伝統音楽のメロディーを吹いてみる。ハーモニカ一つではなかなかうまくいかない。そこで、慎吾が足踏みをしたり、その辺にあった木の枝で空き缶を叩いたりしてみた。少しは感じが出てきた。暫く、そんな感じで練習していた。この日はチップ用の竹細工の器も用意せずに、ただ練習した。

その途中にどうも日本人と思われる中年のカップルが近づいてきた。
「あなた達、日本人ですか？」
麗名が答える。
「はい、そうです。」
「ハーモニカも手品も凄くお上手ですね。今は、お客さんに見せていないのですか？」
「一昨日スペインからモロッコに入ってきたばかりで、ここの音楽を取り入れる準備と練習をしているんです。」
「そうですか。見ていてもいいですか？」
「どうぞ。」
そのカップルは暫く見ていたが、途中で女性の方が一度いなくなった。女性は直に戻ってきたが、練習の切れ目に麗名に言った。
「私たちには、あなた達のように世の中の枠にとらわれないで生活しているのが、とても素敵で羨ましく思うのですよ。頑張ってください。そして、これからの活動にこれを足しにして下さい。他の人の注意を引くと良くないので、後で開けて下さいね。陰ながら応援してますよ。」
その女性は麗名に小さな紙袋を渡すと、男性と一緒にその場を素早く立ち去った。言われた通り、ホステルに帰ってからそれを開けた麗名はびっくりした。
「あんた！ちょっとこれ見て。普通じゃないよ！」
「えっ！なんだ、これ！」
「米１００ドル札でこんなに！これ、あたしたちの何年分の稼ぎになるの？」
「ほんとだ。どうしてだ？なんであの二人が？」
慎吾と麗名には理解できないことだった。同じ日本人と言うだけで、こんな大金を大道芸人にくれるものか？こんなへんぴなところを旅しているのだから、世界中を遊び歩いている大富豪か？
「不思議だよね。でも、これからの活動を応援するって言ってたよね。つまり、あたしたちの活動をスポンサーしたいということかな？」
「なるほど、見返りを求めないスポンサーね。今の世の中にはないことだよね。おまえ、これは、期待に応えないといけないかな。」

「そうだよね、みんながお金くれるわけではないけど、それでも、あたしたち、パフォーマンスを続けなくてはいけないかな。」

これまで、慎吾と麗名は純粋に生活のためにパフォーマンスをしてきた。しかし、この時点を機に、二人の気持ちに僅かな変化が生じてきた。二人のパフォーマンスを期待している人たちが居る。そんな使命感とも思えるような気持が芽生えてきたのだ。そして、二人にとってかなりの大金を手にした今、精神的な余裕も出てきた。明日から、パフォーマンスを再開しよう。今日はしっかり準備しよう。そういう気構えが出来ていた。

その後、ホステルのそばの食べ物屋で簡単な夕食を取った。今回はいつも頼んだことがなかった前菜を余分に取った。そのせいか、ついてきたピタを全部食べ切らず、紙ナプキンに包んで外に出た。慎吾も麗名も食べ物を無駄にすることだけは許されないという性分だった。外には、いつもの物乞いが居た。二人とも物乞いにお金をあげたことはない。今となっては、二人には十二分のお金がある。それでも、二人はその物乞いにお金をあげようとはしなかった。その代わり、食べきれずに持っていたピタをあげた。物乞いはお金を期待していたと見える。何も言わずにピタを受け取った。慎吾と麗名はこの時、初めてこの物乞いと目を合わせた。少しもの悲しげな表情には力強さも感じられた。彼には慎吾と麗名の今回のようなパトロンはいないだろう。彼のことは、誰も何も期待していないのだろう。それでも、何も言わずに生きている。二人にはまだ人生の意味がよく分かってはいなかった。

翌日、二人は同じ公園に行った。今回はもう少し人通りがあるあたりに陣取った。一応今まで使っていた竹細工の器を前に置いて、ハーモニカを吹き始めた。気持ちの変化はパフォーマンスにも反映しているようだ。二人とも前よりゆとりがあるように見える。お金を稼がなければという気持ちから、人々に娯楽を提供するという姿勢に変わりつつあるようにも見える。そして、何よりも違うのは二人とも観客を観察する余裕が出てきたことであろうか。今までは、只ただ、自分たちのルーティンをやり遂げることで精一杯だったのが、見物客の反応を見ながら、それを自分たちの行動に反映する余裕が出てきた。押し売りではなく、インタラクティブ、対話型のパフォーマンスに移行してきているのだ。これは、この手のパフォーマンスがステージでのものと大きく違う点だろう。

この日は、それほど多くの見物客は来なかった。一人、二人と足を止めるが、人ごみなどはとてもできない。当然、収入もかわいいものだった。それに、この辺の人々の収入

自体、ヨーロッパよりずっと低いはずだ。以前の二人だったら、落胆したことだろう。ところが、今は違う。一人でも見物客が来て、気に入ってくれればそれで良いと思うようになった。

同じような状態が数日続いた。そして、ある時、二人はモロッコの伝統音楽を真似たものを二本のハーモニカで吹き、慎吾が足踏みで拍子を取っていた。丁度その時、小さな太鼓のような物を持った男が立ち止まった。そして、二人の音楽に合わせて太鼓をたたき始めた。何となく、のっているようである。反復的な音楽に合わせてコリもせずに太鼓をたたき続ける。時々、うなずくように首を振っている。慎吾と麗名も暫く調子を合わせていた。この後、一休みした時に、慎吾が見物客に向かって英語で言った。
「皆さん、今日飛び入りで太鼓を一緒に叩いてくれた彼に拍手を。」
慎吾と麗名も拍手をした。その後、休憩に入り、慎吾は彼にも英語で話しかけた。
「ありがとう。私たちは、慎吾と麗名。」
「メルシー。ジュヌコンプランパラングレ。」
仕方なく、慎吾は彼と握手だけした。

次の日、慎吾と麗名がいつものようにパフォーマンスをしていると、前日の太鼓の彼氏が他に数人楽器を持った人々を連れてきた。慎吾と麗名がびっくりしていると、彼らは麗名の吹くタイスの瞑想曲に合わせて伴奏を始めた。この有名な曲はよく知っているようだ。曲が終った時には見物客が拍手をする。慎吾も飛び入りのパフォーマーを立てて拍手をする。彼らはお辞儀をして、慎吾と麗名に拍手をする。そして、飛び入り組が、麗名の前日吹いていた曲を始めた。麗名と慎吾に一緒に演奏しろというように手招きする。この反復的な曲の途中、あの太鼓の彼氏が慎吾に太鼓を渡して、たたけと合図する。いつたたけば良いかも手招きで教えてくれた。その後、いくつか違う曲を取り上げた。麗名のまだ知らない曲の時は、彼らのうちの女性のボーカルが麗名の横で、メロディーを歌う。その後、麗名がハーモニカで同じ節を吹く。そして、麗名が完全に真似できない時は、何やら即効で胡麻化す。よく言えば、ジャズのインプロヴィゼーションのような具合になった。

見物客は喜んで見ていたが、実は一番喜んでいたのはパフォーマー自身であった。この時は、見物客はさておき、パフォーマー皆が音楽的対話をしていたのだ。ひとしきり、演奏が終わり、見物客がお金を入れて帰って行った。慎吾と麗名は、飛び入りの楽師たちにそれを全部渡そうとした。ところが、その中の女性のボーカルが、英語で言った。
「それは、あなた達でどうぞ。私たちは、太鼓の彼から聞いて飛び入りで参加出来てとても楽しかったから、それだけで十分です。」

慎吾が返答する。
「ありがとう。ほんとに楽しかった。音楽に国境はないね。ところで、僕は慎吾、こちらは麗名。日本から来ました。」

「私たちはここのバンドで、いつもスーク、市場でパフォーマンスをしてます。太鼓の彼がカズマで、私はジャズミン、そして、このひとたちは～。それから、カズマはアラビア語の他はフランス語しか話せません。」
「ありがとう、ジャズミンと皆さん。また、一緒に演奏できるかな？」
「私たちはスークで夕方から毎日のようにパフォーマンスをしているから、いつでも一緒にどうぞ。それから、カズマが慎吾は手品をすると言っていたから、一緒にそれも見せて下さい。」
と言う訳で、二人のパフォーマンスは意外な方向に展開していった。麗名は言った
「あたし達、食堂芸人からやっと大道芸人に仲間入りしたようだ。」

慎吾と麗名はその翌日からジャズミンのグループに加わった。麗名はハーモニカで、慎吾は民族ドラムで、演奏に参加する。たまには、麗名がフランスや他国の曲をソロあるいは伝統楽器の伴奏で吹く。そして、時折、曲の合間に慎吾が手品を見せる。スークは先の公園よりよっぽど人が多く、それなりの人だかりとなった。パフォーマンスが終わって、談笑しているときに、慎吾と麗名にといってその日の収入のうちの何某かを渡そうとした。慎吾は、「二人はまだ見習いだから、まだ受け取れるほど活躍していない」と言った。彼らは、「じゃ、明日からは頭割りでいこう。今日は、私達が夕食に招待する」と言った。その後、全員で、スークの中の屋外レストランで土地の料理を食べた。

それからは、同様にことが進んだ。二日目からは慎吾と麗名も支払いを受けた。そして、徐々に二人にも伝統音楽の要領がつかめ、全員でスムーズにパフォーマンスをすることが出来るようになった。そして、二人が日本から来ているということもあり、いくつか日本の曲も演奏するようになった。中でも、アニメで知られているため、スタジオジブリの宮崎駿監督の映画で使われる久石譲の音楽は喜ばれた。毎日かなりの見物客があり、それなりの収入があった。初めは、どうなることかと思ったモロッコでの活動は予想以上に楽しいものとなっていた。

そんな調子で始めの２か月はあっという間に過ぎた。その頃、ジャズミンのグループはカサブランカのホテルで三日間ショーをするという話が出てきた。慎吾と麗名も一緒に来て欲しいと言うのだ。交通費、食費、宿泊代等諸経費はすでに契約済みの収益金から

支払い、残りは頭割りで分割するという条件だ。二人は、何よりもこのグループの一部として一緒に行動できるのが嬉しかったので、即座に同意した。

ショーの初日にグループの手配したバスで半日かけてカサブランカの会場のホテルに到着し、チェックインした。慎吾と麗名は二人用に一部屋あてがってもらった。これは、二人が一緒になって初めてのバストイレ付の部屋であった。ショーの前にホテルのレストランで夕食を取り、会場で準備をしてから舞台に立った。二人にとっては舞台に立つということ自体想像もしてなかったことなので、かなり緊張もした。だが、ショーがはじまってからは、いつもの仲間と同じようにパフォーマンスをするので、要領は同じであった。

二日目の昼間は自由行動で、慎吾と麗名はカサブランカの観光ツアーに参加した。他のメンバーはみんなすでに来たことがあるので、それぞれに時間を過ごしていたようだ。三日目の昼間は他の希望者と同乗して映画で見たことのあるマラケシュへドライブした。三泊四日でカサブランカとマラケシュへの観光を含んで、それでも収入があるというのは、夢のようであった。

ところで、この頃、麗名の母親からの返信のメールが来た。
「麗名、メール見ました。今までの全く状況がわからない時に比べれば、メールで連絡が出来るだけでも、少しは安心しました。それでも、あなたは、今まであまり男性と付き合ったことがなかったはずなので、その点が一番心配です。今頃、その彼と何をして生活しているのか、教えてください。真奈美。」

麗名が慎吾に言った。
「これは、思ったよりいいかな。そう思わない？あんた。」
「そうだな。そんなに悪くないな。まぁ、この吾輩が怪しまれるのは当然と言えば当然だよな。箱入りのはずのお嬢様を海外でナンパしておいて、平気な顔をしているのは許せないだろうな。一つ違うのは、このお嬢様は、実は親がそうあれと思っているほどお嬢様ではない。どちらかと言えば、じゃじゃ馬だということかな。」
「また、それか。たしかに、そうかもしれないけど、あたしたちは、あたしのことをお嬢様と信じているこの両親を相手にしなければならないんだからね。あんたも、ちょっと考えておいてよね。」
「わかったよ。よく考えよう。だけど、返事はスペインに戻ってからでいいよな。それ

に、吾輩はそろそろパフォーマンスのことを言ってもいいような気がしてきた。モロッコに来て、少し自信が付いたというか、まぁ、誇りって程じゃないが、少しは他の人にも貢献しているじゃないかという気さえしてきたんだよ。そして、吾輩もおまえのご両親に挨拶をしないのは失礼かなと思うようになってきた。吾輩にもおまえとその家族に対する責任と言うものがないわけではない。前にも言ったように、真剣なんだからそういうべきかなと思ってきている。」
「ありがと。今、あんたが出てくるのは良いのか悪いのかわからないけど、あんたがそういう気持ちになってくれているのは嬉しいよ。」

「それで、おまえの親が書いていたけど、おまえの男経験は実際どうだったんだ？」
「それ、ほんとは思い出したくないんだけど。言わないとだめかな？」
「ほんとに嫌だったらいいよ。ただ、吾輩としては、おまえのことで知らないことがあるのは寂しいような気がする。とかいって、聞いてしまったショックを受けるかもしれない気がする。」
「わかったよ。あんたにはすべて打ち明けるよ。高校２年の時、ハーモニカ部の同学年の男の子を好きになった。まぁ、ちょっとかっこいいタイプだった。ある時、学校から駅まで歩いているときに、そいつが後ろから追いついてきて、お茶でも飲んでいくかって誘われたんだよ。あたしはすっごく嬉しかったんだよ。それから、何回かそう言うことがあって、ある日、そいつの家に来るかって言われた。その頃はそれで幸せと思っていたから、のこのこついて行ったんだよ。その日、そいつの両親は旅行中とかで居なかった。家には他に誰もいなかったんだ。それで、そいつの言いなりになった。その時はそれでいいと思ったんだ。ところが、そんなに経たないうちに、ハーモニカ部の他の女がそいつと関係しているという話を聞いたんだ。もう、目の前が真っ暗で死にたいくらいだった。その後は、もうハーモニカに専念して、男のことは忘れようと思った。どうだ、可哀そうなもんだろ。おかげで、ハーモニカは随分練習したよ。そして、あんたが救ってくれたと言う訳だ。目出度し目出度し。」
慎吾は、麗名がその男の家に行ったと聞いた時は嫉妬を感じたが、その後はすぐに麗名が可哀そうだと思った。
「ふ～ん。そうだったのか。いけ好かない奴だな。おまえのようないい女をそんな目にあわせて、吾輩がぶん殴ってやりたいよ。」
「あんた、あたしは最初からあんたに会いたかったよ。」
「でも、そういうひどい奴がいたから、この吾輩でもいいやということになったんじゃないか？例の猫よりましだの理屈で。」
「ちがうよ。ロンドンで会ってから、あんたはあたしに何一つ悪いことをしていない

じゃない。あんたも口は悪いが、今まで、ずっとあたしと一緒に居てくれたじゃない。今のあたしには、これ以上望むものはないよ。」

「おまえ、うれしいことといってくれるなぁ。吾輩は前にも言ったかもしれないけど、学校のフォークダンス以外女の手さえ握ったことがなかった。キスなんてとんでもない。吾輩の唯一の付き合いは文通だけだ。だから、おまえを初めての抱いて口を付けたときはもうメロメロだった。おまえと初めて寝たときはもうそのままで死にたいとさえ思った。」
「まだ死なないでくれよ。」
「大丈夫だ。幸せで、とても死ぬ気にはなれない。そして、吾輩がアメリカに行ったのは、吾輩の両親の知り合いの家にホームステイしたのが初まりだった。その家には同い年の娘がいて、娘の親は、吾輩がその娘とうまくいくんじゃないかと思っていたようだ。ところが、この娘、だれかれ構わず異常に親しくするんだ。抱き合ったり、キスをしたり。吾輩はそういう経験がなかったし、そういう行動が出来なかったからすぐにその家を出た。考えようによっては、アメリカ風の友達付き合いで何も気にすることではなかったのかもしれない。それでも、吾輩はそういう女と付き合うことは出来ないと思った。それで、吾輩の親に費用を持ってもらって飛行機学校に逃げたと言う訳だ。その後は、おまえも知っている通りだ。おまえは天の恵みだ。」

タンジェに戻ってからは、ジャズミンのグループと、相変わらず一緒に活動していたが、モロッコのビザの３か月の期限が近付いてきた。ジャズミンには延長するか、無視して滞在する気がないかと聞かれたが、慎吾と麗名はペドロとの約束があるということで、ビザの３か月が切れるその日、タンジェを後にした。二人の驚いたことに、ジャズミンと太鼓のカズマがフェリー乗り場まで見送りに来てくれた。慎吾と麗名はジャズミンとカズマが白い家々の中の二点になるまで手を振った。

4．マドリッド（スペイン）

フェリーはスペイン側のタリファに着いた。ここで入国審査である。３か月前に、ここを出たので、またヨーロッパ連合に３か月滞在出来るはずだ。今回は、マドリッドの滞在先にペドロの父のレストランの住所を書き、十分な資金もあるので、問題なく再入国出来た。ペドロには一両日中にマドリッドに戻るとメールを送ってある。途中、バスでグラナダまで行き、有名なアルハンブラ宮殿を見ようということになった。一回乗り継いでグラナダについた時はもう夜で、バスターミナルから近めのホステルを探して泊った。せっかくなのでということで、近くでセビジャーナスというスペイン南部のダンスを見れるバーに入った。ペアで踊るこのダンス、フラメンコとも共通するところがあると思われた。たが、セビージャの街でみんなで踊るものということで、そんなに難しくは見えない。歌はかなり情熱的で独特の節回しだった。

翌日は、市内バスで丘の上のアルハンブラ宮殿へたどり着く。パリのベルサイユ宮殿のような規模ではないが、その南国風・イスラム風の美しさは格別であった。その生い立ちは、城塞を兼ねるとか、複合用途を考慮しているということで、これも、ベルサイユとは違った趣きがある。偶像崇拝を許さないイスラム教に従い、建物は幾何学的な美しさと簡素さが良い。ここはいつも混んでいるようで、この日も観光客でごった返しており、思い通りにはゆっくり出来なかった。

帰りは下り道なので、ゆっくり歩いて降り、市内に入った。大聖堂など、途中いくつか見物をし、公園で休憩。パフォーマンスをする予定ではなかったが、麗名がハーモニカを取り出して吹き始める。以前から知っているタレガの「アルハンブラの思い出」という曲だ。ところが、途中で止めて、慎吾にバス・ハーモニカを出せと言う。元のギター演奏では、メロディーは小刻みにトレモロで伴奏はアルペジオ、分散和音で弾かれる。さすがに麗名、メロディーのトレモロは舌を微妙に使ってうまくこなす。そこで、慎吾にバス・ハーモニカで伴奏のアルペジオをやってみろと言うのだ。麗名が音程を教えて少しずつやってみる。すると、一台のギターで奏でるのと似たような効果が出せる。二人は、暫くそこで練習をした。シエスタの時間か、人通りは多くはない。たまに通る現地人や観光客は時折止まって聞いていく。二人に声をかけていく人もいた。マドリッドではスペインの曲を中心にパフォーマンスを再編成する予定なので、これは使えると思った。その後、バーで小皿料理のタパスと食べた。定番のオリーブにチョリソとハモンを注文した。だが、慎吾は何と言っても、カジョスと言う牛のもつ煮のようなものが

気に入った。最後にはデザートワインとしてクリームシェリーでしめた。そして、夜行バスでマドリッドへ向かった。

マドリッドへ着くと、ペドロの父のレストランの方角へ歩き始めた。そして、レストランからさほど遠くないところにホステルが見つかったので、そこを宿とした。やはり、モロッコのように安くはない。が、パリよりは安い。また、トイレ・シャワー共同の二人部屋があったことはラッキーであった。その日の昼食時間が終わったころレストラン、エル・エスクデロに行った。３か月ぶりで、ペドロに会い、皆再開を喜んだ。慎吾と麗名はペドロに、マラケシュで買ったラグを渡し、予想外のモロッコでの体験を話した。ペドロが言った。
「慎吾に麗名、それはいい経験だったね。ここマドリッドも、ロンドンとパリに次いで、ストリート・パフォーマンスが許可制になってしまった。表向きの理由は騒音対策らしい。ただ、怒っている人も多いと聞く。ただ、その許可と言うのは、市の審査員の前でオーディションをしてパスすればいいらしい。お金もかからないということだ。二人もその内試してみたら？」
これは、良いことを聞いたと思った。ただ、残念なことは、この間に、ペドロの父が亡くなってしまっていた。それで、ペドロがずっとこのレストランを経営することになっていた。二人は次の日の昼からレストランに来ると言ってそこを出た。

二人はその後、近くの公園に行って、パフォーマンスの準備と練習を始めた。まず、アルハンブラの思い出を復習してから、新しい曲に取り掛かった。一つはロドリーゴの「アランフェス協奏曲」。慎吾の伴奏は比較的簡単で、何とか出来た。そして、アルベニスの「タンゴ」と「グラナダ」。アルベニスのタンゴはドイツやアルゼンチンの物とは違う。これも実にスペインだ。そして、グラナダは、慎吾にとって新しいチャレンジであった。二人のハーモニカの音域からすると、慎吾がバス・ハーモニカでメロディーを吹き、麗名が高音域の和音の伴奏をする部分がかなりある。まだまだ練習が必要と思われた。それでも、グラナダは二人の最も好きなスペインの曲の一つとなった。

そして、その後、二人は街の中を歩いた。ストリート・パフォーマンスをしているとこところでは立ち止まった。フラメンコのパフォーマンスもあった。二人とも完全に魅了された。そして、いくらかのお金をいれた。ただ、フラメンコの音楽は二人で演奏するのは難しすぎると感じた。二人では、あの強烈な手拍子は出来ないし、ボーカルの部分がハーモニカでは吹ききれないと思った。

パフォーマーの中に一人、ハーモニカを吹く人が居た。麗名がコメントした。

「彼、確かに凄くうまいな。あの速さはただものではない。だけど、多分あたし達は少し違う路線を行ってると思うよ。あたし達は、どちらかと言うと、『しみじみ派』かな。これは、あの『タイスの瞑想曲』を定番にしていたことからもわかるけどね。」
「確かにそうだ。まぁ、音楽は主観的だから、観客の好み次第だな。それに、未だかつて手品と一緒にハーモニカ吹いているところは見たことがないよな。」

翌日から、ペドロのレストランで、昼と夜、食事時にパフォーマンスをした。また、ロンドンかパリに戻った時のような感じであった。毎日２食そこで食べられるので節約にもなった。ここでは、好みのタパスを食べて良いと言われている。ワインも飲み放題だ。さて、パフォーマンスの曲目の中心はやはりスペインのもの。それでも、時折、フランス、モロッコ、そして日本の曲なども取り交ぜた。ここでも、スタジオジブリの音楽はかなり受けた。モロッコでは慎吾の手品は控えめに披露していたので、マドリッドへ来てからはもう積極的に見せた。そして、モロッコで気持ちを新たにしてからは、より見物客に注意を払うようになった。どういう反応があるか見ることがまた興味深い。麗名のハーモニカは少なからず癒しの効果がある。ほとんどの客はうっとりと聞いている。慎吾の手品には、純粋に驚きを隠せない人から、タネを明かしてやろうと真剣に見つめているものまで千差万別だ。このレストランにはあまり子供は来ないのだが、時折来ると確実に魅了されている。

ある時、男の子の父親がその子に手品を教えてくれないかと頼んできた。慎吾はペドロと相談したところ、昼食と夕食の間にレストランの片隅のテーブルを使ってよいと言う。このことをこの家族に話すと、それでは、今度の金曜日に母親が子供を連れて来たいということになった。この子供は英語はほとんど話せない。母親の英語は発音のせいか慎吾にはほとんどわからない。慎吾も麗名も相変わらずスペイン語はだめだ。そのため、手ほどきは、ほぼ見よう見まねにならざるを得なかった。しかし、所詮手品は説明するような代物ではない。この子供は興味が強いだけでなく、手先が器用だと見えて、素早く手品を覚えて行った。そして、この母子は毎週金曜日に来ることになった。慎吾は子供に手品を教えることをとても楽しく思った。言葉が通じなくても、お互いに「対話」をしている。確かに、音楽にも言葉は要らないかもしれないが、子供に手品を教えるのはほんとにインタラクティブだ。子供の理解と反応に応じて全く違う態度を示さなくてはならない。世の中、子供たちは一般に学校で、教師にこうしろああしろと言われて過ごしている。この子供は全く自分の興味で手品を習っている。慎吾はその子供が興味を失わないように手助けしているだけだ。

何週間か掛けて、この子供はかなり上達した。学校で友達に見せて得意になっているらしい。そして、ある夜この家族がみんなで食事に来た。慎吾はその家族のテーブルに回って行った時に、子供の手を取り、レストランのはじにあるちょっとしたスペースに子供を立たせ、何かやってみろという仕草をした。子供は一瞬恥じらっていたが、次の瞬間には、どこからともなくカードを取り出した。レストランの他の客があっけに取られているうちに慎吾に習った手品を次々に披露した。終った時、客は皆喜んで拍手をした。子供はお辞儀をして席に戻った。慎吾はもう一度その子供の方を指さし、客に拍手を促した。「ブラボー」という声も上がった。その家族は帰るときに慎吾と麗名の所に来て、二人に何かしらギフトを渡した。開けると、中には、子供が描いたと思われる二人のパフォーマンスをしているところの絵と現金が入っていた。慎吾と麗名は丁寧に礼を言って家族みんなと抱擁した。

他にも、家族連れで来ていたなかで、高校生くらいの女の子が麗名にハーモニカを教えて欲しいと言ってきた。その子は家にハーモニカがあるので今度持ってくると言った。この子は学校で英語を習っているので、英語で話が通じた。麗名と慎吾が、昼食と夕食の間に来れるかと聞くと、学校があるので、夕食前直前だったら間に合うかもしれないとのことだった。それで、その子は次の週に自分のハーモニカを持ってきた。それは、ブルース・ハープと言われる欧米では一般的なものだ。しかし、これは特定のキーごとに作られている。麗名の持っているのは日本の学校で使うような半音もすべて出せるもので、３オクターブのどんな半音でも出せる。麗名は慎吾に手伝ってもらって、このことを説明した。麗名のようにどんな曲でもこなそうという場合にはこの子の持っているハーモニカには向かない。この子は、確実に麗名の演奏に憧れていたのでがっかりしていた。麗名のようなハーモニカは高価なのかと聞かれ、麗名と慎吾は特に日本ではそんなことはない。学生はみんな持っている。ただし、スペインで簡単に買えるかどうかわからないと答えざるを得なかった。その子は家に帰ってネットで調べてみると言って、麗名のハーモニカの型番を控えて行った。

何日かして、その子が興奮気味でやってきた。手には麗名と同じハーモニカを持っている。アマゾン・スペインですぐ買えたと言うのだ。そして、すでに何曲か吹いて見せた。終った時、慎吾と麗名は拍手した。教わらなくても、やる気があるからすぐできるのではと言うと、麗名の吹いていた曲をもっと覚えたいと言う。麗名は今は旅行中で楽譜は持ち歩いておらず、すべて記憶していると言った。そこで、麗名はいくつか吹いて見せた。その子はそれを携帯電話で録音し、自分でもゆっくり吹いてみた。じゃ、ということで、麗名が一通り吹いて、彼女に録音させてあげた。その子は喜んで帰って行った。次の週もまた来て、自分で吹いてみて悪いところを直して欲しいという。麗名は、良く

吹けているからそんなに直すところはないと言った。そして、じゃ、二人でデュエットをしてみようということになり、吹いてみた。その子はまた大喜びであった。そんな調子で、その子は何回か麗名に手ほどきを受けた。ある時、その子は麗名に小さな紙包みを渡した。彼女の親が用意してくれたという。それは、キャッシュ・ギフトカードだった。麗名はお礼を言って、いつでも一緒に吹こうと言った。麗名は英語もスペイン語も十分に使えないことが残念に思ってきた。

それから暫く経ったある日、慎吾と麗名は市庁舎へ向かった。ストリート・パフォーマンスのオーディションをしてみようと言う計画だった。オフィスで、スーツを着た人たちを前にパフォーマンスをするのは少し場違いな感じだったが、審査員は路上の見物客と変わらずに楽しんでいるようで、すぐに調子に乗ってしまった。あまり続けないうちに、審査員はもうやめと言って、何やら紙切れをくれた。それが許可証であった。あまりの簡単さに少し気が抜けた感はあったが、ロンドンのようにいかめしくないところがやはりスペインならではと言う気がした。その後は、気が向いた時にパフォーマンスに向いているような場所で少し試してみた。

連絡先を教えてくれていたので、手品師の子供とハーモニカ吹きの高校生の親に連絡して、休日の昼間にストリート・パフォーマンスを一緒にやりたいか聞いた。皆の都合の良い時間を選び、試した中でよさそうな所でパフォーマンスを始めた。多分、一番嬉しかったのは、その子供と高校生だろう。見物人も最初は彼らの親だけだったが、徐々に増え、最後の頃にはそれなりに人だかりができていた。パフォーマンスの最後に、その高校生が、スペイン語で事の成り行きを説明していた。見物客はそれを聞いて拍手をし、置いてあった竹細工の器にお金を入れて行った。この時は、慎吾と麗名はそれを半分に分けてゲスト・パフォーマーに与えた。当然、彼らにとってお金は問題ではなかった。慎吾と麗名もそれはわかっている。だが、彼らに収入を渡すことで、自分でパフォーマンスをしたという実感を得て欲しいと思っただけだ。

ホステルに帰って、麗名は慎吾に言った。
「あんた、良かったよな。みんなよろこんでくれて。」
「ほんとだ。ロンドンの頃は、こんなことは想像できなかったなぁ。なんだか、マドリッドの時間もどんどん過ぎていく。もう３か月の期限まであと１か月もないかな。おい、おまえ。すっかり忘れていたが、親に連絡しないと。」
「やばいな。今回は、あんたもあたしの親になんか言ってくれると言う話だったよ

な。」
「そうだ。ちょっと下書きするから、出来たら見てくれるか？」

慎吾の麗名の両親に対する挨拶を次のように書いた。
「親愛なる麗名さんのお父様、お母様、初めまして。麗名さんと一緒に旅行している。綿引慎吾と申します。今まで、一度も挨拶をせずに申し訳ありません。正直言って、おしかりを受けるのが恐ろしく、今まで黙っていました。今も恐ろしくないわけではないのですが、私の麗名さんに対する気持ちが確固たるものとなったことで、恥ずかしげもなく、ご挨拶をさせていただいております。麗名さんとわたしはロンドンで初めて会った時からお互いを相補う伴侶として旅してきました。そして、そろそろ一年になろうという今、私は麗名さんと生涯一緒に行動することを誓います。確かに、私達の行動には計画性はありません。それでも、この一年間の間に、人間として成長したことは事実だと思います。レストランの経営者、単なる行きずりの人、地元の大道芸人など、いろいろな人にお世話になりました。そして、麗名さんのハーモニカと私の手品を見物客と分かち合うことによって、私たちの中にも、見物客の中にも微かな喜びを見出すことが出来るようになってきたと思うのです。今は、スペインのマドリッドに居ますが、ビザの関係上あと１か月以内にヨーロッパ連合を去ります。まだ次にどこへ行くかは未定です。また、必ず連絡します。度重ねて、私の失礼を謝罪し、お許し下さるようにお願いします。慎吾。」

この下書きを見て、麗名は吹きだした。
「ちょっと、あんた。この出だしは何なの？いくらあたしの家族があたしにお嬢様言葉を期待しているからと言って、この出だしはちょっと白々しいよ。後は、凄く誠実な感じでいいと思うよ。そして、あんた、生涯一緒って言ってくれて嬉しいよ。でも、あんた、メールでは、『私』とか言うんだね。」
「そりゃ、書き言葉だからしかたないよ。今まで書き物で『吾輩』と言ったのは夏目漱石の猫くらいじゃないかな。いずれにしても、お前がそう言うなら、『麗名さんのお父様、お母様、初めまして。』に変えようか？」
「それでいいと思うよ。あたしのメールに送っといてくれる？あたしから出すから。何とかなりますように。」
「そうだな。」

慎吾と麗名はスペインに再入国して３か月になる数日前、旅立ちの準備を始めた。ペドロにお礼を言い、ホステルを引き払った。今から陸路で出国するには日数がかかるので、空路にしようということになった。市内バスに乗って空港に向かった。実は、まだ行先

が決まっていない。二人の選択は東か西かということであった。ヨーロッパ連合の東だと、モスクワ、キエフ、イスタンブール、カイロ等の行先がある。これらの都市へ行くフライトは極めて安い。西だと、メキシコシティ、カンクン、キューバのハバナ、ベネズエラのカラカス、コロンビアのボゴタが候補に挙がった。これらは、東側の都市よりは２～３倍高くつく。二人がこれらの行先を検討しているときに、麗名が言い出した。
「あんた、あたしはハバナに行きたい。日本に居る時、キューバの音楽を聞いたことがあるんだけど、すっごくいいよ。東行きよりは少し高くつくけど、今、少しはお金あるんだから、いいよね。大西洋を渡ってこの値段だったら、悪くないんじゃない？」
「おまえがそう言うんだったら、決まりだ。ハバナに行こう。」
と言う訳で、ハバナ行きの飛行機に乗り込んだ。あいにく開いている席は離れ離れだった。１０時間は少し長いが、今までいつも一緒に居たので、このくらいは我慢しようということになった。二人とも久しぶりのフライトでそれなりに楽しんだ。

５．ハバナ（キューバ）

フライトは順調に行き、夕刻ハバナに着いた。マドリッドで必要な書類は入手してあったので、入国に問題はないと思ったのだが、なんと、健康保険の加入証明が必要と言われた。当然、慎吾も麗名もキューバで有効な保険などある訳はない。がっくりしていると、入国審査員が少し離れたところにある窓口を指さす。英語でも旅行保険と書いてある。二人はそこへ行き３０日間の旅行保険を購入せざるを得なかった。今は少し資金があるので、問題はなかったが、以前のようにギリギリで旅していたらどういうことになったろうと思った。その後、普通の観光ビザで１か月の滞在を許可された。空港で無料の観光ガイドを入手してバスで市内に入る。適当なところでバスを降り、歩いてみる。すでに街角からキューバの音楽が聞こえる。どうやら、ホステルは相当安い。モロッコよりもさらに安い。ということで、比較的簡単によさそうなところを見つけた。飛行機で２食出たので、もう夕食はいらないと、その日はホステルでゆっくりした。

次の日は早速街を歩く。色彩豊かな街並みは、よく写真で見るようなアメ車のクラシックカーで溢れている。時代錯誤に陥る。街では至る所で、音楽が聞こえる。麗名はブエナビスタ・ソシアル・クラブのCDを聞いたことが切っ掛けでここの音楽に惹かれたのだ。キューバの滞在は一か月と短いので、自分たちのパフォーマンスというよりはなるべく土地の音楽を聴こうということにした。まず、ライブをやっている近くのカフェ・バーに入ってみる。ここは、観光客でにぎわう有名なカフェ・バーではない。麗名はすぐに知っている曲を聞きつける。「チャンチャン」、「ムルムジョ」、「シレンシオ」、「ペルフーメ・デ・ガルデニアス」等。キューバに来たという実感がしてきた。ところが、このバンド、これらの曲を繰り返して演奏している。麗名は真剣にピアニストの様子を見ている。仕舞には、麗名は何曲か覚えてしまったようだ。慎吾に、久々にピアノが弾きたくなったと言う。

バンドが休憩時間を取った時、麗名はバンドのメンバーにピアノを弾いていいか聞いた。どうぞと言われて、麗名は弾き始めた。まずは、先程聞いていたキューバの音楽をゆっくり試している。今聞いた記憶の範囲で弾いているのでバンドのピアニストのようにはいかないが、すぐに感じを掴み、調子が出てきた。バーの客もそれなりに関心を示していた。バンドのピアニストが休憩から帰ってきて麗名のピアノを聞く。そのピアニストが麗名に何か言うのだが、スペイン語のため、麗名にはさっぱりわからない。それを悟ったピアニストはもう一つ小さな椅子を持ってきて、麗名の左側に座り、一緒に弾き

始めた。彼は主に伴奏を弾いているが、調子を変えたり、違う曲に移ったり、麗名を少しずつリードしながら、キューバの音楽の弾き方を伝えようとしているようだ。二人で暫く４手連弾をしていたが、段々他のバンドメンバーも来てバンド演奏が始まった。麗名が立ち上がろうとすると、ピアニストは座っていろという身振りをする。それで、麗名はそのまま次のセッション中ずっとピアニストの補助をしていた。終った頃にはひととおり弾き方をマスターしたように思えた。そのセッションが終わると、ピアニストが麗名を立たせて、客に拍手させた。麗名はピアニストとバンドメンバーに数少ない知っているスペイン語で「グラシアス」と言って慎吾の所に戻ってきた。

「おまえのピアノ今日初めて聞いたけど凄いな。バンドに入れるんじゃないの？」
「それ、楽しそうだな。まぁ、兎に角代表的なキューバの音楽の感じをつかめて嬉しいよ。」
「吾輩が一番驚いたのは、おまえがああやって、聞いただけですぐ弾けちゃうことだよ。普通ピアノを習ってるって、楽譜を見てその通り弾いてるだけかと思ってたよ。」
「それは、そういう人はたくさんいるよ。特にクラシックピアノだけやってるとそうかもしれない。あたしは、高校の時、ハーモニカ部とは別にジャズバンドの伴奏を時々頼まれたんで、アドリブでその場を誤魔化す技を覚えたんだよ。」
「いかにもおまえらしいな。ただのお嬢様じゃ済まなかったんだろう。」
「そうかもしれないけど、このアドリブって言うのはほんとに面白いよ。他のミュージシャンや観客の様子を見ながら何をするか決める。あたしたちのパフォーマンスも段々見物客に応じた芸が出来るようになってきたじゃない。あれと似てるよね。」
「なるほど。そうかもしれない。」
「それにしても、あたし、少しでもスペイン語、話せたらな～。凄くいいチャンスなのに、聞きたいことが聞けないよ。残念だ。ねぇ、本屋でも行ってスペイン語の教科書探そうか。」
「おまえ、ここはキューバだぞ。スペイン語の教科書がスペイン語で書いてあるんじゃないか？」
「それは考え付かなかったな～。」

二人はいくつか他のカフェ・バーにも行ってみた。どうも似たような感じである。多くのバンドは有名なキューバ音楽を繰り返し演奏している。これは、キューバに来る観光客が長く滞在しないし、出来ないことを反映しているのかもしれない。二人は、高級ホテルについているような劇場には行っていないのでそういう所がどんな状況かはわからず、また、現地のキューバ人が行くような所にもまだ行っていない。そんなわけで、街をうろうろした後は、いつも、初めて入った近所のカフェ・バーに寄ってからホステル

に帰るといった具合だった。

そこのバンドと段々馴染みにもなり、言葉がわからないながらも何となくいつもいると、親し気に話しかけてくれる。そして、時には麗名を呼んで一緒にピアノを弾いたりする。ある時、麗名がハーモニカを持ち出して見せる。何も喋らないのだが、バンドの連中はすぐにわかって、マイク・スタンドを一つ麗名に渡した。流石に麗名、もうピアノで一通り弾けるので、ハーモニカ用に速攻でアレンジして吹いている。キューバ音楽にはハーモニカに似た音がする楽器はあまり使用しない。それで、少しエキゾチックな感じではあるが、南米ではアコーデオンやバンドネオン等、ハーモニカと同様のフリー・リードの楽器も良く使われるので、完全に違和感があるわけではない。そんなわけで、バンドも観客もそれなりに面白がってくれた。その後は、時折、麗名がピアノにハーモニカにと特別出演することがあった。

ハバナに来て２週間は過ぎた頃、慎吾が急に頭痛を訴えた。
「おい、なんだかひどく頭が痛い。どうしたんだろう。」
「あんた、どうしたらいい？」
「わからない。ただ、これは今まで経験のしたことのないような痛さだ。普通のことが出来ない。ひゅっとすると、重症かもしれない。」
「あんた、どうしよう。」

麗名はひどく不安になり、ホステルのおばさんに相談した。言葉が通じないので、頭を指さして苦しそうな顔をした。おばさんはオスピタル、オスピタルと言っている。これは、英語のホスピタルと似ているので、麗名も首を振って応答した。おばさんは紙に病院と思われる名前と住所を書き、麗名に渡した。今度はタクシ、タクシと言っている。これには即座に「シ！」と答えた。おばさんは電話の受話器を取り、タクシー会社に電話してくれているようだ。電話が終わると、慎吾と麗名の泊っている部屋の方を指さして、こっちへ持ってくるような振りをする。麗名は、慎吾を連れてこいと言っていると察し、部屋に戻り、慎吾を引きずりだしてきた。しばらくして、タクシーが来たので、麗名はおばさんに「グラシアス」と言って、慎吾をタクシーに押し込め、ドライバーに行先の病院が書いてある紙を渡した。慎吾はぐたっとしている。ドライバーは状況から用を察したようで速やかに走り始める。夕暮れの雑踏を手際よくさばいて、その病院についた。運転手は、すぐそこに見えるドアを指さしている。救急の入り口のようだ。タクシーには言われた通りの額を払った。この際、交渉するとか適正価格を調べるという

ことは言ってられなかった。

ドアに入ってから、麗名は戸惑った。とても慎吾の状態を説明できるわけがない。英語で「ジャパニーズ」と言っても受付の人はわかっていない様子だ。そこに居合わせたが外国人らしい人が、「ハポネス」と言い換えている。受付の人はやっと日本語が必要と察したらしい。何やらファイルの中を探して、どこかに電話している。そして、電話に出ろと言う。訳も分からず電話に出ると、「どうしましたか？」と日本語で話しかけてきた。ハバナ在住の日本人で、そこの病院の通訳ボランティアをしていると言う。麗名は急いで慎吾の症状を言った。そのボランティアはそれをスペイン語に直して、受付の人に伝えている。そして、そのボランティアの人は出来るだけ早く来てくれると言う。麗名はお礼を言って電話を切った。受付の人にも「グラシアス」と言った。

暫くして、慎吾は緊急診察室に通された。相変わらず、ぐたっとしている。まず、看護師と思われる男性が来て、慎吾の脈拍とか血圧とかを調べている。慎吾にスペイン語で質問しているが、慎吾は答えられない。その看護師は少しイライラしているようだ。３０分ほどして、先程の日本人のボランティアと思われる人が駆け付けた。麗名はもうすがるようにお礼を言った。このボランティアが通訳をして、看護師が出来る限りの情報を記録している。その後、医師と思われる女性が現れたとき、看護師がいきさつを説明した。医師はしばらく慎吾の身体をチェックし、いくつかのテストをするように看護師に指示した。そして、うつ伏せにした慎吾の背中に注射針を刺して何やら液体を採取した。この時、慎吾は痛そうなうめき声をあげた。この医師は、その液体を持って一度部屋から出た。慎吾は、検査のために他の場所に連れていかれた。日本人のボランティアは慎吾に通訳が必要ということでついて行った。

その間病室に一人残された麗名は不安で仕方がなかった。今日の朝までは何でもなかったのに。その間、実際にどのくらい待ったのかよくわからなかったが、麗名には永遠に感じられた。慎吾が戻った時には、麗名はもう泣きべそをかいていた。それから、しばらくして医師が戻り、その時までに分かったことをボランティアの通訳を通して、伝えてくれた。慎吾は、髄膜炎にかかっている、脳髄に通ずる髄膜の中にウィルスが侵入し通常より何倍も多い白血球がそれに対抗しているというのだ。髄膜炎には細菌によっておこるケースもあり、その時は抗生物質で最近を殺すことが出来る。しかし、ウィルスによる場合は、白血球がウィルスに打ち勝つのを待つしか方法がないというのだ。自己治癒力に頼るしかないというのだ。

こんな異国で、そんな重症の病気になってしまい、麗名は途方にくれていた。日本人の

ボランティアの人は、そんな麗名をいたわってくれている。彼女は、ここで日本人向けのホテルを経営しているらしい。必要があったら、いつでも連絡して良いと言って、電話番号を書いてくれた。麗名はまた、丁寧にお礼を言った。

その後、慎吾は一般の６人部屋の病室に移された。栄養補給のための点滴がなされている。麗名も付き添った。そして、慎吾のベッドの横にある椅子に座っていた。気が付くともう夜遅くになっている。今の状態で麗名はどうすることもできずにいた。後で、宿直の看護師が来た時に、麗名に何か質問をした。麗名は答えられずにいると、その看護師は寝る真似をしている。麗名が首を振ると、どこからか簡易ベッドを持ってきてくれた。麗名は「グラシアス」と言い、ベッドに横になった。とても眠れる状態ではなかったが、疲れていたので、体を休めることは出来た。

慎吾は翌日も同様だった。ほとんど何も話さない。何も食べない。麗名は、気が気でない。
「あんた、早く良くなって。あたし、怖いよ。」
慎吾に聞こえているのかどうかも分からない。次の日が終わり、夜になった。なかなか寝付かれなかったが、仕舞には疲れて眠っていた。

朝目覚めると、慎吾は目を開けている。
「あんた、どう？」
「頭痛が減ったよ。良くなっているみたいだ。」
「あぁ、嬉しい！どうなるかと思ったよ。」
「多分、大丈夫だ。もう少し休めば大丈夫だ。」

慎吾は昼食からは少しずつ食べる気がしてきたと言った。麗名は病院のカフェテリアに行って何かしら食べ物を買ってきて一緒に病室で食べた。麗名はその次の日にタクシーでホステルに戻り、着替えなど、必要なものを持ってきた。その後も病室に泊るつもりだった。それから、数日のうちに慎吾の気分はすっかり良くなった。頭痛もほとんどなくなり、食欲もある。麗名はほっとした。ところが、またボランティアの通訳を介して聞いた話では、まだ、髄液中の白血球の割合がまだ高い。これがある程度まで下がらないと退院できないと言うのだ。これは、何らかのきっかけで髄膜炎がぶり返さないようにするための常道であるらしい。

そのため、慎吾の気分はもうほぼ普通と言えるのだが、週に一回の髄液検査をパスするまでは病院にいなければならなかった。それで、仕方なく、麗名がもう一度ホステルに

戻り、二人の荷物を全部病院に持ってきた。退院になるまで麗名も慎吾と一緒に病院に居ようと言うつもりだ。そして、慎吾が、一か月のキューバ滞在期限がもうじき切れるということに気が付いた。どうしていいかわからず、またボランティアの日本人に相談すると、彼女が入院によるビザ延長の手続きを手伝ってくれた。これで、あと一か月余分に居られる。それから、旅行保険の期間も一か月だったので、これをあと一か月追加した。

ボランティアの日本人の話では、キューバ国民は医療費が一切かからないのだそうだ。これは、共産主義だからだが、中南米諸国のなかで、キューバは特に医療に力を入れている。他の中南米諸国から多くの医学生が留学にも来るそうである。ただし、キューバは裕福な国ではない。この無料の枠を旅行者までは広げることはできず、それで、比較的最近になって、旅行者に保険加入を義務付けたということだ。慎吾は、アメリカ滞在中、健康保険があまりに高額のため、加入していなかった。米国にはそう言った人々が大勢いる。そして、米国の医療費は異常に高い。そのため、保険のない人が重病になった場合など、病院側が治療を拒否したり、あるいは救急で治療をしてしまった場合など、想像を絶する高額を請求されて個人破産せざるを得ない場合が少なくないらしい。
キューバではそう言った心配をする必要はない。日本やヨーロッパはキューバとアメリカの中間であろうか。

さて、入院してから２週間の間に、慎吾はすっかり元気になってしまい、今度は暇を持て余してきた。麗名も同様であった。ただ、方向音痴の麗名が一人で行きたい所に行けるわけでもないし、慎吾を病院に残してどこかにに行きたいわけでもない。そんな状況だったので、麗名はハーモニカを取り出し、静かな曲を吹き始めた。ところで、慎吾は他に空き室がなかったために、小児科の病室に入っていた。ハーモニカの音を聞いて、入院中の歩ける子供何人かがそばに寄ってきて聞いていた。何曲か終わった後、子供たちは「マス」とか何か言っている。麗名にはわからないが、何やらしぐさで、「もっと」と言っていると思えた。それで、また暫く吹いていた。ベッドに寝ている子供も聞いている。そして、一段落した時に、慎吾がそばで聞いていた子供を相手に手品を始めた。いつの間にか、自分の持ち物から準備をしていたようで、コインを取り出したり、カードマジックをして見せた。二人のパフォーマンスは言葉が要らないため、世界どこでも出来るところが良い。子供たちも大いに喜んでいた。

次の日、看護師が来て、何やら慎吾と麗名に言っている。二人にはわからないのだが、今度は看護師が身振り手振りでハーモニカと手品の真似をし、次は廊下の方を指さした。二人は、パフォーマンスをどこかでやれということだと察知し、道具を持って看護師に

ついて行った。すると、そのフロアの真ん中あたりのロビーにすでに椅子が並べてあって、来れる患者とか家族が座っている。慎吾と麗名が来ると、拍手で迎えられた。それで、二人はパフォーマンスを始めた。まずは、麗名が最近覚えたキューバの曲を吹く。そして、その後、スペイン、モロッコ、フランス、日本の曲と演奏した。その間に、適当なタイミングで、慎吾が手品を披露した。病院で退屈している観客はたいそう喜び、盛大な拍手が沸き起こった。ただし、拍手の音が大きすぎて、看護師長らしき人から注意されるという場面もあった。

それからは、二人は毎日パフォーマンスをした。他のフロアからも見物に来た。これは、慎吾が最終的に髄液検査をパスするまで続いた。入院してから４週間を過ぎた頃にようやく髄液中の白血球が正常値に戻り、慎吾が退院できることになった。二人は、同じ部屋に入院していた子供たちとその家族、看護師たち他の職員みんなに、「アディオス」と言って挨拶した。通訳をしてくれたボランティアの日本人にも電話でお礼を言った。そして、最後に会計をしなくてはならなかった。キューバ入国時に購入して、その後一か月延長した旅行保険の証書をみせ、それですべてカバーされた。結局保健加入料以外は一銭も払わずに済んだ。キューバは共産主義で、それなりに問題点はあるだろうが、人々が医療費の心配をしないで良いということは住人にとってどんなに安心なことであろう。

病院を出た慎吾と麗名はそれからどうするか話し合った。もう延長した滞在期限も数日のうちに切れる。それで、空港に行って他の国に行こうということになった。取り敢えず、ごく近いメキシコのカンクンまで行こうということになった。ここはメキシコ有数の観光地で、白いビーチで有名だ。飛行機で一時間もかからず、航空券も格安だった。

６．メリダ（メキシコ）

カンクンでのメキシコ入国は極めて簡単で、１８０日の滞在期限がもらえた。ただ、カンクンでは多少のためらいがあった。まず、外国人観光客用の高級リゾートホテルはたくさんあるが、これは高価であるし、慎吾と麗名が望むようなところではない。そうかと言って、現地人が生活するような地域は外国人にとってあまり治安が良いとは言えない。そこで、取り敢えず、一番安くて安全と思われるところに一泊して休息し、計画を立てようということになった。病院に一か月以上も居た二人には、久々のまともなベッドだった。

チェックインの後、ホテルの近くのメキシコ料理のレストランで夕食を取った。実は、二人共キューバの食べ物は好きではあったが、種類に乏しいと感じていた。特に、病院に長く居たせいか、少し変わったものが食べたくなっていた。慎吾はアメリカに居る時からメキシコ料理は良く食べていた。慎吾の好物は、ポークのタマレだ。メキシコ風の味でじっくり煮込んだポークを練ったトウモロコシの粉の中に入れてトウモロコシの皮に包んで蒸す。実に、素朴な料理だが、通常二日がかりで料理する。メキシコ人には人気の食べ物だが、これは、インド人がブリヤーニを、日本人がカツ丼を好むような土着の感覚ではないだろうか。麗名はあまりメキシコ料理に馴染みがなかったが、慎吾に勧められて、ビーフのエンチラーダをオーダーした。久々のレストランでゆっくりと食事をし、ホテルに戻って十分くつろいだ。そして、翌日の計画を練った。やはり、パフォーマンスをするにはそれなりに大きい都市に行く必要がある。そこで、カンクンから近い都市で、治安が良いとされているユカタン州の州都メリダに行くことにした。

翌日の朝、バスターミナルからメリダ行きのバスに乗って、３時間半ほどで、メリダに着いた。まずは、バスターミナルの近くでホステルを探した。そして、すぐにあたりを歩いて回り、パフォーマンスが出来そうな所を探した。よさそうなところがすぐに見つかった。それは、街のほぼ中心に位置するプラサ・グランデという広場である。その日は、そのあたりを歩いてみた。いろいろなストリート・パフォーマーがいる。まず、さまざまなミュージシャンがいる。その他、ダンス、似顔絵、スタチューや単なる仮装等々。二人が今まで通って来た中でおそらく最もパフォーマーが多い場所ではないかと思われた。メリダは常夏の土地で、夕刻から夜にかけて一年中ストリート・パフォーマンスが出来ることも原因かもしれない。途中、大きな本屋があったので立ち寄った。かねてからスペイン語を習いたいと思っていたので、英語で書かれたスペイン語の教科書

を購入した。

当然、二人はメキシコの音楽を演奏しているグループに注目した。一つは、いわゆるマリアチグループだ。バイオリン３人、トランペット２人、ギター、そして、もう一つギターに似た楽器を使っている。なぜか打楽器がない。マリアチはフランス語の結婚、マリアージュから派生した言葉らしいが、いろいろなタイプの民族音楽を演奏している。一般的に陽気で華やかな感じだ。麗名が知っていたのは、「ラ・クカラーチャ」という曲、後でわかったことだが、これはゴキブリという意味らしい。もう一つのグループはボレロを演奏していた。これは、キューバが発祥地であろうか。「ペルフーメ・デ・ガルデニアス」など、ハバナで聞いた曲もある。他に「ベレダ・トロピカル」という名の知れた曲も聞いた。ゆっくり、静かに、しみじみとボーカルが歌う感じだ。ギター、トランペットに打楽器が伴奏をしている。音楽を聞いている間に、麗名は早速使う曲を選択していた。しみじみ派の二人には、ボレロが好みだ。

その日は帰ってから麗名が慎吾に新しい曲のバス・ハーモニカのパートを教えた。そして、翌日から道具を持って、プラサ・グランデに行った。ハーモニカ２本では、マリアチグループや、アンプを使うバンド等のやたらと大きい音にとても対抗できない。それで、そのようなグループからはなるだけ遠ざからなければならない。また、少し早めに出かけ、パフォーマーの数が限られている時間帯を選ぶことにした。

二人には久々のストリート・パフォーマンスであった。以前のように二人でハーモニカを吹き始め、一人、二人と見物客が足を止めると、慎吾が手品を始める。二人が前日に下調べをした限りでは、ここでは手品を見せているパフォーマはいなかった。そして、モロッコで貰った資金がまだあるので、焦りはない。二人とも見物客の様子を見ながら、曲を選び、手品を選ぶ。今回は、メキシコの曲から始め、キューバ、スペイン、フランスと少しずつ移っていった。見物客はこの珍しいハーモニカと手品の組み合わせにそれなりの興味を持っているようだった。反応は良かった。二人は、少しずつ場所を選びながら、この公園を本拠地とした。時々、声をかけてくれる人々も居た。

直に気が付いたことであるが、夕刻の比較的早い時間に、いつも母親と一緒に来る子供がいた。学校の帰りのような出で立ちで、毎回大変注意深く手品を見、ハーモニカを聞いていた。この子は何かしらの原因で少し歩き方が普通ではない。そのため、二人にはいつも簡単に認識できた。そして、ある時、その子の母親が、二人に話しかけてきた。

二人は本で覚えたスペイン語を使ってみようと試みたが、まだ十分ではない。すると、母親は英語で質問してきた。その子に手品とハーモニカを両方教えて欲しいというのだ。家庭教師として、毎日のように来てくれないかという。その家族はメリダの郊外に住んでいるという。慎吾が、自分たちは今市内のホステルに泊っていて、郊外に行くのは少し不便であるということを伝えた。すると、この母子はどうしても来て欲しいので、その家庭に滞在しても良いと言う。どうやら、この家族はかなりの富豪で、郊外の家というのは牧場があるようなところらしい。何人も使用人を雇っているので、いくらでも、泊まるところはあるだけでなく、無償で泊っても良いというのだ。そして、いっそのこと、その子の家庭教師として雇用したいと言い出した。

慎吾と麗名は詳しい話を聞いてみようということになった。それで、そこから直接その母子の車で牧場へ直行することになった。牧場を見た慎吾と麗名はあっけにとられた。普通の一軒家とはかけ離れた大きさの土地に、かけ離れた大きさの家が建っている。この家族は、おそらく、今まで二人の出合った人々の中で最も裕福ではないかと思った。家に入るとパーラーという大きな部屋に通され、お手伝いの女性が二人にアイス・ティーとフランス風の小さなケーキを持ってきた。すぐに、その子供の父親と思われる人が出てきて英語で挨拶をした。

実は、この家族、もうすでに慎吾と麗名に泊まり込みの家庭教師として来て欲しいという希望さえ話し合っていたという。その子供、ホセが懇願したらしい。父親は、二人の個室、全食事、メキシコでの一般的な給与、４年間就労ビザの取得、銀行口座の開設、健康保険、運転免許の取得と車の利用、スペイン語の習得に必要な費用、その他メキシコ滞在と生活に必要なすべての経費を支払う。その代わり、ホセが手品とハーモニカを習いたい時はいつでも教えてくれること。そして、できれば、数学を中心に学校の学業も手伝って欲しいと言われた。これは、平日はホセが学校から帰ってきてからの夕刻、休日はいつでも必要に応じてということだ。つまり、ホセが学校に行っている間は、全くの自由時間である。それから、雇用に伴い、メキシコの税金申告が必要となるが、これは、家族の会計士が処理してくれるらしい。慎吾と麗名には信じがたい条件で、二人は即座に合意した。その後、二人は運転手のドライブでホステルの荷物をまとめて、すぐに牧場に戻ってきた。なんと、慎吾と麗名はメキシコの大富豪の息子のお抱え家庭教師となったのである。自分たちの新しい部屋に入った二人はまだ信じられないという感じだった。
「あんたがハバナで髄膜炎になった時はどうなるかと思ったけど、どうやら、また新しい経験が出来そうじゃない。」
「ほんとに予想外の展開だな。二人の肩書にもう一つ足さないとな。食堂芸人と大道芸

人にゴロを合わせて、家僮芸人って言うのはどうかな？」
「あたしにはどう意味でどういう字を書くのか分からないけど。」

ホセはもうその日から慎吾に手品を習い始めた。だた、ホセはハーモニカを持っていなかったので、メキシコのアマゾンで、麗名と同じハーモニカを注文し、翌日までにメキシコシティから配達させた。それで、ハーモニカの練習も始めた。ホセは、生まれつきの障害で足が悪く、普通には歩けない。ただし、両手は器用で、手品もハーモニカも問題ないようだった。練習の時間は決まっておらず、ホセがしたいときにする。そのため、１日に集中して練習することもあれば、何日か何もしない時もあった。慎吾も麗名もそれぞれ、何年も練習してここまで来ている。二人のようになるにはかなり時間が必要だということをよく理解している。そして、時には両親の依頼で、パーティーの余興に二人がパフォーマンスを披露することもあった。また、この家族は誰も弾けないのに、コンサート仕様の大きなグランドピアノがある。パーティーの時に、麗名が弾いて見せてからは、ホセにピアノも教えてほしいと言うことで、これも、仕事に加わった。

二人が牧場で生活し始めて１か月ほどで、４年間就労ビザ、キャッシュカードとクレジットカードを含めた銀行口座、健康保険など必要なものはすべて取得できた。また、慎吾はアメリカの運転免許がまだ有効だったので、英語の筆記試験だけで、メキシコの運転免許に切り替えが出来た。麗名はペーパードライバーだし、方向音痴でもあり、異国で運転をする気は全くなかった。そして、二人にとって、最も画期的なことは、二人でスペイン語学校に通い始めたことである。平日は毎日午前中に学校に行くことにした。牧場の車で、慎吾が運転して行く。それに、どうせ、麗名は英語で教えられてもよくわからないので、スペイン語でスペイン語を教える学校を選んだ。

当然、二人とも学校に行けば言葉が喋れるようになるわけではないということはわかっている。特に麗名は、イギリスでの短期留学がほとんど無意味であったことが記憶に新しい。しかし、二人とも、今は、動機が十分に高まっていると感じている。とくに、キューバで慎吾が髄膜炎になった時は、麗名はスペイン語の必要性を痛感した。そして、今や、メキシコ住人だ。覚悟を決めた二人は、当面、英語と日本語さえ極力使わないようにしようと決めた。スペイン語学校の間はスペイン語だけだ。牧場でも、まずはスペイン語で会話を始めるように努めた。そして、どうしてもわからない時だけ英語で補充した。日本人にとって、スペイン語の母音はそれほど難しくない。基本的には「アエイオウ」だ。一番てこずるのは動詞の活用だ。これは、学校で徹底的に練習させられた。

そして、最も画期的で有効だったことは、慎吾と麗名の間の会話をスペイン語でし始め

たことだ。これは、初め、極めて難しかった。スペイン語で話しかけようとしても何も出てこない。それでも、一言ずつ、日本語で話さなければならなかったことをスペイン語で話せるようにしていった。また、読み書きもできる限りスペイン語でするように努めた。後で思うには、麗名が英語をろくに話せるようにならなかったのは、実際に英語を使わなかったからである。英語学校に行って授業に出ても、それだけではどうにもなる訳はない。

ホセは学校で英語を習っているが、慎吾と麗名との会話にはスペイン語を使うように心がけてくれていた。
「シンゴ、手品の練習をしよう。」
「いいよ。じゃ、今まで習ったものをやって見せてよ。」
「じゃ、これかな。」
ホセは知っているものを一通り、やって見せた。
「大分うまくなったね。一つ言うとすれば、最初にコインを取り出すときに少しコインが見えてたよ。」
「やっぱり、そうか。あれ、難しいよ。慎吾、やって見せて。」
「こんな感じかな。うまく反対の手を使って、相手の注意を逸らせるんだ。」
「分かったよ。」
手品が一段落すると、麗名にハーモニカを教わる。
「レイナ、ハーモニカ聞いてよ。」
「うん。良い感じでてる。タイミングも凄くいい。」
「今日は、日本の曲を教えてよ。」
「じゃ、あたしが吹くから少しずつ覚えて。」
慎吾も麗名もホセのやる気を大事にすることが一番大事だと思っていたので、決して押し付けがましいことはしない。もし、ホセが練習をしたくなければ、する必要は全くない。

こうして、二人の工夫と努力でスペイン語の力は徐々に向上した。数か月後には何とか基本的なことを処理できるようになった。一年も経った頃には二人とも簡単な会話が出来るようになった。ところで、少し話は戻るが、二人が牧場に落ち着いたころ、ハバナのボランティアの日本人に礼状を出した。ハバナではお世話になった、そして、二人とも今は一時的ではあるがメキシコ住人になり、スペイン語も練習していることを伝えた。

二人とも忘れていたわけではないが、ハバナでの緊急事態と、メリダでの生活の変化に気を取られて、麗名の母のメールに返事を出していなかった。まず、麗名の母は麗名へのメールの中で、このようなメッセージを慎吾に送ってきていたのである。これはもう２か月も前のことだ。

「慎吾さん、麗名経由でのご挨拶ありがとうございます。はじめまして。麗名の母の真奈美です。やっと、麗名が付き合っている人の言葉を聞き、少し、ほっとしました。あなたはまだ若いので親の苦労というものがわからないかも知れません。ところで、『生涯一緒に行動することを誓います』と書かれていましたが、一般に、そのような言葉を言うのは結婚するときではないでしょうか。あなた達は結婚する意志があるのでしょうか？そして、結婚に関連しているのが家族計画です。あなた達はどういう家族計画があるのでしょうか？そして、慎吾さんのご両親はどのようにお考えなのでしょうか？私たちの心配はまだ消えてはいません。それでも、こうやって、メールで連絡が出来るようになって、ありがたく思っています。真奈美。」

少し落ち着いたので、麗名の母にも返事をしないとということになった。
「あんた、見てよこれ。やっぱり、敵は手ごわいよ。一筋縄ではいかないな。」
「うん。そうだけど。でも、おまえのお袋さんが間違っているわけではないよな。全く正当なことしか言っていない。吾輩もおまえも、随分チャランポランな性格だから、こういうことになるんだよな。まぁ、今から急に変えられるもんでもないし。兎に角、吾輩が下書きするから、また見てくれ。」

慎吾の下書きはこうであった。
「麗名さんのお父様、お母様、返事が遅れて大変申し訳ありません。まず、近況を報告します。前回のメールの後、キューバ経由で、現在メキシコのメリダと言うところに滞在しています。キューバでは私が入院することになったり、メキシコでは今の生活に落ち着くのに少し時間がかかり、十分に考えて返事をする時間がありませんでした。私が入院したと言うと大変に心配をおかけすることになると思い、ためらったのですが、事実を言わないより言った方が良いと思い、あえて報告させていただきます。病気はウィルス性の髄膜炎でした。幸い、キューバ入国時に義務の旅行保険に加入していたため、費用はすべてカバーされました。また、ご存知かと思いますが、キューバの医療事情は極めて良く、治療も対応も良くしてくれました。また、現地の日本人のボランティアの方が通訳をしてくれたので、言葉の問題も克服出来ました。今、メキシコでは、この地の大富豪のご子息の住み込み家庭教師として麗名がハーモニカを、私が手品を、そして、二人で数学を中心に学業の手助けをしております。メキシコの４年間就労ビザも取得し

てくれ、健康保険を含め、ここでの短期滞在・生活に必要なサポートをすべてしてくれています。また、麗名も私もスペイン語を習得中で、簡単な会話は出来るようになりました。」

「そして、お母様のご質問について返答します。まず、結婚する意志があるかということについては、まだはっきりとした答えはできません。それは、生涯一緒に過ごすという決心の重大さに比べると、二次的な判断に思われるからです。そして、現在、海外生活のため、結婚に係わる手続きの難しさもあります。次に、家族計画ですが、私たちは子供を産む計画はありません。実は、ハバナで入院した時の検査で私は子供が作れない体であることが分かりました。最後に、私の両親には、まだこのメールに書いてあるような情報は伝えていないのですが、その前に私たち二人のことを書いた時に、『悔いのないように過ごしてください』と言われています。以上、十分に返答が出来たかどうか気になりますが、私たちの率直な気持ちをお伝えしようとした所在です。不十分な点がありましたら、是非、ご指摘下さい。慎吾。」

ここで、慎吾は下書きを見せた。
「あんた、最初は、入院のことは言わない方がいいかなって思ったけど、あんたが言うとおり、何でも正直に言った方が良いというのはわかる。いろいろなことを隠そうとすると、お互いに信用もなくなるし。結婚のことは、実は、あたしも考えたことがあるよ。あんたが、生涯一緒に居てくれるって書いてくれた時、すごく嬉しかったけど、それ、結婚してくれるって意味かなぁとも思った。でも、今は、結婚どうのこうのということはそんなに重要じゃないと思う。とにかく、あたしは今のままで幸せだよ。そのままでいいから、今回はあんたから直接送っといてよ。」

暫くして、麗名の母から返事が来た。
「慎吾さん、メールありがとうございます。今までよりも詳しい情報を送って頂き感謝しています。そして、私の質問に正直に答えて頂きありがとうございます。あなた達の気持ちは少しずつですが、分かってきたように思います。私達夫婦はあなた達よりも古い世代の者ですから、どうしても、自分たちの経験から物事を言いがちです。ところで、今、メキシコのメリダと言うところに滞在中ということで、地図を見てみました。あの有名なカンクンのそばですね。夫と話したのですが、この１２月にカンクンへの観光旅行を兼ねて、あなた達を訪問してみたいと思いついたのですが、あなた達の意見を聞かせてください。真奈美。」

これには、慎吾も麗名もびっくりした。

「おまえ、どうする？これは、ひょっとしたら、いい機会かもしれないよ。吾輩としても、箱入りのはずのお嬢様を引きずりまわしておいて挨拶もしていないというのは、気が引ける。」
「そうだね。あたし達も今は移動中じゃないから、一番いい時期かもしれない。あんたがいいんだったら、あたしはいいよ。あんた、そのまま、連絡とってくれる？」
「わかったよ。これは、意外だったな。」

麗名の両親はカンクンへの観光旅行を予約した。慎吾と麗名はホセの両親と相談して、三日間の休暇をもらい、車も貸してもらうことにした。こうして、麗名の両親がカンクンに来ている間に、慎吾と麗名は車でカンクンに行き、同じホテルに一泊し、次の日、両親をメリダの牧場に連れて行き、同日またホテルに戻ってもう一泊するという計画を立てた。

慎吾と麗名はカンクンのホテルのロビーで麗名の両親に会った。麗名は一年半ぶりである。
「慎吾さんですね、麗名の父です。こちらが母です。」
「お父さん、お母さん、はじめまして。綿引慎吾です。一年半の間、まともな挨拶もせずにいたことをお許しください。」
「正直言って、初めは、妻がカンカンでしたよ。私も相当心配しました。それでも、慎吾さんから何回かメールを受け取って、様子が分かってくると、私たちも段々落ち着いてきました。今でも心配がなくなったわけではないんですが、今回は二人に会えてよかったと思います。」
「ほんとに、申し訳ありませんでした。それでは、レストランで夕食でよろしいでしょうか？」

レストランでは、慎吾と麗名がメキシコ料理のことを説明して、注文するのを手伝った。麗名の両親は二人がスペイン語で不自由なくウェイターと話すのを聞いて少なからず感心しているようだった。今度は、麗名の母が話し始めた。
「私たちは滅多に海外旅行なんてしたことがないので、この旅は不慣れなことだらけでしたのよ。麗名、日本を出てから、随分といろいろなところを歩き回っていたようですけど、生活は大丈夫でしたか？お金は十分にあったのですか？」
「お母様、初めは、安いホステルに泊って、食事とかもとてもささやかにしていたのよ。ところが、モロッコでパフォーマンスの練習をしている時に、日本人のカップルがかな

りの大金をくれたのよ。大金と言っても、当時の私たちの収入に比べての話よ。それからは、それなりにゆとりが出来たわ。そして、ここメキシコでは固定給をもらっているし、住居と食事は込みなので、支出がほとんどないから貯金もできるのよ。」
慎吾は必死に笑いをこらえている様子だ。
「あら、そう。それだったら、よかったわ。それから、慎吾さんはロンドンで麗名に会う前は何をしていたんですか？」
慎吾は不意を突かれて若干戸惑った。
「あ、あの～、僕はアメリカで小型機のパイロットをしていました。ところが～、ビザの関係で、アメリカから出ることになって。それで、少し、世界を歩いてみたいと思ってロンドンに行ったのです。麗名さんと出合って、新しい世界が開けました。」
今度は麗名が必死に笑いをこらえる番になった。
「そうですか。まだまだ、聞きたいことは山ほどあるのですけど、明日と明後日もあるし、またゆっくり聞かせてくださいね。」

食事の後、慎吾と麗名は二人のホテルの部屋に戻った。
「おまえ、ほんとにあんな喋り方しているから、笑いをこらえるのが大変だったよ。」
「悪かったね。ところで、あんたは今度、『僕』って言ってたよ。」
「あぁ、流石に、おまえの親御さんの前では、『吾輩』は使えなかったからな。兎に角、一応顔を出しただけでも良かった。」
「全くだよね。これで、向こうが猛反対でもしない限り事実を認めたと言うことになるわけだし。それに、これはあたしの直感だけど、あたしの母、あんたのこと結構気に入ってると思うよ。」
「そうだといいけどね。」

翌日は慎吾のドライブで、牧場を見に行った。慎吾は、アメリカで何年か運転もしてたし、右側通行も慣れている訳であるが、麗名の両親は慎吾が異国で自分たちをドライブしてくれると言うのは心強く思ったようである。牧場に着くと、ホセの両親が接待してくれた。あいにくホセは学校があったので居なかった。慎吾の父は少し英語が話せたので、ホセの両親と一応会話ができた。ホセの父は慎吾と麗名がいかにホセに良くしてくれているかということを話した。そして、慎吾と麗名にパフォーマンスを見せてあげればということで、二人はしぶしぶと手短に披露した。麗名の両親は麗名のハーモニカやピアノのことは知っているが、慎吾の手品を見て、かなりびっくりたようだった。

その後、再び、慎吾の運転でカンクンのホテルに戻り、その夜はホテルの中にあるフランス料理のレストランに行った。この時までには四人はかなり打ち解けて、慎吾と麗名

の旅の話や、麗名の小さいころの話、麗名の両親の思い出話など語り合った。慎吾が麗名の両親に二人の出会いのことを聞いたときには、麗名でさえ聞いたことがなかったことが出てきてびっくりしていた。翌日までには、慎吾も初対面とは思えないほど親しくなり、また連絡することを約束して、慎吾と麗名は牧場に戻った。

ホセの家では、毎年ホセの誕生日に学校の友達を招いてパーティーをすることになっている。慎吾と麗名がホセの家に来てから最初のパーティーでは、ホセは一人でハーモニカを吹き、手品をして友達をもてなした。司会もホセが自分でしていた。
「ご来場の皆さん、ようこそホセの牧場に来てくれました。僕はうちに滞在中のマエストロ慎吾とマエストロ麗名から手品とハーモニカを習っています。今日は、皆さんに僕の習ったものを見て、聞いてもらいます。」
ホセは物怖じしない性格のようで、一人でハーモニカを吹いてから、手品をして、またハーモニカを吹いて、と交互に知っていることを全部やって見せた。さすがに友達はびっくりしたと見えて、大きな歓声をあげて喜んでいる。終った時にホセが丁寧にお辞儀をすると、みな、「ブラボー」と言って拍手をしていた。その後、軽食とケーキが出された。慎吾と麗名は子供たちを連れてきた親たちと談笑した。彼らは日本と言うと車や電気製品の印象が強いのに、どうして手品とハーモニカをやっているのかと真剣に聞いてきた。慎吾が簡単に受け答えた。
「私達は、あなた達の想像しているような勤勉な日本人ではありません。二人はロンドンで偶然出会ってから、偶然にパフォーマンスを始め、偶然に多くの人々に助けられて今日までやってこれました。その間に、徐々に、自分たちの出来ることを他の人に提供することに意味があると思ってきたのです。私達は性能の良い機械を作るよりは、他の人々と楽しみを分かち合う方が性に合っていると思うようになってきました。」

すると、親の中の一人が、もし可能だったら、メリダの図書館でパフォーマンスをして、その後、少し経験談を話してくれないかと言われた。二人とも、人前で話すことは得意ではないが、質問に答える形で気軽に出来るのだったら出来るかもしれないと答えた。これがきっかけで、図書館ではそういったイベントを何回か行った。

メリダのあるユカタン半島はマヤの遺跡の宝庫だ。メリダから簡単に行けるところにも数多くある。中でも、チチェン・イツァの遺跡は階段ピラミッドを含む巨大な古代都市のもので、見どころの一つである。慎吾と麗名は近くの遺跡をいくつか見物したことがある。また、ホセの学校も時折、遠足として遺跡を訪れることがある。その日、ホセは

遠足でチチェン・イツァの遺跡に行っていた。例の階段ピラミッドを降りる途中、ホセは足の調子が悪かったのか、バランスを崩して階段を転び落ちてしまった。その時に頭を強く打ち、意識を失った。救急車ですぐに近くの病院に運ばれたが、打ちどころが悪かったようで、変化がない。今すぐに生命に係わるわけではないと言われるのだが、外から見た限り、意識があるかないかもはっきりとはわからない。外界との意思の疎通は全く出来ない。慎吾と麗名も急いで病院に駆け付けた。両親はベッドの横で泣いている。慎吾と麗名は何と言っていいかわからなかった。

子供がこのような状態になった時、親はどう対処したらよいのであろうか。脳波の状態から、確実に意識があるかないか断定できればそれに従って、判断することもあろう。ホセの場合は、それが難しい状態だった。両親は、万が一意識を取り戻す可能性がある限り、ライフ・サポートを続けて欲しいと懇願した。彼らは経済的にそれが出来る人たちである。メキシコの一般市民はそうは言えないかもしれない。

いずれにしても、慎吾と麗名の仕事は継続できないことになった。ホセの家族は慎吾と麗名の仕事がこんな形で終了するのを気の毒に思い、退職金として３か月分の給与を支給してくれた。それなしでも、二人の銀行口座にはもう長いこと十分に生活していけるだけの資金があった。

二人は急にこれからのことを考えなければならなかった。メリダでの安定した生活も良かったが、これを機に、また旅に出ようということになった。二人のごく自然な行先は南米であった。まずはネットで中米を通るバスの旅を調べてみた。バス旅は通過する地域の様子が分かり面白い。残念ながら、二人が見出したことは所々に治安の問題があるということだ。そして、パナマ東部には車の通れる道がないため、そこを通過するのは船か飛行機ということになる。それだったら、いっそのこと南米大陸に直接飛行機で行こうということになった。メリダからコロンビアの首都ボゴタまでは随分と安い航空券がある。それで、メキシコシティ経由ボゴタ行きの航空券を買った。これはメキシコシティに深夜到着し、翌日夜にそこを経ち、ボゴタには翌日の深夜に着くと言うものだ。おそらく、深夜着のため売れ行きが悪いのであろう。二人は、深夜着の場合は、そのまま空港で仮眠をすればよいと考えていた。調べた限り、メキシコシティも、ボゴタも空港が２４時間閉まることはない。そして、メキシコシティでほぼ一日の時間がある。少し、市内を見れるかもしれないと思った。

慎吾と麗名はホセの両親に厚く礼を言い、牧場の皆に別れの挨拶をした。空港まで送ってもらい、メキシコシティまで飛び、空港で仮眠後、市内を少し見物した。メキシコシ

ティは湖を埋め立てて造られたメガロポリスである。大東京圏よりも大きいと言われている。市内の雑踏は異常なほどで、交通渋滞もひどい。巨大地震が多く、地盤が悪いにも関わらず、建築基準はしっかりしていない。そのため、過去の大きな地震の際に必ずや大きな被害が出ている。

その夜、メキシコシティからボゴタまで飛び、再び空港で仮眠した。そして、朝起きて、すぐに街の中心部までバスで行った。ボゴタでは、まず、ハバナで世話になった日本人のボランティアに絵葉書を出した。この後の南米滞在中、二人はこのボランティアに国が変わるごとに絵葉書を出すことにしていた。慎吾が二人の両親にもメールを送った。
「大変残念なことなのですが、私たちが家庭教師をしていたホセが遠足の時に起こった事故で意識不明の状態になってしまいました。そのため、私たちはメリダの牧場を離れることになりました。これからは、南米大陸を南下する計画でいます。今日、飛行機でコロンビアの首都ボゴタに着きました。尚、メキシコの銀行にはそれなりの貯金があり、世界中どこからでも現地通貨で引き落とすことが出来ます。当面の旅行資金には十分だと思います。健康状態も良好なのでご安心ください。」

久々に旅行気分になった二人は、以前のように安ホステルに泊り、歩いて街を散策した。ただ、今までと違うことがある。二人ともスペイン語が使えるということだ。街での日常会話は苦労しないし、いろいろな標識やサインも読める。現地の人々の会話も耳に入ってくるようになった。ボゴタの旧市街は歩いているだけで楽しい。そして、街のあちこちに珍しい博物館がある。中でも、金の博物館はかつてのインカ帝国の輝きをみるようで、圧巻であった。また、ボゴタはかなりの高地にあり、山々が間近に迫っている。その景観は素晴らしい。そして、モンセラテ山から望む市内の景色は昼夜ともに絶景である。二人ともゆっくりとした休暇を過ごした。

それでも、やはり、二人は大道芸人である。プラザや公園で休息した時は、気軽にパフォーマンスをしてみたりもする。そして、パフォーマンスの途中や後で、現地の人や観光客とスペイン語で会話をすることも出来る。見物人がお金をくれればそれも良し、くれなくても構わない。
「あんた、なんだか昔と比べると、あたし達、随分変わったよね。」
「あぁ、そうだな。パリで自分たちのことを『上等物乞い』だって言ったの覚えてる？」
「うん。ほんとにそうだったよね。でも、今は、何だろうね、ただで余興をする、ボラ

ンティアみたいな感じかな。」
「ボランティアね。経済的にも、精神的にも、ゆとりが出来たということだろうな。
まぁ、吾輩たち程度の貯金でこんなにゆとりを感じると言うのも変なことかもしれないけどな。世の中、どんなに資産が出来てもまだまだ足りないと思っている連中ばかりだろうな。」
「人間のゆとりはお金じゃないよね。あたしは、あんたと貧乏旅行をして、少しは良いこと学んでいると思うよ。」
「少しはね。少しでもいいよ。それに、今度は、貧しい人達から見たら、吾輩たちも金持ちだろう。自分たちはたくさん資産があって、それで、ゆとりがあるなんて思っているかもしれない。でも、今持っているお金を貧しい人たちに分配したしても、それが、良いことかどうかわからないよな。」
「そうだよね。あたしたち独自の道を探さないとね。」
二人は、ボゴタに２週間ほど滞在した。その間に街で聞くアンデス地方の音楽とかも少し覚え、パフォーマンスに取り入れた。そして、そこを後にした。

ボゴタからエクアドルの首都キトまでは、千キロ以上の行程だ。途中、サンチアゴ・デ・カリとパストで一泊ずつして、三日目にコロンビア側のイピアレスそばの国境での出入国審査を済ませて、エクアドル側のトゥルカンへ渡る。そこからキトに同日中に入る。

キトはよくボゴタと比べられる都市である。共に高地にあり、隣国の首都である。大きさ的にはボゴタの方がかなり大きいが、街並みとか似ている感もある。慎吾と麗名にとって、一番の違いは、キトの方が高い山々が周りに迫っている感じである。特に、コトパクシ山の姿が印象的であった。これは、エクアドルの富士山と呼ばれるだけあって、街から望む姿は雄大である。東京から望む富士山よりも大きく見える。残念ながら、政情不安のため、ここでは２泊だけして、リマまでの長いバス旅に望んだ。

７．リマ（ペルー）

キトからペルーの首都リマまでは、約１８００キロの行程だ。慎吾と麗名はこれを三泊四日でこなした。バスには日中平均７時間ほど乗り、途中、三か所で宿泊した。エクアドルとペルーの国境には倉庫のようなビルがあり、そこで入国審査を済ませた。二人とも、旅行者として１８３日の滞在許可を得た。約６ヶ月の滞在期間は長い方だ。

ボゴタやキトと違い、リマは海岸沿いの大都市だ。西岸海洋性気候のため、夏でも極端に暑くならないし、冬でも極端に寒くならない。冬の間の霧を除いては過ごしやすい所だ。そして、街は海岸沿いの断崖の上にあり、津波の心配もない。ただし、環太平洋地域に共通の地震は避けられない。

二人はいつものように安ホステルに泊り、街を歩いてみた。海岸沿いの断崖の上には広々とした公園やショッピングモールもある。そして、海岸からの夕日は格別だった。また、海産物も豊富で、いろいろなシーフードが食べられる。セビチェなる、中南米風の「刺身」もよく食べた。それに、毎日のように食べたのが、シラントロ・ライスだ。パサパサのご飯にたっぷりと刻みパクチーが入っていてライムがかかっている。また街の中には野良猫天国の公園があり、地元の人々も観光客も餌を与えている。

街の様子が分かると、直に路上や公園でパフォーマンスを始めた。ここではサイモンとガーファンクルで有名になったインディオの曲「コンドルは飛んで行く」と、多くのペルー人に愛される「イ・セ・ジャマ・ペルー」という国民的な曲もパフォーマンスに加えた。また、ペルーに来て初めて気が付いたことは日本人と思われるような顔つきも多いということだ。後で聞いたことだが、他の南米諸国同様、かなりの数の日本人が移住してきて住み着いていると居ることだ。それでも、見物客の中には日本から旅してきている日本人と思われる人々も見受けられた。その中に、二人と同年代の日本人と思われる、現地人とは思われないが一般の観光客ににしてはやけに旅慣れている感じのカップルがいた。麗名はそのカップルが気になっていたが、いつの間にかいなくなっていた。

野良猫天国の公園があるくらい、リマは猫好きの人が多いのかもしれない。ホステルの玄関にもいつも決まって一匹の三毛猫が居る。ある日、二人が出かけようとすると、その猫が二人を誘うような素振りをする。少し歩いては二人の方を振り向き、ニャオと言う。あまりに可愛いので、二人はその猫の後をついて行ってみた。

５００メートルほども歩いたであろうか。猫はある建物の前で止まり、ここだと言わんばかりの素振りをする。柵越しに中を垣間見ると、中庭で子供たちが遊んでいる。ただし、そこは学校のようではない。建物の看板を見て、慎吾が言った。
「ここは孤児院だ。」
「え～。そんな～。あたし、初めて見る。」
「吾輩も初めてだ。可哀そうだよな。だけど、みんな楽しそうに遊んでいるように見えるけど。」
「そうだけど、夜とか子供たちだけで寝るんでしょ？」
「そう言うことだよな。夜は辛いかもな。吾輩もお前と一緒に寝るようになる前は正直言って寂しかったからな。」
「その気持ち、よくわかるよ。」

二人は暫くそこに立ちずさんで居たが、言葉もなく立ち去り、街へ行ってパフォーマンスをした。だが、その日は、二人ともあの孤児たちのことが頭から離れなかった。

次の日、ホステルから出かけようとすると、またあの猫が手招きをしている。少なくとも、二人にはそう思えた。ついて行かないといけないような気がして、二人はまた猫の後をついて行った。猫は今回も同じ孤児院の前で止まり、ここだと言わんばかりの素振りをしている。
「あんた、どうしても、この猫ちゃん、あたし達をここに連れてきたいみたいだね。」
「確かに。どうしてだろう？」

その時、孤児院の中庭の中で誰かが大きな声で、「ホセ！」と叫んだ。二人はハッとした。もちろん、二人の脳裏にはメリダのホセのことが思い浮かばれた。そして、子供たちの中にあのホセを思わせる子供がいる。
「おい、なんだか、中に入ってみないといけないような気がしてきた。いいか？」
「いいよ。わかるよ、その気持ち。」

二人はためらいながらドアについているインターホンを押してみた。慎吾は何と言っていいか分からなかったのだが、思い付きで答えた。
「こんにちは。私たちは旅行者なのですが、施設を見学できますか？」
すると、すぐに返答があった。
「もちろん、どうぞお入りください。」
そして、ドアのロックが自動的に解除される音がした。二人は取っ手を回して中に入った。

中に入るとすぐに受付と思われる女性が出てきた。
「ようこそ。猫の連れて来られたんですね？」

二人はたいそう驚いた顔をしたのだろう。
「アッハッハッハ！びっくりしましたか？あの猫はもう何人も旅行者をここに連れてきているんですよ。私たちはもう慣れっこになってしまっています。」
慎吾が答えた。
「ほんとですか？私たちもついつい、あの猫に連れられて。でも、どうしてあの猫はここへ？ここが孤児院だということを知っているのですか？」
「それは私たちにはわかりません。ただ、あの猫が連れてくる人たちは皆何かしら子供たちにしてくれるんですよ。不思議ですね。」
「え？！他の人は何をしたんですか？」
「ほんとにいろいろです。歌を歌ってくれた人もいるし、絵を描いてくれた人もいます。お金をくれた人もいますよ。」

慎吾と麗名にはすでに考えがあった。二人同時に声を出した。
「私たちもしたいことがあります。」
「それはありがたいです。子供たちも喜ぶでしょう。ところで、あなた達は何をしているんですか？」
「私がハーモニカを吹き、彼が手品をするんです。今まで、世界各地でパフォーマンスをしてきました。」
「凄い！いつ見せてくれますか？」
慎吾が答えた。
「今でも。丁度、街にパフォーマンスをしに行くところだったんです。」
「それでは、こちらに来てください。」

受付の女性は二人を中庭に通した。そして、遊んでいる子供たちに二人がパフォーマンスをしてくれることを告げた。二人は即座にハーモニカを取り出して吹き始めた。子供たちは皆二人の周りに集まって熱心に聴いている。暫くして、慎吾がバス・ハーモニカを中断し、至る所からコインを取り出し始めた。子供たちは大喜びで、「こっち」、「こっち」と叫んだ。一通りパフォーマンスを終えると、子供たちは興奮状態のようで慎吾と麗名の周りから離れない。女の子の多くは麗名にハーモニカを教えてとせがんでいる。男の子の多くは慎吾に手品を教えてとせがんでいる。そして、いつの間にか何人か職員らしき大人も見物していて子供たちと話をしている。

中でも、男の子の一人が異常に熱心にせがむ。慎吾が名前を訪ねると、「ホセ」と言った。これはスペイン語のごくありふれた名前だから別に不思議なことはないのだが、慎吾と麗名にとっては、やはり、あのメリダのホセの事を思い出してしまう。慎吾と麗名は早速職員達と相談した。そして、翌日から一日一時間程、週に６日、手品とハーモニカを教えることにした。孤児院にもトランプはあるが、問題になったのはハーモニカである。その時、麗名はメリダのホセの使っていたハーモニカをもらってきたことを思い出した。それを孤児院に寄贈し、アルコールで消毒して交代に使ってもらうことにした。

孤児院を後にした二人は、まっすぐホステルに帰ってきた。ホステルの玄関の前で、あの猫が何気ない顔をしてうずくまっている。
「あんた、この猫、只の猫じゃないみたいだね。」
「そうだな。もう、『猫よりましだ』なんて言えたもんじゃないな。」
「でも、これも縁、孤児院で子供たちと付き合うっていうのもいい経験だよね。あたし達、子供が出来ない体だけど、結構子供と付き合いがあるよね。」
「うん。神様の思し召しかな。それにしても、あの、マドリッドの頃は二人とも子供に教えるの苦労したけど、今や、スペイン語が話せてほんとに助かる。」
「あたし、結局、スペイン語の語学留学したことになったんじゃない？」

約束通り、次の日から孤児院に手品とハーモニカの手ほどきを始めた。手品は数人のグループで、ハーモニカは一台しかないので個別に交代で教えた。多くの子供たちが希望しているので、なかなか順番が回ってこない。それで、必然的に、二人は段々孤児院で過ごす時間が長くなった。そして、そこに居るときは子供たちと一緒に昼食を取るようになった。職員たちの計らいで、無償で支給されるようになったのだ。そして、数週間経った頃、職員寮の一室が開いているので入らないかという話が持ち上がった。食事が付いてホステルよりも安くつく。二人は喜んで寮に移った。ホステルから寮に移るときは、あの猫が付いてきた。孤児院に入る前に二人が顎の下を撫でてあげると、気持ち良さそうに「ニャオ」と言った。そして、あたかも「またね」というように一つの前足を上げて立ち去った。

孤児院の子供たちはほとんどの時間、施設の中だけで生活する。それでも、月に数回、外出の機会がある。通常、リマ市内の公園や博物館などに行く。慎吾と麗名にハーモニカと手品を習ってからは、公園での自由時間に子供たちが交代でパフォーマンスをすることもあった。人だかりが出来る訳ではなかったが、それでも、ちらほらと通行人が足

を止め、ハーモニカを聴き手品を見て行く。多くの見物人は手を叩いて子供たちを励ましていく。

ある日、子供たちのハーモニカ演奏を熱心に聴いていた老人が引率の職員に声をかけてきた。
「オラ！みんな楽しそうにハーモニカ吹いているね。でも、ハーモニカ、一つしかないの？」
「ここに居る子供たちは孤児院から来ているので、寄贈してもらったハーモニカを交代で使うしかないんです。」
「それは気の毒だ。私がハーモニカを子供の数だけ寄贈しよう。私にはどんなものを買ったらよいか分からない。今小切手を切るからそれで買ってくれるかな？」
「え？！ほんとですか？ありがとう。」
その職員は小切手を受け取った後、子供たちを呼び集めて老人の言葉を伝えた。子供たちは大喜びで老人に「ムーチャス・グラシアス！」と叫んだ。老人は子供たちに手を振ると、そそくさと去って行った。

孤児院に帰る途中、一行は銀行によって職員が貰った小切手を現金化した。そして、早速そのお金で麗名のものと同じハーモニカを２０本注文した。約一週間後には、希望者全員にハーモニカが渡された。麗名は今まで同様の個人指導も続けたが、新たに合奏の練習時間も加えた。これには麗名の高校時代のハーモニカ部の経験が役に立った。皆同じハーモニカなので音域は限られるが、それでも複数のパートを設定できる。曲によっては打楽器の役割もハーモニカでこなした。孤児院の行事にはハーモニカ合奏で「イ・セ・ジャマ・ペルー」を演奏したりした。そして、子供たちの人気が高かったのはスタジオジブリの曲で、ビデオを見ながら、一緒にハーモニカを吹いたりすることもあった。

ハーモニカ合奏の練習を積むと、外出時にも演奏することが増えた。それを聞いた見物人から、地域のフェスティバルでパフォーマンスをする誘いも受けて、子供たちは大いに喜んだ。職員も大そう気を良くして、慎吾と麗名に何度も礼を言った。

孤児院での生活が長引くにつれ、二人は何とはなしに他の職員を手伝うようにもなってきた。子供たちが悪さをすれば叱ることもあった。そして、二人とも徐々にそこで生活する子供たちの気持ちというものを実感する機会が増えた。中でも一番二人を悩ませたのは、養子を希望する人たちが現れる時だ。子供たちは持っている数少ない衣類の中から一番良いものを着る。そして、数人ずつ面会室に連れて来られる。この時の子供たちの緊張度は、はたから見ていても痛いほどに伝わってくる。期待と不安が思考回路を占

拠してしまっているようだ。そして、慎吾と麗名にはこれがあまりに過酷な競争に思えた。養子に貰われて行く子供はやっと自分の家族が出来ると思い、喜びに沸く。その傍ら、他の子供たちは皆、愕然とする。現実的にはほとんどの子供はこの挫折感をもう何回も味わっている。

ある日、訪れていた夫婦がホセを養子にしたいと言い出した。夫婦が帰ってからその話を聞いたホセは中庭を駆け回って喜んだ。他の子供たちは自分たちの部屋にこもったまま、羨ましそうに窓から中庭を覗いていた。ところが、数日後に状況は反転した。養子縁組の手続きを進めて行く間にその夫婦が他の地域で少年少女虐待の疑いをかけられていたことが発覚したのだ。養子縁組を司る行政機関はこれを理由に手続きを中止した。

この知らせを受けた時のホセの落胆は計り知れなかった。一番有頂天だったのに、今度は一番落ち込んでしまった。職員たちは代わるがわるホセのことを慰めたが、なかなか功を発しなかった。ある職員はホセに「もし、あの夫婦にもらわれていたら、あなたの生命さえ危なかったじゃない」と言った。ただ、ホセにとっては、どんなにひどい人間でも家族だったらその方が良いと思っていたかもしれない。

こう言った事態には慣れている職員たちも、今回はホセを慰めきれないでいた。そんな中、ホセが慎吾に手品を習う順番が回ってきた。様子を聞いていた慎吾としてはホセに手品のことを考える余裕はないだろうと思っていた。それでも、一応練習に使う部屋で待っていた。慎吾は何をするともなく、トランプをいじくりながらボーっとしていた。当然ホセの事を考えていたのだが、どうしてよいかもわからずに手を動かしていた。すると、慎吾の予想に反して、ホセが部屋に入ってきた。未だ希望のない顔をしている。ホセは独り言のように口を開けた。
「シンゴ、何をしても気が紛れない。現実は耐えられない。それで、幻想の世界の手品に逃げようと思った。」
「ホセ、そうか。じゃ、始めよう。二人で幻想の世界に飛び込もう。」

その日は、特別に決められた時間以上練習をした。ホセは頭の中を駆け巡る失望感から避けようと、必死に練習をした。最後に、少し、微笑みを浮かべると、「グラシアス」と言って自分の部屋に帰って行った。慎吾は自分の出来る唯一のことをしてるに過ぎない。それでも、ホセの心の癒しに少しでも役立っていると感じて嬉しかった。そして、職員たちの計らいで、ホセは特別に多く手品の練習をしていいことになった。練習の間、二人はほとんどしゃべらない。二人で交代に手を動かすだけだ。それが、ホセの瞑想になっていったのだ。

数週間経った頃、練習の後で、ホセが慎吾に言った。
「シンゴ、ずっと手品を教えてくれてありがとう。大分心が落ち着いてきたような気がする。それに、随分うまくなったよね？」
「ほんとだよ。ホセが一番うまくなったかな。他の子供に教えられるね。」
「そうかな？でも、兎に角、もう大丈夫だと思う。教えてくれてありがとう。」
「手品の練習が役に立って、嬉しいよ。」
「それから、一つ気になっていることがあるんだ。」
「ホセ、何だい？」
「実は、僕の仲の良かった友達でミゲルという子が居るんだけど、ここで、少し悪さをして、他の孤児院に送られてしまったんだ。この前、職員が話しているのをちらっと聞いたんだけど、どうやら彼は少年鑑別所に送られてしまったらしい。彼は悪いやつじゃない。何か訳があるんじゃないかと思うんだ。シンゴは、ここの職員ではないし、え～と、部外者だからひょっとしてミゲルに会ってみてくれないかな？」
「ホセ、自分の身の上にこんな重大なことが起こったのに、よく友達のことを考えられたね。感心だな。」
「僕らには家族が居ないから友達は大事なんだ。会ってみてくれるかな？」
「どうなるか分からないけど、兎に角試してみるよ。じゃ、また明日。」
「また明日。それから、ミゲルに会うときは『カバージョ』と言ってくれる？これは僕達の合言葉で、この言葉を知っている人は信用していいという意味なんだ。」
「出来るだけのことはするよ。」

その夜、慎吾は麗名にホセの話をした。
「あんた、それ、ほんとに良かったじゃない。ホセの元気が出て、ほっとするな。それにも増して、そのミゲルのこと気になるね。いつ会いに行くの？あたしも一緒に行っていい？」
「いつかはまだわからない。一緒に来てくれたら助かるよ。話は二人で聞いた方が間違いがないと思う。それから、これは良いかどうかわからないけど、一応職員に相談しようと思うんだけど。」
「そうだね。あたし達は部外者だから、その方がいいよね。」

翌日、慎吾が職員にミゲルの事を話すと、皆少し緊張したような表情をした。どうやら、何かを知っているようだ。だが、皆はっきりとした返答はしてくれない。ただ、職員の一人が他に人の居ないところで、慎吾にコッソリと話した。

「シンゴ、ぜひ会ってほしい。君達は部外者だから丁度いいと思うんだ。だけど、ここの職員の事は持ち出さないでくれるかい？それから、ミゲル以外の人々にはホセのことも持ち出さないでくれるかい？」
「分かったよ。兎に角会ってみるよ。ありがとう。」

それから数日後、慎吾と麗名はミゲルの居る少年鑑別所に行った。そこで、小説を書くための取材として、何人かと面会したいと申し出た。そこに居る何十人かの中から、ミゲルという少年３人に会いたいと言った。初めの二人のミゲルは会話の途中に挟んだ合言葉「カバージョ」に全く反応しなかったので、すぐに三人目のミゲルに会った。慎吾が会話の途中で「カバージョ」と言うと、このミゲルはきりッとに慎吾を見つめて、やはり、「カバージョ」と言った。

慎吾はホセという名前は出さずに、ミゲルの友達が心配している、何があったのかと尋ねた。ミゲルは再び「カバージョ」と言って、静かに話し始めた。ミゲルはホセと一緒の孤児院に居た時に女の子をかばって、他の男の子とけんかをした。その男の子がけがをしてしまい、ミゲルが悪者にされた。それが切っ掛けで他のもっと厳しい孤児院に送られたのだ。そこでは、毎日のように子供たちが職員に体罰を受けていた。それだけでなく、その孤児院では、設備、食事、すべてにおいて粗悪であった。ホセは何か訳があるはずだと勘繰り、時折職員室に忍び込んでは、手掛かりをあさろうとしていた。ある日、院長補佐の職員の引き出しの鍵が締め忘れになっていることに気が付き、その中にあった鍵の沢山ついているリングを見つけた。それを使って、そこらじゅうのファイルキャビネットを開けてみた。その中の一つのフォルダーに特別と思われるような金銭出納帳のようなものがあった。また、同じキャビネットの中にそのキャビネットの合鍵もあったので、リングの方は机の引き出しに戻し、合鍵だけ自分のポケットにしまい込んだ。

その日から、折を見てはその合鍵を使ってキャビネットの中にある金銭出納帳を詳しく調べた。最終的にわかったことは、その孤児院の収入の多くはリマ中央銀行のある口座に振り込まれているということだった。口座名はモット・クレーロとなっており、その孤児院に働いている人の名前ではない。おそらく仮名だろうということだ。何日にもわたって、ミゲルは重要と思われる内容を自分のノートに書き写した。そのノートはミゲルの住んでいた部屋に隠していたということだ。ミゲルはまず、その部屋が孤児院のどこにあるか教えてくれた。そして、その部屋の片隅にあるくくりつけの本棚と壁の間にネズミが通れるくらいの隙間があり、そこに差し込んであるというのだ。

少年鑑別所を出た慎吾と麗名は複雑な気持ちになった。
「おまえ、参ったな。この事態を放っておくのはミゲルに対して申し訳ないよな。でも、これは吾輩たちの出来る範囲を超えているようだし、出る幕でもないような気がするし。」
「でもね、あんた。あたしは何とかしなくてはという気がしてきたよ。あたしは今まで人のために何かをしてあげたことがなくて申し訳ないんだ。」
「そんなことないよ。吾輩を助けてくれたじゃないか。」
「それはお互い様だよ。兎に角、今のままではミゲルが可哀そうだ。それに、もしかしたら、この件はあたし達が部外者だから出来ることかもしれないし。」
「そうかなぁ。まぁ、おまえの言うことはわかるよ。ない頭を使って考えるか。そして、吾輩たちの苦手な計画を立てないとな。」

二人の考えた計画というのはこんな按配であった。今の孤児院で活動しない日を使っていくつか、他の孤児院でパフォーマンスをすることにする。この中にミゲルの居た孤児院を含める。その時に、何とかミゲルのノートを取り出そうと言うのだ。これは、計画性のない二人が思いついた最善の策であった。

さて、どの孤児院もパフォーマンスの申し出には快く応じてくれた。だが、実際にミゲルの居た孤児院に行った時にどうやってノートを取り出すか具体的なアイデアがあるわけではなかった。都合のいいことに、その孤児院に着くとまず、そこの職員が院内の案内をしてくれた。この時にミゲルが居たと思われる部屋を見つけることが出来た。パフォーマンスが終わった時、子供たちがいろいろと質問をしてくる。その時に、麗名がトイレということでその場を去ってミゲルの居た部屋に向かった。ところが、その部屋には職員が残っており、何やら事務をしているようだ。麗名はその部屋に入ることが出来ずに戻ってきた。慎吾には日本語で「だめ」と伝えた。

二人共どうしたものかと思っていたが、帰り際に、慎吾が自分の手品用具をパフォーマンスをしていた場所の一角にわざと残していった。孤児院から出た二人はすぐにノートの事を話した。
「あたしが部屋に入ろうとしたら、職員が居て入れなかったんだ。ミゲルの言っていた隠し場所は大体わかった。部屋に誰もいなければさっと取れると思う。」
「よし、子供たちの遊び時間が来るまでこの辺で待機していよう。そこの柵越しに見えるだろう。そしたら、忘れた手品用具を取りに来たということで、孤児院に戻ろう。」
「でも、何と言ってまた部屋まで行くの？」
「おまえ、下痢でも生理でも何でもいいからまたトイレに行ってくれるかな？」

「しょうがないな。」

孤児院に戻った二人はまず、慎吾の手品用具を回収した。その時、麗名はミゲルの部屋に居た職員が中庭で子供たちの監視をしていることに気が付いた。そこで、また、トイレに行くということであの部屋の前まで行った。部屋には誰もいない。すかさず中に入り、本棚の隙間から小さなノートを抜き取った。それをバッグに入れるとすぐに部屋を出てトイレに向かった。トイレの中でそのノートを見ると、中にはぎっしりと数字と何かしら名前が書いてあった。二人は直ちにそこを出た。
「おまえ、凄いな。お手柄だ。」
「心臓が止まりそうだったよ。兎に角、ほっとした。」
「もう一度ミゲルに会おうか。」

二人は追加取材ということでミゲルに面会した。ノートを見たミゲルの目は輝いた。まだはっきりしたことは言えなかったが、慎吾は、このノートを有効に使いたいと言った。慎吾が思いついたのは汚職監査の機関、孤児院を管轄している厚生省の機関、そして新聞に同時にコピーを送付したらどうかということだった。ミゲルは、それだったら、革新系の新聞「ラ・レププリカ」が良いと教えてくれた。そして、問題の概略を含めた手紙を添付することにした。これらの告発はすべて匿名ですることにした。

寮に帰ってきて実際に手紙を書き始めると、スペイン語であまり文章を書いたことがない二人にはかなりの難題だった。そこで、職員の一人でミゲルの事を相談した人に助けてもらうことにした。直接かかわりたくはないようではあったが、協力的で興奮もしているようだった。数週間のうちにこの作業が終わり、手紙とミゲルのノートのコピーを三か所の機関に送る準備ができた。二人がペルーに入国して５か月を過ぎていた。

「あぁ、いつの間にか滞在期限の６か月が近付いてきた。吾輩はほんとはクスコとマチュピチュを見たかったのだけど、それは難しいかな。」
「え～、でもまだ数週間あるじゃない？」
「うん。ただ、ミゲルのノートを送ったら、一応身の安全のため国外に出た方がいいんじゃないかと思うんだ。」
「えっ、まさか、誰かに襲われると言うの？」
「いや、そうと確信している訳じゃないが、安全策を取った方がいいと思う。吾輩も、もはや独り者ではないし、おまえの親御さんにも責任を感じる。」
「分かったよ。どうするの？」
「近いうちに、ビザが切れるからということで、孤児院のみんなにお別れの挨拶をしよ

う。子供たちはもうだいぶ手品もハーモニカも覚えた。自分たちだけでもやって行けるだろう。そして、ノートを投函すると同時に空港から次の国に行こう。」
「随分急だよね。なんだか寂しいな。」
「そうだな。メリダほど長居した訳ではないけど、スペイン語を覚えたせいか、だいぶ地元に馴染めた感じもする。」
「あんた、次はどこに行こうか？」
「どこに行きたい？」
「やっぱり、南下だよね。え～と、チリだっけ？」
「そうだな。吾輩も同感だ。」

翌日、二人は孤児院の子供たちと職員に別れの挨拶をした。皆残念がった。噂を聞いて職員たちはもう事情を察しているようだが、子供たちはきょとんとして訳が分からないといった表情だった。その日、慎吾と麗名が少し買い物をしに孤児院から出たとき、いつもと違っていることに気が付いた。いつも周りをウロウロしていた、あの野良猫が見当たらないのだ。どうしたのだろうと思っていたが、孤児院に戻ると、子供たちが泣いている。あの猫が裏の路地で死んでいたというのだ。何歳だったのだろうか。野良猫はは飼い猫ほど長生きできない。あの猫が誘ってくれなかったら、二人はこの孤児院にも来てはいなかっただろう。二人も悲しく思った。

慎吾と麗名は二日後に孤児院を後にした。皆、門の所で見送ってくれた。途中、ミゲルのノートと手紙を投函し、そのままバスで空港に行った。昼頃には前日に予約しておいた便でチリの首都サンチアゴへ向かっていた。少し気になったのは、リマ空港の出入国審査官に少し怪訝な顔をして「シンゴとレイナというのはよくある名前か？」と聞かれたことだ。何か二人の事を知っているのだろうか。

リマからサンチアゴまでは３０００キロ以上ある。丁度、日本の北端から南端までくらいの距離だ。普通だったら、二人は４０時間以上かけてバスの旅をするだろう。途中の様子を見られないのは残念だが、飛行機は実に早くて楽ちんではある。途中、慎吾が思い出したように言った。
「あれ、最後に親にメール出したのいつだったけ？」
「え～と、リマに着いてすぐだったかなぁ。待って。ひょっとすると、リマでは何も連絡していないかも。」
「それはまずいな。いろいろあったから、うかつだった。」

「このフライトの間に下書きしようよ。」
「そうだな。今までの方針に従って、必要以上に心配させることはないが、基本的には正直に言う、だよな。」
「そう。まぁ、今のところ二人とも元気だし、経済的にもまだ余裕があるし、心配するようなことはないよね。」
「うん。それじゃ、少し、汚職の告発に関与したことでも書くかな。」
「それは、もう少し待とうよ。もし、この事件が新聞沙汰になれば、あたし達もラ・レプブリカのウェブサイトで状況を知れるし、その件はそれからでいいんじゃない？」
「なるほど。それもそうだ。それじゃ、孤児院での経験でも書こうか。」
「そうだね。それじゃ、早速下書きを始めようよ。」

二人は交代で電話にその話を書き込み始めた。そうしているうちにサンチアゴの空港に到着した。ここで何をするかまだ全く計画というものはなかった。ただ、空港についてすぐに気が付いたことは、警備が異常に厳しいことだ。そして、リマに比べて、人々の表情も険しいように感じた。兎に角、安めのホステルを探し、宿を取った。

次の日、ホステルのWiFiを使って、下書きをしておいたメールを二人の両親に出した。麗名の両親からはすぐに返事が来た。やはり、心配していたらしい。そして、サンチアゴの政情はどうかと聞いてきた。二人は丁寧に謝ったが、急に来たためサンチアゴの政情のことは全く調べていなかった。さて、外に出て朝食でも取ろうとしていたら、やはり、人々の動きが激しい。それに、どこかで騒ぎが起きているような音もする。二人は不安になってきた。
「これ、ひょっとして、おまえの親御さん達の心配している政情不安定ってやつかな？ちょっと新聞でも買ってみるか。」

ところが、新聞は買う必要がなかった。今にしては時代遅れの「号外」と言って、街の至る所で、ペラペラのニュースを配っているのだ。どうやら、今朝クーデターが起こったらしい。サンチアゴの空港は封鎖され、陸路の国境も封鎖されているらしい。
「あたし達、なんて運が悪いんだ。クーデターが昨日起こっていればここには来れなかったのに。」
「兎に角、チリは抜け出した方がいい。ここからアルゼンチンのメンドーサまでは極めて近い。そこまで行こう。」
「どうやって！？」
「大都市には旅客用の空港の他に小さな商用の空港があるはずだ。そこで、メンドーサに行く自家用機を探そう。」

ごく簡単に朝食をすまし、慎吾が電話を使って商用空港を調べた。確かに市の東のはずれにそれらしきものがある。二人はタクシーでそこへ向かった。空港には大きな旅客ターミナルのようなものはないが、商用機を扱う小さなターミナルがいくつかあった。二人は端からそれらのターミナルを当たってみた。三つ目のターミナルまで来た時だ。幸い、国境をまたいでビジネスをしている人が自分で操縦する飛行機に少しお金を払えばメンドーサまで乗せてくれるという。そこで、そのパイロットと一緒に小型機に乗り込んだ。小型機はすぐに離陸した。

パイロットは二人にひっきりなしに話しかけてくる。旅行者かとか、どこから来たかとか、どうしてこんな物騒な時にサンチアゴに来たのかとか。その後は、歌を歌っている。アンデスの山々は夏なのにまだ一部が雪と氷に閉ざされていた。丁度、山脈の頂きを超えた頃、パイロットが急におとなしくなった。どうしたのかと思っていたが、どうも体がまったく動いていない。不審に思った慎吾がシートベルトを外して後ろからのぞき込むと、パイロットは目を閉じて、手はだらんとしている。意識もないようだ。
「おまえ、大変だ。パイロットが気を失っている。」
「あんた、なにそれ！」
「なんでもいいから、ちょっと手伝ってくれ。パイロットを席から引きずり出す。オレが操縦する。おまえは、パイロットの様子を見てくれ。息してるか？人工呼吸とか出来るか？」
「えー！！あの口移しでやるやつ？」
「他に何があるんだよ。兎に角、この機材のコントロールを取り戻さないと。」

慎吾はパイロットの席に座り、コントロール・パネルをいろいろ見回している。次に無線を使ってアルゼンチン側の管制塔を探し始めた。ところが、見知らぬ土地のため、周波数が分からない。兎に角、非常事態を知らせるメーデーボタンを押した。これで、当局が感知してくれるだろう。そして、目視で着陸可能なところを探し始めた。まだ山岳地帯だ。さらに東へ暫く飛ぶと、平野部に差し掛かった。

ちょうどその時、戦闘機が２機スクランブルしてくる。メーデーの信号を受けたのだろう。戦闘機のスピードは早すぎるので、交互に追い抜いてはまた旋回してくる。慎吾は紙に周波数という意味の「FQ」と書き、それを窓越しにかざした。戦闘機のパイロットの一人が追い抜きがけにそれを見た。旋回して戻ってきたときに、「１２９．９００」と書いてきた。慎吾は無線のダイヤルを合わせた。
「ケ・パサ？」
慎吾はスペイン語で応答し始めた。

「パイロットが気を失っている。私は飛行機の操縦が出来る。最寄りの空港まで誘導を頼む。パイロットのための救急車も必要だ。」
ところが、途中から英語で話していたことに気が付いた。慎吾がアメリカでパイロットをしていた時は当然すべて英語だったからだ。英語の方が慣れていると分かった戦闘機のパイロットは今度は英語で対応した。
「了解。ついて来い。メンドーサ空港が見えたら、有視界飛行で着陸せよ。周りのエア・スペースおよび空港は直ちにすべてクリアする。」

空港まで、2機の戦闘機が代わる代わる先導してくれた。空港が視界に入ると、慎吾は戦闘機のパイロットたちに敬礼し、着陸の準備に入った。まずは、空港上空を３０００フィートで通過、滑走路を確認する。視界良好、横風やや強く、約１５ノット。そのまま約２分飛行し、旋回して最終着陸体制を取った。滑走路上５０フィートでエンジンをアイドルにし、強風に多少あおられながらも無事着陸した。慎吾がアメリカでパイロットをしていた時は、どんな気象条件でもスムーズに着陸できると評判だったのだ。無線の指示に従って空港内を安全な場所まで進んだ。滑走路の両脇には消防車が待機していた。救急隊が即座にパイロットを救急車に乗せて病院へ向かった。慎吾と麗名は空港事務所に連れていかれ、二人だけ特別の入国手続きを済ませた。空港関係者は二人を英雄並みの待遇で扱った。そして、アルゼンチン政府の計らいで、ホテルに一泊させてくれることになった。そこは、メンドーサでは一番高級なホテルだった。二人には、似合わないようなところだった。

「もし、あんたが飛行機の運転出来なかったら、あたしたちどうなっていたの？」
「雪のアンデス山脈にミイラを３体追加することになっただろうな。インカ人のミイラは普通だろうが、日本人のミイラは珍しいだろう。」
「あんた、あたしの命の恩人だね。ところで、飛行機の中であのパイロットを引きずり出す時、あんた、『オレ』って言ったよ。」
「気が付かなかったな。慌てていたからな。」
「やっぱり、『吾輩』じゃダメなんだ、そういう時は。」
「そうかもしれないな。吾輩もおまえのようにバイリンガルなんだろう。」

８．ブエノスアイレス（アルゼンチン）

メンドーサはアルゼンチン最西部にあるアンデス山脈の麓の美しい街だ。慎吾と麗名はサンチアゴ脱出の疲れを癒すため、湖畔の小さなホテルで一週間近く休んだ。ここでは時間もゆっくりと過ぎていくようだった。さて、ここからは行く先は当然ブエノスアイレスなのだが、実は二人とも密かに楽しみにしていることがあった。
「あんた、ブエノスアイレスで何が一番したい？」
「ん～。おまえは？」
「あたしは、本場のタンゴが見たい。」
「ほんとー！？吾輩もだ。」
「へ～、あんたが？」
「悪かったな。これでもタンゴの一つや二つ踊るんだぞ。」
「えっ？！あんたが？」
「そうだよ。叔母さんがダンス教室を経営していたから、遊びに行くと良く教えてくれたよ。」
「以外だな。見かけによらないな。」
「おまえはどうしてだ？」
「ちょっと恥ずかしながら、バレーをやってたんだけど、東京で本場のアルゼンチンタンゴの来日講演を見た時に感激したんだよ。」
「えっ？！おまえ、バレーもやってたの？」
「そう。例のお嬢様パッケージの一つだよ。でも、足のケガが切っ掛けで高校の途中で辞めたけどね。どっちにしても、あたしの体形じゃバレーには無理があるよ。もっと足が細くて長かったらな～。」
「おまえは今のままでいいよ。それじゃ、話は決まった。明日ブエノスアイレスへ出発だ。」

二人は１６時間ほどバスに揺られてブエノスアイレスへやって来た。まず、適当な安ホステルを見つけ、パフォーマンスが出来るようなところを探した。ここには公園が沢山あり、いくつか候補地が上がった。ここでのパフォーマンスにはタンゴの曲が欠かせない。二人ともすでに好きな曲があったので、それらを取り入れることにした。中には、カルロス・ガルデルの「エル・ディア・ケ・メ・キエラス」、アストール・ピアソーラの「オブリビオン」、マリアニート・モレスの「ウノ」がある。本場のタンゴは、バンドネオンのスタッカートとバイオリンのレガートの交差が映える。そして、ハーモニカ

はバンドネオンと同じフリーリードの楽器なので、良く感じが出せる。二人は主に夕刻に公園でパフォーマンスをした。そして、パフォーマンスの後は、毎日のようにエンパナーダを買って食べた。中南米どこでもある食べ物だが、アルゼンチンの場合、たっぷりの牛肉とオリーブとゆで卵が入っていて美味しい。

そして、気が向いた時はその後、時には夜の１１時ころからタンゴバーに行って本場のタンゴを楽しむという日々を続けた。また、時にはタンゴのダンスパーティーといったところの、ミロンガという集まりにも行ってみた。二人はそこで初めて一緒にタンゴを踊った。慎吾はかつて叔母さんから教わったと言っても、もうずいぶん長いこと踊っていない。麗名はバレーの経験があるとは言っても、タンゴを踊ったことはない。それで、二人は思ったようにはうまく踊れなかった。周りを見渡すと、地元の年配の夫婦とかがいとも鮮やかに踊っている。とても容姿端麗とかプロのようなスピードもない。年も体形もまちまちだ。それでも、実にうまく音楽にのって、楽しんでいるのである。二人とも口には出さなかったが、いずれ自分達のパフォーマンスにタンゴのダンスも加えてはとさえ思っていた。

二人はミロンガに通っているうちに、近くにタンゴの専門学校があることを知った。これはいい機会だと思い、門をたたいてみた。いろいろと話をしている間に、すぐに入学を勧められた。生徒になれば各種学校の学生ビザが取得可能で、観光ビザの３か月を超えて滞在できる。そして、幸い、二人には幾ばくかの資金がある。と言う訳で、二人はタンゴの学生になったのであった。ところで、このタンゴ・スクールには音楽部門もある。タンゴで普通に使われる、バンドネオン、バイオリン、ピアノ、ギター等の教授もする。実は、麗名はバンドネオンも習いたかったのだが、バンドネオンは非常に高価で購入する気にはなれず、断念した。何より、旅行中に持ち歩くのは現実的ではなかった。

このタンゴ・スクールは生徒の都合に合わせて比較的自由に学べる。慎吾と麗名は当初、週に５日好いている午後の時間に少人数のグループ・レッスンを取った。まず、男女の組み方、バシコ、サリーダ、オーチョ、クワドラードといった基本的なステップを徹底的に習った。アルゼンチン・タンゴが英国風のボールルーム・タンゴと全く異なって見えるのは意味がある。ボールルームではホールドは上広がりの感があるが、アルゼンチンではどちらかと言うと末広がりである。男性の右頬と女性の左頬が接する感じで、密着感がある。ボールルームではプロムナード・ポジションと呼ばれる組み方に近い。
ホールドは小さく、男性の右腕は女性の背中全体を支えて、しっかり抱く感じだ。そして、ステップは大胆につま先から踏み出していく。

最初の数か月はこういった基本を徹底的に練習した。すると、ステップ自体は極めて簡単なのだが、いかにもアルゼンチン・タンゴの雰囲気が出てきた。その後は、アルゼンチン・タンゴ独特の蹴るようなボレオ、足を絡めるようなガンチョ等を学んでいった。半年ほどで、一通りのステップを覚えた頃、二人はプライベート・レッスンを取るようにした。

タンゴ・スクールの費用は予定外だったので、少し真剣にパフォーマンスをしようということになった。タンゴの練習の後、いつも夕刻に公園に出向く。タンゴの曲に交えて、今まで使ってきた世界各地の曲も演奏する。慎吾の手品のルーティンにもタンゴ風の動きを取り入れた。また、最近はここにも日本人観光客らしき人々が現れる。ある日、麗名が気が付いたことがある。リマで見た日本人らしいカップルが見物人の中に居たのだ。雰囲気としては、現地の日本人でも観光客でもない。旅人のようでもあり、仕事中のようでもある。麗名は不思議に思ったがその時はそれ以上深く考えなかった。

日本人と言えば、二人の通っているタンゴ・スクールにもダンス、バンドネオン等の習得に日本から留学生がやって来る。中にはプロのボールルーム・ダンサーのカップルがいて、子供も二人連れて来る。このプロのカップルは年に一か月ほど、子供の夏休みと合わせて来るらしい。主眼は自分達の練習で、毎年、日本で教えるために技を磨いていくのだ。だが、同時に男の子二人もここのダンス・スクールに入れて習わせている。実はこの子供たち、小学生なのだが、日本のボールルームのジュニア・コンペティションで入賞する程なのである。

慎吾と麗名もたまにこの家族と付き合いがある。この家族の両親がレッスンを取っている間、子供たちを子守することもある。この子供たち、ダンス以外ではごく普通の可愛い小学生である。ところが、ダンスのこととなると、普通の小学生ではない。まず、歩き始めると同時に親にダンスを習ってきたので、踊ることはごく当たり前のことである。ただ、慎吾と麗名が気にするのは、この子供たちは自分たちの意志でダンスを習い始めたのではないということである。外から見ていてもわかるのは、両親が子供たちを自分たち以上のダンサーにしたいという期待からダンスをさせているのである。そして、コンペティションで入賞すると大そうなご褒美をあげる。長男はうまく両親の意志を汲み取って、両親の期待通りにふるまっている。いつもコンペティションでの成績も良い。しかし、次男は三歳上の長男と比較されるため、どうしてもそれほどうまくないように見られる。そのため、次男は長男のようにはダンスに熱中してはいない。長男と同じよ

うに練習させられているのだが、コンペティションの成績は良かったり、悪かったりという状況らしい。

ある日、慎吾と麗名が街でパフォーマンスをしているところを偶然この家族が通りかかった。特に次男は慎吾が手品をするところを熱心に見ていた。翌日ダンス・スクールで二人がこの家族に会うと、この次男は慎吾に手品を教えてくれとせがんだ。ところが、これを見ていた両親はとんでもないという様相で次男を止めた。母親が「うちの子供たちはダンスに夢中で、それ以外の事をしている時間はないんです」と弁解した。

後で、慎吾と麗名はこの時の状況を思い出していた。
「なんだか、あの子可哀そうだったよな。手品習いたいって言っているのに、母親に止められちゃってさ。」
「ほんとだよね。あたしは、少しあの子の気持ちが分かるよ。」
「えっ、ほんと？」
「うん。だって、あたしだって、お嬢さん教育を押し付けられて来たんだから。」
「そうだったな。でも、おまえのお袋さんはあんなにきつくないようにみえるけどな。」
「あたしが小さい時は結構きつかったよ。バレーなんか、足は痛いし、ほんとは早く止めたかったよ。それに比べると、タンゴは違う。タンゴは大人になってから初めて見て感激したからだよ。やっぱり、自分で選んだ道が一番だよ。だから、やる気がするんだ。」
「ふ～ん。なるほど。」
「それから、また、思い出したよ。親に連絡しないと。」
「うん、うっかりしていたな。一応、正直に経過を話さないとな。チリ脱出はかなり危なっかしかったけど、今は一段落。ダンス・スクール学生なんだから言いやすいよな。」
「じゃ、またメール出そう。」

そうこうしているうちに、時間はどんどん過ぎていった。ペルーを出てから初めて、二人の世話になった孤児院の職員から電子メールが来た。ミゲルが書き写した汚職の事実が確認され、ミゲルの居た悪い方の孤児院の院長初め関連の職員が逮捕されたというのだ。詳しくはペルーの新聞「ラ・レプブリカ」を見るようにと記してあった。早速、タンゴ・スクールの共用コンピュータでニュースを読んだ。汚職の内容はほぼミゲルの

すっぱ抜いた通りであった。ただ、汚職に絡んでいた孤児院は他にもあったようで、それらの孤児院では、職員が大幅に入れ替えられ、政府のより厳しい監視下に置かれた。ミゲルは少年鑑別所から出され、ホセの居る孤児院に戻されたようだ。やっと、二人の旧友は再会出来、喜んでいることだろう。慎吾は、孤児院の職員に頼んで、ホセとミゲルにメッセージを送ってもらった。その職員経由で彼らからも返信があった。ホセはミゲルにも手品を教えると言っている。そして、「もう養子縁組には期待しない。二人で手品の大道芸人になるのだ」と締めくくっていた。

「おまえ、どうやら、吾輩たちのやっていることが子供たちに影響を及ぼしたようだな。たいそうなことではないけど、孤児院の子供たちに多少なりとも希望を与えたのは良かったと言えるよな。」
「当然だよ。彼らは、身内が居なくて気の毒だけど、そうやって、親友と出来ることがあれば強いよ。それに比べると、親の押し付けたことをやらなければならない子供たちは逆に哀れだよね。」
「いや～。まったく。一番怖いのは、押しつけがましい親が心から良いことをしていると思っていることだよ。子供たちは絶対に心の奥底でそれに反抗しているはずだ。せっかく親が居るのに、精神的な孤児にさえなりかねない。そして、いわゆる、いい子ほどひねくれた形で反抗する。」
「あんた、それ、あたしのことを言っているの？あたしが、こんな話方をしているのも、短期留学の後、ロンドンでぶらぶらしていたのも反抗の表れだっていうことね。」
「まぁ、そうだろうな。」
「でもさ、あたしの反抗は可愛い方だよね。ちょっとしたことで、アル中になったり、麻薬をやったり、不良性交をしたり、犯罪だって侵しかねないよね。」
「そういった例は山ほどあるだろうな。それで、おまえ、吾輩との関係は不良性交じゃなかったのか？」
「あ～、あたしは運が良かったよ。正直言って、あんたに出会った頃は、あんたがまともか不良かの区別をしている余裕はなかったよ。今思えば、よっぽど寂しかったんだろうなぁ。」
「ふ～ん。おまえの親御さんも罪なもんだな。自分達のお嬢様がそんな思いをしているとは思っていなかっただろうに。」

慎吾と麗名はタンゴ・スクールに２年近く通った。仕舞には、ちょっとしたパフォーマンスさえ出来るようになり、学校の発表会を兼ねたダンスパーティーでは、二人の踊りを披露した。と言う訳で、一応タンゴ・スクールは「卒業」することになった。その後、しばらくは夕刻のハーモニカと手品のパフォーマンスに専念した。慎吾だけでなく、麗

名もタンゴのステップを踏みながらハーモニカを吹くという技を身につけ、パフォーマンスに取り入れた。

そして、各種学校の学生ビザが切れる少し前にブエノスアイレスを後にした。次の目的地はリオデジャネイロだ。バスだと全行程で４０時間以上かかるし、せっかくなので、ウルグアイを通ってずっと海岸線で行こうということになった。まずは、ウルグアイの首都、モンテヴィデオまでフェリーに乗り、そこで一泊した。次の日は、ウルグアイからブラジルに入った。国境には片側一車線の橋があり、行先を書いた札を持ったヒッチハイクをする人たちが居るだけで、何の国境審査もなかった。そのため、パスポートに入国のスタンプをもらわなかった。二人とも、もう今までのように滞在期限を気にしてはいないようだ。

その日はペロタスという町で泊まり、翌日はポルトアレグレというところまで行った。次はクリティバまで、１２時間近いの長いバス旅だ。朝早くから夜遅くまでかかった。そう言えば、慎吾がアメリカに居たとき、クリティバから来ていた日系三世の留学生に会ったことがある。もう日本語は話せないが、それでも、日本食は大好きであった。今頃どうしているだろうか。その後、サンパウロで一泊して、リオデジャネイロに到着した。

９．リオデジャネイロ（ブラジル）

リオデジャネイロはシドニー、サンフランシスコと並び世界三大美港の一つとされている。慎吾はシドニーとサンフランシスコにも行ったことがあるが、リオデジャネイロ港の美しさは群を抜くと思った。そして、慎吾が今までに行った中で、世界三大美港を選ぶとすれば、ここリオデジャネイロの他には香港とバンクーバーを入れたいと思った。それは、慎吾の主観的な見方によるが、これら三つの港が一番高低の差が激しくそれゆえの美しさがあると思ったからである。

ブラジルの主要言語はポルトガル語である。これについては、二人がバスでスペイン語圏のウルグアイからポルトガル語圏のブラジルに入り、通過している間に気が付いたことがある。どうやら、ブラジル南部に入った時はポルトガル語もほとんどスペイン語のように聞こえていたし、二人のスペイン語もよく通じた。それがブラジル中心部に近づくにつれ、スペイン語が通じにくくなってきたのだ。ブラジル南部ではポルトガル語方言が連続的にスペイン語的からポルトガル語的になっているようだ。当面は、二人ともすぐにポルトガル語を覚える訳にもいかず、スペイン語だけで通した。いずれ、日常使うポルトガル語は少しずつ覚えようという気持ちであった。

ポルトガル語と言っても、ブラジル方言はポルトガル本国とはいろいろと違う。すぐわかる違いのひとつは、ブラジル方言では語尾の「e」と「o」の音が「イ」と「ウ」のように聞こえる事だろう。例えば、「どこ」を意味する「onde」は「オンジ」と聞こえるし、「世界」を意味する「mundo」は「ムンドゥ」と聞こえる。これが、ブラジル方言でボサノバやサンバを歌うときに何とも言われない雰囲気をかもし出すのである。

ご存知であろうが、ブラジルは音楽の宝庫だ。高価な楽器を使う訳ではない。複雑な音楽理論を駆使する訳でもない。それでいて、音楽として究極の美しさがある。そこで、リオに着いてすぐ、二人のレパートリーにもお気に入りの曲をいくつか加えた。映画「黒いオルフェ」からルイス・ボンファの「カーニバルの朝 」と「オルフェのサンバ」、アントニオ・カルロス・ジョビンの「イパネマの娘」、カエターノ・ヴェローゾの「アケリ・フレヴォ・アシェー」等だ。また、パフォーマンスにはブエノスアイレスで習ったタンゴ風の動きを加えたり、世界各地の曲を使ったりとバラエティーを増した。

「あたし達、これでABCを制覇したね。」
「なにそれ？」

「A はアルゼンチン、B はブラジル、C はキューバ。あたしは一般にラテン音楽が好きなんだけど、この三つが特に好きなんだ。あたしたちのパフォーマンスにも ABC すべて入ったってことだよ。」
「快挙だな。吾輩もおまえのおかげで、だいぶ音楽の事を学んだ。もう ABC どれでもバス・ハーモニカで伴奏出来るじゃないか。猫よりましだな。」

ここでも、二人は適当な場所を探して毎日のようにパフォーマンスをする。ある日、パフォーマンスの合間に麗名が言った。
「ねぇ、あんた。あの日本人っぽいカップル覚えてる？リマでも、ブエノスアイレスでも、あたしたちのパフォーマンス見てたじゃない。」
「あぁ。さっき通りかかった日本人の団体を引き連れていたのは、その二人か？」
「うん。確実だよ。どうやらツアーガイドみたいだね。だから旅人のようでも、仕事人のようでもあったんだぁ。」
「それじゃ、どこで会ってもおかしくないよな。」
「それもそうだけど、あの団体、普通の観光客じゃないよね。なんだか、アマゾンのジャングルにでも行きそうな格好していたじゃない。」
「うん。世の中には変わり者もいるさ。人の事を言えるか？」
「そうだけど。ちょっと、気になっただけだよ。」

そして、ちょっとした驚きもあった。ある日、パフォーマンスの写真を撮りまくっている日本人らしき見物人が居た。この人は、二人がかたずけ始めた頃話しかけてきた。日本の放送局の記者で、有名人の世界旅行を取材中だそうだ。ただ、この時は非番で、二人のパフォーマンスをたまたま見て強い印象を受けたという。簡単なインタビューをして、日本で紹介したいと言ってきた。特に断る理由もないし、実際に放送されるかどうかもわからないので、取り敢えず応じた。ひょっとしたら読者の中にも二人のパフォーマンスの話を見聞きした方があるかもしれない。

さて、二人のよくパフォーマンスをするところはリオデジャネイロの中でも裕福な人々が住んでいる地域と貧しい人々が住んでいる地域の接点に位置する。そのため、様々な人たちが見て行く。この中で、二人が特に気が付いたことは、よく見に来ている子供たちの音感の良さと手先の器用さである。一つには、リオはカーニバルで有名なことと無関係ではあるまい。また、ブラジル人がサッカーに強いのは有名だが、どうやら器用なのは足だけではないようである。そして、その子供たちは、着ているものから察して、

貧しい地域から来ているに違いなかった。

あまり見物人もいなかった日、何回もパフォーマンスを見ていた子供たちがどこからか持ってきた空き缶を叩いたり、小さな容器に砂を入れたマラカスのようなものを振ったり、洗濯板のようなものを擦ったりして伴奏を始めた。これが、異常にうまい。当然、麗名と慎吾のハーモニカ２本だけではリズム部門に限度があるので、子供たちの応援は大いに役に立った。これを見た通行人が少しずつ立ち止まって見物していった。パフォーマンスが終わった時、慎吾と麗名は子供たちを連れて近くにある屋台のようなところに連れて行った。そこで、その日の収入を使って食べ物を仕入れ、みんなで一緒に食べた。それからは、子供たちはバンドのメンバーのようにいつも来るようになった。

そして、その子供たちの一人がどこからかトランプを仕入れてきて、慎吾のやっている手品を見よう見まねで練習し始めた。それからは、暇な時間に慎吾が手品を教えて、子供たちも人に見せるほどになった。そんなわけで、いつの間にか、二人は１０人ほどの子供パフォーマンス集団をリードするようになっていた。それからしばらく経って、慎吾と麗名は、その子供たちの住んでいる地域のブロック・パーティーがあるから来て欲しいと誘われた。

子供たちの住んでいる地域はコパカバーナやイパネマの高級住宅地からすぐ目と鼻の先の所にある。そこにある家々は、慎吾と麗名には掘っ立て小屋としか思われなかった。おそらく、貧困にまつわる数々の問題があることだろう。ブラジルは南米諸国の中でも貧富の格差が激しいことで悪名高い。だが、そこの人々は陽気でパーティーを十二分に楽しんでいるようだった。子供たちは自分達の家族に慎吾と麗名を紹介して喜んでいるいるようだった。家族の人々も部外者の二人を自然に受け入れてくれているようである。一様に、子供たちがパフォーマンスを楽しんでいると言って喜んでくれている。

みんな十分食べてパーティーは終わるかと思った頃である。大人たちの表情が急に真剣になって真ん中の広場に集まり始めた。いつの間にか子供たちはどこかに行ってしまった。慎吾と麗名はどうしていいか分からずにそのままそこに居た。すると、突然、集会らしきものが始まった。なお、この頃までには二人とも言葉に慣れ、現地人の言っていることは大体わかるようになっていた。麗名は少しためらいがあったが、慎吾はもう集会のテーマに引き込まれている。

この集会は反政府デモの打ち合わせだった。ご存知のように、中南米というのは、政治情勢の複雑な土地である。中世の頃から、原住民の生活は主にスペインとポルトガルにことごとく破壊された。現代に入ってからは、アメリカとロシアの新植民地化外交政策の狭間で独裁政権が作り上げられたり、クーデターが起こったり、住民は引き続き多くの犠牲を払ってきている。慎吾と麗名もチリでクーデターに巻き込まれるところだった。ここブラジルでは、アメリカの汚職政権を模した極右翼の大統領が就任し、汚職、メディアの取り締まり、環境破壊としたい放題の事をしている。多くの住民はそれらの影響を直接的・間接的に受けている。何とかして今の政府を替えなければならないと考えている。

そして、このような運動はブラジル全土で起こっている。この集会には他の地区からの応援部隊も参加していた。その中の一人は日系三世のワグナー・原と言っていた。慎吾と麗名が日本人ということで、特に親しみを持って話しかけてきた。そして、ブラジル中の日系人がこの運動に参加していると言っていた。機会があったら自分の家にも来てくれと言って連絡先を教えてくれた。

集会の話を聞いていた慎吾はいつの間にか完全に同調していた。慎吾はアメリカに居た時からアメリカのひどい外交政策に批判的だったが、実際にデモなどの行動に参加したことはなかった。今回は、ここの住民の怒りを聞いて、少しでも力になりたいと思ったのだ。麗名には、そこまでの入れ込みはない。なんでも、危険な方向に向かうのだけは避けたいと感じていた。

集会の最後に反政府デモの計画が発表された。慎吾はもう行く気でいる。
「おまえ、ここの人たちはほんとに真剣だし、よく考えている。吾輩も応援しない訳にはいかない。」
「あんた、気持ちはわかるけど、あたしはちょっとためらいがあるよ。今まで、こういうことしたことないから、こんな海外でデモに参加して危険なことはないかな。」
「う～ん。世の中、リスクのないことはないからな。吾輩はキューバでは髄膜炎で死んだかもしれないし、二人ともチリでクーデターに巻き込まれていたかもしれないし、アンデス山脈のミイラになっていたかもしれない。それに比べれば、デモに参加するリスクは大したことないよ。」
「そうかなぁ。そうだといいんだけど。あたしは正直言って怖いけど、あんたが行くなら行くよ。あたしはいつもあんたと一緒に居たいから。」
「おまえはいつもそう言ってくれて嬉しいよ。おまえに悪いようにはさせないよ。」
「ありがとう。」

そのデモは数週間後だった。慎吾と麗名は決められた場所に行き、先の集会で会った人々と合流した。人々はいろいろなことを書いたプラカードを持っていたが、二人は何も持っていない。ただ、一緒に街の中心部を歩いて行く。周りには様子を見ている人と警備にあたっている警察官と軍隊もいる。デモの参加者は大声を上げて歩いているが、行動は整然としている。３０分ほども歩いたころ、デモの最終地点に到着した。ここには、現政権を支持する右翼団体が待ち構えており、折を見ては反対派デモを触発しようと躍起になっている。反対派は長いこと我慢していたが、その内の一人が政府支持派の右翼団体に接触しようとした。ここぞとばかりに、軍隊がそれを取り押さえた。これを切っ掛けに軍隊と反対派の小競り合いが始まった。いがみ合いから、つつく、叩くとエスカレートしていき、直に絡み合い、殴り合いの場面が見られるようになった。麗名はもう気が気でなかった。慎吾でさえ、恐怖を感じ始めていた。そして、次の瞬間には軍隊の一部が慎吾と麗名のいるあたりの一団を取り囲み、全員をビルの壁沿いに並べられて写真を取り始めた。写真を基に警察署で身元を調べると言っている。二人も反政府デモの参加者として記録に残ることになる。ひょっとしたら写真が明日の新聞の一面に載るかもしれない。いや、それどころではないかもしれない。

今度は、写真を撮られた一団が軍隊のトラックの方に押しやられて行った。この時まで、あの集会のリーダーが慎吾と麗名とずっと同行して見守っていた。ところが、軍隊のすきを見計らって二人を列から外して、急に逃げろと指示した。二人は逃げるのもまずいとは思ったが、もう深く考えている余裕もなく、逃げた。幸い、軍隊も忙しく追いかけては来なかった。二人は大急ぎで滞在中のホステルに戻った。

息を切らせながら、麗名が吐き出した。
「あんた、怖いよ。」
「吾輩もだ。悪いことをした。申し訳ない。だが、今、誤っても遅いし、これからの事を考えなくては。」
「どうするの？」
「ブラジルを出よう。ここに居ては危ない。他に誰も知らないし、フロントで日系三世のワグナー・原に電話をしてみる。」
暫くして慎吾が戻った。
「ワグナーもデモに参加していないので直接話は出来なかった。だが、彼の奥さんと話した。この奥さんもよく反政府行動に参加している人で、吾輩たちをかくまってくれると言っている。そして、反政府の日系人のネットワークを使って、パラグアイまで送ってくれると言うんだ。」
「あんた、パラグアイっていうことは、またもと来た道を戻るってこと？」

「違うよ。ここまで来るのに通って来たのは海沿いのウルグアイで、これから行こうとしているのは、内陸のパラグアイだ。確かに、両方ともブラジルとアルゼンチンの間のスペイン語圏だし、名前が似ているから混乱しやすい。」

二人は荷物をまとめてすぐにホステルを出て原宅へ向かった。そこには、すでに原家の友人が待ち構えており、慎吾と麗名を車に乗せてパラグアイへ向けて出発した。もうすでに、二人の行程は計画されていると言う。まず、この友人がサンパウロまでドライブし、そこで別の日系人に交代した。その後、クリティバ、グアラプアバで車と運転手を交代して、パラグアイとの国境に向かった。トイレ休憩を除き、二人は連続２０時間以上車の中で過ごした。ドライブしてくれた日系人は誰も日本語を話せなかった。みな、三世代か四世代前に農業移住してきた人たちの子孫だが、もう農業はしておらず、医者、弁護士、教授、社長等の職業についている。日系人は勤勉だと評判なのだ。それでも、汚職政権には耐えられず、反政府活動もしている。

国境に差し掛かると、そこまで運転してきてくれた日系人が二人に言った。
「ここが国境だ。橋を境にブラジル側とパラグアイ側両方にゲートがある。あなた達はそこを通過するだけでいい。出入国審査のオフィスもあるが、審査官は昼寝をしているか、起きていればトランプでもしているだろう。この国境を通る多くはブラジル人で物価の安いパラグアイに買い物に行くだけだ。誰も真剣に考えてはいない。ついでに、すぐそばに有名なイグアスの滝があるが、今は観光どころではないよね。では、幸運を祈る。」
「どうもありがとう。この恩は忘れない。落ち着いたらメールするよ。」
と言う訳で、ブラジルでは入国も出国もスタンプ無しで済んでしまった。

１０．アスンシオン（パラグアイ）

橋を越えてすぐのパラグアイ側の街、シウダッ・デル・エステに入ると、そこは、買い物天国だった。数ある店の他に、路上の至る所に出店が出ている。一見して、まがい物と思われるようなものも売っている。兎に角、落ち着くような街ではないし、イグアスの滝を見物する気分ではないので、真っ直ぐ首都アスンシオンまで行こうということになった。そこまではバスで５時間ほどだった。

パラグアイは南米でも最も田舎の国の一つだろう。内陸部のため、港もないし、人口も少ない。アスンシオンにはいくつか高層ビルもあるが、すべてがのんびりとしている。ブラジルからの脱出とは打って変わってゆっくり出来そうだ。二人はバスターミナルの近くでホステルを探し、しばらくは何もせずにそこで休養した。

それからは、市内の散策をして過ごした。ホステルの近くには公営の「メルカド・４」という市場があり、なんでも手に入るし食べられる。十分鋭気を養った頃、適当な場所を探してパフォーマンスを始めることにした。幸いなことに、やはりホステルのそばの小さなレストランの前でパフォーマンスをして良いということになった。このレストランの中にはスペースがないが、前の通りは歩行者のみだし、アスンシオンは温暖と言うか暑いくらいなので、いつもテーブルと椅子を出して外でも食事が出来る。その一部にパフォーマンスをする場所を設定した。すでに、二人のレパートリーも大きくなっていたので、すぐにいろいろなパフォーマンスが出来た。そして、地元の歌として、フェデリコ・リエラの、その名も「アスンシオン」という国民的な曲を加えた。比較的娯楽の少ないこの地では、二人のパフォーマンスはすぐに評判になり、毎日見物客は絶えなかった。また、見物客から聞いた話では、パラグアイはかつてブラジル、アルゼンチン、ウルグアイの三国同盟との戦争に敗れたことがあり、その時の莫大な損害は今でも感じられるという。二人は中南米を旅してきて様々な話を聞いてきたが、どうしてこうも争いが絶えないのか理解できなかった。

レストランのオーナーも売り上げが増え喜んでいたのだが、なんと、インフルエンザから肺炎をこじらせて急に死亡してしまった。この時は、人手が足りず、慎吾と麗名もレストランの手伝いもしていた。遅くまで働き、閉店後にはよくボリボリという鶏肉の入ったスープを飲んだ。亡くなったレストランのオーナーは独り者で、後継者もいなかったので、レストランは市の主催する競売に出されることになった。丁度その頃は街

の経済状況がよくなかったせいか、買い手がなく、仕舞には市の不動産処分物件のリストに載っていた。たまたま、それを見た慎吾は驚いた。それは、慎吾と麗名のささやかな資産でも十分買えるような額だったのである。
「おい、このレストランのオーナーになる気はないか？」
「あんたのアイデアは時々危険なことがあるけど、これは大丈夫？」
「ブラジルでの経験があるからあまり信用はないかもしれないけど、大丈夫だと思うよ。じゃ、踏み切る前に、何が必要か調べてみよう。」

と言う訳で、慎吾が下調べを始めた。まず気が付いたことは、慎吾のパスポートの期限が近付いているということだった。この地で、パスポートを更新するには在留届を出さなければならない。そこで、日本大使館に行って、これらの処理をした。小さな国だが、大使館では必要な事務はすべてできる。それから、パラグアイ入国のスタンプもないので、きちんとしたビザを取らないといけない。今度は、パラグアイの外務通産省に出向いてビザの件を調べた。どうやら、このレストランを購入すれば、投資家として永住権が取れるとのことであった。ここで一生生活するかどうかは分からなかったが、滞在期限がないというのは好都合だと思った。こうして、調べ始めてからひと月も経たないうちに、慎吾と麗名はパラグアイ永住のレストラン経営者となったのだ。そして、レストランの後ろにある一室を住居とした。

前のオーナーはレストランに特別な名前を付けていなかったので、この際、新しい名前を付けることにした。スペイン語で手品のマヒアとハーモニカのアルモニカを組み合わせて、「レスタウランテ・マヒアルモニカ」とした。メニューは今までの物に加え、一応日本食と世界各地の簡単な食事を出すことにした。この頃までには、アスンシオンでさえ、日本食レストランがいくつか出来ている。それらの日本食専門のレストランと競争するつもりはないので、日本食は焼き鳥など家庭的なメニューを少し提供するという程度にした。慎吾も麗名も飲食業の経験もなく、ろくに料理が出来るわけでもないので、今までのシェフにいろいろと工夫してもらわなければならなかった。さらに、麗名の希望を受けて、中古のピアノも購入し店内に置いた。

少し落ち着いたころ、麗名が今までパフォーマンスで使っていた曲を楽譜にしたいと言い出した。そこで、レストランの常連の音楽家に楽譜を作ってもらって、楽譜をシェアするウェブサイトにアップロードしてもらった。最初にアップロードしたのは、アルベニスの「グラナダ」のハーモニカ・デュエットであった。これは、今でもダウンロード可能かもしれないので、気が向いたらウェブサーチでもしてみてください。

「あんた、これはいつも起こることだけど、また親に連絡するの忘れてるよね。」
「うん。言い訳をするようだけど、忘れていたんじゃなんだ。ちょっと、最近の出来事が過激で余裕がなかっただけだ。よし、連絡しよう。簡単でも、ブラジルで起こったことも書かないとな。心配はするかもしれないが、正直に言うことは大事だよな。また、驚くだろうな。」
「そりゃそうだよ。でも、ここでレストラン経営と永住権取得ということになって、また遊びに来るかもしれないよ？」
「そうだな。いっそのこと誘ってみるか？」

両親にメールを送った後、他の人々にも近況を報告しようと言うことになった。ロンドンで世話になったピエール・モリンは連絡先が分からなかったので、マドリッドのペドロ・エスクデロに聞いた。慎吾と麗名がレストランの経営者になったと知って、この二人はびっくりしたようだが、祝福してくれた。モロッコのジャズミンにも連絡を取りたかったが、これは難しかった。そして、モロッコで大金をくれた中年の日本人カップルにもお礼をしたかったが、これは無理というものだった。

キューバの病院で世話になった日本人のボランティアにも連絡した。二人とも元気なことを大変喜んでくれた。メキシコのホセの家族にもメールを送った。残念ながら、ホセの植物状態は依然変わらないようである。人間はそんな状態で何年生き延びられるのだろう。それから、ペルーの孤児院の職員にも連絡した。そこのホセとミゲルにも現状を伝えてもらった。ホセとミゲルはいずれアスンシオンに来てみたいと言っているらしい。そして、ブラジルで世話になったワグナー・原とその奥さん、そして、他に逃走を手伝ってくれた人々にもメールを送った。皆、二人が無事なことを喜んでくれた。そして、連絡先が分からなかったのはブラジルの貧しい地区の反政府グループだ。慎吾と麗名を逃がしてくれておいて、彼ら自身は逮捕されてしまったに違いない。どうしたであろうか。二人は自分達だけ良い思いをしているのではないかと思い、悲しい思いをした。ワグナー・原に様子を調べてもらえるか聞いてみた。

二人のレストランは、パフォーマンスとちょっとした世界の食べ物を出すことで十分繁盛した。ある日、家族連れの客の子供が食事もそっちのけで必死に数学の問題を説いているところが見受けられた。どうしたのか聞くと、宿題が出来ずに困っているという。親も手が出ないらしい。じゃ、ということで、慎吾が手伝ってあげた。それから、このレストランは塾のような機能もすることになり、昼食と夕食の間の暇な時間に放課後の子供たちがテーブルで宿題をやっていくという風景も見受けられた。コンピュータも買って、レストランの片隅に設置して共用できるようにした。現代版の寺子屋といった

ところであろう。

そして、子供たちは宿題よりも慎吾と麗名のパフォーマンスに興味を持って、何人か弟子のようにハーモニカと手品を習い始めた。二人からタンゴを習う子供たちもいた。暫くすると、うまく出来るようになった子供が、レストランの前でいろいろとパフォーマンスをするということもあった。

こんな状況は慎吾と麗名がロンドンで会った時には想像だに出来なかったことだ。子供の出来ない二人にとって、今まで多くの子供たちと付き合ってきたのはかけがえのない経験だった。そして、たまに、今までの経緯を振り返ることもある。
「ロンドンの最初の晩覚えてるか？おまえ、『日本人ですよね。』とか言っちゃってさ。」
「あんたこそ、『そうです。』とか言っちゃってさ。」
「なんだか、年取ったかな。」
「当たり前だよ。でも、あんたと一緒に年を取れて幸せだよ。」

それから何年経ったでしょうか。慎吾と麗名がどうしているか気になって、二人のレストランを訪れてみました。看板には今でもレスタウランテ・マヒアルモニカと書いてあります。ただ、店のどこにも二人の姿は見当たりません。その時、どこからともなく現地人と思われる子供が二人現れ、かつて慎吾と麗名がパフォーマンスをしていたあたりで立ち止まりました。まず、女の子が小さなバッグの中からハーモニカを取り出すと静かに吹き始めました。どうやら、その曲は映画「黒いオルフェ」のラストシーンで使われた「オルフェのサンバ」のようです。ハーモニカの音は段々と大きく、速くなり、サンバ独特のリズムを打ち始めました。すると、男の子がハーモニカに合わせて踊りだしたのですが、急に中断すると、至る所からトランプをどんどんと取り出し始めました。そして、トランプが一式揃ったところでカードマジックを始めたのです。

それは丁度夕日が沈む頃合いでした。それなのに、なぜか、朝日が昇って行くような錯覚を覚えたのです。

作者注：この小説の時代設定は、概ね執筆当時を想定しています。

慎吾と麗名の旅奏曲（４）：完結編

２０２０年４月４日

蓮　文句

第一話　旅籠屋

時は江戸時代の末期、所は今で言う山陰地方。当然、町人の旅は徒歩、旅人の宿泊は旅籠屋と決まっていた。

当時十六才のおれいは出雲のある豪商の住み込みの女中見習いとして奉公していた。主な仕事はここの奥さんの身の回りの世話である。さて、この奥さんは嫁いでもう何年か経つが子宝に恵まれずにいた。そこで、夫君はこの奥さんを有馬温泉の湯泉神社に祈願と同時に湯治場での治療に送ることにした。おれいはそのお供を言いつかった。二人は、出雲を出て、松江、米子から山間部に入り、津山を通って、姫路、明石と経由して、有馬温泉に到着した。旅慣れない女二人の旅、途中山道もあり、片道二週間程を要した。

有馬温泉では、宿を取るとすぐに湯泉神社に祈願した。これは二週間の滞在中毎日欠かさず行った。湯治場での表向きの療法は温泉につかる以外特にすることはなく、二人は毎日長いこと湯につかっていた。尚、物の本によれば、当時、温泉は混浴が普通で、女性の入浴時の世話も男性の三助がしていたということである。そして、実際の「治療」はと言えば、毎晩二人の部屋には二人の男が現れた。子宝が必要なのは奥さんだけであったが、この奥さんは自分だけに男があるのは極まりが悪いと思って計らったことであった。おれいは奉公中忙しく働かされていただけなので、生まれて初めての旅で、生まれて初めての経験をして、戸惑いが隠せなかった。さて、予定の二週間が終わり、二人は帰路についた。実は、この旅には、夫君に言い使った商用もあった。姫路の取引先

で、小さいが比較的高価な品物を預かり、それを鳥取の取引先に届けるというものである。そこで、姫路からは、因幡街道の智頭往来ルートを通って、鳥取に抜け、その後は山陰道を出雲まで戻る予定だった。途中、智頭街道の志戸坂峠を越えた時は、二人ともたいそう疲れたため、やっとのことで鳥取側の最初の宿場に辿り着いた。そこには一軒だけ古びた兼業の旅籠屋があった。

やはり当時十六才の慎は、富山の薬売りの息子で、修行のため、現在の中国地方を担当する父のお供として、各地を回っていた。この父の薬物の中で一番の人気商品は子宝に効くという秘薬で、商いは順調であり、それなりの富を蓄えていた。この父は、大きな町に泊るときは決まって夜中に出かけて行って遅くまで帰ってこない。慎はいつも好奇心に満ち溢れていたが、父は慎には何も言わなかった。また、この父は子宝に関する相談を受け持つことも多く、時には子宝に恵まれない細君を個別に診察して差し上げるなどということもしていた。そのような時は、慎は幾ばくかの金をもらい、外でいついつまで過ごすようにと言われる。それで、慎は街に出てはうまそうな物を食らい、うまそうな酒を飲んだりすることもあった。

道中、この父子は山陰道から備前方面へ向かうに際し、鳥取で宿を取った。これから山々を超えて行くため、父はここでひと遊びしておかねばと思った。また、この日も個別診察を承り、慎を外にやった。仕方なく、街で一人で飲み食いをしていると、派手なかっこをした女が近寄ってきて一緒に飲み食いしてよいかと尋ねる。二人は、なんだかんだと差し障りのない話をしていたが、急にその女が、女を抱いたことがあるかと聞く。慎は正直に答えると、自分を抱かしてくれるという。そして、幾ら払うかというのだ。慎は父に貰った金のほとんどは飲み食いに使ってしまったので、懐には大した額は残っていなかった。それを見せると、その女は少しがっかりしていたようだが、ないよりはましかといいその金銭をすべて取り上げた。そして、ついて来いという。その時が、慎の初めての経験であった。翌日からは、商いをしながら、智頭街道を南下し、数日後には峠の一番手前の宿場まで行き着いた。そこには一軒だけ古びた兼業の旅籠屋があった。

その旅籠屋は部落の中心を流れる小さな川を渡ったすぐ反対側にあった。部落には他に店もなく、娯楽もなかった。慎の父は旅籠屋の食事を出すところで宿泊客に薬を売り込んでいる。そして、この同じ日に宿泊中の例の奥さんが湯泉神社に祈願してきたということを聞きつけ、個別診察を勧めている。夕飯の後、慎の父はこの奥さんを自分の部屋に呼び込んだ。奥さんは疲れていたが、断るのも億劫という感じでついて行った。そし

て、父は慎にいつものように外で時間を潰すように言った。ただ、この時は、慎に小遣いを与えなかった。おそらく父はこの部落には金を使うようなところがないことを知っていたからだろう。慎はもう食事も終わっていたし、この部落には時間を潰すようなところもないと悟っていた。その時、慎の脳裏に閃いたことがある。「そうだ、あの奥さんには若い女子がお供しとった。あの女子に声をかけてみよう。」慎はコッソリとその部屋を探した。この旅籠屋にはそんなに多くの部屋がなかったので、割と容易にその部屋を見つけることが出来た。慎はそっと声をかける。
「あの、奥様にお供の女子さんでしょうけ？」
何も返答がない。
「もう一度お尋ねする。奥様にお供の女子さんでしょうけ？」
暫くして、細々とした返事があった。
「何の御用だらーか。」
慎はとっさに嘘をついた。
「奥様のお使いで来た。」
また、沈黙が続いた。
「何のお使いだらーか？」
「薬を持ってきた。」
「何の薬だらーか？」
「奥様の薬や。部屋に持ってくるように言われた。」

すると、スーッと障子が開き、おれいが出てきた。慎は「間違いのうあの女子や」と、にんまりした。そして、どうしても外に連れ出したいという考えが浮かんだ。
「薬をごしなぃ。部屋に置えちょく。」
「これや。」
流石に薬売りの子供だけあって、慎はいつも懐に風邪薬の一つや二つは持っている。それを渡して言った。
「んで、奥様ちゃ時間がかかりそうや。外を散歩でもせんか？」
おれいはこれには返事をしない。少し、怪しんでいるようでもある。
「失礼した。わしちゃ薬売りの息子や。わしの名ちゃ慎や。ここに泊っとる。ほんの宿の前のところでいいんや。富山の菓子もあるちゃ。」
菓子と聞いて、おれいは興味を示したと見える。部屋の外に出てきた。
「ちょっこしそこまでだけや。」
慎が先に廊下を進んで、旅籠屋の玄関を出る。おれいも宿の草履を突っかけてついてきた。

「綺麗な月が見えるちゃ。ほれ、見てごらん。」
おれいは何も言わずに月を見あげた。おれいは自分の生家から奉公に出て二年ほどになる。寂しくなると、月を見上げて過ごしてきた。まだ生家が懐かしいのだ。おれいはボソッと呟く。
「月を見ーとお父やお母を思い出す。」
「そうやけ。離れて長いがけ？」
「はえ。２年程になー。」
「そうやけ。自分の家が一番やちゃ。菓子を食べっしゃい。なんて名前やけ？」
「おれい、とえう。」

おれいは慎の差し出した菓子を食べ始めた。気に入ったようで、むしゃむしゃとすべて食べた。
「好きか？良かったちゃ。少しその辺を歩いてみますけ？」
慎はそう言うと少しずつ歩き始めた。おれいは少し後をゆっくりと付いてきた。旅籠屋の前の橋を渡り、部落の通りに出た。やはり店はない。提灯が一つ二つとあるきりだ。慎は少し歩き方をゆっくりにしておれいと並ぶ。二人は、各々のことを少しずつ話した。おれいはあまり気にせずに、奥さんの子宝の祈願のため有馬温泉に行ったということを漏らしてしまった。そして、そこでの夜のことを思い起こし、顔を赤くした。だが、夜道故、慎には見えなかった。それでも、慎は慎で子宝の祈願のことが気になっていた。慎の父は当時で言えばその道の専門家である。
「わしのお父ちゃ子宝に効く薬を売っとるがや。奥様ちゃそれでお父と話しとるんがや。奥様ちゃ湯治場で何をしとったがやけ？」
「湯に入ったり、男を呼んだりしちょった。」
「おれいさん、それ、見たんか？」
それに対しては、おれいは何も答えなかった。

丁度その頃、二人は数えるほどの軒並みしかない部落の中心部を過ぎた。そこには小さな神社があったので、そこに入り、木の切り株に腰を降ろした。おれいは有馬温泉の夜のことが頭に浮かび、少なからず体が熱くなっていた。慎もまた、数日前の初体験が蘇り、興奮を抑えられずにいた。いつの間にか、二人は何も言わずに近くの草むらに寝転んで抱き合っていた。

現代人の皆様はこのような経緯をいきずりでふしだらな行為と言って批判するかもしれない。しかし、これは車も、テレビも、携帯どころか有線の電話さえない時代の話である。十六才で学校にも行かずに大人の世界に入りつつある慎とおれいには、どれだけ同

い年の異性と遭遇する機会があろうか？自分の好みの相手を探し求めるような時間と自由があろうか？慎とおれいの出会いは、慎の強い動機とちょっとした機転が切っ掛けで実現した稀な出来事であった。若い二人には非常に限られたロマンスのひと時だったのである。という訳で、この話は、たとえ同じ国のことと言えども、時代の隔たりを考えれば、異国の文化と同様に捉えた方が良いかもしれない。

さて、まだ二人の気持ちが高揚している時に、突然、バチバチと言うような大きな音が聞こえ始めた。これには、事の最中とは言え、流石に驚かざるを得なかった。同時に、あの古びた旅籠屋の方角に火の粉が舞い上がっているのが見えた。二人は慌てて着物を着ると旅籠屋の方に駆け戻った。だが、旅籠屋に通じる橋の手前で立ち止まざるを得なかった。旅籠屋は完全に火の海と化していたのだ。部落の人々が非力な消防活動をしている。二人は唖然としてそこに留まっていた。他に何もできず、しっかりと寄り添っていた。火が完全に消えたのはもう夜明けに近いころだった。二人は疲れ果てていた。それでも、慎もおれいも各々の連れの状況が心配で部落の人に聞いてみた。話によると、最近界隈を荒らしまわっている賊が宿泊客の金銭を盗んだ上に火を放ったと言うのだ。そして、宿泊客は誰も生き残らなかったと言われた。

二人は唖然とした。慎は父を、おれいは奥さんを失ってしまったのだ。おれいはしくしくと泣きだした。慎も一人だったら、泣いていただろう。だが、今そうしている訳にはいかなかった。この山奥の何もない部落で、昨夜偶然に知り合ったばかりの二人だけが唯一の知り合いとなってしまったのだ。そして、当然のこと、二人は何も持っていなかった。ここは、二人の故郷の富山にも出雲にも遠い、人里離れたところだ。どうしていいのかわからなかった。二人とも、いっそ連れと一緒に死んでしまっていたら事が簡単だったと思った。と同時に、たまたま旅籠屋を抜け出したために、命が救われたという僅かな慰めの感もあった。二人は長い間何も話さずにいたが、慎が口を開いた。
「おれいさん、わし達、運が良かったか悪かったかわからんが、二人だけ生き残った。どうしたらいいか一緒に考えてくれっけ？」
「慎さん、わかった。そうすーより、仕方がなえ。」
と言う訳で、どうするか話し合った。そして、昨夜出会ったばかりの二人はこれからの行動を共にしようと誓った。その後は、今までの疲労のため二人ともその橋の袂で倒れるように横になってしまった。

日もだいぶ高くなったころ、目が覚めてから、二人は人の好さそうな老人を捕まえて、

まず自分たちの身の上のことを打ち明け、部落の周辺のことを聞いた。一番知りたかったのは、二人が転がり込めるようなところがあるかどうかということだった。この老人の話では、４里程だったか歩いたところに山寺がある、そこへ行ってみるのが良いかもしれないということだった。慎はその老人にまだ少しだけ残っていた風邪薬を見せて、何か食べ物と交換してくれないかと頼んだ。老人は気の毒に思い、薬と引き換えに自分の家からおこわのおにぎりを二つ持ってきてくれた。その老人の昼飯用にとってあったものだと言う。二人は老人に礼を言い、山寺に向けて出発した。

まず、智頭街道を二里弱北へ歩いた。そこに田舎道の分岐点がある。慎はこの辺を前日に通っているが、その時はこんな田舎道には気付きもしなかった。次に、この田舎道を北へ一里半ほど歩くとまた分岐点がある、そばには農家が一軒見える。だが、周りに人影はない。余りの空腹で、この辺で、交換したおにぎりを食べ、川の水を飲んだ。この分岐点を右へ曲がりさらに半里進む。そして、そこに見える山道をさらに半里ほど行ったところに山寺があるはずだ。ところが、その後少し歩いたあたりで、おれいの草履が壊れてしまった。それは、昨晩突っかけてきた宿屋の安草履だった。まずいことに、この山道は石ころだらけでとても素足では歩ききれない。それで、慎はおれいをおぶって歩いた。おれいは特に重たかったわけではないが山道をおんぶで進むのは並大抵ではない。それに、その山寺と言うのが実存するのか、どういう状態なのか全く不明なため大きな不安が伴う。それにしても、今や、二人の死活問題なので兎に角そこに行きつくことだけが頭にあった。

そして、その山寺に着いた時の二人の落胆はたとえようのないものであった。その山寺というのは、どこから見ても廃墟であったからだ。恐らく、あの老人は古い情報しか持っていなかったのだろう。自分の昼飯を割いてまでおにぎりをくれた人だ。わざと人をだまかすようなことはしないだろう。愕然となった二人は肩を落としてしゃがみこんだ。
「おれいさん、えらい残念や。どうすっけ？」
「がいに、残念で仕方がなえ。今晩は、ここに泊らなならん。」
「なーんだ。」

二人はその廃墟の中を見てみた。風は筒抜けだが、取り敢えず雨は防げそうだ。慎が外から草をむしり取ってきて床に敷いて寝床にした。まだ秋口だが、山奥の、風が通る廃墟での一夜は冷える。二人は何も言わずに抱き合った。空腹はしんどかったが、それ以上に寒さに耐える必要があった。二人の行為はほとんど必然的なものだった。

翌朝、慎が近くの川辺まで行って水を汲んできた。そして、廃墟の周りでしそを見つけ取ってきた。慎は薬売りの修行中なので、草花の類にはそれなりの知識がある。ただ、今の時期にここで食用になりそうなのはそれくらいであった。ここに居てもしょうがないので、二人はまずあの農家のある所まで戻ることにした。幸い、使い古した草鞋が一組見つかったので、おれいはそれを履いて行くことができた。

来た道を戻って農家のあった田舎道の分岐点までやって来た。二人は空腹と疲労が重なっているため、これ以上むやみに動くのは得策ではないと思った。それで、農家の戸を叩いてみた。誰もいない。近くに畑が見えたので、農作業でもしていると思い、暫くそこで待っていた。すると、昼食時になって、住人と思える人が帰ってきた。慎は二人の状況を話して、どこか転がり込めるところはないかと尋ねた。その住人の話によると、今廃墟になっている山寺は、縁起の悪いことがあり、数年前にもう少し奥に移ったというのだ。それは、田舎道の分岐点を別の方向に半里強進み、そこから山道を少し歩いた所にあると言う。そして、この人は二人を哀れがり、自分の昼飯を少し分けてくれた。それは、そばで作った団子にお新香だった。それでも二人にはご馳走で、何度も礼を言ってそこを去った。今回は確かな情報があるので、二人の足取りはずっと軽かった。一時間程でその山寺に辿り着き、戸を叩いた。

慎が言った。
「まいどはや。」
返事はない。今度は、おれいが言った。
「ごめんごしなぃ。」
すると、中からかなり年配の住職らしき人が出てきた。
「へー。いらっしゃい。どうしたかの？」
慎とおれいは交代に事情を説明した。取り敢えず今晩泊めてもらえないか、できれば暫く置いてもらえないかと聞いた。二人は何でも必要なことをすると言った。
「そうか、そうか。わしはこの寺の、住職じゃが。ここぁ、来るもなぁ拒まずの寺じゃけぇ、ゆっくりしんせー。まぁ、めったに人は来んがな。」

こうして、慎とおれいは救われた。二人はこの山寺のすべての雑務をすることになり、そこに住まわせて貰うことになった。ひょんなことから結ばれた仲だったが、事実上二人だけが知り合いであり、家族となった。住職はとても理解があり、二人のことを少し遠くから優しく見守ってくれる様子だった。

この山寺での生活は楽ではない。自給自足を基本とするため、庭にある小さな菜園を最

大限に使って、住職も含め皆で農作物を育てる。調理をし、暖を取り、湯を沸かすために常時、薪を用意しておかなくてはならない。壊れたものは自分達で修理する。それでも、ゆっくり出来る時間がない訳ではない。

時には、他の人々との交流もある。まず、先に世話になった近隣の農家の農作業を手伝って、農作物を分けてもらうことがある。この農家の奥さんが熱を出した時は、慎が薬草を処方したりした。それから、月に一回、十四の日に行商が街道を通る。そこで、その日は慎とおれいは朝から行商の来る場所まで二時間近く歩いて行き、現れるまで待っているのだ。雪が降っていれば行商は来ないが、雨の時は一本だけある傘をさして歩いていく。その姿を見た行商の親爺は「相合傘」だねと言ってからかう。

慎は自分の名前を含めて少しは字の読み書きができたが、おれいは全く出来ない。山寺に戻った二人は住職からどうやっておれいの名前を書くか教えてもらい、紙に書いてもらった。住職は「れい」という字はいくつかあるが、おれいさんにはこれが似合うと言って「麗」という字を書いた。住職はその時、二人が何をしようとしているのか知らなかった。それでも、この二人が真剣に何かをしようとしていることを察し、微笑ましく思った。

その紙を持って、慎とお麗は、庭の裏の方にある小さな門のところに行った。そして、そこの横にある板に「慎」と「麗」と横に二文字彫った。ところで、住職はもし二人が字を彫ると知っていたら、おれいの名前としてもっと簡単な字を教えたかもしれない。次に、その二文字の上には大きな横長の三角形を、文字の間には縦線を引いた。これは、二人が行商から聞いた相合傘のつもりであった。

二人とも家族や知り合いから離れてしまって寂しいのは事実だった。半日歩けば、一番近くの町まで行ける。数日歩けば、鳥取あたりまで行くこともできよう。二人は何度もこの山寺から出て、新しい人生を始めようかとも考えた。それでも、いつも到達する結論は、二人一緒であれば、どこでも良い。ささやかに生きていくことが出来ればそれで良い。一言で言えば、それなりに満たされていたのである。

山寺に来て、九か月か十か月経った頃、お麗は子供を産んだ。その子は、慎には全く似ていなかった。そのため、お麗はその子が有馬温泉の湯治場で授かった子だと察していた。だが、慎はそんなことは一向に気にせず、その子のことを可愛がった。

年によっては、夏祭りを見に、一番近くの町まで半日歩いて行って一泊することもあっ

た。お麗は祭りで聞いた笛の音に興味を持ち、慎に笛を作ってくれと頼んだ。慎は近くの竹やぶから取ってきた竹で笛を作った。二人とも全く無知であったので、その笛が音階はもとより、まともな音を発したかどうかは不明である。

何年か経って、住職が老衰で亡くなった。生前からの指示通り、二人は子供を連れて街まで行って、寺の大本山に知らせを送り、事の次第を伝えた。ずいぶん経ってから、次の住職がやって来た。新しい住職は山寺でのお勤めは初めてで、慎とお麗が何かと世話をやかなければならなかった。

その後、二人は三年から四年おきに全部で六人の子供を産んだ。これは、当時の、母乳だけで育てた場合の標準的な子供の生まれる間隔である。そして、この山寺にはそんなに人手が要らないので、子供たちは一人前になると次々とそこを出て行った。子供たちとその子孫が最終的に散らばっていった地域は、北は北海道から南は九州までに及んだ。

また、年老いてからだが、二人の故郷の富山と出雲に出かけたこともある。故郷もすっかり変わってしまっていたし、結局は山寺に戻ってきた。晩年は時に子供や孫が手助けにやって来ることもあった。そして慎が歩けなくなった年の初雪の日、慎は老衰で亡くなった。お麗はその日まで元気と思われていたのだが、その夜慎の亡骸と添い寝をしている間に静かに亡くなっていた。翌朝、初冬のやわらかな朝日が昇って来た時は、その光が真っ白になった山寺の庭に優しく映っていた。思えば、この二人は旅籠屋で出会ってから一日も離れたことはなかった。そして、二人の亡骸は、今でも山寺の敷地内で一緒に眠っている。

第二話　東回り

さて、これは普通の教師二人の話ではあるが、多少普通ではないところもあるかもしれない。

坂沼麗名は小学校の教師だった。まじめな性格で十年以上仕事に熱を入れていたせいか、婚期を逃したのではないかと思っていた。時には若いカップルが仲良く歩いているのを見て羨ましいと思ったこともある。そんな時だったろうか、なぜか、全く気にも留めていなかった新宿西口の占い師の前に座ってみた。「新宿の婆婆」と書いてある。特にパッとしたことを言われた訳ではなかったが、最後に一言、「あんたは子宝に恵まれるね」と言われた。麗名は苦笑してしまった。「その前に必要なことがあるでしょ！」と言うのが実感だった。

宮島慎吾は高校の数学教師だった。やはりまじめな性格で十年以上仕事に没頭していたせいか、結婚適齢期はとうに超えていた。彼にも若いカップルは目の毒で、あまり見ないようにしていた。やはりそんな頃だろう、自分でも驚いたことにいつの間にか、新宿西口の占い師「新宿の婆婆」の前に座っていた。特に印象に残るようなことを言われはしなかったのだが、最後に一言、「あんたは水着姿に弱いね」と言われた。慎吾は呆れた。「当たり前だろ、男なんだから！」と思った。

それから数日たった頃、どういう訳か、麗名と慎吾の二人にあまり親しくもない共通の知り合いから急に見合いの話が入った。今の時代は結婚しない人々も増えている中、その当時は皆結婚するのが当たり前だったので、こう言ったしきたりもあった訳だ。二人とも期待をしていたわけではなかったが、生涯独身でいるのも肩身が狭いだろうしとか、多少の好奇心も芽生え、会ってみることにした。

意外なことに見合いは無事に終わり、その後慎吾と麗名は、大して付き合いもせずに結婚に至った。二人とも、これが最後の機会と思っていたこともある。当初、ヨーロッパへ新婚旅行に行くことを計画していたが、現地でのテロ事件のためキャンセルとなり、結局、未だに新婚旅行には行っていない。二人とも質素な生活に慣れていたため、結婚後も同様に質素に暮らしていた。

職業上、二人とも教育については熱心で、よくその方面の話をした。学校で教師をすると言うことは、その社会の中で期待された任務を果たすことだ。しかし、二人とも、そ

れなりに、疑問も持っていたし、改善したいと思うことも少なからずあった。二人は、そんな話の中にお互いの真剣さを感じ、結婚して間もなくに打ち解けた仲になった。また、二人はろくに異性と交際したこともなかったので、休日にデートが出来るというのもまんざらではなかった。単に他の人より少し遅い春であっただけなのかもしれない。

結婚して数年経ったある日、慎吾の所へ裁判所から何やら手紙が届いた。慎吾の叔父が亡くなり、相続が発生したというのだ。この叔父は結婚後数年の間に妻を亡くし、その後再婚せず、子供もいない。この叔父の両親、つまり、慎吾の祖父母はすでに他界している。また、叔父の兄弟と言うのは慎吾の母のみであるが、慎吾の両親もすでに他界しているし、慎吾は一人っ子だ。叔父には遺言というものもない。そして、この手紙にはこの叔父が密かに莫大な財産を所持していたということが書いてある。従って、その莫大な財産が慎吾に相続されるというのだ。また、この叔父はアパート暮らしであったので、不動産の相続はない。それでも、アパートにある所持品は、慎吾がどうするか決めなければならないとも書いてあった。慎吾はこの叔父とかなり昔に会ったことはあるが、その後全く連絡をしていなかった。

慎吾は麗名にこの話をした。まず、高知にある、この叔父のアパートを片付けなくてはならない。慎吾は次の休日に飛行機でそこに出向き、所持品を調べた。後で必要になるかもしれないと思い、文書、書き物の類は大きな袋に入れて持ち帰った。その他の家具、雑貨は業者を頼んで処分してもらった。そして、遺産については、一週間ほどいろいろと考えた結果、今までの二人からは想像できないアイデアが出てきた。仕事を辞めて、制限時間なしで世界一周の旅に出ようというのだ。これは、お預けになっていた新婚旅行を実現するという意味もある。ただ、もう一つは、世界を回って、世の中の教育状況がどのようになっているか実際に見てみたいという希望もあった。旅行の資金は十二分にあるし、行きたいところに行けるが、贅沢や無駄遣いはしない旅にしようということになった。そして、その後のことは後で決めようということにした。二人はその学年末で退職する由をそれぞれの学校に届出た。当然、期日まではきちんと仕事をした。そして、学年末が近づいてきた頃、旅行の準備を始めた。

まず、世界中どこでも預金を引き出せるようにアメリカの大きな銀行の支店で新しい口座を開き、キャッシュカードとクレジットカードを入手した。念のため、当時まだ使われていたトラベラーズチェックというものも入手した。持ち物で大事なものは、麗名の実家で預かってもらった。郵便物もそこに転送してもらうことにした。そして、処分できるものはすべて処分しようとした。

ところが、この「処分」ということは麗名にとって思いがけぬ難関だった。一つ一つ物品を見るたびに思い出がよぎり、ああでもない、こうでもないと話し始めるのだ。慎吾にはそういった傾向は全くない。
「きみはよく脱線するね。それが悪いと言っているわけではないんだよ。アリさんたちだって、いつもいつも脱線しながら新しい食べ物の在りかを探している。それに、急がば回れという言葉もあるよね。だけど、旅に出るためには、今あるものを処分しないとね。」
「あなたは良くそうやって簡単に物を処分できるわね。悪いと言っているわけではないのよ。確かに、効率がいいものね。」
このため、出発は予定よりかなり遅れてしまった。

世界一周と言っても、まず大体の計画を立てなければならない。最初の選択は東回りか西回りかということであった。そこで、二人でじゃんけんをして、その結果、東回りということになった。丁度良いので、ハワイでの休暇から始めることにした。それなりに良いホテルに泊まって、一週間ほどゆっくりする予定だった。

ホテルにチェックインした後、早速水着に着替えてホテルのプールへ行った。ところが、どうも慎吾が落ち着かない様子だ。プールサイドでタオル着を脱ぎ、プールに入ろうとした瞬間、慎吾が口を開いた。
「ねぇ、部屋に戻ってもいい？」
「どうしたの？」
「部屋で、話すよ。」
その時、慎吾は「あの占い師に見抜かれていたな」と独り言を言った。

麗名は少し訝しげだったが、部屋に入ってすぐに聞いた慎吾の言葉に少なからず驚いた。
「ちょっと外では言えなかったんだけど、きみの水着姿すごくセクシーだね。スタイルもいいし。」
「えっ？何よ、急に。」
「初めて見て、興奮しちゃったんだよ。それに、その水着随分ちっちゃいよね。」
「おかしなこと言う人ね。もう結婚して何年も経っているじゃない。」
「でもさ、ぼく達、プールも海も行ったことないから、きみの水着姿見るの初めてだよ。それに、お見合い写真に水着姿入ってなかったよね。」
「当たり前じゃない。ミス何とかの応募じゃあるまいし。」

「今思えば、布団の中ではきみのスタイルの良さが十分に分からなかったみたいだ。」
「ほんとに変なこと言う人ね。まあいいや。褒められて嬉しくない訳じゃないし。じゃ、プールは後にしようか。」
そう言うと麗名はタオル着を脱ぎ、その小さな水着を取り始めた。

さて、プールに戻ろうかと言う頃には、すでにダイアモンドヘッドの方角に夕陽が沈み始めていた。
「あ〜、きみともっと早く知り合っていたら、ぼくは欲求不満にならなくてすんだのにな〜。」
「そんなに欲求不満だったの？」
「そりゃそうだよ。中年になるまで女性経験なしで、それでも、やっぱり動物だから、欲求は収まらない。当然、ぼくのような内気で善良な男はなかなか女性に手が出せないし。自分で処理するしかなかったんだよ。」
「気の毒だったわね。わたしも結婚して良かったと思ってるわ。わたしは、あなたのように性的な欲求不満はなかったけど、やっぱり、信頼できる人に抱かれてみたかった。多分、あなたの求めるような感覚じゃないと思うけど、ゆっくりと、じわ〜っと暖かい思いをしてみたかった。だから、わたしだって、夜あなたと一緒なのは嬉しいわ。それに、実は、ちょっと恥ずかしくて言えなかったんだけど、わたし、夜一人で寝るのが怖かったの。だから、夜あなたが横に居てくれるのはすっごく心強い。でもね、ほんとはね、毎朝どんな景色でも、どんな天気でも、窓から外を見ながらあなたとゆっくりコーヒーを飲みながら話をする時がもっと快感かもしれない。」
「朝のコーヒーはいいよ。でも、ぼくは、やっぱり布団の中かな。」
二人とも、見合い結婚でもまんざらではないようである。いずれにしても、新婚旅行を満喫しているようであった。

常夏のハワイを後にした二人は、風光明媚なカナダのバンクーバーに到着した。あたりを暫く見物してから、次はレンタカーで米国西海岸をサンディエゴまでドライブすることになっている。今だに新婚旅行の続きの気分で、絶景の続く海岸線を南下し始めた。

数日後にワシントン州の州都、オリンピアに着いた時のことである。レストランでの夕食の後に寄ったコンビニの掲示板に目が留まった。そこには、「フリースクール・オリンピア」と書かれた張り紙があった。ただ、この「スクール」の綴りが、普通の「school」ではなく、「skool」となっている。最初は間違いかと思ったのだが、アメ

リカ人が間違える訳はあるまいと思い、よく見てみた。

「きみはフリースクールって聞いたことある？」
「ん～。ただの学校のこと？公立校のこと？」
「うん。確かにお金のやり取りはないみたいだけど、それだけじゃないようだ。これ、見てご覧よ。」
その張り紙には地域の人々が無償でいろいろなクラスを取れると書いてある。これから始まるものには、自転車の修理、瞑想、そして子供のサマースクールというものが載っていた。そして、ユニークなクラスを無償で教えたい人を募集している。
「これ、見た感じでは日本の公民館の講座みたいね。」
「そうだね。ぼく達は今まで、学校教育に気を取られていたけど、生涯教育というのも意味のあるものだよね。」
「そうね。日本では、公民館の講座というと退職後の老人が中心のように思っていたけど、アメリカではどうなのかしら？」
「ぼく達の旅は気ままだから、この連絡先に電話してみようか。」
電話に出たのは、主催者の一人、フィル・キャンベルという人だった。慎吾はクラスを取りたいわけでも教えたいわけでもないが、興味があるので話を聞きたいと言った。二人とも日本の教師で世界中の教育状況に興味があることも伝えた。フィルはそれだったら、喜んで話をしたいと言った。翌日の夕方に地域の図書館で自転車修理のクラスがあるので、その前に会うことにした。

翌日、図書館のロビーでフィルに会い、ロビーの椅子に座って話を聞いた。フィルはすぐにフリースクールを始めた経緯を語り始めた。それは、生涯教育さえも商業化されていることに対する反発からだったという。世の中には何かを習いたい人もいれば、何かを教えたい人もいるはずだ。金銭の授受無しでそういった人々が集まる場があってもいいと考えたそうだ。米国でも各地の公立図書館で無料の講座が開かれている。ただ、それらは図書館の職員が管理していて、多くの制約がある。そんな制約をなくして、人々が互いに自由に教えあえる機会を作りたいと思ったそうである。このフリースクールは公立図書館の会議室、公園、賛助してくれる地域のコーヒーショップの一角、そして自宅をも使って様々なクラスを開催している。それほど活発と言う訳ではないが、いつも何かしらのクラスがあるらしい。

フィルの言うことには、こういったフリースクールが十年ほど前からアメリカ全国各地に出来てきたらしい。ところが、最近は一つ二つとなくなっているようだともいう。
フィル自身、一つの大きな疑問を感じているというのだ。それは、アメリカの教育事情

の根本的な欠陥に絡んでいるという。営利を目的としようが、フリースクールだろうが、参加者のほとんどは、クラスに出て「教えて貰えば」何かが出来るようになると思っていると言うのだ。フィルはそんな風潮に反対で、いつも思うことは、自分で学ばなければ何も身に着かないということだという。そして、アメリカ人が教えてもらわなければ出来ない人々になっているのは子育てとか学校教育がそういった姿勢を叩きこんでいるというのだ。

まず、彼が言うには、現在のアメリカの学校は工場か、あるいは監獄ようなものだという。各州の教育省と各学区の教育委員会が教育内容を細かく取り決め、それを教師に押し付ける。そして、教師は賞罰を利用してこれを生徒に押し付ける。それでは、生徒の自主性や想像力が養われないのは当然だと言う。こんな状態が、何十年と続いているから、選挙でろくな候補者を選ぶことさえできない。フィルは、いくらフリースクールを運営しても、人々の教えてもらわなければ学べない姿勢を変えることは出来ないと思い始め、今は興味を失いつつあるのだと言う。

これには慎吾と麗名は驚きだった。さて、日本はどうだろうか？自分たちはどんな教師だったのだろうか？慎吾と麗名は昨今の日本の教育事情について簡単に説明した。そして、自分達のことについても少し話した。二人の一致した気持ちは、日本の教育も押し付けでないとは言えないということだった。慎吾が尋ねた。
「じゃ、押し付けでない教育とはどういうものか？そんな教育はあるのか？」
「押し付けでないのは、子供の自発心あるいは内発心を尊重するような教育だ。そして、そういった教育現場はあることはある。そういう環境では、教師は自分達の用意した課題を押し売りしたりしない。どちらかといえば、子供たちの中にある良い所を『買う』ような姿勢だ。あなた達はこれから東海岸に行くということだけど、ニューヨークに行ったら、ジョージ・デニソンと言う人が創設したファースト・ストリート・スクールという所に行ってみると良い。これもフリースクールの一種だけど、私たちのやってる生涯教育ではなくて、学校教育に値するものだ。」

その後、自転車修理のクラスを見学させてもらった。クラスというより、友達が集まってわいわいがやがや楽しんでいるといった感じであった。その後、オレゴン州のポートランドを通った時にも、似たようなフリースクールを見かけた。

それから、米国西海岸の景色を楽しみながら、サンフランシスコ、ロサンゼルス、サンディエゴと南下していった。途中いくつも観光スポットがあり、かなりの時間を要した。また、丁度その頃は米国大統領選挙の運動の最中で時折候補者に対する意見を大っぴら

に議論している人たちを見かけた。米国大統領選挙は事実上、共賄党候補と民終党候補の一騎打ちだ。民終党の候補は人は良さそうだが、うだつの上がらない政治家だ。それに対し、共賄党の候補は大富豪のせがれ、口から出まかせばかりの、自分中心の人間だ。どうしてこんな人物達が候補者になったのかと思われる。それにしても、一般に先進的で革新的なカリフォルニアでさえ、貧しく年老いた白人男性にはこのロクでもない共賄党の候補に断然の人気がある。ある解説では、このような人々は自分達が一生懸命働いてきたのに、新たにやって来る移民や若くて革新的な人々に自分たちの仕事や生活が脅かされていると思っているのだそうだ。共賄党の候補はそんな支持者の回顧的な希望を借り立たせてくれるらしい。しかし、どちらの候補者が大統領になっても、新型コロナウイルス等、世界的な危機の時はもちろん、平常時でさえまともな政策は打ち出せないだろう。

さて、サンディエゴに滞在中は、せっかくだからと国境を超えたメキシコの隣町、ティファナまで足を延ばした。人々は、ここはあまり治安の良いところではないと言う。アメリカへの麻薬密輸に大きく絡んでいるらしい。ところで、アメリカの麻薬対策は今や世界的な問題になっている。それは、麻薬利用に追いやられた社会の底辺の人々を罪人として厳しく処罰し、その真の原因である貧富の格差に全く言及しないという方針だからだ。いわゆる弱いものいじめで、その政策を海外援助に結び付けて世界中に押し付けてきたのだ。二人がティファナのメキシコ料理店で美味しい物を食べている限り、そういう状況は感じられない。ただ、米国に入る時の米国入国審査官たちのメキシコ人に対する横柄な対応が記憶に残った。

その後はロサンゼルスまで戻り、そこからアムトラックの大陸横断鉄道で東海岸まで行くことにした。広大なアメリカを鉄道で旅するのは時間と費用がかかり、なかなか普通の人が経験出来ることではない。二人は幸運だった。雄大なロッキー山脈、殺伐とした砂漠地帯などを比較的ゆっくりと進む列車の旅では十分時間がある。時には車内図書館で、通過する地区に関する図書やビデオを見ることもあった。アリゾナ州の砂漠を通過中は、その地域にあるナバホとホピのインディアン居住区についてビデオを見た。米国はイギリスからの独立を勝ち取った後、暇になった陸軍を使って未だ米国西部で生活していたアメリカ原住民の討伐に力を入れた。虐殺され、土地を奪われた後、生き残った数少ない原住民は利用価値のない土地に設定されたインディアン居住区に追いやられた。この頃からの悲劇は現在も原住民を脅かしている。インディアン居住区で、アルコールや麻薬中毒、精神障害、暴力、自殺が多いのは皆、この過去に起因していると言われている。そんな状況ではとてもまともな教育が行える訳がない。皮肉にも、この大陸横断鉄道もそう言った背景の基に作られている。

また、東海岸に近づき、ペンシルベニア州を通過中はその地域に住むアーミッシュの事を学んだ。アーミッシュは宗教上の迫害を逃れてドイツから来た人々だが、周りの「俗世界」に毒されないように自動車や電気製品の所有しない。原則として農業中心の自給自足生活だ。学校教育は小中学校程度までで、すべて自分たちで実行しており、米国の他の学校とは全く異なる。また、子供たちは小さい頃からよく家族や農業の仕事を手伝う。そして、思春期の終わり頃に、一年間普通のアメリカ人のような生活をしてみて、アーミッシュとして生涯家族と過ごすか、アーミッシュから脱して俗世界で暮らすか決めるのだと言う。結果的には、約９０パーセントの子供はアーミッシュとしての道を選ぶと言う。これは、慎吾と麗名にとっては驚きだった。子供たちが望んで、時代遅れと思われるような生活を続ける。それは、その年になるまでに家族と一緒に過ごした時間に満足しているからに違いないと思った。

最終地点、ニューヨークの地下にある鉄道ターミナルで列車を降り、地上に出ると、そこは摩天楼の真っ只中であった。アーミッシュの生活とは程遠い。近くのホテルにチェックインした後、二人はすぐにマンハッタン島南東部のファースト・ストリート・スクールに行ってみた。聞いていた住所はアパートの合間にある。ところが、そこは空き家状態であった。もう学校は続いていないようだ。ひどくがっかりしてもと来た道を戻り始めた。二人とも空腹だったので途中にあったピザ店に入った。念のためと思って、店員にファースト・ストリート・スクールの事を聞いてみた。すると、彼は知っていると言う。出前に言っている他の若者が話をしてくれるだろうということで、二人はピザを食べながら待っていた。出前から帰ってきたと思われる青年が店員と言葉を交わした後、二人の所に来た。マイクと言い、ファースト・ストリート・スクールに行っていたと言う。

「僕は、市立の普通の中学に行っていたが、けんかをして追放された。それで人の話を聞いてこの学校にいれてもらった。デニソン校長は普通の教師とは全然違った。学校では一応普通の教科を教えているのだが、全く生徒に押し付けることをしない。生徒のやる気が起きるまでいくらでも待っているんだ。この学校には僕のように市立校を追放されたような生徒が多く来ていた。だから、みんな勉強は出来ないし、やる気もない。校長は、そんなことは一向に気にしていない様子だった。そして、何時間でも生徒の話を聞いたり、相談に乗ったりしてくれた。当然、僕らには勉強のことで相談することはなかった。だが、僕らの多くは家庭でもいろいろ問題があったから、そういった方面の相談に乗ってくれたんだ。そして、校長だけでなく、そこの教師は皆同じような感じだった。校長がそのように指導していたんだと思う。ある時、ちょっとしたことが原因で僕は他の生徒とけんかを始めた。その時、校長が呼ばれて来たんだけど、何と、けんかを

止めないんだ。じっと見守っている。変な気分だったが、僕はけんかを続けた。そして、お互いに疲れて倒れた時、校長は僕ら両方に手を差し伸べて引き起こしてくれた。そして、二人に向かって『大丈夫か？』と一言、優しく声を掛けてくれたんだ。僕とその生徒は顔を見合わせた。その瞬間に、なんでけんかをしていたのか分からなくなってしまった。あそこで、普通の教師のようにけんかを止められていたら、決してそのような感情は湧かなかっただろう。大事に至らないように見守りつつ、僕らのエネルギーを発散させてくれた。多分、僕らの事を信頼していたんじゃないかな。それから、僕はその生徒と親友になったんだ。あそこに居る、あいつだよ。」

マイクが指をさしたのは、慎吾たちが最初に会ったあの店員であった。その後、マイクはその店員と肩を組み、楽しそうに二人の方を向いた。好奇心に駆られて、慎吾が尋ねた。
「その後、その学校はどうなったのか？校長、教師、生徒はどうなったのか？」
「あぁ、残念だ。僕には、本当の理由はわからないが、学校は閉鎖になった。噂では、経済的な問題があったとか、市の教育委員会の反発にあって封じ込められたとか、いろいろだった。でも、他の生徒達には街で時折合うよ。みんなあの学校が懐かしいと言っている。あそこでのいい思い出が切っ掛けになって、普通の市立校で頑張っているやつもいるよ。校長と他の教師については、僕にはわからない。」

慎吾と麗名にとって、そんな学校が一時でも存在していたというのは驚くべきことであった。どうしてそのような学校が無くなってしまったのだろう？また、どうして、普通の学校では教師が無理やり物事を押し付けなくてはいけないのだろう？二人は興味が湧き、ニューヨーク市立図書館に行って、関連の書物を調べてみた。まず、二人の感嘆したのはジョン・ホルトという人の教育論だった。彼の書物の多くには自発心の事が書いてある。そして、彼の引用分の中にこういうものもあった。「知能についての真のテストは、どれだけ物事の仕方を知っているかではなくて、どうしたらいいか分からない時にどのように行動するかだ。」他には、カール・ロジャースと言う心理学者の教育論も素晴らしいと思った。彼も、学生の自発性・内発性を重視している。彼の本の中で、知り合いの高校教師が生徒の抱えている数々の問題点から発して授業をしているという例が取り上げられていた。また、イギリスに「サマーヒル」という自由主義の学校があるということも知った。この学校は、伝統的な普通の学校教育をするのだが、やはり生徒の自発心を最重視するらしい。ただ、英国の歴史的な背景を反映して全寮制だと言う。慎吾と麗名はイギリスに行った時に是非サマーヒルに寄ってみたいと思った。

また、せっかくニューヨークに来たので、幾つかブロードウェイのショーやジャズのラ

イブハウスにも出向いたし、ニューヨーク近郊の普通の観光もした。そしてその後、二人はアメリカを後にした。

二人は、ニューヨークからはロンドンに飛び、早速サマーヒルの学校を訪れることにした。そこは、イギリス東部の海岸からそんなに遠くないところにあった。緩やかにうねる様な地形の所に比較的小さな建物がいくつかある。小中高校にあたるだろうが、全寮制で、学生には皆学内の様々な規則を決めるための投票権がある。教師達は通常の学科のようなものから、普通の学校にはないようなクラスまで受け持ち、学生はこれらを自由に選択し、自由に出席できる。そんな環境で何か学べるのだろうか？ただ、当然全員ではないが、サマーヒルの卒業生の中には著名な学者もいるらしい。

この自由気ままな校風・校則は、過去に多くの波紋を呼んだらしい。また、校内で問題がなかったわけでもないようだ。それでも、サマーヒルは今でも継続して存在し、海外からも入学希望者が絶たない。やはり、規制の学校に満足しない人々は世界中に居るのだろう。慎吾と麗名は徐々に違うタイプの教育というものを目の当たりにして、今まで自分たちが実施してきた教育とは何だったのだろうかと感じざるを得なかった。ただ、麗名はサマーヒルについては一つ疑問が残ったようだ。
「あなた、サマーヒルはほんとに自由で良い校風だと思うけど、全寮制はどうかな？」
「どういうこと？」
「わたしには、小さな子供を全寮制の学校にいれるのは適切ではないと思うの。」
「うん。確かにそうかもしれない。絶対に寂しいよね。」
「そう。やはり、思春期が過ぎるまでは家庭で生活した方が良いと思う。」
「ここの全寮制というのは、ひょっとしたら、イギリスの上流階級では子供を早くから全寮制の学校に入れるのがしきたりになっているからじゃないかな。よく、映画や小説にあるじゃない。」
「うん。でも、わたしは知らないけど、多分、小さいころに親元から離された子供の性格とか調べた研究があると思うんだけど。何かしら、損なわれると思う。」
「まぁ、その可能性はあるよね。」

この後、二人はオックスフォードにも行ってみた。ここは、サマーヒルとは打って変わって、しかめっ面のいかにも古い英国のしきたりが徹底しているという感じを受けた。二人には場違いの感があった。それから、ロンドンに戻り、しばらくは市内観光をしてから、デンマークへ向かった。

デンマークでは、リルスクールという幼稚園児レベルの学校を訪れた。ここは学校と言うより自然保育園とでも言った方が良いかもしれない。子供たちは一日中外で遊びまわっている。二人は、アメリカで幼稚園児でさえ、いわゆる「教科」を押し付けられているのを見て閉口したが、リルスクールは実に自然で微笑ましかった。

次は、フィンランドの公立校を訪れた。フィンランドは世界共通の標準テストの結果が最も高い国の一つだ。当然、標準テストで測れる事は非常に限られているので、そんなに重要な事ではない。それでも、何かいい点があるはずだ。学校で話を聞くと、確かに教育に力を入れている。ただし、そのやり方は他の国と随分違っている。ここで教師になるには大学院に行かなくてはならない。そのためもあろうか、ここでは教師は非常に尊敬されている職業の一つだ。ただ、少し意外なことは、教師も生徒も学業のために費やす時間と言うのは他の国よりずっと少ないということだ。学生はリラックスしているし、教師も自分の時間をたっぷりと持てる。そして、最も重要なことは教師が自分で教育内容・方法を決められることかもしれない。これは、アメリカでの他人に決められた内容を押し付ける型の教育と正反対である。生徒同様、教師だって教育内容を他人から押し付けられていたのではやる気が起こるわけがない。皮肉なことに、アメリカは世界共通の標準テストでほとんど最下位に近い。どういうことだろうか。

ここまで、何か所か教育現場を見て来ただけでも、二人にはある程度の理解が出来た。まず、子供の自発心が最も重要だということ。教師は決められた内容を押し付けてはいけないということだ。分かってみれば、極めて簡単なことだ。世の教師達はどうしてこんな簡単なことを実行しないのか？だが、二人にはまだこの疑問に答えるだけの理解はなかった。

さて、仮にもヨーロッパ、せっかくの観光地に居るので、興味のある所を訪れようということになった。それで、二人はまず、ドイツ、フランス、スペインをゆっくりと旅した。その間も、二人は教育の事を考え、何度も話し合った。
「たしかに、この旅で今まで教師生活をしていた時には気がつかなかった事に沢山であったなぁ。やっぱり、どう考えても、この自発心ということだよね、重要なのは。」
「それは、わたしも同感。だけど、ほんとに自発心のないような子供っていないのかしら？時々、何を言っても反応しないような子供っていなかった？」
「それはそうかもしれない。だけど、今思うと、教師だったぼく達がどうのこうのと言っても、子供としては押し付けがましく聞こえたかもしれないよね。今から後悔しても仕方がないけど、ぼくは子供たちの声を十分に聞いていたとは言えない。だから、子供たちの自発心まで到達したとは思えない。」

「あなたは、随分と客観的に自分の事を観察できる人ね。羨ましいわ。」

スペインの南部アンダルシア地方を回っていた時のことだ。麗名が、せっかくここまで来ているんだったら、一足伸ばして、モロッコまで行ってみようと言う。慎吾は、また脱線だなと思う。だが、モロッコはスペイン南端からフェリーでたったの一時間ほどということで、納得した。フェリーがモロッコに着くと、そこはタンジェへの街であった。フェリーからも良く見えた白い街並みが美しい。迷路のような小路をぐねぐねと歩いて行くと、急に公園があった。南国らしい、ヤシの木が並んでいる。二人はそこで日本人らしいカップルがハーモニカを吹き手品をしているところを見かけた。ただ、見物人を集めている様子はない。麗名が声をかけると、練習中だと言う。そのカップルが練習に真剣になっている間に、麗名が慎吾に尋ねる。
「あなた、こうやって自分たちの道を切り開いて行くって素晴らしいことね。わたし、応援したいんだけど、少しまとまったお金をあげてもいいかしら？」
「あぁ、もちろん。どうせ、ぼく達のお金は貰い物だ。きみは尾ひれはひれで、いろいろ脱線するけど、いいことするよね。」
麗名は、少し離れたヤシの木陰に行って、念のために持っていたかなり多額の米ドル札を小さな紙袋に入れた。そして、練習が途切れた頃を見計らって、紙袋を女性の方に渡した。そして、後で開けるように頼んだ。

二人がホテルに帰ってから、麗名が言った。
「また、脱線かもしれないけど、さっき、あの大道芸人のカップルを見ていた時にふと思い出したことがあるの。わたしが小学三年生を教えている時に、あなたと同じ名前の慎吾君という子が居たの。その子は、両親の研究の関係で前の年一年間モンゴルで過ごしていたんだって。そして、モンゴルではからっきし勉強しなかったので、帰ってきた時に一年下のわたしのクラスに入ってきたの。その子は、自由奔放な子で、何かを押し付けられるのが嫌だったみたい。それから、給食の後の昼休みに学校の中では飽き足らないみたいで、校門から出て、学校の後ろの空き地を冒険してしまうような子供だったの。そして、やりだしたらとことんやる性格ね。ある時、理科の勉強に使うということで、学校に鶏小屋を作ることになったの。その時は、慎吾君は用務員さんと一緒に毎日放課後を使って、その二人でとうとう鶏小屋を作ってしまった。でも、なぜ急に彼のことを思い出したのかしら？」

「へ～、面白い子だね。実はね、さっき芸を見ていた時にぼくもふと思い出したことが

あるんだ。ぼくの高校一年の数学のクラスに、きみと同じ名前の麗名という生徒がいた。安城麗名だったと思う。その生徒は、生まれてから中学までアメリカで育った帰国子女だった。そのせいか、日本語がちょっと古臭い感じで、友達とかに『平安朝風』と言われていたよ。でも、どうやら４か国語以上ペラペラだっていう話だったよ。随分おとなしい生徒で、よくボーっとしているように見えた。数学の成績はあまり良くはなかったんだけど、時々とんでもない奇抜な発想をしていた。丁度、論理のことを扱っているときの話だ。ぼくは、早くテストを終わった生徒のために、テストの最後に頭の体操的な追加問題を入れておくことが多かった。その時の問題はこんな感じだ。『この文は誤っている。』という文は、もし正しいとしたら、その意味は間違っているということになり、反対のことを言っているし、もし間違っているとしたら、間違いの反対で正しいと言っていることになる。どちらにしても、矛盾している。問題点の一つはこの文が文の中でその文自身を参照していることだ。数学的にこのような自己参照をどうやって表現したら良いかという問題だった。」

「あなたは、生徒に随分無茶なことをやらしていたのね。わたしには皆目見当がつかないわ。」

「それが普通の反応だったよ。ところが、この生徒はどうやらテストの時間中ずっとこの追加問題に取りつかれていたようなんだ。他の問題には全く手を付けていなかった。どうしたんだと聞くと、追加問題が面白そうだったので、ついついそれを考えていたら時間がなくなってしまったというのだ。ぼくはゼロ点にするのは気の毒だろうから、追試をしてあげようと思っていた。ところが、後で採点している最中にその生徒の追加問題の答案をよく見て、度肝を抜かれた。ぼくの教師生活の中で、他に誰も出来なかったような答案だった。簡単に言うとこんな感じだ。まず、準備として、自然数のことを考えてごらん。すべての自然数は１、２、３、と一列に並べることが出来るよね。」

「それは、わかるわ。多分それ以上は無理ね。」

「まぁ、一応聞いてよ。次に、同じ要領で、日本語の文をすべて一列に並べらると言うんだ。第一に、日本語の文を文字の長さによって全て並べる。次に、平仮名、カタカナ、漢字、数字、記号など日本語で使われる文字にすべて番号を付ける。同じ長さの文については、その文字番号をくらべて、一番左の文字から一番右の文字の順に文字番号に従って並べ替える。細かいことは良いんだが、確かに日本語のすべての文を一列に並べることが出来るということだ。言い換えれば、日本語の文すべてを列記した辞書を作るような感じかな。そうすると、日本語のすべての文に番号が付けられる。ここで、問題となっている『この文は誤っている』という文を少し言い換えて、『第ｎ番目の文は誤っている』という文を考えてみる。すると、この文自体にも番号が付けられる。つまり、その文の番号とｎが一致する文を見つけることが出来ればそれが自己参照になると

いうことだ。その生徒が考えたのはそこまでだけど、それは、実に２０世紀の前半にゲーデルと言う大数学者がある有名な証明に使った手法と同じ考え方なんだよ。」
「あなたの言ったこと、わたしにはチンプンカンプンなんだけど、あなたが言うならそうなんでしょうね。」
「兎に角、その時は、ぼくは驚いた訳だよ。それで、そのテストは追加問題の答案だけで１００点にしちゃったよ。それから、その生徒は文系だったんだけど、興味があると言って、数 III まで取ったんだ。その時も、微積とか普通の問題はそれほどできはしなかった。どうやら、数式をこねくり回すのが苦手のようだった。これはアメリカで育ったせいかもしれない。兎に角、この生徒はもう一回ぼくを驚かしたことがある。」
「わたしは数 III はとらなかったから、何もわかる訳がないわ。」

「また、そう言わずに、これも聞いてよ。複素数は実数と虚数という二つの性格の違った数を２次元の平面上で表せる。また、三角関数は二つの実数軸を使って、やはり２次元の平面上で表せる。この生徒はこの二種類の概念を合わせて、三角関数のぐるぐる回る様子を複素平面で表そうとしたんだよ。これは、実に複素三角関数の基本なんだよ。電子工学ではこれを使って電子回路の設計をする。どうして、そんなことを考え付いたのか今思っても不思議なくらいだ。」
「あなた、その生徒を数学科にでも送った方が良かったんじゃない？」
「そうかもしれない。だけど、数学もやたらと機械的なことが多いから、その生徒が楽しんだかどうかはわからないな。それに、ぼくの中学の時の先生は真に優秀な人間は、数学や理科じゃなくて、社会問題に取り組むと言っていたよ。でもさぁ、今思えば、ぼくがやっていたことは、所詮押し付けだったよね。」
「あら、あなたがそれだけ思い入れていたことでも今は押し付けだったって言えるなんて、あなたは偉いと思うわ。」
「ありがとう。ところで、あの生徒、今何やってるかな？」
「そうね。わたしも教え子が何やってるか気になることがある。あなたの難しい数学の話で脱線しちゃたけど、二人とも、どうしてあの芸の間にわたし達と同じ名前の教え子の事を思い出したのかしら。何かの奇遇かしら。いずれにしても、あなたはやっぱり数学が好きなのね。数学と結婚したほうが良かった？」
「ぼくは、数学は好きだったけど、数学者になるほど優秀ではなかったから教師になったんだよ。数学なんかに取り付かれて、結婚適齢期を逃してしまったし、きみが拾ってくれなかったら危うく独身で一生を終わるところだったよ。もちろんきみの方がいいよ。」
「ありがとう。それから、せっかくモロッコに来たんだから、映画の舞台になったカサ

ブランカとマラケシュまで足を延ばそうね。」

その後、二人はまたスペインに戻り、そこからもう一度フランスを通って、イタリアに入った。二人とも、どうしてもローマの遺跡とあのポンペイを訪れたかったのだ。その後は、ギリシャ、トルコ、エジプトと有名な観光地を次から次へと訪れた。この間も二人の教育議論は続いた。
「あなたは、また教師に戻るとしたらどんなことがしたい？」
「そうだな、日本ではまた高校の数学教師になるしかないと思うけど、予め準備された教材を生徒に押し付けるようなことだけはしたくないな。そんなものは、絶対に生徒の自発心に触れるようなものじゃない。これは、たとえ、どんなによく考えられて教材でもそうだ。あのオリンピア・フリースクールのフィルが言っていたように、まず、生徒のなかにある何かに気が付いて、それを『買って』あげるようにしないと。自発心は外から強要できるものじゃない。でも、そんなことは日本の教育現場で出来る訳ないよね。」
「そうよね。じゃ、フリースクールとして、新しい学校を作ってみるって言うのは？」
「それは、面白いアイデアだけど、ぼくにはそれほどの自信はないな。全く未経験の世界だから。そう思うと、今現在、世の中で行われている教育と言うのは全くもってお門違いだし、弊害だらけとしか言いようがないな。きみ、モロッコで若い日本人のパフォーマーにお金をあげたじゃない。今思えば、あの二人はそんな教育に目もくれずに自分たちの道を行っている。きみ、良いセンスしてるよね。あの時、あの二人をサポートしたのは、今悶々としているぼくにとってはちょっとした光明だよ。」
「あら、嬉しいこと言ってくれるわね。確かに、あの時は何かを直感したわ。あの二人どうしているかしら。」

そして、その次は、インドのデリーまで一気に飛行機で移動した。デリーでは市内観光と、有名なタージマハールへの日帰り旅行等をしてしばらく過ごしていた。また、ここでも市内の学校を見学してみた。二人が訪れたのは私立のシッダルタ・スクールと言う。ここは極めて小さな小中高学校で、生徒が数十人しかいない。大した設備もなく、教師が黒板に書いたことを生徒が暗唱するといった、古臭い授業をしていた。そして、その日の最後に校長から意外なことを聞いた。実は、資金不足で直に学校を閉鎖せざるを得ないと言うのだ。誰かが幾ばくかの投資をしてくれない限りそれは間違いないらしい。そして、その必要額と言うのは慎吾と麗名の資産に比べたら小さな額だった。

ホテルに帰ってから麗名が口を切った。
「あなた、あの学校の閉鎖の件、どう思った？」
「気の毒だよな。それも、あの程度の額で。まぁ、これは、為替レートの影響もあるし、ぼく達が莫大な相続をしたから言えることだけどね。」
「そうよね。ねぇ、わたし達でその費用を払わない？」
「うん、実はぼくもそういうことを考え始めていた。もともと自分たちのお金じゃないし。それじゃ、早速、明日あの学校に戻ってみよう。」

翌日、投資の可能性を告げると、校長他一同は非常に喜んだ。そして、もし投資してくれるんだったら、学校の名前を二人の名前に変えても良いとさえ言った。もちろん、これは即座に断った。今度は、じゃ、二人は教育者だから、何か教育上の新しい指針を提案してくれるかと言ってきた。そこで、二人はフリースクールの方法を試験的に実施できないかと聞いてみた。インドの教育現場は極めて保守的で、フリースクールの概念を理解してもらうのには非常に時間がかかった。そして、校長初め他の教師は極めて懐疑的であった。ただ、お金の魅力には代えらないとみて、シッダルタ・スクールの一部を試験的にフリースクール部門として運用することに合意した。運用方法については慎吾と麗名、それに、フリースクール担当の教師を後ほど選抜して、協議して決めることになった。

話が決まると、二人はアパートを探して引っ越し、外国人登録事務所へ出向いて、観光ビザから投資家用ビジネスビザに切り替える方法を調べた。手続きはかなり煩雑に思えたが、仕方がないので一から順に片付けて行った。現地としてはまとまった額の投資だし、学校側も首尾よくサポートしてくれたので、時間はかかったが兎に角すべて処理できた。

フリースクールの運営に関しては、二人ともこの時までにかなり強い動機はあったのだが、実際に自分たちで実行するとなると話は全く違う。特に、言葉も文化も異なるインドなので、二重にも三重にも困難が付きまとうことになる。ところで、ニューデリーのあたりはヒンディー語圏だが、公用語の一つとして英語が十分通じる。それで、慎吾と麗名は職員や学生との会話は拙い英語でということになる。

さて、まず最初の障害は現職の校長と教師がフリースクール部門の重要性を理解してくれることである。二人は、まず、伝統的な教育の何が悪いかを力説した。もし、現状に問題がないのだったら、何も変える必要がないからだ。二人の取り上げた問題点は以下の通りである。第一に、教師が勝手に用意した教材を押し付けられても、生徒はやる気

が起こらない。たとえその教材が生徒の興味をそそる様にと工夫されていたとしても、それは教師の想像の範囲内の事であるし、生徒は皆独自の興味を持っている。これは、教師自身の過去の経験を思い起こせば明白なことであるが、一度教師になってしまうと忘れてしまうことでもある。

第二に、与えられた教材を「消化」するだけでは、人生に必要な創造力や判断力が培われない。これは、どんなに学校教育を受けていても、世界のほとんどの国で一般大衆が無能で有害な政治家や資本家にやりたい放題をさせている現実を見れば明白なことである。二人がよく引き合いに出す例は米国民がとんでもない大統領や政治家を選出することである。そして、残念なことに、世界中のほとんどの教師が自らの学校教育を通して、真の教師たるに必要なことを学んできていないことも挙げられる。

第三に、教師の役割は情報や技術を伝達することではなく、生徒の良いところ見つけて伸ばしてあげることだし、生徒が自分たちに直接関わる問題点を自分たちで見つけて取り掛かれるように補助してあげることだ。二人の経験から言うと、多くの教師は自分たちが生徒の上に立つ「偉い」人なのだという驕りと自信を持っているように感じる。今の二人にとって、それは完全に間違いだと言える。生徒の問題点に一緒に取り組もうとすると、必ずや教師の分からないことも出てくるはずだ。その時、正直に分からないと言えるような教師でなくてはいけない。

当然、慎吾と麗名自身、比較的最近こう言ったことに目覚めたわけで、大した経験もない。そんな二人の力説がどれだけ効果があったかは甚だ疑問である。ただ、校長と教師たちは何かを感じ始めたようではある。そして、職員の中で、一番若いサンジャイという教師が、やはりつい最近まで学生だったせいか、最も納得しているように見えた。

これらの事を踏まえて、この学校のフリースクール部門の学習目標を以下のように定めた。

＊生徒が高校レベルを卒業する時点で、その年の人々が遭遇するような世の中の問題に対して他の人と協調して取り組む意欲と能力を育むこと。

それと同時に、フリースクール部門からは、今まで要求されていた通常の学習項目はすべて除かれた。

ある程度方針が決まった段階で、保護者に対する説明会が開かれた。そして、希望者は

フリースクール部門に移れるということが伝えられた。先にも書いたようにインドは極めて伝統的で保守的な国である。この説明会で言われたことを何人が理解したであろうか。それでも、数日の間に５人の希望者が集まりサンジャイが担任、慎吾と麗名が補助をすると言うことで新しいクラスを形成した。この５人は皆学年が違う。小学校２年生、３年生、６年生、中学３年生と、高校２年生が一人ずつだ。特に小学校低学年の生徒は親の希望で来たわけで、正直言って子供達には何が何だか分からない状態だった。

さて、このような環境に置かれた教師と生徒にはどんなことが起こるだろうか。特にこの学校のように関係者全員が全く初めての場合、極めて困難なことである。最初の半年は混乱状態だったと言うのが正解であろう。誰もどうしていいか分からない。もし、この方式の効果をこのような状態で判断するとすれば、それは完全に否定的なものになるだろう。残念ながら、学校教育として米国でフリースクール運動が起こった時も同様だったに違いない。多くのフリースクールがすぐに門を閉じることになった。

同じような失敗を犯さないようにと、サンジャイ、慎吾、そして、麗名は必死に方策を考えた。まず試したことは、生徒たちの言うことをよく聴き、しっかりと記録を取ることだった。サンジャイはこの地域で育ち、生徒たちの環境を比較的よく知ってはいる。それでも、生徒一人ずつ、独自の環境にある。彼らの環境が、どのように彼らの成長を形成しているかよく理解することが不可欠である。そして、彼らがどのようなことに興味を持っているか、家庭でどのような問題があるか、年長の生徒は卒業後どのような進路を取りたいのか、そう言ったことを根気よく探り出すことをした。これは、非常に手間のかかり、能率の悪い作業である。ある生徒に注意をしている間、他の生徒への注意がおろそかになることもある。暇になった生徒がどこかへ行ってしまったり、暇を持て余してケンカをしたり、様々なことが起こった。ただ、それらの出来事すべてが教材となった。このクラスの生徒と教師全員でどうしてそうなったか、これからはどうすべきかということを話し合った。

生徒の様子がつかめてきてからは、それぞれの生徒の問題となっていることを生徒自身で克服できるように手伝うことに努めた。これも、想像以上の難関で、サンジャイは今までの習慣から、すぐに自分の意見を言ったり、指示したりしてしまおうとする。慎吾と麗名はそれを外から見ているので、簡単に気が付く。それで、何度も何度もサンジャイに注意をしなければならなかった。この反復で、サンジャイも徐々に慣れ、生徒の問題に対して生徒自身がそれを理解し、どうしたら克服できるかを考えさせられるようになってきた。

中学２年生のラクシュミーは、家庭での躾が異常に厳しく、体罰もあると言う。ここはインドで、アメリカのように児童福祉課が飛んできて子供を親から切り離し、親を起訴するということはない。そこで、サンジャイはラクシュミーにいろいろな対応策を自分で考えさせ、一つずつ実施させてみた。ラクシュミーはその過程から何が効果があるかを学び取って、自分の生活改善に役立てようとした。

高校２年生のカナンは卒業後の自分の将来の事を考え始めていた。ご存知のように、インドでは古くから世襲制の傾向が強く、蛙の子は蛙的な現実がある。カナンの家庭はシーク教徒で男性の親族の多くはタクシーの運転手など、交通関係の仕事が多い。だが、カナンはコンピュータに興味があり、その方面の仕事がしたかった。おりしもインターネットの全盛期を迎え、インドでもその方面の機会は急速に増えていた。残念ながら、その時まではこの学校には生徒用のコンピュータはなかった。そこで、慎吾と麗名は自分たちの資金からコンピュータを何台か購入し、学校に寄付した。若くて好奇心の強いカナンには特に何も「教える」必要がなかった。一人で、コンピュータの前に長いこと座って、いろいろなことを学んでいった。

他にもフリースクール部門で試みたことがある。年の差の大きく異なる生徒たちを一緒に活動させる時間を増やしたのだ。小中高校にまたがる生徒５人は普通の兄弟姉妹以上の年の差に値するかもしれない。それでも、あえて一緒にしてみたのである。インドでは一世帯の子供の数は比較的多いので、生徒たちは兄弟姉妹との付き合いは少なくない。それでも、学校はやはり学年ごとに分かれているので、他の学年の生徒との付き合いは多くはない。そこで、学年を超えて交流することによって、協調の輪をもっと広げようと言う主旨である。例えば、小学校低学年の生徒にとっては、年長者の様子を見ることは、自分たちが成長していく過程でどういうことが問題になって、どういう対応が出来るかということを目にすることが出来る。年長の生徒にとっては、年下の生徒たちの問題を聞いてそれに対する手助けをする姿勢を身につけることが出来る。教師が介入しなくても自分たちで何かをしようという姿勢が身に着く。例えば、コンピュータの事はと言えば、カナンが黙って他の生徒を手伝った。

明らかに混乱状態だった最初の半年が過ぎると、徐々に、ある程度の方向性が見えてきた。そして、二年目に、フリースクールらしい特徴が見えてきた。サンジャイの仕事も軌道に乗り、フリースクール部門に他の教師も加わった。生徒数も少しずつ増えてきた。

そして、カナンが高校を卒業した時には希望通りインターネット関連の会社に就職出来た。そこでは、会社の幹部がカナンの行動力に目を付けてシッダルタ・スクールの事を

聞きだした。これが切っ掛けでこの会社がコンピュータの寄付を含め、シッダルタ・スクールに出資することになった。それで、この学校の資金問題は一気に解決した。そして、それを機に慎吾と麗名は学校の運営から徐々に離れ、インドを後にすることにした。思いもかけず、いつの間にか三年近くインドで過ごしたことになる。

その後は、タイ、マレーシア、インドネシア、オーストラリア、ニュージーランド、フィリピン、香港、台湾と周遊して日本に戻った。四年以上の長旅であった。
「あなたの相続のおかげで、わたし達、とんでもない経験が出来たわね。ありがとう。」
「あぁ、あの叔父さんのおかげだよ。それから、インドを出てから考えていたんだけど、この自発心を重要視するって、教育だけじゃないよね。職場でも、家族や夫婦間でも同じだよね。」
「そうね。わたし達、見合い結婚のせいか、お互いの意志をよく尊重していると思わない？二人とも自分の意志を押し付けようとはしないわよね。」
「そうだな。自然とそうなっていたよなぁ。気が付かなかったけど、それ、見合い結婚のせい？恋愛結婚だと、もっと自己中心的なのかな？」
「まぁ、そう言う訳ではないかもしれないけど。それから、これはわたし達には関係ないけど、自発心が大事なのは子育ても同じじゃない？」
「そりゃそうだ。基本的には、子育ても、教育も同じだ。押しつけがましいのは最悪だ。子供が可哀そうだ。」
「この旅、わたし達にとって、最高の教育だったみたいね。」

世界一周の旅から帰ってきた慎吾と麗名は暫く麗名の実家の世話になった。その間に新しいアパートを探し、直にそちらに移った。引っ越しが一段落したころ、慎吾は遺産を相続した叔父の書類をそろそろ処分しようかと思い、一応目を通してみた。その時、まず目に留まったのは、家系図であった。それはかなり大人数が列記されていたが、所々に空欄があり、慎吾の祖父母の代で終わっている。その一番上の夫婦は慎吾のひいひい爺さんとひいひい婆さんにあたる。名は慎とおれいと書いてある。二人は鳥取県智頭町にある山寺で奉公していたという記述がある。家系図から見る限り、二人は子宝に恵まれたようである。

慎吾はネットで智頭町の山寺を探してみた。何か所か見つけたが、それらはみな大きな寺ばかりである。そして、どれも山寺と言うには人里に近い。それらの寺に電話で問い

合わせをしてみたが、誰もそれらしい智頭町の山寺のことは知らないという。もう暫くネットで探していたところ、「歩いて訪れる全国の山寺」というサイトを見つけた。その中に一つ、智頭町の山寺が紹介されている。鳥取県智頭町の北東部、八頭町と若桜町との境に近い所、近くに鳴滝山を望み、日本海にそそぐ千代川の支流の一つ綾木谷川の源泉に近い。だた、この寺の名も連絡先も記されてはいない。そこで、地図上でそのあたりを調べてみた。確かに、山寺のありそうな所だ。慎吾は、この辺に違いないと察した。まだ存在するかもしれない。

慎吾は麗名にこの山寺の事を伝え、行ってみようと誘った。鳥取まで飛行機で行き、そこでレンタカーを借りた。国道 53 号線を南下、智頭町で国道 373 号線を東に進み、郷原という交差点から津山智頭八頭線を北東に９キロほど入った所に、実際、その山寺はあった。一時間と少しのドライブだった。最後の１キロほどは未舗装だが、全行程車で行けたことには驚いた。

二人はその山寺の門戸を叩いた。住職に自己紹介をして、昔の奉公人の夫婦、慎とおれいの子孫だと言い、その奉公人のことを尋ねた。住職はその事を知っていた。前の住職から伝え聞いているという。ただし、もう昔のことなので、詳しいことはわからないとも言っていた。そして、庭の裏の方にある小さな門の所に行ってみなさいという。

慎吾と麗名はそこへ行ってあたりを見まわした。すると、横の壁に相合傘のような図形があり、その下に「慎」と「麗」という字が彫ってあった。慎吾は麗名に言った。
「これは、ぼくのひいひい爺さんとひいひい婆さんのことに違いない。家系図には『おれい』と書いてあったが、ここにはきみと同じ漢字を使っているね。」
「そうね。とうとう、あなたのルーツにやって来たのね。」
「うん。この二人、どのように知り合って、どのような暮らしをしてたかはわからないけど、仲が良かったに違いない。ぼく達は見合い結婚で、ロマンチックな出会いはなかった。だけど、ぼくはきみのことがほんとに好きだよ。もし、見合いの前に、偶然に知り合っていたら、たいそうロマンチックな恋をしていたかもしれないよ。」
「あなた、わたし達は一緒に世界一周の旅もしたし、今は、恋愛結婚の人たちと変わらないわ。お見合いだって、こんな素敵な人生を送れて幸せだわ。わたしは、構わないわ。」
慎吾と麗名は互いに寄り添った。その後、慎吾が急に言い出した。
「そうだ。この相合傘を慎吾と麗名にしようか？ぼく達は子孫だし、ほとんど同じような名前だし。何も悪いことはないよね。」
慎吾は、その辺に転がっていた、先のとがった石で「慎」の字の下に「吾」、「麗」の

字の下に「名」とこすってみた。彫れているわけではないが、なんとなく縦書きで「慎吾」と「麗名」と読めるように見えた。

その後、二人は住職に礼を言って、帰路についた。国道 373 号線に出たときに、麗名が一つの道路標識に目を留めた。
「あなた、あそこ見て。『恋山寺駅３００ｍ』と書いてあるわよ。これ、随分ロマンチックな名前よね。ちょっと行ってみない？」
「そうだね。じゃ、少し脱線しようか。」
「この駅名、まさにあなたのひいひいお爺さんとひいひいお婆さんのことを言っているみたいね。」
駅に行ってみると、それは無人駅であった。駅全体がピンク色に塗装されており、大きなハートの印も描いてある。そこには、全国で四つある「恋」駅の一つだと記載されている。
「あなた、ここには恋を求めて観光客さえ来るみたいよ。」

そこを出た後、慎吾はうっかりと国道 373 号線を南へ走ってしまった。しばらく行くとトンネルに突き当たる。慎吾は、ここでトンネルに入るはずはないと思い、道を間違ったことに気が付いた。引き返して、地図を見ようと止まったところ、道端に碑があるのが見えた。「智頭街道、駒帰宿旅籠屋火事の跡、慶応×年。」と記されていた。
「これ、『こまがえり』とでも読むのかな？多分、鳥取から馬に乗ってきた大名行列の一向が峠越えには使えない馬を返したという意味だろう。まぁ、町人は徒歩だったに違いないが。それにしても、こんなところには旅籠屋は一件しかなかっただろうが、火事が起こったら旅人も災難だったろうなぁ。」

慎吾と麗名は、山寺から帰ってからも引き続きそれからの人生について考えてはいたが、まだ何も実行に移してはいなかった。そして、また暫く経った頃、麗名が郵便物に目を通している時のことだ。
「あなた、シッダルタ・スクールのサンジャイから手紙が来たわよ。」
「懐かしいなぁ。どうしてる？」
「子供が出来るって！」
「えっ？サンジャイは結婚していなかったと思ったけど。」
「子供が出来るまでには結婚するって書いてあるわ。」
「まぁ、あの進歩的なサンジャイらしいな。でも、きっといい父親になるだろう。」

「そうね。ところで、あなた、わたしはもう子供なんかできない年だと思っているでしょう？」
「うん。きみはまだまだ若々しいけどね。やっぱり、年には勝てないよね。どうしたの？」
「わたしも、妊娠してるわよ。」
「えええっ！！！」

第三話　海

長崎湾は日本で最も美しい湾の一つだろう。それ故、土地の人の多くが海に憧れるのは無理もないことかもしれない。

都築麗名は裕福な家庭に生まれ育った。長崎の有名女子高校を卒業後、長崎大学心理学科に進んだ。そして、麗名の家族は長崎湾のマリーナにかなり大きなヨットを所有している。いわゆる、クルーザーというものである。そのため、麗名もヨットについては詳しいし、しょっちゅう乗っていたがる。ただし、家族は他の事で忙しくなかなか付き合っていられなかった。さすがに、この手のヨットは麗名一人では操作が困難だ。それで、麗名の家族は麗名が好きな時にヨットに乗れるように、専属のクルーを雇うことにした。早速、ヨットの雑誌いくつかに広告を出した。

秋葉慎吾は中学の時いじめに合い、登校拒否児であった。それでも、卒業はさせられ、過去の辛い思いから抜け出して伸び伸びとした高校生活を送ってほしいという両親の願いで、長崎海洋高校に進んだ。慎吾はそこで、ヨット部に入り、新しい活路を見出したと思った。高校卒業後、やはり、ヨットに因んだ仕事がしたいと思っていた。ヨット部の顧問に勧められて最初に応募したのが、麗名の家族の広告であった。

数日後に、慎吾はそのマリーナでの面接に行き、クラブハウスで麗名と父親に初めて会った。
「はじめまして。秋葉慎吾です。」
「秋葉さん、よく来てくれました。私は、都築です。これは、娘の麗名です。実は、この娘ヨット狂なんですが、私たちの船は大きいので一人で動かすのは難しいのです。それで、娘が乗りたいときはいつでも一緒に乗ってくれる人を探していました。あなたは、海洋高校のヨット部で活躍していたということで、頼みになると思って来てもらいました。もしよかったら、この後、すぐに、麗名の手伝いをしてくれますか？」
「わかりました。よろしくお願いいたします。」

麗名の父はそれで帰った。慎吾は麗名の後を追って、船の係留されているところまで行った。それは、慎吾が高校の時に乗っていたヨットより遥かに大きい。おそらく30フィート以上あるだろう。高校の時にも特別なイベントでこのくらいのヨットに乗ったことはある。しかし、こんな大きなヨットを一人で自由に使っていいというのはどういう金持ちの娘だろうと思った。

「慎吾さん、船を出すので、手伝って。」
「わかりました、お嬢様。」
「ちょっと！その、『お嬢様』って言うの、辞めてくれる？」
「わかりました、お嬢。」
「しょうがないな。うちが舵を取るから、あんたはロープを外してから飛び乗ってね。」
「はいよ。」

麗名はエンジンをかけて船を桟橋から出した。そして、マリーナの外に向かっていった。
「慎吾さん、マリーナの外に出たら、セールの用意してね。」
「はい、お嬢。」
「また。」

その日、慎吾は言われるままに、すべきことをすべてこなした。麗名は慎吾に言った。
「あんた、今日はこれで上がろうよ。それで、あんた、ほんとに、うちの好きな時にいつでも来てくれるの？」
「はい。それが俺の仕事ですから。携帯にメッセージを送ってください。30分で来れます。」
「あぁ。嬉しい。うち、いつでも好きな時に船乗れるんだ。じゃ、また明日ね。連絡するね。」
「わかりました、お嬢。」
「その、『お嬢』って言うの、辞めてくれる？」
「はい、お嬢。」

翌日、早速メッセージがあり、慎吾はマリーナに飛んで行った。
「お待たせしました、お嬢。」
「こうやって、すぐに来てくれる人ってほんとに嬉しい。ありがと。」
「それが、仕事ですから。」
「今日は、ちょっと遠くに行きたいんだけど。ちゃんと食べ物も持ってきたから安心してね。」
「それは、有難い。」
「ところで、あんた、なんで、この仕事する気になったの？他にはすることないの？」
「ご存じ、俺はヨット部で、ヨット狂だよ。当然、高校の時はちっぽけな船に乗ってた

けどね。それでも、ヨットはヨット。風の力だけで大海原を行く。こんな爽快なことはない。それで、ヨットに乗ってられる仕事を探していたんだよ。そんなに、不思議かなぁ。」
「ううん。ただ、男は普通もっと野心があって、お金や権力を欲しいと思うのかと思っただけ。まぁ、うちも女々しい普通の女の生活は嫌だし。風の力だけで大海原を行くっていいよね。」
「じゃ、俺たちは育ちも違うし、雇い主と雇われの身だけど、これは共通の趣味だね。」
「そうね。やっと、自由にこの船を使えるから、いろんなとこに行こうね。ところで、うちは大学の心理学科に所属しているんだけど、どうしようかなと思っているの。ほんとは、ずっと海に居たいぐらい。」
「お嬢、せっかく大学に行ってるのに、それは勿体ないんじゃない？俺だったら、行ってんだったら、卒業したいと思うけどな。それに、お嬢の親爺さんとか家族の人は怒らないの？」
「それが、半分は放任主義というか、後の半分は、自分でほんとにやりたいことをしない限りものにはならないという精神かな。うちは心理学に興味がないわけではないけど、ひょっとしたら、タイミングの問題かもしれない。兎に角、今は船に乗っていたい。」
「それは、わからないわけじゃないよ。まぁ、俺にとっては、お嬢は救いの神だよ。こんな仕事はなかなか見つからないからな。この仕事がなかったら、俺は何をしたらいいか全くわからない。」
「じゃ、良かったじゃない。うちら、お互いに好きなことが出来て。ねぇ、今日は湾を出て、高島のあたりをセールしようよ。橋の下を通るの気持ちいいよ。」

二人は橋の下を通り、高島の周りをセールする。
「お嬢、今日はセーリングに最高の日だね。ほんとに気持ちがいい。」
「だから言ったでしょう。さて、部長さん、この辺でアンカーを入れて休もうか。」
「何、その『部長さん』って？」
「あんたの『お嬢』に対抗しているんだけど。ヨット部の部長さんだったんでしょ。」
「えっ、何で知ってるの？」
「内緒。」
「お嬢、兎に角、その部長さんは辞めてくれる？」
「あんたが『お嬢』って言うの辞めたらね、部長。」
慎吾は、「やりずらいな、この娘。」とつぶやいたが、麗名には聞こえなかった。アンカーを入れ、麗名の持ってきた昼食を食べていた時、慎吾が急に気が付いたものがある。

「あれっ！ウミガメだ。」
「どうしたの？」
「ビニール袋がヒレに絡まっていてうまく泳げないでいるみたいだ。」
そう言うや否や、慎吾は海に飛び込んでウミガメからビニール袋を取り始めた。そのビニール袋は随分長い間ついていたようで、一部が皮膚に食い込んでいたためなかなか取れなかった。ようやくすべて取れてから慎吾はそれを持って船によじ登った。

「部長が急に飛び込んだから、びっくりしたよ。でも良かったね。優しいんだね。」
「可哀想だったんだよ。ウミガメが人間の罪を背負わなければならない理由はないよな。」
「そうだけど、うちは泳げないからとてもあんなことは出来ない。」
「えっ、泳げないの？それでヨットに乗ってるの？」
「何で？ヨットは水泳じゃないでしょ。」
「それはそうだけど。いざって言うとき怖くない？」
「別に。例えば～、空を飛べないからって飛行機に乗らないの人いる？」
「面白い理屈だな。泳げなかったらヨット部には入れないよ。それに、俺たち乗ってたヨットは簡単にひっくり返ったし。ちょっと、下で着替えてくるよ。キャビンに入っていい？」
「どうぞ。ご自由に。」

慎吾は船のハッチから下に降りて船内に入る。室内は６人くらいまで泊れるくらいゆとりがある。簡単な洗面所にトイレとシャワー、そして、ギターもあった。慎吾はその辺にあった服を構わずに着て出てきた。麗名の父の物と思われる男物のショートパンツに麗名の物と思われる女物のシャツを着てきた。麗名は思わず吹き出した。
「変なかっこ！」
「しょうがないじゃないか。今だけだよ。降りるまでには俺の服が乾くだろうから、そしたら、また着替えるよ。ところで、中にギターがあったけど弾いていい？」
「弾けるの？ご自由に。」

慎吾はギターを持ってきた。取り敢えず、６弦に他の弦に音を合わせて引き出す。
「いいねぇ。楽団は雇ったつもりなかったけど、クルーに含まれていたみたいだね。そのギター、今まで、誰も弾いてくれなかったんだ。どうやって、習ったの？」
「俺は中学の時、登校拒否児だった。家に居ても、結局暇なんで、一人で練習してたんだよ。音楽が友達だった。」
「へ～。今日は最高だな～。」

船を降りるとき、麗名が言った。
「素敵なクルーズだったね。どうもありがとう。ところで、部長が一番最初にギターで弾いた曲は何？聞き覚えはあるんだけど。」
「あぁ、あれね。あれは、アラン・ドロン主演の『太陽がいっぱい』の主題歌だよ。」
「いい曲だね。」
「うん。映画は随分と悲しいけどね。そして、ヨットが舞台だよ。」
「へ～、そうなの？うち、まだ見たことないんだ。それから、うち、小学校で習ったハーモニカくらいしか吹けないんだけど、今度あの曲のメロディーを教えてくれる？」
「もちろん。喜んで。」
「じゃ、また、メッセージするね。」
「あぁ、いつでも。」
天候が悪くない限り、麗名はほぼ毎日のように慎吾を呼び出した。その日によってセーリングの時間はまちまちだったが、休日に天草や佐世保方面の途中まで行ってみたこともある。

そんな感じで、数か月が過ぎていった。ある日、セーリングの途中で、麗名が尋ねた。
「部長がよく弾いてくれる曲の映画だけど、今度見てみたいんだけど。映画に連れて行ってくれる？」
「えっ、『太陽がいっぱい』のことだよね？」
「そう。」
「あれは、すごい昔の映画だから、劇場ではやっていないよ。」
「そうなんだ。それだったら、何でもいいから映画に連れて行ってくれる？」
「いいけど。それさ～、仕事としてじゃないよね？」
「どうして？」
「俺は雇われの身だから、仕事としてなんでもやるけど、仕事とは関係なく、お嬢が俺と付き合ってくれるかっていう意味なんだけど。」
「うちは自然と一緒に行きたいと思っただけだよ。そんなに気になる？」
「気になるな。じゃ、このクルーの仕事とは切り離して、俺がお嬢をデートに誘ったら、行ってくれる？」
「もちろん。映画じゃなくてもいいんだけど。」
「わかったよ。じゃ、改めて、お嬢、今度デートに誘いたいだけど、行ってくれる？俺が全部払うよ。」
「嬉しい。部長と船に乗ってるのは最高だけど、たまには丘の上だっていいよね。」

「良かった。俺には生まれて初めてのデートだよ。」
「え～、ほんと？随分しっかりした人だと思ってたけど、以外と、うぶなんだね。」

慎吾と麗名の丘の上のデートは、どうやら、丘に上がった亀のようなものだったかもしれない。慎吾も映画館など行ったことはなく、いざ麗名を連れて行ってみると、なんだかアクションとか子供向けとか、あまり二人の好みの映画がなかった。それで、今日は丘の上だから、思いっきり高いところへ行こうということになり、ロープウェイで稲佐山へ登った。そこからは、いつもクルーズをする長崎湾が一望でき、二人は映画より良かったと思った。観光客と恋人たちの中、夕暮れ時から日没後の夜景までゆっくりと過ごした。慎吾の仕事とは切り離された、丘の上の二人の時間だった。途中、二人の体は、微かに触れたりする。この時、周りの恋人たちと同じように、二人も恋人なのではないかとさえも思えた。その後、船では持ち込んだ食べ物しか食べられないので、何でも好きな物が食べらるという状況に少し戸惑った。二人で、あっちやこっちと歩いた。そして、仕舞に麗名が食べたいと言ったのは、カウンターで売っている豚まんであった。二人分買って、そばにあった小さな公園のベンチで食べた。最後に、慎吾は麗名を家まで送って行った。少し驚いたのは、麗名がアパートに住んでいるということだった。それは、長崎市の中心部から近く、たいそう立派な建物の、見るからに高級そうなアパートではあるが、それでも賃貸だそうだ。それは、麗名の両親が不動産を所有したくないという方針からそうなっているらしい。そう言えば、確かに、どんなに高価でもヨットは不動産ではない。慎吾は、玄関に出てきた麗名の両親に挨拶をした。母親が麗名に尋ねた。
「あら、今日はセーリングじゃなかったの？」
「ううん。今日は丘の上のデートだったの。随分と勝手が違ったけど楽しかった。慎吾さんが全部払ってくれたの。」
「あら、慎吾さん、ありがとうございました。わがまま娘でお困りではないですか？」
「とんでもない。今日も楽しいひと時が過ごせました。では、おやすみなさい。」

それから数週間経った頃、麗名が慎吾に尋ねた。
「ねぇ、今度の連休に２泊３日で八代海の方に行きたいんだけど、部長、泊りでも行ってくれる？」
「俺は喜んでお供できるけど。ちょっと待ってよ。それって、この船に泊るってこと？」
「うん。」
「二人で？」
「うん。」

「それ、お嬢のご両親が許してくれるの？」
「そんなに深く考えなくてもいいんじゃない？特に問題とは思わないけど。」
「それは、どういう意味？若い男と女が二人だけで一艘の船に寝泊まりするって、普通の親は許さないんじゃない？」
「そうかもしれないけど、部長は、うちの親が雇ったクルーだから、うちの親は信頼してるはずだけど。」
「そうねぇ、雇ったクルーね。」
「違う？」
「ううん。その通りだよ。それでも、一応、親爺さんにはっきりと許可を取ってくれる？」
「ちゃんと取るよ。」

そして、実際にその２泊３日の八代海方面へのクルーズの日が来た。慎吾も着替えを持って船に乗り込んだ。天候も良く、二人は美しい八代海の景色と海を存分に楽しんだ。さすがに雲仙天草国立公園に指定されているだけのことはある。そして、問題はやはり夜である。二人は小さな入り江にアンカーを打ち、船を止めた。持ってきた即席の夕食を食べた後は、慎吾のギターで静かなひと時を過ごす。夜空には月が明るく輝き、さざ波の音が微かに聞こえている。二人ともベッドを用意して床に入った。

「部長、うち、やっぱり少し甘かったかもしれない。ちょっと、体が熱くなってきちゃったんだけど。こっちに来てくれる？」
「そうかい。そう言ってくれるのは、うれしくないわけではないよ。俺だって興奮していないと言ったら嘘になる。若い男と女を同じ部屋に入れるというのは罪なものだ。」
「何が罪なの？うち、熱くなってるって言ってんだけど。」
「お嬢。お嬢は、俺がどんなにお嬢のことを抱きたいか知らないんだろう。だけど、俺は、お嬢の親爺さんに対する責任がある。お嬢が前に言ったように、俺は雇われたクルーだ。雇われたものと結ばれるのは売春じゃないか？」
「あんた、そんなこと言わないでよ。じゃ、はっきり言うよ。うちは、部長のこと好き。ねぇ、抱いてくれる？」
「俺もお嬢のこと好きだよ。初めて会った時はちょっとお嬢さんだという抵抗はあったけど。一緒にセーリングしていて、もう耐えられないくらい好きになってしまった。お嬢様には変わりないんだけどなぁ。それでも、俺は所詮雇われの身だ。そして、この仕事を失ったら、俺はすることがない。出来ることがない。だから、どんなにお嬢に惚れ

ていても手は出せないんだよ。だから、この旅に出る前に聞いたじゃないか。お嬢はその時、問題ないと言っていたじゃないか。俺が雇われのクルーだから男としては見做さないという意味かと思ったんだ。俺はがっかりしたけど、それだったら、夜も問題ないかなとも思ったんだ。」
「雇われのクルーなんて言って、うち、ほんとに失礼だよね。ごめんなさい。許してくれる？それに、問題ないって言ったのは部長に断られないようにと思ったからかもしれない。うちは、部長が一緒に船に乗ってくれて嬉しかっただけじゃなくて、一緒に居てくれて嬉しかったんだから。」
「じゃ、聞くが、もし、俺たちが関係を持って、それがお嬢の親爺さんに知れて、俺がクビになったらどう思う？」
「やめて！絶対にあんたをクビにはさせない。一緒に居て欲しい。」
「それだったら、きちんとしないと。」
「辛いよ。」
「言っとくけど、俺はお嬢に意地悪をしたいんじゃないんだよ。俺だってお嬢を抱けないのは辛いよ。だけど、きちんとしないと。問題は。」
「問題は？」
「どうしていいかわからいことだ。」
「部長、なんとかしてくれる？」

二人とも悶々としたままどうすることもできずにいた。それでも、もうほとんど夜が明けようかという頃になって、二人ともいつの間にか眠りについていた。二人が目が覚めたのはもう昼近かった。
「部長、随分辛い夜を押し付けてくれたね。」
「そうじゃないよ。俺だって、いや、俺の方が辛かったんじゃないかと思う。」
「なんかいい考えが浮かんだ？」
「いいや。ただ、一つ考え付いたことがある。テストをするんだ。お嬢がほんとに俺のことが好きかどうか、テストをするんだ。」
「どういうこと？」
「俺が休暇をもらうから、その間、代わりのクルーを雇ってくれ。もし、しばらくたって、まだ俺のことが好きだったら、多分ほんとに俺のことが好きなんだろう。そして、もし、代わりのクルーか、あるいは、誰か他の男が好きになったら、それは、それまでだ。俺は諦める。それは、諦めたくて諦めるのではない。もし、お嬢が他の男を好きになってしまったら、諦めざるを得ないよ。そして、その間、俺は、俺としては、何もすることはない。俺は今までお嬢以外の女に惚れたこともないし、付き合ったことさえな

いから、俺の方はテストをする必要はない。だが、収入は必要だから、何かしらバイトでもしなくてはならないだろう。」
「何それ！それは、あんまりだ。そのテストは残酷すぎるよ。うちに、他のクルーとセーリングをしろと言うの？！うちは、いままで何回も男の子と付き合ったことあるよ。何回か寝たこともあるよ。だけど、誰も部長みたいに筋が通ていなかった。もう、それがテストじゃない？うち、もうテストをパスしているんじゃない？」
「そう言ってくれて嬉しいよ。じゃ、他のテストを考えよう。例えば、お嬢がたった今親爺さんに電話して、『雇われのクルーが好きです。関係を持っていいですか？』って言えるか？」
「ん～。それは危険なテストだな。それ、うちは言えるよ。ただ、部長がさっき言ったみたいに、それであんたがクビにされたら、うちは耐えられない。ところで、部長は、他に異性経験がないって言っていたけど、もし他に、素敵な女性に出会っても、うちのこと捨てないって宣言できる？」
「おっと。反撃に出たかな。出来るよ。当然、他の経験がないからこの言葉に重みはないだろうけど。だけど、俺のお嬢に対する気持ちはもう限りがないんだ。こう言おうか。お嬢のためだったら死ねるよ。」
「止めて！死ぬなんて言わないで！もう少し、前向きなこと考えて！」
「それじゃ、これはどうかな。お嬢が俺のことを出さずに、親爺さんに、真剣に好きな恋人が出来たと言う。一緒に船で寝泊まりしていいかと聞く。もし、良いというなら。雇われのクルーを辞めて、その恋人と船に乗っていいかと聞く。つまり、親爺さんはもうクルーにお金を払わなくても良い。だが、今度は俺の収入が無くなる。俺は船で寝泊まりができてお嬢が食べ物を差し入れしてくれれば生きてはいける。だが、もし親爺さんが、まだ恋人と関係を持つのは早いと言ったら、どんな条件を満たせば良いか聞く。多分、この俺はお嬢の親爺さんの言うような条件は満たせないだろう。それに、妊娠したらどうするとか、将来計画はどうするとか、聞かれたらどうする？」
「部長、いろいろ考えてくれてありがと。今一つだけ言えることは、うちはまだ妊娠して子供を育てる準備が出来ていないということかな。だから、もし、妊娠の可能性のことを聞かれたら、十分に避妊に注意すると言うしかない。そして、将来計画は全くない。これは、多分うちの両親もわかっていると思う。うちにヨットをやらせてくれているのは、将来計画が出来るようになるための準備をさせてくれていることだと思う。」
「なるほど。そして、最後に俺が相手だと打ち明けらるのか？」
「うん。そう。じゃ、出来たよ。うち、親に電話するよ。」
「ほんとか？大丈夫か？」
「うん。そして、もう、バックアップ・プランさえ考えたよ。」

「何それ？」
「うち、もし、親が納得してくれなかったら、部長と夜逃げしてもいいよ。船も、親も捨てる。あんたを取るよ。」
「ほんとに？！そこまで、言えるの？」
「うん。部長が、いろいろ考えて、聞いてくれたおかげて、頭がすっきりした。今欲しいのは部長だけ。」
「そう言ってくれるなら、俺だって駆け落ちする覚悟はあるよ。親を置き去りにするのは罪だが、やっぱり、今一番欲しいのはお嬢だから。」
その後、二人はもう一度考えを復習した。そして、麗名が親に電話した。

麗名の親の反応は以下の通りだった。真剣な恋人が出来たことは祝福する。そこまで真剣なら、一緒に船で寝泊まりすることは構わない。ただし、すべての責任を自分で取ること。これには、妊娠の可能性を含む。麗名が彼氏の食べ物を差し入れすることも構わない。そのくらいの余裕はある。そして、将来計画のことは聞かれなかった。麗名の親がその点に関心がなかった訳ではないが、それは麗名が自分の経験から生み出さなければならないことなので親がどうのこうのということではないと悟っているからだろう。そして、麗名が最後にもう雇われのクルーを辞めても良い、ただし、相手は慎吾だと言ったとき、父親は、もう察していたと言った。それもそのはずだ。父親は、今麗名が慎吾と八代海方面のクルーズに出ていることを知っているわけだから。麗名のバックアップ・プランは無用だった。そして最後に、今まで慎吾に払っていた金額を二人の生活資金としてそのままくれるということになった。

麗名がその話を慎吾に伝えたとき、慎吾は泣いて喜んだ。これは、慎吾の期待以上の回答であった。慎吾はその後、すぐに麗名の父に電話をして、丁寧に礼を述べた。父親は慎吾に言った。
「秋葉さん、いや、慎吾さんと呼んでいいかな。実は、私も君と同じ高校の同じヨット部にいたんだよ。麗名はそのことを言ったかな？」
「いいえ。」
「そうか。たまたま、今のコーチは私の同期なんだ。それで、この広告を出す前から君の話は聞いていた。中学の時に苦労したことも、ヨット部の部長として地味だが誠実な働きをしていたことも聞いていた。そして、初めて実際に君に会った時にはもう分かっていたんだよ。すぐに麗名が君に惹かれると察したよ。もし、それが不安だったら、もともと君を雇ったりしないよな。ただ、一つ分からなかったことがある。それは、君が金持ちのわがまま娘にどのような対応するかということだ。テストと言っては失礼だが、結果としては、君の麗名に対する対応は、私たちの想像を上回るものだった。私たちは

君に感謝しているし、そこまで出来る君のことを立派だと思っているよ。ところで、あのわがまま娘のどこが気に入ったんだね？」
慎吾は予期していない質問に少しためらった。
「あの～。わがままなところです。」
「えっ？！」
「いえ。わがままなことがいいと言っているのではありません。わがままなことを隠し立てしない素直さというか。そうです。僕はわがままで傲慢な人は耐えられません。でも、麗名さんはわがままで素直なのです。多分、僕の言い方が間違っていたと思います。僕が好きなのは、麗名さんの素直なところです。そして、僕の言うことや行動にほんとに素直に反応してくれます。それで、確かに、失礼ですが、金持ちのわがまま娘だとは思いますが、それを気にせずにお付き合いできるのです。僕は、今までの短い人生の間でも、自分を取り繕って生きて来なければなりませんでした。ところが、麗名さんといると自分のままでいいのです。それは、麗名さんが自分のままで対応してくれるからだと思います。」
「確かに、君の麗名についての見方は当たっているかもしれない。麗名は良いことも悪いことも隠し立てしない。だから、私たちは麗名の失敗や過ちも大体知っているか感ずいている。いずれにしても、君の気持ちを説明してくれてありがとう。よくそう言ってくれた。君はまだ若いし、君も麗名もまだはっきりした将来計画というものがないだろう。私たちは、それでいいと思っているんだよ。だから、麗名に好きなことをさせている。ただし、人生ずっとそうしている訳にはいかない。いずれは自分たちの道を自分で見つけて進まなければいけない。私たちは、君と麗名が一緒に進んで行く道を探したいというなら、喜んで応援する。そして、将来、きっと君達が世のためになることをしてくれると信じている。仲良くやってくれ。そして、我が家を自分の家と思って、いつでも来てくれ。」

慎吾にはもう返す言葉がなかった。ただ、ただ、礼を言って電話を切った。麗名の父の言葉を麗名に伝えると、麗名も泣いて喜んだ。そして、慎吾は静かに言った。
「お嬢は良い家に育ったね。」

いつの間にか、もう二日目の夕刻になっていた。この日は全く船を動かさずに終わてしまったのだ。二人は夕食を取り、また月を見て、寝床に入った。この日は麗名の両親に祝福されて、晴れ晴れと一つのベッドに入った。

それからというもの、慎吾と麗名はほとんど船での生活だった。マリーナに停泊していることもあったし、長崎近辺の至る所へもクルーズした。そんな調子で怠惰な何年かを過ごした。当然、その間に、いろいろと昔話をすることもあった。

「俺は中学の途中まで、埼玉で育ったんだよ。」
「へ～。じゃ、都会っ子なの？」
「いや。埼玉の田舎だ。埼玉もかなり大きいからいろいろなところがある。ないのは海だけだ。」
「じゃ、長崎に来て良かったじゃない。」
「ところが、どうも、中学の途中で引っ越して来たことが学校でのいじめの理由になったと思うんだ。少なくとも、俺には他に理由が浮かばない。」
「ひょっとして、部長の話し方も関係していない？かなり方言の強い長崎で、埼玉訛りは受けないかもね。」
「それは気がつかなかったが、そうかもしれない。」
「うちも、子供の頃、ほとんど横浜で過ごしたから、その感じは分かるよ。言語心理学の講義で聞いたんだけど、一般的には10歳くらいまでにその土地の言葉を身につけないと土地の訛りは身につかないらしい。それから、なぜか、うちの親戚ってほとんど港町に住んでるの。横浜の他に、神戸、石巻、函館とかね。」
「へ～。先祖はポリネシアの海洋民族かな？」
「うちの顔、そういう感じじゃないでしょ。どうやら純粋の日本人だと思うよ。家系図とかあるといいんだけど、そういう話は聞いたことがないし。」
「俺の家族もそんなもの持っていないだろうな。」

「それから、うちの名前はね、母が京都で大学生のころなんだけど、一緒に大学の環境保護団体でボランティア活動をしていた女友達の母の名前を頂いたんだって。何でも、その友達の両親は何年もかけて世界一周旅行をしたという話を聞いて、うちにも見聞の広い人間になってほしいという希望から頂いたらしい。」
「それ、俺の場合と似てるな。俺の父は、若いころ関西で、建設中の建物とかのコンクリートに配管が通るような穴を開けるアルバイトをしていたらしいんだ。その時、一緒に働いていた女の子の両親が世界一周旅行をしたと言っていた。貧しかった父は、世界一周が出来るくらい豊かになってほしいと思って、俺にその女の子の父の名前を付けたということだ。少し、軽率かもしれないけど。」
「ねぇ、その女性、ひょっとして同一人物かな？そしたら、その両親も慎吾に麗名？」
「もしかしたらね。お嬢のお母さんも俺の父も同年代で、二人ともその頃関西に居たわけだし。当時、両親が世界一周旅行をしたことがある人なんてそんなにいる訳ないよな。

だけど、その女の子、お嬢のお母さんと同じ大学の環境保護団体に入っていたんだったら、やっぱりお嬢さんだよね。俺の父と同じ土方のようなアルバイトをするのは不似合いだよな。」
「うん。だけど、その女性はうちの母の大学には所属していなかったらしいよ。環境問題に真剣で、その団体にだけ特別に入っていたんだって。それに、その女性は高校卒業後、むやみに大学に行くのは良くないという両親の意見を尊重して、いろいろな経験をしていたらしい。だから、そのアルバイトをしていた可能性は十分あると思うよ。」
「ふ〜ん。その女の子の両親まだ生きているかな？」
「かもね。でも、うちの母はもうその女性の連絡先は分からないって言ってた。」
「俺の父も同じだろう。」

「それにしても、うちの家族がうちに好き放題をさせているのは無責任かな？」
「そうじゃないと思うよ。自信があるんじゃないかな。もう今までに、お嬢には授けるものは授けた。後は、自分で将来を切り開かなければならないと言ってるように思える。そして、何かあったらお嬢の事を完全にサポートする準備が出来ていると思う。リスクは高いかもしれないけど、大した責任感だと思うよ。」
「それって、ひょっとして、その、世界一周をして、うちらの名前の由来となった夫婦が娘に関西でいろいろな経験をさせていたことと似てる？」
「そうかもしれない。」

また、少しずつ、遠出もするようになった。その時は、西表島まで、２週間程かけてのクルーズに出かけた帰りだった。それまでは天候も良く、二人は大海原を満喫していた。

それなのに、慎吾が急に大きな声を出した。
「なんだか急に風が出てきた。空模様がおかしい。今日は天気がいいはずだったのに。お嬢、念のためライフジャケットを付けてくれる？」
慎吾がライフジャケットを麗名に渡そうとした瞬間に、予想外の逆風を受けた船体は大きく傾いた。そして、メインセールのブームが慎吾の方に手を伸ばそうとしていたところの麗名の頭に強くあたり、麗名が海に放り出された。慎吾は麗名が泳げないことを知っているので、動転した。慌てて、手に持っていたライフジャケットごと海に飛び込んだ。麗名のところまで泳いで行き、気を失っている麗名の顔を水から出し、必死で叩いた。一つのライフジャケットを頼りにかろうじて水面に留まりながら、麗名の意識を取り戻そうと努めた。この間、慎吾には永遠の時間に思えたが、やっと麗名の意識が回復した。
「部わっ！！がっ！！」

「お嬢！！」
だが、慎吾が慌てて飛び込んだ後、ヨットはそのまま遠くまで進んでしまっている。とても泳いで追いつける状態ではなかった。麗名はライフジャケットにすがり、慎吾は自力で顔を水面上に保った。無線も非常灯も何もない。こんな大海原で、どれだけ持ちこたえることが出来るだろうか。二人は絶望的になった。一つだけ幸いなことは、波がそれほど高くないことであった。

どのくらい時間が経ったことか、気が付くと、いつの間にか風が静かになっていた。そして、驚いたことに、どこからともなく、一台の大きな船が現れた。それは、いわゆるモーターヨットと言われるタイプだろう。モーターボートのようだが、マストも付いている。そして、船の横には大きな竜の絵が描いてある。すぐに船の中から一人の男性が現れ、二人にロープの着いた救助用の浮き輪を二つ投げた。その男性はまず麗名を、続いて慎吾を船内に引きずり上げた。そして、二人に言った。
「良かった。間に合った。」
麗名は泣き出した。今度は慎吾がその男性に言った。
「あなたは？どうしてここに？」
「そんなことはいい。兎に角、良かった。下に何かしら服があるから着替えて来いよ。」
「ありがとうございます。助けてくれてありがとうございます。」

慎吾と麗名は下のキャビンで、そこにあった服に着替えてから上に戻ってきた。慎吾が言った。
「ほんとにどうもありがとうございます。あなたは？」
「あぁ、大介。」
「こちらは麗名で、僕は慎吾です。ほんとにありがとうございます。」
「いいんだよ。お互い様だ。それから、二人の名前は前に聞いたことがあるよ。」
「えっ？僕たちのことですか？」
「いや、違う人達だ。まぁ、いい。このポットに暖かい飲み物があるからどうぞ。それから、レーダーで君たちの船を追跡しているから、今からそこに向かおう。」
そう言うと、大介は高速で船を動かし、すぐに二人のヨットに追いつき、横付けした。
「さぁ、もう天候も大丈夫だろうから、君たちは自分で帆走できるよね。」
「はい。ほんとにありがとうございます。それで、お礼をしたいのですが、連絡先を教えてくれますか？」
「良いんだよ。お互い様だ。気にしないでくれ。また会う日もあるだろう。」
慎吾と麗名が自分たちの船に戻ると、大介の船はあっという間に見えなくなった。慎吾

と麗名はそれでも手を振っていた。

「不思議だな。誰だろう。」
「うち、あまりにあっけに取られて、何も喋れなかった。お礼さえ言えなかった。」
「大丈夫だよ。大介さんは分かっているよ。」
「えっ、大介さんって、あの人？」
「そうだよ。そう言っていたじゃない。」
「うち、それさえ聞こえていなかった。」
「あぁ、無理もないさ。とんでもない状態だったからな。でも、あまりに不思議だ。それにしても、大介さんのおかげで俺たちは命を救われた。」
「でも、どうして、うちらは海の中に居たの？」
「あの時のこと覚えていないの？逆風にあおられた時、ブームがお嬢の頭にあたって、海に放り出されたんだよ。」
「えっ、じゃー、部長、その後、海に飛び込んだの？あの、ウミガメを助けに行った時のように？」
「まぁ、そういうことだ。」
「部長、ほんとにうちのために死んだかもしれないのに？それでも、飛び込んだの？」
「もういいよ。俺たちまだ生きてるじゃないか。」
二人は抱き合って、泣いた。それから、長崎に戻るまで、麗名はいつもライフジャケットを付けていた。

長崎に戻ってからしばらく経った頃、長崎湾の外でアンカーを降ろして休んでいる時、麗名がボソッと言った。
「部長、うち、泳ぎを習うよ。」
「それは良いことだ。」
「ここで教えてくれる？」
「海で？」
「ここにこんなに水があるのに、わざわざプールに行く必要はないよね。」
「それもそうだ。それに、海水の方が体が浮くから簡単かもね。」
「もう一つ考えたことがあるんだけど。」
「何？」
「もし飛行機に乗ることがあったら、パラシュート持っていこうね。」

この出来事があってから、二人の気持ちに徐々に変化が現れ始めた。二人とも船で好き勝手な時間を費やすことは何より幸せと思っていた。だが、このままではいけない。何か始めないという気持ちが起こっていた。そして、慎吾がいつも思うことは、二人とも現実社会から逃げているということだ。それは、慎吾が中学の時に体験した登校拒否と変わらないのではないか、そして、麗名が大学に行かずにいることも基本的には同じだということである。世の中に、どれだけ登校拒否の子供たちが居るのだろうか。慎吾は少しずつ二人だけの世界から外界にも目を向けるようになってきた。

ある日、キャビンの小さな窓から朝日が入り込んできた頃、慎吾がそっと話し出した。
「お嬢、最近考えていることがあるんだけど。」
「う～ん、」
「俺たち、何か登校拒否の子供たちのために出来ることがないかな？」
「う～ん、」
「例えば、登校拒否の子供たちをこの船に乗せるとか。」
「う～ん、」
「どう思う？」
「いいよ。」
「お嬢、ちゃんと目覚めてる？」
「うん。」
「じゃ、もう一度聞くけど、登校拒否の子供たちをこの船に乗せてあげるというアイデアをどう思う？」
「いいよ。」
「ほんとに？それだったら、この船はお嬢の家族の持ち物だから、両親の許可も得ないと。」
麗名はヌーっと両腕を伸ばし、大きなあくびをしてからゆっくりと答えた。
「うん。分かった。うち、そのアイデア、いいと思うよ。部長は、よく、うちも大学の登校拒否だって言ってるよね。そう言われるまで気がつかなかったけど。そういう大学生もいるんだろうなぁと思うよ。あとで、親に電話しよう。」

その日の夕方、二人が麗名の両親にそのアイデアを言うと、両親は喜んで賛成してくれた。そこで、慎吾と麗名はいくつかの可能性を探り始めた。まずは、「登校拒否に対応する会」に連絡して相談してみた。「対応する会」の専務理事と打ち合わせた結果は以下の通りである。暫くの間、慎吾と麗名は九州支部のある福岡に滞在して、試験的に希望する登校拒否児のためのクルーズを実施する。そして、その結果によって、他の地域へ出向いてはどうかという案である。そこで、早速、「対応する会」が協賛イベントと

してウェブページに広告を掲載した。登校拒否に関するその他の団体にも情報を提供した。話が決まると、慎吾と麗名は福岡へ向けて出発した。

まずは、福岡のマリーナと短期滞在契約をした。翌日には、二人を「対応する会」の九州支部事務長が訪れた。クルーズに参加する対象は登校拒否の小中高校生とし、保護者は含まない。それから、ぼつぼつと登校拒否の子供を持つ親が訪れ、二人と話をしていった。慎吾が元登校拒否児だったと聞き安心する親もいた。

それから数日後には、最初の子供がやって来た。利治という小学６年生の男子だ。慎吾と同様、いじめられたという。慎吾には強く感じるものがあった。だが、このクルーズの方針としては、参加者にクルーズの機会を与えるだけでそれ以上積極的に登校拒否の対策をするわけではない。当然、その間に会話をすることもある。そんな時は、自然に生じた話題を自然に話すことに努めるということである。

思春期を迎えつつある利治には若い二人の間柄に興味があったと見える。
「二人は『部長』とか『お嬢』って変な呼び方してるけど、どういう関係なの？」
慎吾と麗名は不意を打たれた感があったが、麗名がすぐに答えた。
「うちらは、恋人同士。結婚はしてないけど、いつも一緒にこのヨットで暮らしているの。」
慎吾が付け足した。
「でもね、お嬢は、ほんとにお嬢さんなんだよ。お嬢の家族がこのヨットを持ってるんだから。」
「それを言うなら、部長はね、ほんとに高校のヨット部の部長だったんだよ。」
「へ～、変なカップルだね。それから、このヨットで暮らしているって言うことは同棲しているということ？」
話題がどこに行くのか少し疑問を感じつつ、慎吾が答えた。
「まぁ、そういうことかな。結婚はしていなくても、二人でずうっと一緒に暮らそうと決めているから、事実上夫婦と同じだよ。」
「じゃ、なぜ結婚しないの？」
「そう言われると困るけど、結婚という形式にとらわれなくても、好きな人が一緒に住むのは良いんじゃないかな。たとえば、犬が好きな人は犬と結婚する訳にはいかないけど、一緒に住むのは普通だよね。」
「部長さん、なんだか、変な説明だね。」

二番目の子供は、清美という小学５年生の女子だ。親との事前の打ち合わせでは清美の

担任が気に入った生徒だけひいきするというのだ。清美がその事を親に訴え、親が学校側に訴えたのだが、らちが開かず、転校を考えているという。しかし、その話が進展する前に、清美はどの学校にも行きたくないと言い出したらしい。クルーズの途中、清美は一言もしゃべらなかった。クルーズに来たかったわけでもないのだろう。ただ一つ、慎吾の気が付いたことがある。慎吾がギターを弾いているのをかなり真剣に聞いて、横目でチラリチラリと観ていたことだ。何かを考えていると思った。ひょっとしたらギターを練習したいと思っていたか、他に何か音楽の事を考えていたのかもしれない。慎吾はかなり長いことギターを弾いていたが、清美には特に何も言わなかった。これは後で聞いた話だが、清美は家に帰ってから親にギターが欲しいと言ったらしい。

三番目の子供は、和人という高校２年生の男子だった。学校でケンカを含めた、いわゆる不良行為で停学となり、期間が切れても、もう学校には戻らなかった。今は毎日自分の部屋でゲームをしている状態である。クルーズには、ほとんど無理やり父親に連れて来られた様子だ。和人は終始不機嫌だった。それでも、慎吾と麗名はいつも通り、普通に行動した。和人は最後にヨットを降りる時に、投げ捨てるように、「金持ちの道楽か」と言ったのだ。

和人の姿が見えなくなるとすぐに慎吾が言った。
「お嬢、やっぱり止めようか。」
「えっ、何を？」
「登校拒否の子供たちを乗せることだよ。」
「どうして！」
「意味がないんじゃないかな。所詮、金持ちの道楽だよ。俺は金持ちじゃないけど、お嬢と一緒に居る限り、やっぱり金持ちの紐だ。」
「そんなこと言わないで！これは、部長のアイデアなんだから、もう少し責任を持って！うちが好きな部長は始めたばかりで仕事を投げ出すような人じゃないよ。」
「あ～、そんな部長はもう居ないよ。ちょっと街を歩いてくるよ。」
「行かないで！」

慎吾は船を降りるとどこかへ立ち去ってしまった。後に残された麗名は泣き始めた。麗名には慎吾の気持ちが全く分からない訳ではない。それでも、そんな事を肯定することは出来なかった。そして、麗名自身にも疑問がない訳ではなかった。いずれにしても、あの慎吾が一人でどこかへ行ってしまったという事実が何事にも変えられず悲しかった。もし帰ってこなかったらどうしよう。そんな不安さえよぎった。涙が止まらなかった。

慎吾は街をひたすら歩いた。中学の時、登校拒否児だったとはいえ、高校ではヨット部の活動に熱中できたし、そして、今や麗名とその家族のおかげで恵まれ過ぎている状況にある。自分よりもっと苦しんでいる登校拒否児達の手助けが本当に出来るのだろうか？どうしてもその疑問を解消できないでいた。歩き疲れて公園のベンチに腰を下した瞬間に、隣にあの和人が座っていることに気が付いた。慎吾が尋ねた。「じゃ、俺はどうしたらいいんだ。」和人の方を向くと、いつの間にか、そこには和人ではなく僧侶のような人が座っている。そして、その僧侶がボソッと呟いた。
「ところで、お嬢様はどうなされていますか？」
慎吾はハッとした。我に返ったように、「お嬢！」と叫んで立ち上がった。その時には、もう隣の僧侶の姿はなかった。慎吾は慣れない福岡の街の中を早足で船まで戻った。どのくらい時間が経っていたか、麗名はまだ泣いていた。慎吾は麗名を強く抱いてから言った。
「お嬢、ごめん。勝手に出て行ってしまって。許してくれ。自分勝手だった。もうこんなことしないよ。」
麗名はまだ何も言わずに泣いていた。

その後、二人は気を取り直して、登校拒否の子供のためのクルーズの事を話し合った。
「確かに、これは金持ちの道楽かもしれない。俺はそれを否定できない。だけど、俺には他の出来ることがない。お嬢の言った通り、できる範囲で続けるよ。実は、登校拒否の子供に息抜きの場を与えるというのは口実で、これは、自分達の成長のための機会なんじゃないかと思ってきた。俺は大学には行けなかったし、お嬢は事実上の中退だ。でも、学校だけが勉強の場所じゃない。これを機会に少しでも社会を体験しよう。」
「部長、ありがとう。ありがとう、帰ってきてくれて。」

福岡ではその後も何人かの登校拒否児をクルーズに迎えた。その結果を「対応する会」の職員たちと検討した結果、同じ調子で全国を回るということが決まった。時間的なことは未定だが、何年という単位で続けるという見通しである。大都市に近い港では一か所に数年は滞在することになるだろう。

慎吾と麗名は、福岡を後にした。瀬戸内海を通って、広島、高松で数週間ずつを過ごした後に、神戸に着いた。神戸には麗名の親戚が居るので、時にはそこに滞在することもあった。その家庭には幼稚園児が居たのだが、稀に両親が同時に働かなくてはならない夕刻など、子守を頼まれることもあった。慎吾も麗名も幼稚園児の扱いは慣れておらず、

かなりの苦戦をした。ある時は二人とも風邪をひいていて、幼稚園児と遊ぶ気力がなく、ビデオを見せてなんとか乗り切ったこともあった。

神戸に居る間は関西各地からクルーズ参加者が来た。中には、何度も、ほぼ定期的に訪れる子供もいた。高校一年の年頃の卓也もそのうちの一人だった。卓也は登校拒否児とはいえ、少し変わっている。学校ではロクなことを学べないから行かないと言うのだ。彼は野外派で一人で山の中に入ってキャンプをしたり、野宿をしながら旅をしたりしてしまうというのだ。慎吾と麗名のクルーズに来るようになると、これも気に入ったようで毎週のように来た。卓也の好きなのは、神戸港から出来るだけ離れて少しでも自然の多い所へいくということだ。と言っても限度があるので、通常、淡路島の近辺に行くのがせいぜいである。卓也は慎吾や麗名とも打ち解けて、クルーズの途中いろいろなことを話す。卓也の家庭は一般家庭であるが、両親共に非常に革新的、進歩的である。それで、卓也には学校で言われたことをするだけの人間になって欲しくないと念願していると言う。そして、何をするかを自分で見つけ出さなければいけないと言う。これには、慎吾と麗名も共感する。基本的には二人も同じ路線を行っているに過ぎない。

冬の間は寒いため、参加者が少ない。それで、慎吾と麗名はクルーズ以外のことに多く時間を費やした。親戚の幼稚園児の子守もしたし、近くの名所を見物することもあった。なかでも、二人のよく行った場所に摩耶山がある。そこから望む夜景は、長崎の稲佐山を思い出させ、何回でも行きたくなる。
「部長がうちを稲佐山に連れて行ってくれた時覚えてる？周りは恋人だらけで、うちも、実はそういう気持ちがしていた。ここに頼りに出来る人が居ると思うと体が熱くなったなぁ。それでも、部長は素知らぬ顔をしていたよね。」
「素知らぬ顔ね。俺は演技派だったのかな？あの時は生まれて初めてのデートで相当興奮してたよ。ちょっとお嬢の体に触れたりするとどうしていいか分からなかった。下手に触って、平手打ちでも食らったらどうしようかと思ってたよ。」
「今思うと、おかしいね。」

ある時は、ケーブルカー・バス・ロープウェイを乗り継いで、有馬温泉まで行ってみた。滞在中、他に特に行く所もなかったので、湯泉神社へ出向いた。ここは古くから子宝神社として名高い。
「その当時、子供が欲しくて、か、必要に迫られて多くの奥さんがここに子宝を授かりに来たんだなぁ。俺たちはそうじゃないから、とてもお参りは出来ない。俺たちには子供を産んで育てる資格はないな。」
「そうだよね。未熟なんだよね。」

そして、当然のように京都へも行った。随分と修学旅行の学生が目についた。それで、二人とも自分たちの京都への修学旅行のことを思い出していた。その頃は、高校卒業後の進路も決まっておらず、ただ、家庭から離れて過ごす昼夜が楽しかった。今は連れと一緒に京都を訪れることが出来、何とも嬉しかった。

神戸で二回目の冬を越した後、次の拠点、浜名湖へ向けて出発した。停泊地は、浜名湖の奥深く、舘山寺温泉のそばにあるマリーナだった。ここでも多くの参加者をクルーズに受け入れた。また、マリーナから歩いて行ける所にホテルがあり、そこにはいつもピアノを弾いている女性が居た。その演奏はホテルのロビーにふさわしい静かなものが多かったが、時にはコンサートで聴くような著名なクラシックも弾いてくれた。いつまで聞いていても飽きないレパートリーだった。慎吾と麗名はよく食事や休憩にそのホテルに行き、長いことピアノを聞いたものだ。

その後、横浜まで一週間ほどかけて航海した。ここにも麗名の親戚が居る。この親戚は子供が巣立ってしまった中年の夫婦で、アパートの一室を自由に使わせてくれた。ここは麗名が子供の頃過ごした地域から遠くない。麗名の住んでいたアパートや通っていた学校の周りにも行ってみた。その辺はすでに新しい建物や店が出来ていて、とても同じ場所とは思えなかった。横浜では、関東全域からクルーズの参加者があった。日帰りのクルーズでは東京湾の中だけしか行けないが、それでも風によっては久里浜や千葉側まで行ったり、それなりに景色の良い所へも行けた。横浜では、三回冬を超えることになる。

その間、残念なことに、慎吾の世話になった海洋高校のヨット部の顧問が急に亡くなり、葬儀に出席することになった。慎吾と麗名は羽田から飛行機で長崎に戻ることにした。搭乗前、麗名は一人で空港のお土産屋さんに入って何やら買ってきた。飛行機に乗ってから、麗名が包みを開け、慎吾に買ってきたものを見せながら言った。
「部長、前から考えていたんだけど、飛行機に乗るときはこれが必要だと思って。ちゃんと、二つあるよ。」
それは、指先くらい大きさの人形に付ける、おもちゃのパラシュートだった。

顧問の葬儀には旧友である麗名の父も夫婦で参列していた。その後、慎吾と麗名は麗名の両親のアパートへ向かい数日そこで過ごした。両親はたとえどんなことでも二人が自分達で見つけた道を進んでいることを嬉しく思っていた。そして、二人が横浜まで戻るときは両親が長崎空港まで送ってくれた。

横浜滞在中も、冬の間はあまりクルーズ参加者が居ないので二人で出歩くことが多かった。ある時は、慎吾の育った埼玉へ出向いた。そこは埼玉の北西部、かなりの田舎である。慎吾の父は近くの精密機器工場に勤め、家族はこの町の社員家族寮に住んでいた。やがて工場が閉鎖され、父が長崎の関連会社を紹介され転職したのだ。

慎吾の住んでいた社員家族寮のあったところに行くと、そこは空き地になっていた。過疎の町で、農地にしても利用する人が居ないのでそのままになっているのだろう。帰り道、バス停まで歩いている間に二人は「安心～の宿・第一宿」という看板を見かけた。一見普通の家だが「必要な時はいつでも戸を叩いて下さい」とも書いてあった。二人はそれ以上詮索しなかったが、何かを感じたようでもあった。

横浜での最後の冬の後、二人は太平洋岸を北に向けて航海した。房総半島を回り、銚子、大洗海岸等、途中何か所か寄港して、石巻に到着した。ここでも、麗名の親戚に会い、仙台近辺の登校拒否児のためのクルーズを実施した後、三陸海岸沖を北上した。途中、釜石では、依然津波の被害が生々しく思われた。そして、函館で暫くクルーズをしていたが、冬が近づき、ここで冬ごもりをすることになった。函館には麗名のいとこが住んでいる。彼女はイベント・コーディネーターで、金森赤レンガ倉庫内のイベントの多くを手掛けている。それで、時には慎吾と麗名にチケットをくれたりすることもあった。函館の冬は流石に寒く、船内に備え付けの一台のセラミックヒーターだけでは足りなかった。それで、もう一台追加することになった。それでも寒い極寒時は、麗名のいとこのアパートに避難することもあった。

函館で二人の好んだ場所の一つに函館山がある。ここからの夜景は美しく、長崎、神戸と並び、港でのロマンスに最適だ。そして、ここでの長い冬を有効に過ごそうということで、資金調達と社会経験を兼ねてバイトをすることにした。幸い、マリーナから歩いて行けるところにいくつか出来ることがあった。まず、昼間は函館ベイホテルでメイドのパート、そして、夕刻は定食屋で手伝いをすることにした。二人はここで夕食も食べられる。いずれにしても経験不足の二人にはかなりの困難であったことは間違いない。特に、麗名はろくに自分のベッドさえ整えたこともなく、料理や食事の手伝いをしたことさえない。慎吾の方が多少家の手伝いをせざるを得ない環境だったので、いくぶんマシであった。

麗名は二つの仕事が苦痛で仕方がなかったが、慎吾の手前、我慢に我慢を重ねて続けた。世の中にこういった仕事を毎日毎日長い時間しなければ生きていけない人が多く居る中、二人の状況は恵まれすぎている。二人の中には、少しでも普通の労働経験をして、登校

拒否児のためのクルーズが終了した時のために役立てようという気持ちがあった。だが、果たして将来どんな仕事が出来るだろうかという不安もあった。

長い冬が終わると、二人は北海道各地でクルーズをするため出発した。主な開催拠点は、苫小牧、釧路、網走、稚内、小樽で、その後再び函館に戻ってきてもう一冬越すことになる。時間のある時は各拠点から行ける観光地にも行ってみた。釧路からは摩周湖と屈斜路湖へ、小樽からは札幌へ行った。

函館での二回目の冬もバイトをするわけであるが、麗名がどうしてもホテルのメイドはやりたくないということで、昼間は近くのコンビニで働くことにした。ただ、求人は一人分しかなかったので、麗名だけそこで働き、慎吾は他のバイトを探さなければならなかった。やっとのことで見つけたのは公園のスノーモービル・レンタルの仕事である。寒い中、屋外で過ごす時間が長く、楽ではない。だが、たまに雪の中をスノーモービルで突っ走るのは爽快でもあった。自然な風の力で日本を周遊している二人にとっては稀なことなので、この時くらいは化石燃料を燃やしてもいいかと思った。夕刻はこの冬も定食屋の手伝いを続けた。バイトを何種類か試してみたわけであるが、どれも何の資格も経験も必要としないものだ。そういった仕事で収入が良いわけもないし、やりがいを見出すのも難しいことだった。二人ともまだ、自分達しかできず、それでいてやりがいのある仕事を探すのは難しいと痛感せざるを得なかった。

長い冬の後、二人は函館を後にして日本海を南下し始めた。秋田寄港の際は市内観光をし、新潟でも暫く停泊した。富山でもクルーズ参加者をヨットに乗せた。また、ここでは富山民族民芸村を見物した。中でも売薬資料館は富山ならではのもので、興味深かった。江戸時代に栄えた薬売りの話、特別な子宝の薬の秘話等の展示もあった。有馬温泉の鉱泉含有物を湯船に入れて同じ効用を狙う画期的な商品もあったらしい。

富山の後は、能登半島を回って、自殺でも良く知られる名所の東尋坊の沖を通る。せっかくなのでと、近くの三国港に船を留め、陸地からも断崖を見物に行った。その時、二人は、近くの駐車場に大きな竜の絵が描かれた大型トラックが駐車してあることに気が付いた。
「お嬢、あれ大介さんのモーターヨットに描かれていた竜に似てるね。」
「あの時うちはあまりのショックではっきり思い出せないんだけど、そうだったの？」
「いずれにしても、自殺を考えなければならない人たちはほんとに絶望的なんだろうな。俺にはどうしても理解できないけど。登校拒否の時もそこまでは思い詰めていなかったし。」

「うちは部長と一緒で幸せすぎる。だから、死にたいという気持ちは到底分からない。」

その後は、舞鶴、鳥取を経て、出雲に停泊した。ここでは、豪商屋敷跡を見物した。江戸末期にその豪商の奥様が有馬温泉への旅行の帰りに旅籠屋の火事で命を落としたという話が伝わっている。それから、下関に寄港後、再び瀬戸内海へ抜けて今度は高知に停泊した。それから、宮崎を経由して奄美大島、沖縄へと、さらに数年かけての航海をした。最後に、熊本に寄ってから、出発点、長崎に戻った。かれこれ１２年にも渡る日本一周の経験だった。登校拒否児のためのクルーズで、慎吾も麗名も出来るだけのことをしたつもりでいたが、果たして効果があったのかどうか、二人ともそれほど自身があった訳ではなかった。二人にとって、一番実りがあったことは、日本各地を回り、いろいろな人々と出会い、断片的ながら様々な経験をして、少しは世の中の事を知れたということだろう。

二人の日本一周の航海の最後の頃、長崎に近づきつつある頃に始まったことだが、慎吾がセールを操作する手に力が入らないことがあると言い出した。長崎に帰ってからは舟の修復のため、二人は麗名の実家に滞在していたが、慎吾の手の力は全く回復せず、さらに悪くなっていくようだった。そして、手だけでなく、上腕、足の力も弱まってきたようだと言い出した。心配した麗名は慎吾を病院に連れて行った。精密検査の結果は絶望的だった。筋萎縮性側索硬化症、英語略称ではALSと言われたのだ。この病気は米国の有名な大リーグ野球選手に因んでルー・ゲーリック病とも呼ばれる。未だ効果的な治療法はなく、筋力低下が全身に広がって、呼吸器官に及んだ時には呼吸困難となり死に至る。予後は診断時点では１年から１０年と幅が広く、個人差が激しい。途中経過によって、より確実な数字が想定出来るらしい。

病院でこのことを告げられた時、慎吾も麗名も現実を把握しかねていた。だが、病院から出た途端に麗名が大声を上げて泣き始めた。初めは、慎吾には麗名の泣き声の方がショックだったが、現実の重さが自分にも伝わってきた。慎吾の余命が数年であるという事実が大きくのしかかってきた。二人はその場に立ち止まった。暫く強く抱き合って居たが、仕方がなく病院の駐車場のはじにあるベンチに腰掛けた。
「ひどすぎる！部長、死なないで！」
「お嬢、俺にはまだそんな実感はないんだ。まだどうなるか分からないじゃないか。」

二人はアパートに帰ると麗名の両親にその話をした。両親は出来ることはなんでもすると約束した。その日は、誰も夕食を取らなかった。次の日から、二人は治療法について調べ始めた。だが、調べれば調べるほど絶望的になった。この時点で慎吾の両親と相談し、慎吾はそのまま麗名の両親のアパートに滞在することにした。そして、慎吾の容態は少しずつだが、確実に悪化していった。運動機能が徐々に低下し、とてもヨットに乗れる状態ではなくなってしまった。そして、二年弱で寝たきりに近い状態になってしまった。あまりの変化に麗名は毎日泣いて過ごした。麗名は一生懸命に慎吾の世話をしたが、時には、慎吾の方が麗名のことを心配して少しは外に出かけて息抜きをした方が良いと言うこともあった。

ある日のこと、慎吾が思い出したように言い始めた。
「お嬢、前にネットで読んだことなんだけど、俺の最後を見届ける時に役立つと思うことがあるから聞いてよ。」
「そんなこと言わないでよ！」
「もう避けられないんだから。俺がまだ話せるうちに聞いてよ。それはね、動物は死ぬ間際になると、吸い込む酸素を呼吸機能そのものに使い切ってしまう。だから、酸素を脳まで送ることは出来なくなる。それで、その時までにはもう脳は活動を停止しているんだ。そして、呼吸機能に必要な酸素さえ得られなくなる時に、最後のあがきのような呼吸をする。でも、その時はもう脳の活動は終了しているから苦しくないんだ。安らかなんだよ。だから、慌てないで欲しい。」
「部長！」

その後、慎吾の言葉は段々と少なくなる。その時は気がつかなかったが、ある時慎吾の言った言葉が最後になった。
「お、じょ、、、あ、、が、、」
「部長ー！！！」

それからは、段々と首も動かせなくなってきた。そのため、麗名の問いかけに、目玉を下に動かしたら肯定、横に動かしたら否定という応答しかできなくなった。そして、仕舞には昏睡状態に陥ってしまった。それから約一月後、慎吾の言っていた最後のあがき的な呼吸をしたかと思うと呼吸が止まった。慎吾の言葉を思い出して、麗名は慎吾が苦しまなかったのだとは分かっていた。それでも、もう慎吾が生きていないという状態に耐えられなかった。発症から約３年半後の事であった。

それから一週間後、麗名の父がヨットの舵を取って麗名と数人の同乗者がマリーナを出

た。この時に操船の手伝いをしたのは、神戸で頻繁にクルーズに参加していた卓也であった。また、麗名が驚いたことに、かつて福岡でクルーズに参加して「金持ちの道楽か」と言った和人もいた。大そう神妙な顔をしていた。そして、もう一人、やはり福岡から清美も来た。長崎湾の端に差し掛かった時は、沖ノ島の上に夕日が沈もうとした。この時、清美は自分のギターで「太陽がいっぱい」を弾き始めた。麗名は船からその夕日めがけて慎吾の遺灰を投げ放った。遺灰は一時夕日を受けてキラキラと輝いたかのように見えたがすぐに海面に達し、長崎湾の底へ沈んでいった。その時までに、麗名の涙は出切ってしまっていたのだろう。夕日に映ったのは、麗名の目から流れ落ちた涙の痕だけであった。

慎吾を亡くした麗名は愕然としていた。両親の慰めも効かず、徒歩の旅に出ると言い出した。長崎を後に北へ向かい、本土に渡った。海を見るのも辛く、中国地方の山間部に入った。当てがあるわけではないが、何かに導かれているようでもある。途中、東尋坊の事を思い出し、無意識に自分がそこへ向かっているのではないかと思うこともあった。だが、急いでもいる訳でもなかった。

その途中、鳥取県南部の智頭町というところへたどり着いた。街の中を歩いている時に、観光客が「恋山寺」という地方鉄道の無人駅の事を話しているのを聞いた。なんでも、近くにあるようだ。その時、なぜかこの駅が自分と関連があるような気がしてきて、訪れてみる気になった。

恋山寺の駅は1時間と少し歩いたところにあった。無人駅なので、駅舎も何もない。ただ、観光客が写真を撮るのだろうか、駅全体がピンク色に塗装され、大きなハートの図形が描かれている。一日に何本の列車が止まるのだろうか。不思議なことに、駅のベンチには老人が一人座っていた。一見して、寺の住職のように見える。恋山寺という駅だから住職がいると言う訳でもあるまい。麗名は気になって声をかけた。その老人は近くの山寺の住職だと言う。夕刻が近付いていたので、麗名がそこに泊まれるか聞くと、住職が、「来るものは拒まず」の寺なので、もちろんだと言う。そして、大体の行き方を麗名に教えた。麗名がそれを書き留め、住職がなぜ駅のベンチに座っているか尋ねようと思った瞬間、ドキッとした。住職の姿はもうなかった。狐につままれた思いでいたが、これは何か意味があるに違いないと確信し、その山寺へ向かった。思えば、麗名にとって長崎を出てから初めての会話らしい会話であった。

第四話　結び

ここは山陰地方のある山寺だ。夕刻に、旅人風の女性が尋ねてきた。
「ごめんください。」
返事はない。女性はまた言った。
「ごめんください。」
かなり長いこと経って、誰かがやってくる音がした。
「はい。お待たせしました。すみません、夕食の準備をしていたもので。」
出てきた男は女性を見るや否や叫んだ。
「麗名！麗名だね！」
女性も叫んだ。
「部長！どうしてここに？！」
二人は何も考えずに抱き合い激しく口づけをした。そして、暫くそのままでいた。

その後、二人は今度はお互いをじっくり見ている。
「どうして？麗名だよね？間違いなく麗名だよね？」
「そう。でも、部長、どうして急に麗名って呼んだの？」
「部長？誰のこと？」
「何とぼけてるの！慎吾のことだよ！間違いなく慎吾だよね？」
「そうだよ。でも、どうして？僕は夢を見ているのだろうか。それとも、麗名、生き返ってくれたの？」
「うちはずっと生きてるよ。うちこそ夢を見ているのかなぁ。あんたこそ、幽霊じゃないよね。」
「なんで、僕が幽霊なんだ。」
「だって、部長はもう死んだから。うちが長崎湾に遺灰を投げたんだから。」
「えっ、もう死んだのは麗名だよ。僕が京都の嵐山で、遺灰を投げてきたんだから。」
一瞬のためらいの後、二人は同時に言った。
「じゃ、あんたは？」
「それじゃ、君は？」

二人はさらにお互いを見極めようとしている。
「あんたは、どこから見ても死んだ秋葉慎吾に見えるよ。だけど、もう暗くなっていたのでよくわからなかったけど、確かに、死んだ慎吾のように日に焼けていないよね。」

「君も、死んだ石館麗名そのものだ。だけど、確かに、死んだ麗名ほど色白ではないようだ。ということは、これは、ただの偶然？」
「ほんとにただの偶然？でも、偶然にしてはあまりに偶然過ぎる。あんたは、あまりに死んだ慎吾に似すぎていて、うちはあんたを見たときに疑いもせずに抱き着いてしまった。そして、同じ名前だし。」
「僕も同じだ。死んだ麗名その人と思って、ロづけまでしてしまった。もう、そう思い込んでしまった。これは、何かの巡り合わせだろうか。僕は麗名が死んでから、ずっと歩いて旅をしてきた。そして、この山寺に滞在中で少し落ち着いてきたと思っていたところだ。」
「うちは慎吾が死んでから、やっぱりさ迷い歩いて、そして、さっき、恋山寺の駅で、ここの住職さんに誘われてここに来た。今夜泊まらせてもらおうと思って。」
「えっ？！ここの住職が駅に？」
「突然いなくなってしまったので、よく分からないけど、そうだと思う。」
「おかしいな。ずっとここに居たはずだけど。京和さんは滅多に２時間もかけて駅まで歩いて行くことはないし。」

この不思議な出会いを理解しようとしているかのように、二人は暫く思いに耽っていた。その後、慎吾が思い出した様に話し始めた。
「あの～、麗名さん、いずれにしても、まず京和さんに言わないと。京和さんはいつも、ここは来るものを拒まずの寺だと言ってる。泊まることに問題はないと思う。」
「ありがとう。お願いします。」

慎吾が麗名を京和大慈の所に連れて行き、簡単にいきさつを話した。京和は麗名に意味ありげなウインクをしてから、話し始めた。
「それにしても、慎吾さんに麗名さん、またもや奇遇でしたなぁ。お二人ともそれぞれに深い思いがあるでしょう。私はこれで休みます。お話されるも良し、休養されるも良し、どうぞ、自分の家と思ってご自由にしてください。」
二人は京和に礼を言った。

その後、二人だけ居間に残される。二人とも少し緊張している。慎吾がポツリと言った。
「不思議だ。ほんとに不思議だ。」
「確かに。なぜなの？慎吾さん、あんたの話を聞いてもいい？」
慎吾が身の上をかいつまんで話した。そして、麗名も自分の話をした。二人は、お互いに親愛なる恋人をなくし、未だ悲しみを乗り越えられないでいたところだ。
「麗名さん、君の気持ちは痛いほどよくわかる。」

「うちも同じ。」
「そして、僕の中に新しい葛藤が生じている。実は、すでに君に惹かれている。」
「慎吾さん、うちもなんだか体の中が熱くなってしまって。でも、うちにはどうしていいかわからない。うちがあんたの事を思っているのは、死んだ慎吾を裏切ることになるのではないかと。」
「僕も同じだ。僕にとって、死んだ麗名は恋人以上だった。僕のただ一人の家族だった。そして、死んだ麗名は僕に一生を捧げてくれた。とてもその人を裏切ることは出来ない。麗名さん、悪いけど、今晩考えさせてくれる？君もそうしてくれる？」
「うん。うちには、あんたに抱かれないことはつらいのだけど、考えてみる。あんたは、死んだ慎吾に似ているところがある。」
二人は、名残惜しそうに障子一枚で仕切られたそれぞれの部屋に入った。二人ともなかなか寝付かれなかった。

翌朝、慎吾はいつもと同じ時間に起きて三人の朝食の用意をした。いつもの時間になって、京和が食堂兼用の居間に現れた。慎吾と京和は麗名を待っていたが、なかなか現れない。少し心配になり、慎吾が麗名の部屋の外から声をかけようとした。麗名の部屋からは、麗名の寝息がはっきりと聞こえる。慎吾はハッとした。朝起きの苦手な、死んだ麗名の事を思い出したのだ。まさか、この麗名もそうなのではないかという思いがよぎってきた。気の毒に思い、慎吾はそのままそこを去り、京和には麗名は疲れているようなのでもう少し寝かせておくと伝えた。京和にはその時に朝食を取ってもらい、慎吾は麗名と自分の分には後で食べるようにふきんをかけておいた。

かなりたってから、麗名が起きてきて、慎吾に言った。
「慎吾さん、すみません。寝坊してしまって。うち、朝起きが苦手なんです。」
「えっ、それって。それが～、死んだ麗名も朝起きが苦手だったんだ。」
「それ、ほんとに偶然かなぁ？うちには少し、信じがたい。」
麗名はこの山寺に来た時は一泊だけさせてもらうつもりだった。だが、今となっては慎吾を去ることが出来ない。京和に頼んで暫く滞在させて欲しいと言った。もちろん、京和は快く受け入れてくれた。

その日、慎吾と麗名はたっぷり話す時間があった。
「麗名さん、昨夜はなかなか寝付かれなかったよ。」
「それは、うちも同じ。何度、死んだ慎吾の事を思ったことか。それでも、何度、あん

たの部屋に入ろうかと思ったことか。辛かった。」
「僕も辛かった。夜中に、いろいろ考えたんだけど。もし、僕たちの今までの経験が全く違って、二人とも恋をしたことがなかったとしたら、昨日初めて出会ったときに同じような感情を持ったかどうか。おそらく違ったのではないかと思うんだけど。」
「それは、わかる。うちがあんたに飛びついたのはあんたが死んだ慎吾に思えたから。つまり、うちらの今のお互いに対する気持ちは、過去の経験に基づいていると言うのね。今までのうちらの全く別々の恋の経験に。」
「そうなんだ。で、仮に、君だけが死んだ慎吾さんとの経験があり、僕には恋の経験がなかったとする。もしそういう状態で、昨日会っていたとしたらどうなるかな？」
「うちは、同じ。だから、あんたに飛びついたと思う。だけど、あんたにとってはうちは全く知らない人。だから、びっくりしたと思う。」
「そうだよね。逆だったら、反対の状況だろうと思うんだけど。」
「それはわかる。そして、もし、すぐに妄想だと悟ったら、うちも今のような混乱も迷いもないと思う。」
「その通りだ。それに、君が死んだ麗名と似ていなくて、僕が死んだ慎吾さんと似ていなかったら、やっぱりお互いにこのような感情は起らなかったんじゃないかな。」
「つまり、すべて、お互いの経験が似通っていて、尚且つお互いが死んだ恋人にそっくりだったために起こった感情ということ？」
「どうやら、そういうことじゃないかな。」
「そうやって考えると、なんだか、少しがっかりしてしまう。もし、昨夜うちが希望通りあんたに抱かれていたら、それは、ほんとのあんたに対する感情からではなくて、妄想に駆られていたということ？」
「違う？」
「違うとは言い切れない。言い換えれば、うちらは二人とも、依然死んだ恋人に恋をしていて、それを代替の人で補おうとしたということ？」
「多分。」

「確かにそうかもしれない。ただ、一つ、今考えたのだけれど、うちが初めの計画通り、今日ここを去るとしたら、あんたは何も感じない？」
「行かないでくれ！」
「えっ？！」
「あっ、その～。それは、苦しい質問だ。僕の正直な気持ちは、」
「何？」
「僕の正直な気持ちは、君の後を追うと思う。」

「どうして？妄想とわかっていながら、それでも代替えの人を求めようとするの？」
「実は、少し違うかもしれない。君とは昨日初めて会って、まだほんの少ししか話したこともない。だけど、今、仮に君の名前が麗名ではなくって、そして君が死んだ麗名に似ていなくなっても、それでもすでに君の中の何かに惹かれている。ただ、今度は新しい葛藤が生まれてきている。僕のために一生を捧げてくれた死んだ麗名の事をさておき、全く別の人に恋をすることは罪ではないかということだ。」
「あんた、ほんとに、うちの中の、死んだ麗名さんではないところに惹かれているの？」
「あぁ。どうやら、それは間違いない。君の話し方とか、感情の表し方とか、凄く素直で、惹かれる。それが新しい問題だ。」
「うちは少し死んだ麗名さんが羨ましい。あんたはほんとに真剣に彼女の事を考えている。そんなあんたに一生を捧げられて。そして、死んだ麗名さんが羨ましいのは、多分、うちがすでにあんたに恋をしているからだと思う。当然、うちもあんたと同じようなことを考えている。うちが死んだ慎吾とは切り離してあなたに恋をすることは彼を裏切ることになるのではないかと。」
その後、二人は黙ってしまった。

昼食の準備は麗名も手伝った。三人で昼食をし、慎吾と麗名で後片付けをした。二人で掃除もした。そして、午後のひと時もまた話をした。
「慎吾さん、ところであんたが死んだ麗名さんと付き合い始めた頃、あんたの気持ちはどのように移り変わったの？」
「初めは、高校三年生の同じクラスに居ながら、気にも留めていなかった。それが、死んだ麗名がコンビニで働いているのを見て、気になりだした。その時は興味が湧いたと言うのが正しいと思う。そして、彼女が貧しくて修学旅行に行けないと聞き、同情した。僕が自分で修学旅行に行けないように仕向けたのは、多分同情からだと思う。そして、修学旅行の間、三日間彼女とデートをしている間に、彼女の優しさに限りなく惹かれた。その三日間の間に同情は完全に恋に変わっていた。それからは、その気持ちは強まるばかり。その後は、今度は何度彼女を抱きたいと思ったことか。それでも、高校卒業してすぐに、非公式だけど結婚するまでは耐えていた。そして、その後僕たちが幾度となく試練を乗り越えてきた時、彼女だけが僕の家族として暖かく見守ってくれた。僕はずっと他の誰にも感じたことがない有難みを感じてきた。そして、これは今まで言葉で表せなかったのだけれど、彼女は限りなく純粋に近かったんだ。彼女は観光バスのガイドになるまで家から１０キロも離れていない摩周湖にさえ行ったことがなかった。実は、彼女にはその必要もなかったんじゃないかと思う。彼女の心は摩周湖の湖水よりも純粋

だったんだよ。」
「そうか～。いくらあんたが死んだ麗名さんでないうちに惹かれたとしても、彼女には到底太刀打ちできないよね。」
「そんなぁ。比べる必要はないよ。君とは昨日初めて会ったばかりじゃない。」
「それはそうだけど。」
「麗名、君の、死んだ慎吾さんに対する気持ちはどう変わって行ったの？」
麗名は説明した。
「うちの家のヨットのクルーとして父が死んだ慎吾を雇ってくれて、初めて会った時は、確かに雇われたクルーという目で見ていた。ほんとに傲慢だよね。そして、一番最初、彼は、うちのことを『お嬢様』と呼んで、嫌だった。それからは、『お嬢』に変わって、うちのことずっとそう呼んでた。これにも初めは抵抗があった。だけど、彼がこの呼び名をずっと使っている間に、それに込める意味が徐々に変わって来たんじゃないかと思う。うちの反応も変わってきた。初めは、単に、『お嬢様』の省略形、うちもすぐに慣れてしまった。それが、段々、すごく親しみを込めて言ってくれるようになった。うちは、少し、嬉しくも感じた。最後には、それが、彼が、うちだけに使うほんとに特別な呼びかけになった。その時には、うちも彼の親しみを素直に受け取れることが出来るようになった。毎日のように二人で海に出て、二人で海を感じた。そして、お互いを感じた。ヨットという共通の趣味があるだけでなく、彼のすること、言うことがとても筋が通っているということに気が付いた。そして、いつも一緒に考えてくれる。いつも一緒に行動してくれる。彼はそれが仕事だと言っていたけれど、うちはそれだけじゃないなと思ってきた。その頃には、うちは彼のことで頭が一杯になっていた。うちが泊りでクルーズに行こうと誘った時、彼はうちの父の許可を取らなければいけないと言った。そして、クルーズの夜、うちが抱いてと迫ったんだけど、彼はきちんとしないと、と言って応じてくれなかった。その時も、うちのことをいじめたいのではない、二人のためを思ってだと十分に説明してくれた。正直言って、抱いてくれないことにはがっかりしたんだけど、彼の筋の通っているところを尊敬した。次の日、彼がいろいろ考えてくれて、最終的には、うちの親にすべて打ち明けた。そしたら、父はもう察していたと言って祝福さえしてくれた。その後、うちらはもう最高の幸福で抱き合った。うちは、大学でチャランポランタンに心理学を学んでいたんだけど、元登校拒否児の彼は、自分だけでもっと奥の深い心理学を追求していたように思う。そして、今までで、彼だけが言った言葉がある。うちのために死ねると。」
「その話を聞いたら、僕だって、君の、死んだ慎吾さんに嫉妬するよ。やっぱり、お互いの２０年に及ぶ過去は無視できないよね。でも、僕たちは会ったばかりなんだからさ。」

そんな調子で、その山寺での三人の生活が始まり、続いた。慎吾と麗名は多くの作業を二人で一緒にした。時には、平日、一日に数えるほどしかないバスに乗って町に買い物に行くこともあった。バス停まで１５分ほど歩き、雨風雪を凌げるようになっているバス停の囲いの中でバスを待つ。そんな二人の行動を見ていたら、二人が山寺のまかないの夫婦にさえ見えたことだろう。だが、二人共もうはっきりとは口には出さなかったが、夜は相変わらず最もつらい時だった。お互いに、何回も相手の部屋に入ってしまおうかとさえ思ったものだ。それでも最終的には、常に心の底にある罪悪感がそれをさえぎった。

時間のある時は、二人で周囲を散策した。ある日、慎吾は麗名を庭の裏の方にある小さな門に連れて行った。そして、その横の木の壁に彫ってある文字を指さした。そこには、どうやら、「慎」、「麗」と二文字彫ってある。特に、麗の字が複雑だからか、率直に言ってうまく彫れているわけではない。その二文字の上には横長の三角形が、二文字の間には縦線が引いてある。丁度、相合傘のようだ。慎吾は麗名に言った。
「これは、京和さんから聞いた話だけど、その昔、この山寺に慎とお麗と言う夫婦が奉公していたらしい。これはその二人が彫ったのだろうと思う。これを見ると、僕はいつも死んだ麗名との三日目のデートで相合傘をさしたことを思い出すんだ。そして、僕の目にはどうしても慎の字の下に吾、麗の字の下に名と何かでこすった跡があるように見える。それで、僕はそこを指で何回も、何回もなぞったものだ。」
「相合傘って、そんなに昔からあったんだ。でも、うちは、やっぱり死んだ麗名さんが羨ましい。」
ところが、次にその相合傘に目をやった二人は驚いた。「慎」の字の下に、「吾」と言う字が彫ってある。いつの間にか、縦書きで慎吾となっている。
「あれっ！さっきまでは確かに『慎』一文字だったのに。」
「ほんとに！うちも見たよ。」
麗名はすかさず「麗」の字の下に「名」となぞり始めた。麗名がなぞっている間に、そこの汚れが取れ、板が少しずつ白っぽくなってきた。慎吾は麗名の肩にそっと手を置いて言った。
「ここにも、いつしか『名』の字が表れるかもね。」

ある日、どういう訳か、慎吾が死んだ麗名のハーモニカを出してきた。麗名は麗名で、死んだ慎吾に教わった「太陽がいっぱい」の事を思い出した。それで、麗名はハーモニカを手に取ってその曲を吹き始めた。主題部分の１６小節を終わったところで、暫く間

を置いたと思ったが、続けて「月の光」の最初の９小説を吹いた。慎吾の目からは涙が止まらなかった。
「あんた、やっぱり死んだ麗名さんのことが忘れられないんでしょう。」
慎吾は何も言わない。
「分かっているの。うちも、あの頃を思い出さないわけにはいかない。」
二人とも暫くの間無言だったが、今度は慎吾が麗名に尋ねた。
「でも、麗名、『太陽がいっぱい』の後に、どうして急に『月の光』を吹いたの？」
「その曲、うちは知らないんだけど、なぜか自然と音が出て。」
「死んだ麗名の好きな曲だった。」

やがて、春が終わり、夏が過ぎ、木々の葉が散ると、冬が来た。山寺での冬の生活は楽ではない。それに、ここでは今だに薪を燃やす旧式のストーブだ。住職に指示された通り、秋のうちに小枝を拾ったり、木を割ったりして、薪を蓄えた。雪が降ってバス便に影響が出たりすると、食料や備品の買い出しにも苦労した。山陰地方の山間部は思いのほか雪が降るのだ。慎吾と麗名は、住職一人の時どうやってこれらのことすべてをこなしていたのかと思っていた。

そして、二人にとって冬の夜はさらに辛かった。寒い中、自分の部屋の中で、布団を何枚も重ね、その中で小さくなって寝る。それでも、隣の部屋には行けない。また、ある時、家族連れ四人が泊まらせて欲しいと言ってきた。住職の方針通り、心よく受け入れた。ただ、家族四人なので通常慎吾の寝ている部屋を使ってもらうことになった。そして、その夜は、慎吾は麗名と同じ部屋で寝た。二人はすぐ隣の布団で寝ている。この時の苦痛は言い表せなかった。二人の息は段々荒くなり、もうどうしようもないかと思われた。その時、隣の部屋で、子供が「おしっこ」と言い出し、隣の部屋中ドタバタし始めた。翌朝、二人はやはり言葉には出さなかったが、顔を見合わせてため息をついた。

次の春がやってきた。山寺の春は美しい。花に緑に、生命の息吹を感じる。麗名が来てからほぼ一年である。この頃から、京和が急に衰弱してきたように見えた。食欲が減り、体重が減り、顔がやせ細り、言葉数が少なくなった。慎吾と麗名は心配して医者を呼ぼうとした。京和にかかりつけの医者の事を聞くと、いないと言う。京和は医者はいらないと言う。長くは持たないので、寺の本部に状況をそう伝えておいてくれとだけ言った。

数か月後には京和はほぼ寝たきりになってしまった。そしてある日、慎吾と麗名が二人とも京和の枕元に居るとき、弱っていたはずの京和が急に上半身起き上がって話し出した。

「慎吾さんに麗名さん、オレだよ。大介だよ。亡くなった麗名さんと亡くなった慎吾さんの言葉を伝えようと思うんだ。まず、これは、亡くなった麗名さんの言葉、」
京和あるいは大介の声は急に死んだ麗名の口調になった。

「慎吾、今でも私の事を考えていてくれてありがとう。私はね、慎吾のおかげで、もう月の光に輝く保津川の川底になったの。私はもう大丈夫。だけど、慎吾はもう少し生きていかなければならない。慎吾が新しい麗名さんの中に、彼女の良いところを見つけて好きになるのはいいことだよね。私は慎吾のことずっと見守っているから、これからの人生、お幸せに。」

「そして、これは亡くなった慎吾さんの言葉、」
今度は、死んだ慎吾の口調になった。

「お嬢、今でも俺の事を考えていてくれてありがとう。俺は、お嬢のおかげで、もう太陽の光に輝く長崎湾の海底になったよ。俺はもう大丈夫だ。だけど、お嬢はもう少し生きていかなければならない。お嬢が新しい慎吾さんの良いところを見つけて好きになるのはいいことだよ。俺はお嬢のことずっと見守っているから、これからの人生、幸せに生きて欲しいんだ。」

慎吾と麗名は顔を見合わせた。麗名は涙ぐんでいた。
「死んだ麗名さんに部長、ありがとう。うちら、あんた達のことは決して忘れないよ。そして、大介さん、ありがとう。」
慎吾は遠いかなたを見つめるように言った。
「死んだ慎吾さんと麗名、その言葉、大事に胸の内にしまっておくよ。ほんとにありがとう。そして、大介さん、今までに何度も助けてもらった。今日もまた助けてくれてありがとう。」
二人がそう言い終わった時に、京和はバタッとまた横になってしまった。

しばらくの沈黙の後、慎吾がポツリと言った。
「京和さんが起き上がった時は、大介さんが乗り移っていたと思った。だけど、以前他の人から、人は死に際に急に力が出る時があると聞いたことがある。すると、あれは実は京和さん本人だったのだろうか。僕には分からなくなってきた。ひょっとしたら、京和さんと大介さんとは同じ人だったんじゃないかとさえ思えてきた。」
「そうねぇ、ほんとに不思議だよねぇ。もしかして、京和さんあるいは大介さんがうちら二人をこの山寺に導いたということ？」

またしばらくたって、慎吾が思いついたように言い出した。
「麗名！今やっと気が付いたよ。この一年間、僕たちは悩み苦しんできた。それは、死んだ恋人と新しい恋人のどちらかを選ばなければならないと思っていたからだ。言い換えれば、過去と未来のどちらかを選択しなければならないと思っていたからだ。だけど、今、死んだ二人に言われたことをよく考えてみて、やっとわかったよ。そんな選択は不要だ。いや、存在さえしないんだ。僕たちの使命は過去と未来を結び付けることだよ。僕たちが過去の絆を忘れずにこれからの人生に反映することは悪いことではない。悪いどころか、死んだ二人はそう願っている。それは、言ってみれば、僕たち四人で一緒に過ごすことになるんじゃないかな。」
「慎吾、確かにうちらは過去と未来の選択に悩んできた。でも、この苦しかった一年間は無駄ではなかったんだね。うちら、やっとその苦しみの意味が分かったんだね。そして、死んだ二人のおかげで、やっとそれを乗り越えられようとしているんだね。そうだ、選択ではない。死んだ二人の言っているように、過去を大事に、大事にしながら、その上に未来を築けばいいんだ。うちら、あの幸せだった過去を幸せな未来に結び付けなくてはいけないよね。」

二人がそれを言い終わった丁度その時、京和は息を引き取った。安らかな臨終だった。慎吾と麗名は京和が仏になったと確信した。

慎吾は寺の本部に連絡した。翌日には即刻本部から一人来て、京和の葬儀を施行した。そして、その人の話では、おそらく数週間のうちに次の住職が決まり、やって来るだろうということだった。それまでは、慎吾と麗名が代理として寺の面倒を見て欲しいと言った。そして、その間の生活資金として何某かを慎吾に渡して本部に帰った。

京和の遺体が運ばれて行った後、山寺には慎吾と麗名二人だけが残された。二人は一年ぶりに抱き合い激しく口づけをした。外から見たら、この二人の様子は一年前と全く同じに見えたかもしれない。しかし、二人の心の中には大きな違いがあった。二人の相手は、幻想でも、代替えでもなかった。迷いも、苦しみも、選択の必要もなかった。そして、その夜、慎吾と麗名は結ばれた。別の言い方をすれば、この時結ばれたのは過去と未来であった。その夜は満月であったが、その月が沈み、日が昇るころには慎吾と麗名の新しい生活が始まることになる。

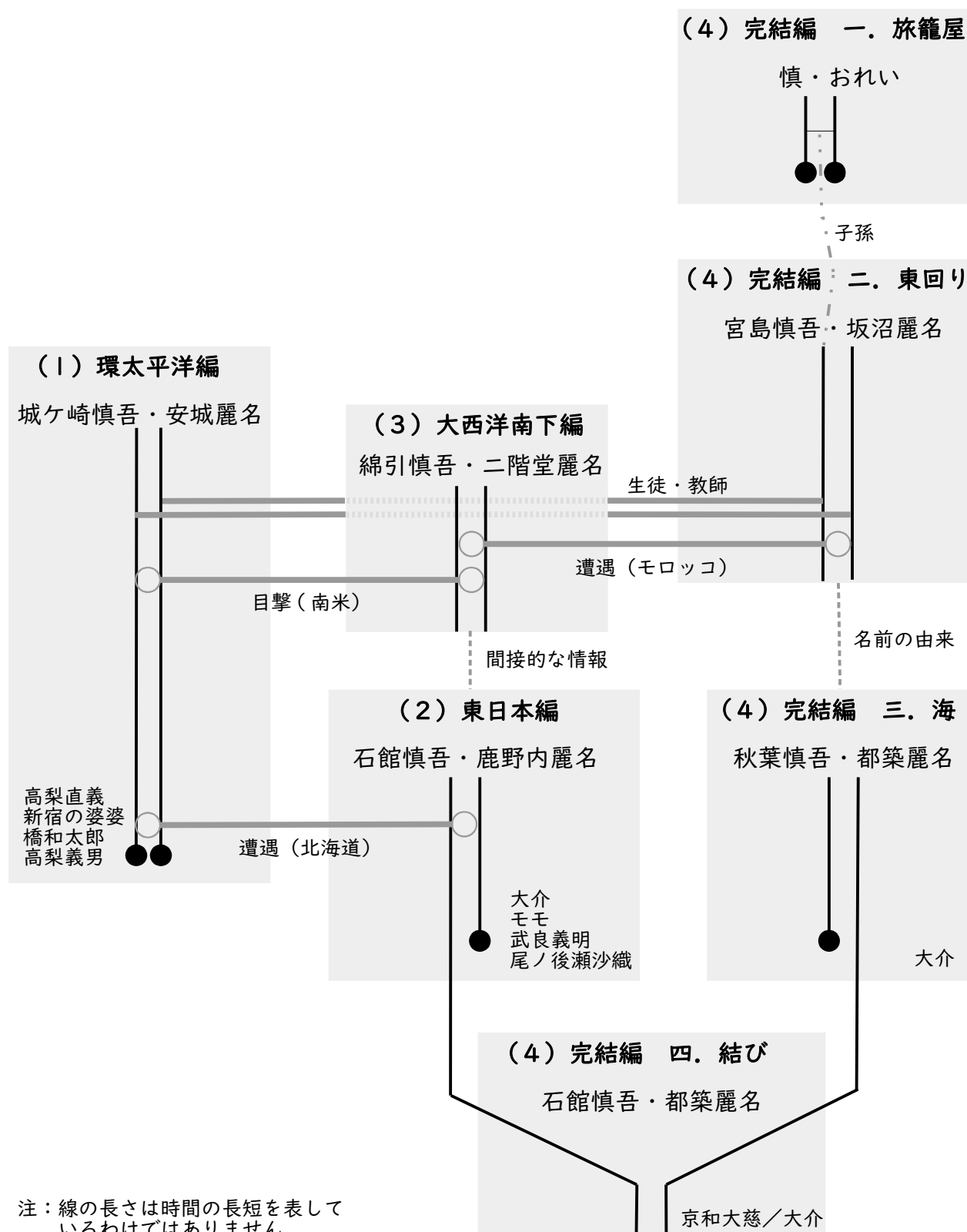
まもなく、この山寺にも新しい住職が赴くことだろう。そして、新しい住職にもこの山寺にまつわる恋の話が伝わることだろう。

さて、もし皆さんがこの山寺を訪れることがあったら見てもらいたいものがあります。庭の裏の方にある小さな門の横にある木の壁です。そこには相合傘のような図形が彫ってあるのですが、その下、左側には縦書きで、「慎吾」、右側にはやはり縦書きで、「麗名」とはっきり彫られています。

完

作者注：第一話で使われている江戸時代末期の言葉遣いは作者によって創造されたもので、当時の実際の話し方を意図しているものではありません。また、第二話から第四話までは何世代かに渡る時間が示唆されていますが、時代設定は概ね執筆当時を想定しています。

慎吾と麗名の旅奏曲（全四巻合冊）　主要登場人物一覧

注：線の長さは時間の長短を表して
　　いるわけではありません。

この小説（第一巻：環太平洋編、第二巻：東日本編、第三巻：大西洋南下編）の場面に因んだピアノ独奏曲集 Travelapsody（当初５曲のみ、楽譜付き）が出来ました。

https://archive.org/details/travelapsody